

連載専門誌

# 対人援助学マガジン



vol. 14 No. 2

第54号

September 2023

対人援助学会

## No.54 M O K U J I

目次		002-003
ハチドリの器	見野 大介	004
執筆者@短信	執筆者全員	005-017
付け加えることができる価値は何か？	千葉 晃央	018-024
臨床社会学の方法 (42)	中村 正	025-034
団遊の脱線的経営言論	団 遊	035-038
解放の心理学へ (3)	藤 信子	039-041
カウンセリングのお作法 (36)	中島 弘美	042-044
晩年 D・A・N 通信	団 士郎	045-060
幼稚園の現場から (54)	鶴谷 主一	061-063
福祉系対人援助職養成の現場から (54)	西川 友理	064-070
ああ、相談業務 (14)	河岸 由里子	071-075
ドラマセラピーセラピーの実践・研究・手法 (12)	尾上 明代	076-080
きもちは言葉をさがしている (51)	水野 スウ	081-090
男は痛い！ (48)	國友 万裕	091-096
臨床のきれはし (22)	浅田 英輔	097-098
発達検査と対人援助学 (13)	大谷 多加志	099-102
講演会&ライブな日々 (35)	古川 秀明	103-112
対人援助点描 (32)	小林 茂	113-114
立場が変わると何かが見える (6)	坂口 伊都	115-120
周辺からの記憶 - 東日本大震災家族応援プロジェクト - (40)	村本 邦子	121-136
精神科医の思うこと (30)	松村 奈奈子	137-139
馬渡の眼	馬渡 徳子	140-142
東成区の昭和 やぶにらみ日記	柳 たかを	143-150
そうだ、猫に聞いてみよう (30)	小池 英梨子	151-156
先人の知恵から (41)	河岸 由里子	157-160
うたとかたりの対人援助学 (26)	鶴野 祐介	161-165
ああ結婚 (27)	黒田 長宏	166-168
PBL の風と土 (26)	山口 洋典	169-174
接骨院に心理学を入れてみた (25)	寺田 弘志	175-190
現代社会を『関係性』という観点から考える (25)	三浦 恵子	191-196
保育と社会福祉を漫画で学ぶ (21)	迫 共	198-201
「余地」—相談業務を楽しむ方法— (24)	杉江 太郎	202-204
統合失調症を患う母とともに生きる子ども	松岡 園子	205-211

原田牧場 Note (14)	原田 希	212-214
サイコロジ- (2) <b>新連載 2 回目</b>	川畑 隆	215-219
応援、母ちゃん (14)	玉村 文	220-222
みちくさ言語療法 (9)	工藤 芳幸	223-226
HITOKOMART (13)	篠原ユキオ	227-230
フランスのソーシャルワーク	安發 明子	231-232
川下の風景 (11)	米津 達也	233-234
父が自分の身を呈して教えてくれたこと	高名 祐美	235-239
幾度となく会い、語り合うことの意味	本間 毅	240-258
一語一絵 (11)	畑中 美穂	259-261
対人援助をレポートするこの一冊 (18)	長谷川 福子	262-266
対人援助をレポートするこの一冊 (19)	神山 努	267-268
対人援助をレポートするこの一冊 (20)	渡辺 修宏	269-273
島根の中山間地から Work as Life (10)	野中 浩一	274-282
ヨミトリとヨミトリ君で一緒にしましょ! (6)	高木 久美子	283-292
こかげのにちじょう (5)	鳴海 明敏	293-294
先生のための 16 のことば	原田 孝	295
私はここにいる -現象学としての書道-(5)	櫻井 育子	296-297
社会教育の周縁 (4)	山本 竜司	298-299
コソダテノシンリ (4)	中谷 陽輔	300-306
教室の窓から	來須 真紀	307-309
社会科の授業を対人援助学の視点から	内田 一樹	310-323
ある訪問看護師のアタマの中 <b>新連載 2 回目</b>	山岸 若菜	325-331
人生は対応のバリエーション <b>新連載 2 回目</b>	宮井 研治	332-337
編集後記	編集長&編集員	338-339
【特別寄稿】ヒロシマへ行こう!	本間 毅	340-342



ハチドリの器 37

見野 大介

*Mino Daisuke*



- 左上：工房の様子
- 右上：乾燥中
- 右下：削り仕上げ
- 左下：ろくろ成形



## 第54号

執筆者  
@ 短信

## 山岸 若菜 連載二回目

今年の夏はとても暑かったです。訪問看護の仕事が始めてから一番暑かった気がします。お願いやからクーラーついて！と願いながら玄関を開け、ついてなかった時の絶望感。「お部屋の中でも熱中症になるからクーラーつけましょう。」と熱く説得しても、聞き入れてもらえない時の無力感。ほぼサウナ状態のお家から出て、暑いはずの外が涼しく感じられた時の解放感。全部しんどくて、自分が倒れるかと思ったのは初めての経験でした。少しでも楽しみを作るため、この夏は一人でひそかに『汗拭きシートはどれが一番優秀か？』を比較実験していました。5種類の汗拭きシートを試した結果 GATBY の氷冷シリーズが栄えある栄冠に輝きました！大判というのがポイント高かったです。まだ暑い日が続くようなので、興味があれば是非使ってみて下さい。

ある訪問看護師のアタマの中  
P325～

## 宮井 研治 連載二回目

「焚き火、孫、ときどきサーフィン」

どうです、何かのエッセイのテーマみたいでしょ。これは私の人生終盤のとりあえずのメインテーマです。現時点でのものな

ので、とりあえずと申しました。自分ではなかなか気に入っています。このテーマの実践を人生終盤の指針としようと考えています。



焚火に関しては、これ即ち、キャンプです。コロナ禍でソロキャンプデビューし、年3回はソロキャンプに出かけてきました。もともと、キャンプ好きの友人に連れられ、キャンプはそこそこ楽しんできました。キャンプ歴は長いのです。決して「ひろし」に触発された訳ではありません。ただ、ソロでやるというのは、コロナがなければなかなか踏み出せなかったと思います。いくら管理されたキャンプ場でのソロとはいえ、一人でキャンプ設営、食事の用意、おたおたしていたら、あっという間にあたりは夕やみに包まれるなんてこともありました。そんな時の焚火の炎のなんと心強いこと。

孫に関しては、ご多分に漏れず、まあ可愛いし、面白い。人の孫自慢は敬遠しても、自分のこととなると別のもというのは、人間だから仕方ない。ご多分に漏れず「働く車好き」系の2歳前の男子です。YouTubeでもこうした「働く車好き」系幼児および児童のための動画はたくさん up されていて、自分の孫が関心を持つからそのジイジも関心を寄せるという、世の中はよくできたものです。その孫と母親である私の娘を車に乗せ、運転中、ある工事現場に差しかかりました。そうすると、クレーン車やブルドーザーが林立しておりました。なかなか圧巻の光景で、後部座席チャイルドシートに陣取る孫にすぐさま伝えます。はやく反応を確かめたいジイジなのですが、何せ後部座席で反応はわかりません。母親に聞いても

「見ているよ、それより運転気を付けて」なんて言われるのが関の山です。工事現場を通り過ぎて、ややあって、孫がおもむろに人差し指を一本掲げ「もういったい！」と言いました。通訳すると「じいちゃん、もう一回今の景色見せてよ、おねがい」ということなのです。母親と大笑いですわ。こん

な話どうでもいいですか。

さて、最後のサーフィンです。これは死ぬまでにやってみたいスポーツということではなく、一度サーフボードを所有したことがあります。所有しただけではなく、何度かサーフィン仲間にくっついていたり、一人で四国の海に出かけたりしていた時期があるのです。しかし、お世辞にも立てたとは言えない。当時、通っていたサーフショップ屋はショートボード専門でして、四十の手習いよろしく始めたオッサンが乗りこなすには、ちとレベルが高かったのです。ロングボードやもう少し浮力のあるボードで、夢をもう一度です。しかし、海にさえ出かけることが少なくなった今日この頃、ジイジの夢は叶いますことやら？

人生は対応のヴァリエーション  
P332～

## 内田 一樹

先日7月20日から23日の3泊4日で今年度の「東北と復興」のスタディツアーを実施しました。今回はその報告です。この夏は全国私学夏季教育研究集会や教育科学研究会で選択講座「東北と復興」についての実践報告をしました。その中で感じたことは他者とのコミュニケーションを通してこの選択講座の目的や形などのアイデンティティが浮き彫りになっていくという感覚でした。

社会科の授業を  
対人援助学の視点から  
P310～

## 来須(らいす) 真紀

一時保護所に勤務し始めて4か月がたとうとしています。学校という組織を冷静に外から眺めていたいと思っていたのですが、外からは見る事ができていないものの冷静には見る事ができていないなと思う今日この頃です。

この4か月、一時保護所でたくさんの子どもたちと出会ってきました。私自身、学校に勤めている十数年間かなりの個性豊かな子どもたちと関わってきたのですが、一時保護所は、その5年分を凝縮したような出会いが続きました。なかなかの楽しさです。「この子は、どう考えているのだから」

う?」「なぜ、このようなことを言うの  
う?」「どうしてこのような行動に出るの  
らう?」と考えることが、学校現場にいた  
ときの1000倍多く、濃厚な日々です。

日々様々なトラブルや小競り合いがお  
こる(まあ、子どもが2人以上集まればトラ  
ブルは起きるのが自然なことなので)ので  
すが、そのトラブルや小競り合いの半数  
は、大人の都合に子どもを合わせようとす  
ることで起きています。結局ルールを守  
っていない守っているどこまでがアウトで  
どこまでがセーフなのかみたい。(私はこ  
の手の議論は大の苦手です、)どこでも  
同じだろうと思うのですが、ルールや規則  
を守らせようとするのみが目的になっ  
てしまうと、お互いが苦しい思いをしてし  
まうことも少なくないなと。学校も福祉現場も  
似ているところだなと感じています。

もう一つ。暗闇が怖くて寝付けないと訴  
えてきたある子どもにしばらく付き合い、  
雑談していた時のこと。

子ども:「大人は、結局ルールや規則で  
都合よく子どもを動かそうとするからい  
けないよ。だから余計にいうこと聞か  
ないよ。そこに気づかないなんて馬鹿  
だねえ。」

私:「そんな経験がたくさんあるん?  
じゃあ大人にどうしてほしかったん?」

子ども:「冷静に、淡々と、なぜダメ  
なのかという理由を何度も言ってほし  
かった。」今更ながら「へえ」と腑に  
落ちました。子どもから教わるとは、  
こういうことなんだなと思いました。  
皆さんはどう思われましたか?ちな  
みにこの後、私は「就寝時間を守  
らせないで、ルールを破らせて何を考  
えているんだ!」と顰蹙を買ってしまった  
のは言うまでもありません(笑)

教室の窓から  
P307~

## 山本 竜司

本業と学業に追われており、今号で  
一旦休載いたします。生涯学習関係の  
学会など、どこかでお会いしたら、お  
声掛けください。またの日までお元  
気で!

社会教育の周縁  
P298~

## 中谷 陽輔

3日坊主ならぬ3回坊主になりそう  
なところを何とか踏みとどまった連  
載 4 回目です。

前回投稿時から季節は変わって夏。  
数年ぶりにコロナ渦から抜け出た夏  
に、プールや夏祭りなど、子育て当事  
者としては子どもにイベントを満喫さ  
せてあげられることが嬉しい・・と思  
っていた最中、7月に初PCR 検査から  
の陽性、つまりは新型コロナウイルスに  
初感染いたしました。コロナ渦中では、  
病院勤務の妻や、良く熱を出す我が  
家の幼子たちは何度もPCR 検査を受  
けていたのに、我が家の初コロナは私。

理不尽なようで、自然事象なんて理  
不尽なことばかりだしな・・とか、季  
節に1回くらいは何か起こるものなの  
か・・と40代の自分の身体を振り返  
っています。

ちなみに本稿を投稿した翌日、数年  
前から年に1回受けている人間ドック  
が控えています。自分と家族の未来に  
向けて、まだまだ健康でいたいもの  
です。

人生で今日が一番若い日です。引き  
続き、よろしく願いいたします。

コソダテバシリ  
P300~

## 櫻井 育子



広島大会で書道のワークショップ

「目に見えない大きなものの力を信  
じている方だ。とりあえず無事に帰  
ってきたらありがたいと思うとか、  
何かいいことがあるとありがたい  
と思うとか、結構な頻度で、あり  
がたがっているわたし、と思った。

この連載も、誰が読んでいるかわ  
からないけれども、なんだか楽しくな  
って書いている。と、そんなある日、  
「広島大会で書

道のワークショップをやりませんか!」  
と声をかけていただいた。宮城からは  
遠い。けれども、もう「おもしろそう!  
!」という方向に向かったら止められ  
ない。「よくわからないけどいきま  
す」という即答。目に見えない大き  
なものの力が働いているときには、  
流れに任せてしまおう。ということで、  
対人援助学会そのものが初参加です  
が、学会で墨遊びをする変わり者が  
宮城からやってくるということでぜひ  
当日、みなさまにお会いできるのを  
楽しみにしております。

生涯発達支援塾 TANE 代表櫻井育子  
[shukou0122@gmail.com](mailto:shukou0122@gmail.com)

<https://ikuko-sakurai.com>

わたしはここにいる  
P296~

## 原田 孝

今の教育界は、激しく変化の波が押  
寄せています。様々な方向を向いた  
波で、「それはちょっと極端では・・」  
というような方向への波もあります。  
基本的に教育は子どもたちの成長  
を支援するものです。健全に、バラ  
ンスよく、しかも合理的に成長をサ  
ポートできるシステムの構築が目標  
であるべきでしょうね。今回の居場  
所も、単に不登校生の居場所だけで  
OKではなく、その原因へのアプ  
ローチも同時に行いましょうとい  
うこと内容になっています。

先生のための16に言葉  
P295

## 鳴海 明敏

県庁職員を定年退職した翌月に新規  
開設された、情緒障害児短期治療  
施設(現在は、児童心理治療施設)  
の園長を引き受けてから、14年目  
に入っています。

園長室には「こかげ」という名前が  
つけられています、ということで、  
サブタイトルは「こかげのにちじ  
ょう」とします。紹介する子ども  
たちについては、それなりのカモ  
フラージュを施しています。

児童心理治療施設は、現在全国  
で53か所運営されています。それ  
らの施設で構成される協議会は「  
全児心」という略称で活動してい  
て、施設長会議や職員研修会など  
をブロックごとに持ち回りで開催  
しています。

今年度は、9月12日～13日の日程で、「2023年度全国児童心理治療施設職員研修会」が開催されます。担当は関東ブロックの「嵐山学園(埼玉県)」です。今回は、いろいろ新しい取組があるのですが、その一つが、オンデマンドサービスを活用した「事前研修」です。これまでは2泊3日の日程で開催されていたのですが、行政説明(一部)や基調講演、海外研修報告などを、オンデマンドサービスでの「動画視聴」にして、事前研修とすることで、会期が短縮されました。基調講演は、愛育相談所所長の齋藤万比古先生で、タイトルは「児童虐待が剥奪した心の発達をどう支え再建するかー児童精神科入院治療の観点から」です。

また、1泊2日の1日目は、午前中に社会福祉法人横浜博萌会 理事長 高瀬利男先生(児童心理治療施設 横浜いずみ学園)の特別講演があり、午後は、事例検討、実践報告、意見交換会があります。

2日目の午前中は、「児童心理治療施設での対話を考える」というタイトルのシンポジウムがあり、講演・シンポジストは、みどりの杜クリニック院長 森川すいめい先生という予定です。午後は、嵐山学園の施設見学があります。

先日のカウンセリング研究会のワークショップは、無事終了。参加者20名。今回初めて参加した人が一名いましたが、その方以外は皆「リピーター」で、札幌、宮城、埼玉、東京の各地から参加してくれました。3年間のブランクを感じさせないで、セッションが始まると、あっという間にいつもの顔に戻って、楽しいワークショップでした。やっぱり、対面はいいねと、再会を約しての解散でした。

### 児童心理治療施設の園長室から ～こかげのにちじょう～ P293～

## 高木 久美子

暑い夏でした。遷延性意識障害の方の在宅介護でも暑さ対策、こもり熱への対処は大きな課題です。東海地区遷延性意識障害と家族の会「ひまわり」の会報も9月に発行されます。会員への郵送の他、イベント等の時にご希望の方にお配りしています。毎回家族の手記など、良い記事が

たくさん載りますので、またマガジンでの投稿でもご紹介させていただきたいと思えます。あと、本稿に書きました東海地区遷延性意識障害と家族の会「ひまわり」主催の地区交流会についてご案内です♪

「遷延性意識障害 Yさんのお話しと音楽と親睦の会」

2023年10月7日(土) 三重県松阪市にて。詳細は同「ひまわり」HPにて。ヨミトリ君も登場します！ぜひお気軽にご参加ください。

### ヨミトリとヨミトリ君で一緒にしましょ！ P283～

## 原田 希

牧場へ訪ねてくれる人が増えた夏でした。酪農祭や花火大会も復活し、楽しいながらも出役が多く、そして北海道も異例の暑さ！久しぶりに心身ともに燃え尽きるような夏だったな、と思い返しています。中でも、牧場に来てくれた子どもたちが一緒に虫を怖がって、ずっとソワソワしていたのが印象的でした。短い夏に命を燃やして生きる虫たち。勢いがケタ違いなのかもしれせん。ウシとムシに驚かされた記憶に残る夏休み、牧場を舞台にどんな絵日記を描いてくれたか楽しみです。



### 原田牧場Note P212～

## 野中 浩一

この夏は旅三昧でした。7月はフリースクール生徒・職員28人で「隠岐の島」へ。そして8月はじめは父の納骨で「熊本・福岡」へ。その後8月下旬に中2の娘と陸上の大会を見に「愛媛」へ。さらに続けて高2の娘の演劇公演を見に「東京」

へ。

そんな夏のあれこれを思い出す中で特に残っていることは、熊本の親戚の家でいただいた手作りの筍の煮つけといきなり団子のおいしさ。地元の人たちが長年育んできた、素材を生かした至高の旨味。

### 「島根の中山間地から Work as Life」 P274～

## 畑中 美穂

長年の友人が亡くなった。ここ数年は病気を患って入退院を繰り返していることは耳にしていたが、COVID-19下でもあり見舞う機会にはなかった。亡くなったと聞いたのは共通の友人からの連絡で、すでに葬儀も済ませたとのこと、家族だけの見送りであったらしい。農業を営んでいた人で、苗が順調に根を張ったのは見届けたのではないかと思う、しかし秋の収穫は、みるごとく逝ってしまった。四季のなかで自然を相手に生きていたその人を思い、季節の移り変わるあちらこちらにその存在を思い浮かべる。

私の郷里では盆には山に送り火を灯す。まだごく「新米」のその人も、やっと空に着いたと思ったら盆で下界に下り、また慌ただしく空に戻ったことだろう。私の親しかった多くの者たちと同様にそのなかのひとりとして、小さな火を灯して手を合わせた。

### 一語一絵 P259～

## 渡辺 修宏

2023年夏、毎日暑い日々が続いています。暑い日に「暑い暑い」とつぶやくと、実際以上に暑いと感じるものです。心頭滅却すれば火もまた涼と言いますね。

でもかといって、暑くないよ、とか、ちょうどいい、とか、しまいには、寒いくらだ、つぶやくと、家族をはじめ、周囲の方々に変な目でみられます。

その確率100%です。・・・だから結局、暑いとか、暑くないとか、そういった問題を問題として認知しないのが一番なのです。爆。

### 対人援助実践をレポートする この一冊 P269～

## 米津 達也

この夏も猛烈な暑さを感じる。標高1,000m以下の山々はまさに暑さとの闘いだ。盆の台風前に歩いた山の林道に古新聞が一枚落ちていた。昭和17年とある。78年前となるが、この保存状態はおかしい。何故、この場所で、この状態で遺っているのか。当時は戦火真っ只へ。ミッドウェー海戦の年。「欲しがりません、勝つまでは」と、勝つことを疑わなかった。盆のこの時期に過去からの手紙を視ている。

### 川下の風景 P233～

## 本間 毅 退院支援研究会

今回は引き続いて「チーム医療とナラティブ その2」です。記事のもとになった講演が始まる直前、短時間ですが主催者と「研究者のモラル」について話しました。詳細は省きますが、「執筆者からのレスがない時に編集者が感じる不安や焦燥感」、「締切りを守ることが必ずしも世の中の共通認識ではなくなったこと」、「誰にも分らないことは何もなかったかのように堂々と発表したものの勝ちなのか」など。この大変さとともに仕事に励む出版・編集者の胸中はいかばかりか。長編『豊穡の海』の最終章『天人五衰』を書き終え、担当の編集者に必ずその原稿を手渡すよう家族に託し、市ヶ谷に出陣した三島由紀夫という人物に私は敬意を払います。

読者によって、私の記事の題を「チームワークとナラティブ」と読み替えてもらっても構いません。ただし医療につきものの、「専門家暴力」のことは必ず念頭に置いて下さい。銃創や刀創を負った患者さんは、ほぼ確実に破傷風などで命を落とす時代、外科医は麻酔もせず受傷した手足を切り落としました。先の沖縄戦で軍医や衛生兵だけでなく、ひめゆり学徒隊までが強いられた悲惨な行為を忘れてはならないと思います。記事の中で詳しく述べますが、兵士の怪我という物理的な理由より、戦争遂行という国民にとりついた心理・精神的な拘束がなせる業だったのでしょう。医療を「鬼手仏心」と現すことがありますが、これは非常時以外、「ジコトウスイ」と読むのが正しいことがあります。面談や退院支

援では、このようなことがあってはならないという私のナラティブを読み取っていたできれば幸いです。

追伸、「特別寄稿」もご覧ください。

### 幾度となく会い、 語り合うことの意味 P240～

## 玉村 文

先日子ども達が豪快に遊んでいる最中に、下の子が転んでしまい腕を骨折するハプニングが起きました。2歳児の腕にギプスが巻かれ痛々しい姿に。本人は次の日にはケロツとして一週間後にはギプスを気にせず腕を動かすように。一方で親のわたしは、ギプスが外れるまで食事やお風呂、着替えなどお世話が大変になりました。そんな思いよりも大きな感情は、子どもの怪我がとてもショックだったことです。仕方のないこととはいえ衝撃でした。避けられたかもしれない後悔と、痛がる様子が可愛そうで可愛そうで、わたしも傷ついてしまいました。傷つくことなく幸せに過ごしてほしいという感情は、推し活でも同じだな、そんな着想を得て今回のテーマは、「推し活」。応援するというこのマガジンのテーマにも重なるなど感じてまとめました。

### 応援 母ちゃん！ P220～

## 川畑 隆

中山道の馬籠(まごめ・中津川)・妻籠(つまご・南木曾)・奈良井(ならい・塩尻)を巡ってきました。7月の梅雨明けの暑い日に、妻と二人の一泊旅行にクルマで出かけました。

馬籠は坂がけっこう急。いろんなお洒落なお店が並んで外国人の観光客も多く、まるで清水坂を歩いているような気分でした。食堂のおじさんは汗を拭き拭き五平餅を焼いたり売ったりお給仕したり、そこで冷たい蕎麦をいただきました。隙間から入る風と旧型の扇風機が心地よく、冷たい甘酒もおいしそうでしたが、飲み損ねました。島崎藤村の生家の記念館に入りましたが、焼け残ったという藤村の勉強部屋に夏休みの雰囲気漂っていて、とても懐かしい感じがしました。

炎天下の馬籠と妻籠の間をハイキングしているのは外国人の家族がほとんどで、私たちはそれをクーラーのきいた車の窓から眺めました。



妻籠は一転、人が少なく静かで、道は平らでした。お店も少なく昔がそのままって感じで、こちらのほうが気に入りました。「ここに泊って早朝にこの雰囲気の中を歩きたかった」というのが、妻の感想でした。松代屋という有名な旅館の古い看板を目の前にして、ここに予約しとけばよかったと思いました。

翌日は奈良井宿。馬籠と妻籠を足して割ったぐらいの賑やかさで、一軒一軒に昔の旅館名を書いた表札が掛けていました。連なった旅籠に挟まった中村邸という商家が公開されていて、昔のままの二階の客間から街道を眺めました。神社の木陰がとても涼しくて、そこでもよい時間を過ごしました。

帰りには、恵那にある坂折棚田に立ち寄りました。見事でした。他に誰もいないベンチから見、夏の夕方の遠景の山と眼下の棚田(千枚田)の緑、そして心地好い風の中にいて、極上の気分でした。「緑の違う山が近い」…そんな環境の中を、二日間、車で走りました。

### サイコロジー P215～

## 高名 祐美

4月から県教育委員会から委嘱を受け、スクールソーシャルワーカーとして活動することになった。7月になって、待ちに待った初めての支援依頼があって小学校に伺った。ソーシャルワークは長年実践してきたが、学校という場に出向くのは初のこと。とても緊張した。依頼があったのは小学校4年生、昨年度から不登校になっている女子生徒への介入だった。ケース会議では担任の先生がしっかりと目標をたてて、関



わっていることが伝わってきた。それでも良い変化がでてこないということで、スクールソーシャルワーカーの介入をということになった。子どもとどんなふう面接をして、信頼関係を形成するにはどうしたらいいか。母親や父親の悩みを受容し、学校とどう折り合いをつけていくか。新人 SSW として考えている。フリースクールでの経験をいかし、担任の先生の頑張りを承認しながら、真摯に丁寧に関わってほしいと思っている。

P235～

## 松岡 園子

先日、ヤングケアラーをテーマにした職員研修会での講演依頼を受け、高知県の土佐清水市へ行かせていただきました。高知龍馬空港から車で 3 時間弱かかる足摺岬のある、海と自然に囲まれた会場です。学校関係者や児童福祉担当の職員さんが多く参加されていました。後日、感想もいただき、気持ちの面で共感しあえることが多かったのですが、私の育ってきた神戸と環境がずいぶん違うと感じました。この土地で私が 10 代だったら、あの行動はできなかったかもしれない、また、ここだったら、ああいう展開にはならなかっただろう、反対にこういうことができたと思うこともいくつかありました。どちらが良いというものでもなく、その人が今ある環境で、いちばん腑に落ちる方法を見つけたいことが大切なのかなと思いました。

### 統合失調症を患う母とともに

#### 生きる子ども

P205～

## 杉江 太朗

児童福祉の領域で働く杉江です。最近、仕事で出会う子どもたちがカードゲームに夢中になっています。

ニュースでも、発売日の前日から並び、開店と同時に売り切れてしまうという話を聞いたことがあります。店頭でカードを入手することは難しらしく、新しく発売する際も、予約抽選をする必要があるとか。ここまで入手が困難である理由を聞いてみると、1 枚数十円で買えるカードが、種類によっては、10 万円以上で転売されており、大人が投資感覚でカードを大量購入し、

一獲千金を狙っているとのことでした。そういえば、カードの買い取り業者も多くなったような気がします。子どもらは学校があるので、並んで買うことは出来ません。大人の中にも純粋にコレクションしている人もいます。転売目的で買っているのは、子どもでなく大人の方が多いでしょう。

ビックリマンチョコのシールもそうでしたが、何に値段がつくかわからないシステムはどの時代もあるのでしょうか。ちなみに子どもらに聞くと、口をそろえて言うのが、ポケモンの「ナンジャモ」という人のカードがかなり高額で買い取りしてもらえそう。子どもらにも転売の意識が……。純粋に楽しむことが難しくなっているような気がします。

### 「余地」相談業務を楽しむ方法

P202～

## 浅田 英輔

達国日記が終わった。本編で何度か取り上げているが、ヤマシタトモコさんのまんがだ。最終回を迎えてしまった。とてもさみしいが、とてもよい終わり方だと思う。「言語化すること」って難しいよな。実際はここまでできるかなあ。できないよな。実写化されるらしい。ガッキーがマキオちゃん役らしい。最初ちよつと驚いたけど、意外とアリだな！？とも思えた。何をどこまで描くのか不安だけど、楽しみにしよう。完全にひとりごとです！

### 臨床のきれはし

P97～

## 三浦 恵子

今年もまた暑い夏がやってきました。西瓜がおいしい季節です。

昨今は家族構成の変化もあってか、都市部では一口サイズにカットされ、丸々一個の西瓜の西瓜は専ら贈答用として果物店で信じられないぐらいのお値段で鎮座しています。かつてスリードア等の大型冷蔵庫が登場した時は、「西瓜も丸ごと入る！」というフレーズでテレビで宣伝されていたことを思い出します。私は中高生の頃、腎臓を少し悪くしており、夏の午後の思い出は、西日本では西瓜やミカンの産地として

知られる地域の農家の方が格安で販売されているお店で購入した西瓜が定番だったことも思い出の1つです。

ただ今でも私の嫁ぎ先の近隣では、身近な生協の店舗でも丸ごとの西瓜をごくお手軽に入手できます。ただ、それは中で少し身が割れた家庭用(味は万全です)です。身割れなく大きく育てるのは実は難しいと聞きました。大きなものは10から12キロサイズになります。



この西瓜を毎年、御縁のあった子ども関係の施設等に生協経由でお送りするのが毎年の関連行事になっています。もちろん支える会といった組織には入っていませんが、都会の子どもたちにこの丸ごとの西瓜を体験してもらいたいなと思い、毎年同じ時期に送り続けるのが我が家の関連行事です。数年を施設で過ごす子どももおられる施設では、今年も来たかと喜んでくださることが何よりうれしいです。

当初はその時々でお送りするものを変えようかとも思いましたし、特にコロナ禍の時には個別に食べられるデザート菓子などがよいかとも施設の方と相談しましたが、迷わず「今年も西瓜で」と声が返ってきました。

子ども支援に関わる方から、毎年同じ時期に欠かさず同じものを飽くことなく届られることは、安定した日常生活を送ることが難しかった子どもたちにとってマンネリではなく、ずっと気持ちを寄せている人がいるという意味で、貴重な「安定した日常」なんですよ、と教えていただきました。この言葉は対人援助職としてとても貴重な教えだと今も思います。

結果的に数年後には「三浦(無印)さん」から「西瓜の三浦さん」に……。西瓜の三浦さん」として認知していただけることをありがたく思っています。

更生保護官署職員

## 現代社会を『関係性』という 観点から考える P191～

### 迫 共

前期授業が終わり、やっと夏季休業に入りました。例年ならこの時期に実習訪問があったのですが、今年は前期授業期間に保育所、児童福祉施設、幼稚園の実習訪問があり、授業スケジュールが圧迫されることに。授業&試験の期間はやっと終わりましたが、夏休みも公務員試験対策や入試関連業務、会議などがあり、研究とリフレッシュに集中できることもなく…。世間は「コロナ明け」という認識のようで、お盆期間に旅行やイベントに行く人が多いようですが、コロナは収まっていないし、酷暑に台風、外国人観光客の多さにも、ちょっと気が引けています。



それでも奈良の燈花会に行き、奈良ホテルで一泊。食事と景色と鹿に癒され、灼熱にゆでられてきました。

## 保育と社会福祉を漫画で学ぶ P198～

### 黒田 長宏

本文にも多少書いてしまったが、新庄監督の瘦せろという指示に従ってかっこよくなった日本ハムファイターズの清宮幸太郎を応援しはじめてしまったため、日本ハムファイターズも応援せざるを得なくなってしまい、3時間くらい、GAORAとか、DAZNでほぼ毎試合観戦することになってしまい、おかげで、私のライフワークのYouTube、『婚難救助隊』の重要なネタであるドラマを観る気力が萎えてしまい、これでは日本ハムファイターズをどうこじつけて婚活ネタに持っていけばいいのかわ

えるしかないのだろうか。これを書いた時点で、YouTube登録者は302名である。感謝である。

<https://konnankyuuotai.jimdofree.com/>

## あお結婚 P166～

### 松村 奈奈子

7月の京都があまりにも暑かったので、ふらっと長野県の標高2000mのしらびそ高原にドライブ旅行。そこは山の中の1軒宿で、きれいな星空が自慢のお宿です。夜になると宿の駐車場に、貸し出してくれたマットを敷いて、お客さんがみんな寝転んで「星空観賞会」がスタート。宿が呼んでくれた「星の先生」がレーザーポインターで360度遮るもののない夜空で、星を直接指して解説してくれます。プラネタリウムは好きで何回も見て来たのですが、いやー「本物」の夜空での解説、感動しました！。さすが山の中、肉眼でも十分星を堪能できます。驚いたのは、いくつもの白い物体が少しの間見えて、すーっと消えます。未確認飛行物体か？と思ってたら「あれは人工衛星。太陽が当たっている時は白く、陰に入るとすーっと消えて見えなくなります」「今日は人口衛星多いですね」と星の先生。生まれて初めて、人工衛星を肉眼で見ました。天の川もキレイに見えて、子どもも大人も、夢中で2時間以上寝転んで夜空を見つめていました。本当に楽しかった。

## 精神科医の思うこと P137～

### 柳 たかを

「習うより慣れろ」

僕が宝塚の芸大教員だった頃、東京から何度かマンガコースの授業に松本零士先生に来ていただいた。そのころマンガコースだけで300人くらい学生がいたので、授業は舞台を見下ろす設計の階段状の客席で構成された劇場ホールで行った。ある授業で松本先生が好きなことを徹底してきわめることもマンガ製作には大切だという話をされた。先生の作品には未来の宇宙船や第二次大戦時の戦闘機や爆撃機が活躍する作品も多い。なかでも

WW2時代のドイツ名戦闘機フォッケウルフ Fw109 をテーマにした作品がある。敵戦闘機との空中戦シーンでは、パイロットが急旋回のG(加速度)に耐えながら照準器内に敵の機影をとらえられるかが、ドキドキする臨場感いっぱいの見せ場になる。照準器を簡単に解説すると中央に十字のドット線が刻まれた円が表示されている透明スクリーン。戦闘機から発射される機銃弾は、散水用ホースから放水される水流に似ており、ホース(銃口)を右に振ると(右旋回)、出た水流は左へ弧を描きながら遅れてついてくる急旋回する敵戦闘機を照準器の真ん中にとらえて機銃弾を放っても、弾が敵機に到着する時には敵はすでにそこにいないのでなかなか当たるものではない。その対策として旋回にあわせて撃った機銃弾の未来到達位置をスクリーン状に光点で示してくれるのが光学照準器で、第二次大戦の戦闘機や爆撃機で使用された。先生は光学照準器の実物を海外旅行の時に蚤の市で手に入れ、持ち帰り職場で日々撫でるように細部までチェックし、あれこれ当時の空中戦のシーンを想像されたというお話を聞いたことがある。やがてその経験からフォッケウルフ Fw109 をテーマにした作品が生み出された。好きを頼りに時間をかけて調べる、ゴールにはいつかたどり着くと楽しみに、あえて遠くにおいておく、苦労も好きなことなら楽しい時間だ。ややこしい部分は、手を動かしてメモやスケッチを丁寧にするとうちで整理されてくる。少し手間と時間はかかるが、子供時代にはそういう余裕がなく辛抱できないから失敗したものだ。僕の作品作りも似たような面があると思っている。新しい未知のテーマで作品アイデアを生み出そうとしてもすぐにはこれだという案にまとまらない。でも好きの力を信じてモノ(情報)に触れて目をつむっていてもイメージが湧いてくるまで思考を繰り返す。(習うより慣れろ)ということわざがある、読書でもなんでも同じことを100回繰り返せばいいやでも自分のモノなる頭に入ると…まあ～たしかに(習うより…)、その通りだと思う。

## 東成区の昭和 思い出ほろほろメモ P143～

## 団遊

先日、劇団四季「アナと雪の女王」を妻と娘小5の3人で観に行きました。実妹のこと葉ちゃんが劇団四季で長く女優をしていたこともあり、私自身は色々な作品を観てきたし、高1息子も何度か観に連れて行ったことがありますが、小5娘は初めてでした。

作品はとても面白く、演出も豊かで満足したのですが、私が一番嬉しいと感じたのは、一幕が終わった後に、娘が目を輝かせて「スゴイ！びっくりしたし、面白い！」と声をあげたことでした。その感情に、「自分も少し変わったな」と思いました。

というのも、私は、家族行事に関しては「まず自分が楽しみたい」というタイプです。ですので、極端な話、子どもたちが喜んで自分的にツラナイ場所やお芝居だと、疲れを先に感じるタイプ。ところが、確かに「アナ雪」は私も楽しかったのですが、その満足感とは違う喜びを、一幕の終わりに感じたからです。

自分が何を楽しいと思うか、何を喜びに感じるかというのも、当然年齢とともに変化するものだと思います。しかし、その変化が何を契機に、どんなタイミングで起こるのかは、私には予測がつきません。気付いたら、そうになっていた。不思議です。

### 団遊の脱線的経営言論

P35~

## 村本 邦子

6月には広島、静岡、沖縄をめぐり、7月はオーストラリア、8月はネパールと飛び回っている。年齢を考え用心して、体に無理がかかっていないかと、時々、立ち止まっては体の声に耳を傾けているが、今のところ快調である。やはり、好きなことしかしていないというのがいいのか!? 経験させて頂いたことを世の中に還元するという循環をいつも意識しているものの、こちらはやや滞り気味ですみません!

### 周辺からの記憶 —東日本大震災家族応援プロジェクト—

P121~

## 國友 万裕

いよいよ来年の2月で還暦です。

還暦になったら、連載のタイトルを変えようと思います。今まで、「男は痛い！」でしたが、これからは「還暦マッチョを目指す(仮)」みたいなタイトルにしようかなと思っているんです(笑)。人生のシフトを変えるのにいい時期ですし。

まだ、考え中なのでどうなるかはわかりませんが、僕は歳をとってもできる限り若くいるのが自分のアイデンティティだと思っているので、マッチョなお爺ちゃん、かわいいお爺ちゃんを目指したい。

そうすると「男は痛い！」というタイトルで連載ができるのはあと2回ですね。正確には来年の3月にはもう60歳になっているから1回なんだけど、まだ原稿の締め切りの段階では、50代なので。

内容もこの機会に少し変えようと思います。もう60歳だから余生をどう生きるか。終活の連載ができたと思います。とは言っても、今は余生が長いから、まだ30年以上あるかもしれませんけど、とりあえず、健康や筋トレやおひとり様の生活に焦点をシフトしたいと思います。

よろしく願いいたします。

男は痛い!  
P91~

## 西川 友理

大和大学白鳳短期大学部で保育者養成に、その他いくつかの場所で社会福祉士など福祉系専門職養成・および育成に携わっています。

「西川先生はねえ、とにかく、変化に時間がかかるひとです。焦らず、こつこつ、努力して、果報は寝て待て、です。」



10年くらい前に、元教え子の占い師(介護も出来ちゃう占い師!)に、占ってもらっ

た時の言葉です。人生で、お金払って占ってもらったのは、後にも先にもこの時だけ。だから、強烈に覚えています。

今回の記事に書いた保育者の対話の場についても、「やってみたいなあ」と思ってから開始するまで3年です。「おっそ!」「やっとか!」と自分に突っ込みたくなる時に、いつも上記の占い師さんの言葉を反芻します。いつもありがとう、Hさん、あなたのあの時の言葉のおかげで、他の人と比較するより、自分でいられる方が大事だと思えます。

今回の記事に関連して、今年度の対人援助学会で保育と対話(当事者研究)について、大切な仲間と一緒に、考える場をもたせていただけることになりました。どんな場になるかなあととてもドキドキしています。でもね、こっつて本当にみんなで考えたいポイントなんですよ。保育や対話に興味がある方、いっしょに考える時間を過ごしましょう!

福祉系対人援助職養成の  
現場から  
P64~

## 坂口 伊都

昨年の暑くなり始めた頃、私は体調を崩し、仕事を辞め、急にいろいろなものを失って途方に暮れていました。突如、あり余る時間ができてしまった。明日が来ることに憂鬱になり、簡単に抜け出せるものではないとわかってから、仕方なく腰を据えて自分と向き合うことをしてきました。この体験は、これからの生活を送る上で意義ある時間だったと確信しています。年度も変わり、また忙しい生活が始まり、時間に追われる中でしばしば、1年前の自分を思い返しています。

そんな中、友人のAさんが、8月19日に、1年前の今日、一緒にランチをして散策していたことを知らせてくれました。10年日記に書いてあったそうです。こんな暑い頃に出かけていたのか。Aさんと、尽きることなく何時間も話をしていました。意外な共通点を見つかったりして、しんどい時に光が灯ったようでした。今でもその時のことを鮮明に思い出しますし、これからも忘れられない時間になりました。そして、「もう1年になるのだねえ」と連絡をもらって、また幸せな気持ちにしてもらいました。

いろいろな人と出会い、縁が遠のくことも起こりますが、繋がりが続ける人もいます。改めて、いろいろな人に助けってもらって感謝です。自分のことは自分で決着させていくしかありませんが、一人で何とかできるものでもないなあ実感しています。

## 立場が変わると何が見える

P115～

### 河岸 由里子

10代目の自殺が増えている。先日ビルから二人の中学生が飛び降り自殺を図った。一人は亡くなり、一人は重体である。夏休みや冬休みなどの休み明け近辺での自殺は多い。それを止めるべく、「心のケアを無料で届けたい」というプロジェクトを友人と始めた。Facebook でご覧になった方もいらっしゃるだろうが、第一弾は30万円のクラウドファンディングで目標を達成し、8月19日～9月3日で実施。今第二弾目標100万円で支援を募っている。こちらは、10代に限らず、心のケアを届けたくても有料だと中々難しいという方々のためのものである。

これに伴って無料のカウンセリングを行ってくれるカウンセラーも、全国各地から集めることが出来た。このシステムがある程度長いスパンで続くようにするには、コンスタントに支援をしていただける企業などを取り込むことが必要だろう。システムの構築のために、任意団体を立ち上げ、チラシ作りや周知、peatix の活用など、ここ1か月ほどあわただしく過ごしていた。仕事を減らし、少しずつ引退に向けて進めているのに、なぜか、結構忙しくなってしまった。これも私にもっと働けというどこからの啓示と受け止め頑張るか。ゆっくり、のんびりには向かない性分が幸いているかな(笑)  
ご興味のある方はホームページをご覧ください。



TTTG (Trauma Treatment Therapist Group) ホームページ  
<https://www.ttt-g.net/>  
クラウドファンディング  
[https://readyfor.jp/projects/124064/preview?preview\\_token=bb60baa60324613733073d1aa5db8802f11b25db](https://readyfor.jp/projects/124064/preview?preview_token=bb60baa60324613733073d1aa5db8802f11b25db)

公認心理師・臨床心理士・北海道  
カウンセリంగるうむ かかし 主宰

## ああ、相談業務

P71～

## 先人の知恵から

P157～

### 大谷 多加志

仕事の関係で、幼稚園や小学校、児童養護施設など、子どもに関する施設にお邪魔することも多い。ここ数カ月、どこに行っても聞こえてきたのは「どう在籍者や利用者を確保するか」が各施設の課題になっているということだった。国立大学付属の小学校や、児童養護施設でも定員割れが生じていて、それをどう挽回していくかが経営上の課題になっているようだ。子どもの人口が減少していく状況の中、今生じている定員割れを挽回する方法とは何なのか？ 結局、限られたパイを取り合う状況になっていると考えれば、すべての施設が挽回することはあり得ないのでは…？ と考えていくとなかなか展望は明るい望みにくい気がした。子どもが減っているならその分厚い体制の教育や福祉にすればいいのに、と率直に思うが、各現場では子どもの減少に合わせて体制も縮小していくのが規定路線であるようだった。2040年の多死社会に向けて、葬儀社ばかりが増えていく現状に、若者が将来期待を持ちにくいのも自然なことのように感じる。

## 発達検査と対人援助学

P87～

### 馬渡 徳子

古着屋さんが好きだ。

訪れたことのない県外の仕事があると、先ず古着屋さんを検索する。空き時間に、県内では見かけない古着やボタン、古典的なレースを見つけると「これで、次はどんなお人形を作ろうか。手持ちの服をどんな風に変えようかな。」とワクワクする。

ふりかえると、子どもの頃からミシンや編み機の音に癒されていた。我が家の二階に大手服飾メーカーの下請けとして在宅ワークをしておられた上品で標準語を話す素敵な方がおられた。私は、母に叱られると、逃げたくて泣きたくて、仏壇に供えてあるお菓子や果物を「おさがりください」

とそおつと持ち出して、「母からおすそ分けです。休憩くださいませ。」とその方の部屋を訪ねて、しばらく居座っていた。

切れ端の綺麗な布やレース、欠品扱いの素敵なボタンを使って、私のリカちゃん人形の洋服や帽子、私の洋服もよく作って頂いたので、当時の田舎には売っていないようなデザインは、子ども心に嬉しかった。

その方が、「他人と同じことを目指さなくてもいいんですよ。大勢が賛成することが正義では決していない。中学生になったら、一緒に行動することを強要する女友だちも多いと思う。けれども、流されないで『私は私。嫌! 違う!』と言える人になってね。これはそのおまじない。」と、中学校のセーラー襟の裏に、私の名前とスマイレの花の刺繍をして下さった。

そのおまじないのためかな、こんな大人になりました。(笑)

## 馬渡の眼

P140～

### 鶴谷 圭一

保育日誌や保護者向けのおたよりにキャプション付きの写真を使う「ドキュメンテーション」が一般的になってきたように思います。文字で全部説明しなくてもいいからラクですが文章力は落ちるでしょうね(^\_^)

デジカメが出てきた頃から保育者が保育中にカメラを手にするようになって、原町幼稚園では iPhone が主流です。ポケットに入れておいてスツと差し出しカシャッと写真を撮ったり、動画を撮る。それがほんとにスムーズになりました。おかげで先生たちの iPhone は映像でいっぱいです。(クラウドに上げてありますが、どんどん増えます。)なぜ iPhone かというと、AirDrop 機能で写真や動画を簡単にすばやくやり取りできるので、お互いに必要な素材をやり取りしたり、MacPC で素材を使うのにとっても便利だからです。

原町幼稚園 <http://www.haramachi-ki.jp>

メール [office@haramachi-ki.jp](mailto:office@haramachi-ki.jp)

インスタ [haramachi.k](https://www.instagram.com/haramachi.k)

ツイッター [haramachikinder](https://twitter.com/haramachikinder)

## 幼稚園の現場から

P61～

## 水野 スウ

これまでで一番暑い！夏でした。エアコンなしのわが家は、扇風機と、周りの木々を抜けて大きな窓から入ってくる風が頼り。この緑のエアコン、思いのほかよく効くんだけど、それでも今年はさすがに厳しかった。8月最終週、夜風がやっと肌寒く感じられるようになってきて、少しほっとしてるところです。

日本各地におられるマガジン執筆者のみなさんは、この夏をどう生き抜かれてるんだらう。いいお知恵あったらわけてほしい。私の場合は、秋に大きく体調崩さぬための予防をひたすら心がけました。起きるなり一杯の熱い白湯をすすり、氷のはいった飲み物をとらず、はだしを避けて靴下をはき、毎晩お腹にお灸してから眠る、など。

暑さはこの先もまだ当分は続きそうなので、どなた様にも真剣に、残暑お見舞い申し上げます。

「紅茶の時間」は今年で満40年になります。今回はそれをふりかえると同時に、紅茶を始める前のはるか遠い日の私のことも、片手かざしてふりかえり、眺めてみました。その手がかりに、とつくれた「スウすごろく」は私の年表みたいなもの。それをひもときながら綴った今号は、まさに私自身の当事者研究となりました。結論は、私ってやっぱりおもしろい生きものだ！

きもち言葉さがしている  
P81～

## 中村 正

市川沙央さんの『ハンチバック』(文藝春秋、2023年)を読んだ。芥川賞受賞作である。障害当事者の経験をもとにしている。その中で、「健常者優位主義」(35ページ)という言葉がでてくる。それにマチズモとルビが振られている。具体的な描写はこうだ。「私は紙の本を憎んでいた。目が見えること、本が持てること、ページがめくれること、読書姿勢が保てること、書店へ自由に買い物に行けること――5つの健常性を満たすことを要求する読書文化のマチズモを憎んでいた。」(27ページ)と。「なるほど！」と思った。障がい者と女性が交差するまなざしからみた日常性のいらだちが基調に

なっていると読める。健常者と男性が交差し、主流となった日常性がつくられている様子もよく伝わる。マジョリティの特権が浮かび上がる。そうした中を生きている体験をもとにした棘ある描写が続く。それらをつなぐものとしてのマチズモがあり、読書文化という対象の中心を支えている。これはルビを振る力だと言えるだろう。作家は言葉のプロだと思った。もちろん社会科学や人文科学的でもある。障害学を小説という形式で伝えてくれる本だと思った。狭い意味での学問に閉じない知の広がりや深まりを感じる。そう感じさせてくれるのだからやはり小説の力なのだろう。文学、漫画、映画など、時にはスポーツも含めて人間と社会の理解を深めてくれる、学術や学問とはまた異なる知の力を感じた。こうした世界に時間を割きたいものだ。

臨床社会学の方法  
P25～

## 千葉 晃央

『達人ケアマネ』(日総研)の誌面で連載が始まりました。これまで特集『家族療法の基本とアプローチにおける留意点』の掲載、そして前回の連載テーマ6回「家族支援と対人援助」に続き、今回はテーマを「家族の努力を見逃さない！家族の理解者になるためのジェノグラムを使った事例検討会」(情報誌：隔月刊誌 達人ケアマネ 8・9月号目次 (nissoken.com))として6回連載予定です。初回は、ジェノグラムからできるライフステージごとの経過を検討し、ケースの理解を深める内容を書きました。秋田・京都ジェノグラム研究会の仲間、大沼さん、鈴木さんにもご協力をいただき、誌上ジェノグラム事例検討会と合わせて、ジェノグラムのどこを見るか？「年齢差」をテーマに書きました。さらにオンラインでの事例検討会を企画もしてみました。これからの連載も何を書こうか考えます。



中央法規さんから発刊された本の2周年記念として、オンラインでの事例検討会

も行いました。早樫一男先生、寺本紀子先生と一緒にある事例からジェノグラムを用いた事例検討会を行いました。初めての方も慣れていただけた方もおりましたが、無事協力して終えることができました。第2回目はこのテーマで！という振り返りも終わり、また次の展開もあるかもです。



家族支援と対人援助 **ちばっち**

[chibachi@f2.dion.ne.jp](mailto:chibachi@f2.dion.ne.jp)

090-9277-5049

障害者福祉援助論

P18～

## 団 士郎

毎日いろんな事をしている。誰でもそうだとわれわれが言いたがる、ちょっとだけ言うと、その中に暇つぶし、時間つぶしはない。それは最近のことではなく、40代くらいからそんな感じだったかな。昔は、賭け事とかゲームの類いのことも楽しんでた。それがいつの頃からか姿を消してしまった。多分、kill timeという言葉を知ってからだ。暇つぶし、時間つぶし、そんな時間はない！と思ったのだ。

楽しんでいる人をとやかく言う気は全くないことはお断りしておきたいが、とにかく能動的に楽しめることしかなくなってきた。それで今日までやってこられたのだから有り難いと思っていればいだけのこともかもしれない。

労働に関して、好き嫌いで決めることに徹したのは50歳からだ。公務員という組織労働を卒業した後は、それを最優先で決めてきた。立命館大学の教員としては、そんなわがままが通るかなり特殊な雇われ方だった。ノルマは少なく、やりたい事だけのびのびやれていたのは同僚達のおかげがあった。(ありがとうございます)

その結果が今にまで至っているのだが、誰も彼もがそういうわけにはいかないよと言われるとそう思う。

今、とても忙しいのにストレスがない。やりたいことばかりでスケジュール帳が埋

まっているなんて理想的だ。感謝しかありませんよ、まったく。

## 晩年 D・A・N 通信④ P45～

### 中島 弘美

猛暑が続いている。

これまでは、予約時間になると、ご家族を面接室に案内して、はい、スタートという流れだったが、この夏は異なる。少し休憩をして、涼んでもらう時間を設けた。うちわを準備し、水分補給と塩分補給の確認。汗だらだらで急いで来られる方、早めに来てロビーで休憩してから来所される方も。

コロナ感染拡大のときは飛沫の影響を考えて「飲み物はできれば、飲み終えてから面接室にお入りください」とお願いしていたが、いまは、水分は大丈夫ですかと途中で確認することもある。

一方、来られた方の経過を聴いていると、「再びコロナにかかりました、二回目です」という報告もあり、コロナの影響は消えていない。

安心してゆとりをもって、対面でカウンセリングを受けていただくための優先順位は簡単ではないなあと思う

## カウンセリングのお作法 P42～

### 藤 信子

薬師寺が国宝東塔落慶記念で、東塔と西塔を特別公開していたので行ってみたい。特別公開とは、両方の塔の1階の部分に入ることができるというもので、塔の上まで行けるわけではない。その1階部分には、釈迦八相像があり、それを見ることが出来た、私はここには随分若いとき(高校の修学旅行だったか)に来たばかりだったので、その時は東塔しかなかった。唐招提寺が近くなので、そちらにも回った。木が茂っていて、それに囲まれるようなお堂や、周りは、奈良の街並みから少しはずれているせいか、人も多くなく、ゆっくり歩けたのも良かった。

## 解放の心理学へ P39～

### 篠原 ユキオ

プレバトに漫画を！

『プレバト』というテレビ番組がある。芸能人やスポーツ選手が出されたテーマに沿って俳句や絵を描いて競うという作りである。俳句がメインだが水彩画や消しゴム版画などというものもあって、構成に変化を持たせている。

芸能人たちの隠れた才能を発見する事もあるが一見うまく見えても素人は素人だなと思わせるものも多い。

テレビの前でツッコミを入れながらここに漫画バージョンがあったらなあと常々思っている。

ストーリー漫画を即興で考えるのは難しいが、4コマ漫画や1コマ漫画をその日のニュースや話題にあわせて描くというのは可能だ。俳句と同じでペン1本ですぐできる。

僕は大学の授業では90分の間に100点ほどの学生作品の添削を毎週アドリブでこなしてきたからそんな企画があれば是非ともやらせて欲しいのだと密かに思っている。

## HITOKOMART P227～



### 見野 大介

まだまだ暑いけど、夜は秋の虫の音色も聞こえてきて、涼しく感じるようになってきた。もう一年の半分が過ぎ、秋のイベントラッシュが近づいていることに焦るばかり。虫の音色をBGMに、今夜も残業です。

## ハチドリ器 P4

### 鶴野 祐介

本誌連載中の「うたとかたりの対人援助学」を元にして、このたび『うたとかたりの人間学 いのちのバトン』(青土社)を刊行しました。ぜひお読みください。

## うたとかたりの対人援助学 P161～

### 山口 洋典

コロナ禍も収束かつ終息の傾向と見えて「4年振りの」という枕詞に触れる機会が多い、そんな夏を過ごしています。中には「4年がまんして」というものもあります。その1つが宮城県気仙沼市、唐桑半島の鮎立地区にあるツリーハウスのお色直しです。2014年から2015年にかけて東北ツリーハウス観光協会と立命館災害復興支援室とのプロジェクトで海の見える小高い場所に整備した床や外壁を、8月21日から25日まで、学生4名を交えて塗り直してきました。

ただ、学生にとっては「〇年振り」でも「〇年がまんして」でもなく、「今年が初めての〇〇」という経験も多いのかもしれませんが。中でも気になるのが「今年が初めて対面授業でのレポート」と思われる学生がいたことです。今回、本務校のみで631人分の採点を行ったのですが、論理的な構成、授業内容との関連づけ、文献やインターネット等からの引用に基づいた情報・知識の整理、独自の視点の提示、そうした基本的な事柄が整っていないものが散見されました。生成系AIの台頭が叫ばれる今日この頃ですが、それらの技術を使いこなす上でも、野球でバットの素振りを繰り返すように、まずは読み書きの基礎を習得していただきたいと、かつての自分を棚上げにして思う今日この頃です。

## PBLの風と土 P169～

### 小林 茂

今月、人間ドックに行ってきた。昨年の健診の結果と似た数字と、しばらく変なだるさと気力がわかない日が続いていたが、どうやら変なウイルスをもらっていたらしく、それが数値に現れていた。わかったからと言って気持ちが明るくなるものではない。

前職を退職してから無理がたたったのか、退職した月の翌月に病気が見つかり、それ以降治療を続けている。病気は慢性疾患の一つだが、長時間労働と不規則な食生活、職場内のストレスが想像以上に身体に負担をかけていたのだろう。その後、大学の教員もすることになり、その後

の臨床の過程でヨーガに関心を持ち、研究しながら毎週ヨーガを始めた。始めて3年目になったが身体的にも変化を実感できるまでになった。現状維持ではなく良い方に変化したと思う。これが健康体であれば、もっと変化を意識できたのではないかと思わされる。いたずらに健康を意識するような健康オタクになろうと思わないが、無駄に医療と薬のお世話になることを思えば健康であることは大事に思う。

### 対人支援点描

P113~

## 尾上明代

春 semester が終わって、夏季集中授業などで再び多忙になる前に、思い立って八ヶ岳・清里へ行った。

Do your best, and it must be first class. (最善を尽くせ、そして一流であれ)  
これは、戦後の日本の復興に多大な貢献をしたポール・ラッシュのことばである。彼は清里高原の開拓にも力を注いだ。私が若いころに清里で出会いインパクトを受けたことばである。今回、ホテル・ハット・ウォールデンで絶版の本を見せてもらって、彼の業績に触れ、改めてその構想の偉大さに感動した。

八ヶ岳はとても好きな避暑地の一つで、今回は数年ぶりの訪問だったが、他の場所と変わらない暑さだった。しかし、夜は多少気温が低くなってくれた。初めての、非日常過ぎる夜の森のツアーが素晴らしかった。漆黒の森で動物の気配や音に耳を澄ましたり、木の香りを嗅いだり、大地に寝そべり星を眺め、自分の呼吸と一体化したり！まったく人工的な明かりがない夜の森に入ることは、絶対に一般人だけではできないことだ。ツアーガイドさんの案内が秀逸だった。とても興味深いお話を聞きながら、異世界を安全に探索できた。また行きたい！

## 寺田 弘志

夏季休暇に東北南部各地を訪ねてみました。行って良かった！私のお勧めスポットは・・・

上杉神社、伝国の社、蔵王山のお釜、母成温泉、磐梯山、諸橋近代美術館、鶴ヶ城、会津さざえ堂、北方文化博物館、東北には新しい発見がたくさんあります。

ただ東北は、午後4時などに閉まる施設が多いです。実質的な時差でしょうか。閉館時間がもっと遅ければ、行けたスポットがいくつもあります。東北では早めに行動することが旅のコツです。

そして、米沢牛・新潟牛・粉そば・新潟の地酒などおいしいものいっぱい。

閑空から飛行機で1時間ちよつと。あとはレンタカーで回るのが便利です。新潟で大学時代の友達に再会。私は忘れていたのに、友人が昔のことをよく覚えているのに感心しました。本文は、記憶力の悩みから、私が一生涯の不覚をしてしまう話です。

### 接骨院に心理学を入れてみた

P175~

## 古川 秀明

タブレット(学習端末)を使った自殺予防健康観察の取り組みについて、何とか4月実施にこぎ着けた矢先、文科省から以下の通達が来ました。



### 講演会&ライブな日々

P103~

## 工藤 芳幸

7月初めに2年前から準備してきた第49回日本コミュニケーション障害学会学術講演会を無事に終えることができて流石にホッとしたのも束の間、その後もオンデマンド配信の準備や大学の業務が押し寄せて、気づいたらお盆を過ぎていました。

そんな中、我が家にねこが来ました。高校生の次女が保護猫カフェでボランティアをしており、1ヶ月の預かりをすることになったのですが、結局そのまま我が家のねこになりました。まだ5月の子猫です。ね

このことは全くの初心者。ねこがやることなすこと、関心を持つものがどれも新しい体験です。ねこは指差しに反応するのだろうか？共同注意をするのか？ということが私の関心事で、今のところ指差しすると指した方向ではなくて指の先をじっと見ています。人間とは別の行動原理で動いている生き物が身近にいと、人間社会で体験している「人の壁」のようなものから少し距離を取れるような気がしています。



### みちくさ言語療法

P223~

## 原田 孝

今の教育界は、激しく変化の波が押し寄せています。様々な方向を向いた波で、「それはちょっと極端では・・・」というような方向への波もあります。基本的に教育は子どもたちの成長を支援するものです。健全に、バランスよく、しかも合理的に成長をサポートできるシステムの構築が目標であるべきでしょうね。今回の居場所も、単に不登校生の居場所だけでOKではなく、その原因へのアプローチも同時に行いましょうということ内容になっています。

### 先生のための16の言葉

P295

## 安發 明子

10年の活動の軌跡が一冊の本になった。フランスのエデュケーター国家資格のガイドラインには養成課程で第二外国語の習得まで課せられていて、それは、海外も含めた自分の実務分野の情報をアップデートし共有し職業の発展に貢献することが求められているからである。日本では実務者自身が日常的に海外も含めた情報収集をする機会は少ない。だからこうい

う本があることで、日本の福祉の発展についての議論に花を咲かせることができると思う。フランスの福祉は合理的で人間的な工夫がちりばめられている。日本でモヤモヤと抱えていた気持ちにパズルがはまるように、探していた言葉や考え方に出会えた。是非議論のたたき台に使ってほしい。

Akikoawa.com

一人ひとりに届ける福祉を支える  
**フランスの子どもの  
育ちと家族**

安藤明子 著



**フランスのソーシャルワーク  
P231~**

## 小池 英梨子

里親募集中な猫さん新着情報

チャコ。9歳。おばあちゃんとずっと2人暮らしをしてきましたが、おばあちゃんが亡くなってしまいました。お膝の上が大好きです。猫は嫌いです。一緒に暮らすととても楽しいともいます。そのほか里親募集中の子は「ねこから目線。里親募集」で検索！



**そうだ、猫に聞いてみよう  
P151~**

## 竹中 尚文

今回は、休載にさせていただきます。約10年間、一緒にやってきたホームレス支援団体を抜けることになりました。突然のことでした。先月と先々月にインタビューをさ

せてもらった方に8月の支援日に最終原稿を持ってくと申し上げていました。それが、急に8月から私たちがこれまでの団体から抜けることになったので、インタビューに応じてくださった方々に会うことができなくなってしまいました。そんな事情で今回は休載に致します。◆これまで私たちがやってきたことについて、私はそれを善行と認識することができなかったのです。ホームレス支援という行為を善い行いとする人は、多くいらっしゃると思います。しかし、私はこれまでやってきたホームレス支援を善い行いと考えることはできません。私は仏教僧として、浄土真宗の僧として自らの行為を善行とすることはできません。◆他の観点からみても、自らの行為を善行とするなら、自分は善い人と思ひ込みやすいものです。援助者としての自分を善い人と考えると、気づかないうちに非援助者に上から目線になることが危惧されます。援助者と非援助者の関係は常に平等でなければならぬと思います。◆今、マスコミがホームレス支援のボランティアをしている人を善い人として取材することが多いように見えます。人間に対する思いこみであり、決めつけです。

### 路上生活者の個人史

休載

## きむら あきこ

54年間生きてきて、一番夏が長い年になりました。冷房不要な北海道だったはずなのに、夜になれば気温が下がる北海道なのに・・・これまでの北海道の夏とは全然違う、長い夏！

我が家、冷房がなく、そのまま寝ていたから、うっかり死んでしまうかも?!という危機感を覚えました。なんとか生きていますが、夏バテです。

ということで、本編を書く力がありませんでした。暑さに負けて、1回休み、です。

### かぞくのはなし

休載

## 山下 桂永子

今回は休載いたします。書きたいことはあったのですが、言い訳です。今年の夏は、暑すぎて外に出る気が起きず、ほぼ室内で過ごしていました。それなのに風

邪を引いてしまったところからの喘息になり、薬を飲み、吸引しながらなんとか予定をこなしながら仕事をする日々。「遊んでないし、外にも出てないのに体調不良になるのなんでや?」となげく私に友人が「運動不足や」と突っ込みます。運動不足で体調不良になったり、話題が健康の話になりがちなのは確実に大人の階段を登っているということですね。子どものころは8月31日には火事場のクソ力を発揮し、宿題をなんとか終わらせていたのですが、今回は対人援助マガジンの原稿を書き始めたものの、あきらめるという大人の決断をしました。また次回読んでいただければ幸いです。

### 心理コーディネーターになるために 休載

## 脇野 千恵

夏になる前は、夏の暑さを想像もできなかったが、今年はさらに猛暑続きにやっばり来たなと思った。地球レベルでは、このような暑さは、埃が飛ぶ程度のもだろう。しかし、日々人間は生き暮らしている。さすがに長い人生で、明らかに自然のありようが変わってきているなど感じるこのごろ。8月初旬強い台風接近に伴い、年に一回の趣味の楽器のコンクールに参加できなくなった。台風の進路が定まらず、いつ帰れるかわからないとなると断念するしかなかった。長期にわたって交通手段が絶たれるとどうしようもない。それまでのオンラインでの練習も含め、ことのほか熱心に取り組んできたのに。

実は3年前、コロナ禍で断念した経緯があり、リベンジのチャンスだった。また1年間練習に励むことになるのかと思うと、ちょっと自信がない。元気でいられようか...と考えてしまう。まさかという事故は起きるものだなと思った。

### こころ日記「ぼちぼち」

休載

## 一宮 茂子

【ロシアのウクライナ侵攻】

ロシアのプーチン大統領(以下プーチンと略)は、2022年2月21日、停戦協定を破棄してウクライナ東部で親ロシア派武装勢力が独立を宣言していたドネツク、ルガンスク両州を共和国として承認しました。



そして同年2月24日から1年半以上経過した現在も、ロシアは終わりの見えない壊滅的な攻撃をウクライナに仕掛けています。戦死者の数は増え続け、ウクライナ国民の多くが難民となって国外へ脱出しています。

プーチンの目的は、威圧され民族虐殺にあっている人たちを守るためであり、ウクライナの「非軍事化と非ナチス化」を実現するためだと述べています。ウクライナで民族虐殺はおきていないし、ウクライナは民主国家でゼレンスキー大統領はユダヤ系です。こんな訳のわからない理屈で他国に戦争を仕掛けるプーチンは常軌を逸しています。他国を力でねじ伏せてわが領土とするような指導者に世界も自国民もついていくはずがないと思います。ロシア国民はこのような実態を知らされているのでしょうか。情報統制や封殺などでプーチンにとって都合なことは隠しているのでは？一刻も早くこの戦争が終わることを願っています。

### 生体肝ドナーをめぐる物語

#### 休載

## 岡崎 正明

50歳が見えてくる年齢にもなると、「生まれて初めての経験」というものが少なくなるはずなのだろう。でも個人的にはそんなマンネリ感はあまり感じず、結構新しい経験や発見の日々な気がしている。それは元来のADHD気質のせいかもしれないが(?)、コロナ禍を経験したことも大きいかもしれない。なんだかあたりまえの日常や非日常に素直に感謝できるようになったのは、私だけではないだろう。

この夏、中2の息子と台湾へ行った。我が子と行く初の海外。初めて空港で車イス対応を頼み、初めて行く小籠包の店で最高にうまい食事を食べ、初めて行った夜市で注文と違う料理が出てきた。帰国後も、盆休みには初めて下の娘と輪ゴム飛ばしだけで1時間以上遊んだ。そして何より11月11日~12日には、対人援助学会初の広島での年次大会で、生まれて初めて大会事務局の共同代表というお役目をさせてもらうことに(みなさんぜひ広島にお越しください！)。

もちろんプライベートでも仕事でも、不安や大変なことも横たわっているが、それ

でもこうしてやれていることにひたすら運の良さを感じる。本当に感謝しかない。

さてそんなわけで？この度、人生初の「休載」をすることにした。子どもの頃よく漫画雑誌で「作者取材のため今号は休載します」というのを見て、悔しいようなちよつとカッコイイような気がしていたが、まさか自分ができるようになるとは(笑)大人になったなあ。事情はわりと前向きな理由なのだが、詳細はまたこのマガジンでお知らせしたい。次かその次には復活できるようにしたいと思っています！

### 役場の対人援助論

#### 休載

## 荒木 晃子

2023年10月島根県に導入されるパートナーシップ制にむけ、LGBTQ当事者支援に注力する同志と共に、あれこれ画策中である。これにより、法的保証はなくとも、社会制度として当事者の家族形成に新たな選択肢が広がることになる。

勤務する医療施設では、婦人科の看護師、胚培養士、受付スタッフ、内科の看護師、検査技師スタッフたちの研修に向けた勉強会を予定している。受診の必要がある当事者を迎えるために、LGBTQの基礎知識はもちろんのこと、患者としての対応や問診票の項目の見直し、診療時の対応など、受療する新規患者の対応に多くの留意点が認められるからだ。数回に及ぶ院内勉強会には、レインボーパレード主宰当事者を講師に迎える会も設けた。医療者がわからない/知らないこと、注意すべきことを問い、また、当事者からは医療現場に望むことの教示を受けたい。当然、医療現場/医療者ができること/できないこともある筈だ。大切なことは、互いにそれを知り、理解したうえで支援につなげることであろう。

例え、新たな制度を導入しても、その制度のなかで、どのような支援が必要か、援助者は何ができるのか、それを誰がするのか、がわからなければ、当事者が健康で安全な日常を送ることは難しい。同時に、当事者はどこの誰に支援を求めて良いのかを知る必要がある。

現在は、来月に迫るパートナーシップ制導入にむけ、援助者同志が直接、当事者の声を聴き、医療・教育・子どもの福祉・心理サポートの各領域で、当事者支援に取り組む準備を進めている最中である。新たな支援にチャレンジする経過は後日整理してこちらに掲載する。

微力な筆者は、今しばらくは援助実践に全集中のため、今号も休載とさせていただきます。

### 生殖医療と家族援助

#### 休載

# 付け加えることができる価値は何か？

～82000 キロ離れてみた経験から～

3

千葉 晃央

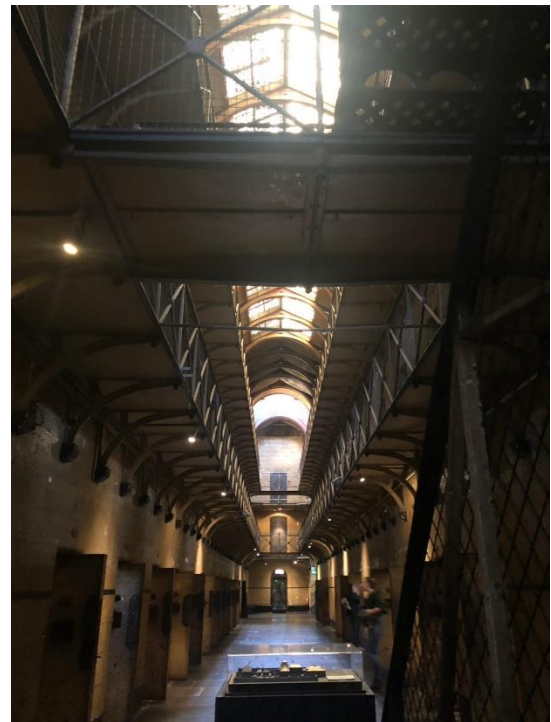
## 捕虜体験に近い経験



旧メルボルン監獄へいく。1850年代から1923年まで使用されていた監獄。130以上の拷問器具、死刑囚のデスマスクもその罪状も解説付きで展示されていた。絞首の様子、女性の不貞に対する処罰なども展示紹

介。薄暗く、独房も狭く、入るとひんやりして、ゾッとする雰囲気あり。

独房が連なる棟や監獄の門などが残されていた。入り口で、囚人体験ツアーをしませんかと誘われる。チャレンジしてみた。



同行した日本人2人と合わせて男性3人で参加。旧監獄前に20人程度が開始を歩道

で待つ。監獄の建物の物々しさと裏腹に参加者の様子は観光客。半ズボンに、ガイドブックと緩やか。その対比を見ているうちに、看守が出てきた。ツアーの開始が告げられる。すでに、ここからスタート。大声で威圧的に、怒鳴られて入れられるのである。



「はやくはいれ、何をダラダラぼーっとしているんだ」というような内容かと思われる。私たちは独房が並ぶ廊下に連れられて行く。そして、壁に背を向けて、きちんと立つことを強られる。まさしく「看守」。一切笑顔はない。列の先頭から最後まで何度も行き来をしながら、一人一人を上から下までなめまわすように見る。姿勢が乱れていると正される。参加者もはじめは笑いが出ていたが、しばらくするとそれもなし。真剣に伝えようとしている雰囲気呑まれる。

英語がわからない。早口で余計にわからない。「戦争で捕虜になるというのはこういう体験か」と思う。いくら体験ツアーであっ

ても不安になった。看守の説明の最後に「少し自由にみていい」という言葉を言っているようで、その時には参加者は柔らかい表情を取り戻し、各所をまわる。勇気を出して看守と写真を撮ってもらう猛者もいて、威厳も持ちながら笑みもなく看守は撮られていた。また次の場所へ移動させられて座って話を聞いていくこと数回。独房以外の監獄は男女で分けられて、シャワーブース1つとトイレが1つ程度の設備でウン十人が入れられていた。投げられないように机も椅子も固定化されている様子もあった。実際に第二次世界大戦時には、臨時的に再度使われたこともあったそうである。拘束され、怒鳴られ、異国で言語が不明という環境がいかに過酷であるかを身を持って体験した。この観光ツアーでさえ、いつ終わるのか?とも感じた。わからなかいことが不安



を増長していた。戦時下における捕虜の立場の一端を経験することができた。



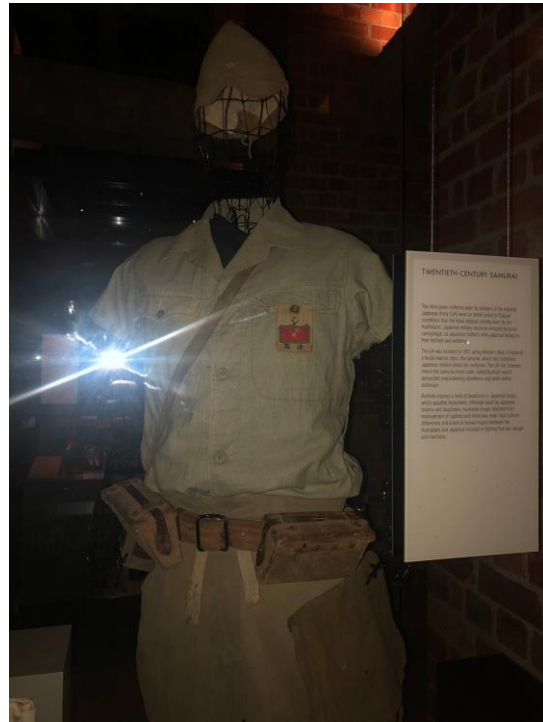
ジブリの映画『魔女の宅急便』に登場する建物のモデルといわれるフィンダーストリート駅をとおって徒歩で南下。エドワード7世の大きな像があった。彼は日英同盟などを締結し、日本・フランス・ロシアとの関係が強化された時期に在位し「ピースメーカー」と呼ばれているそうである。戦没慰霊館に入ると入り口ではたくさんのメダル？勲章？の展示があった。

## 日本によるオーストラリア攻撃





日本軍はオーストラリアを空襲している。代表的なものは「ダーウィン空襲」と呼ばれ、1942年2月日本海軍が行った。計242機の日本軍機が2回、ダーウィン湾の市街地、艦船そして2つの飛行場を攻撃している。オーストラリア史上で最大規模の他国による攻撃となっている。そして継続的に1942年から43年にかけて100回以上日本軍がオーストラリアに対して空襲を行っている。また、潜水艦によっても攻撃が行われた。近年になってオーストラリア軍が潜水艦の購入を考えた時に候補として日本製もあったが、こうした経過もあって今だに国内から抵抗があったという話も聞く。



加害者の国の人として戦没慰霊館を訪れることには勇気が必要ではあった。日本か



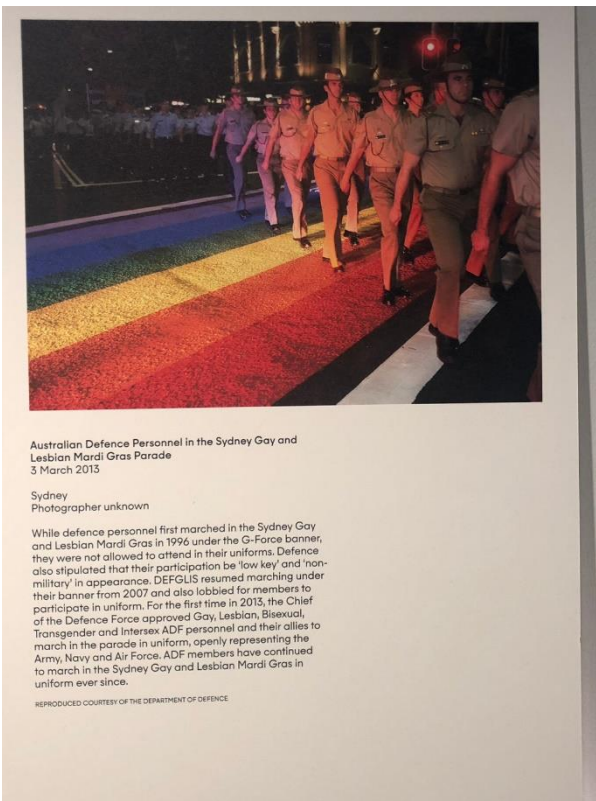
ら受けた攻撃の記録、捕虜の記録も展示されていた。オーストラリアがイギリスの植



民地時代から独立しての建国以後にいかにも国際紛争への協力を行い、国際的立場の使命を担ってきたかを中心に伝えていた。また、軍隊というマッシュヨな価値だけでなく、LGBTQ の運動も積極的に行っている姿も印象深い。命をかけてきた歴史の側面を見せていた。



その帰り道、オーストラリア軍の兵舎前を歩く。入り口前には大砲と記念碑があった。メルボルンを歩いていると開放的だと感じてきたが、アートに関する大学の前を通ると、さらに自由でのびのびと、豊かな自己表現をしている姿も見られた。



Australian Defence Personnel in the Sydney Gay and Lesbian Mardi Gras Parade  
3 March 2013

Sydney  
Photographer unknown

While defence personnel first marched in the Sydney Gay and Lesbian Mardi Gras in 1996 under the G-Force banner, they were not allowed to attend in their uniforms. Defence also stipulated that their participation be 'low key' and 'non-military' in appearance. DEFGLIS resumed marching under their banner from 2007 and also lobbied for members to participate in uniform. For the first time in 2013, the Chief of the Defence Force approved Gay, Lesbian, Bisexual, Transgender and Intersex ADF personnel and their allies to march in the parade in uniform, openly representing the Army, Navy and Air Force. ADF members have continued to march in the Sydney Gay and Lesbian Mardi Gras in uniform ever since.

REPRODUCED COURTESY OF THE DEPARTMENT OF DEFENCE

## 移民資料館へ



新しい国をつくと建国し、その新しいオーストラリアをつくる上で、住民が間違いなく必要だった。そのため、様々な機会移民を受け入れてきたことが移民資料館では展示されていた。メルボルンを歩いていると世界全ての人種の人がいるのではないかと感じた。人種のるつぼといわれるニューヨークよりも感じたし、人種によって仕事の偏向も少ない印象を持った。

移民のきっかけはこれまで歴史でならってきた、そしてニュースで見てきたあらゆる災害である。そして先にいた親族を頼ってくるという流れもある。災害は自然災害はもちろん戦禍という災害もあるし、政変の場合もある。日本軍が第二次世界大戦で中国を攻撃し、その被害で中国からオーストラリアに移民した様子も展示されていた。日本人もオーストラリアに移民としてもち



ろん来ていてその家族の詳細も展示されていた。テラーをしていた家族の姿もあった。

また、移民の方々の一部は国を追われている。戻れないのである。今いるところを豊かにするしかない。その共通するエネルギー





一も感じられた。来館者は小学生が多い。学校行事で来ている様子である。入館時にはどの国から来たか？と問われた。入館者のルーツも集計していた。移民には差別もついてくる。さらに広義に捉え、LGBTQ へ

の差別、性教育、子どもの成長もテーマに啓発を行っていた。

監獄、戦争慰霊館、移民資料館をめぐり、開発し、創造するエネルギーを強く感じた。日本ではなかなか感じ得ない体験となった。



---

---

# 臨床社会学の方法

## (42) 「知らないこと」はつくられている -物語の構造を変容させる力としての無知学-

中村 正

---

---

### 1. 無知の姿勢について

ナラティブセラピーに無知の姿勢 *not-knowing approach* というアプローチがある。意識的に無知という立場をとることを治療者の姿勢として重視し、そこから派生する「治療の会話」および「会話にそった質問」という手法がセラピーには奏功することを論じている。クライアント自身が自分のことについて専門家のようによく知っているということが前提になっている。「社会構造」から「意味生成」へと視座転換を行い、物語的文脈で人間を理解するセラピーの手法として著名な手法である。専門家の立ち位置を相対化する意味もある。語り、言葉、会話の思いがけない展開のなかにもみ存在するものに気づき、意味論と物語論の領域に根ざすアプローチとして重視されている。本稿で参照した無知の姿勢についての文献は次のとおりで頁数はこの論文からのものである (S・マクナミー、K・J・ガーゲン編/野口祐二・野村直樹訳『ナラティブ・セラピー-社会構成主義の実践』遠見書房、2014年。ハーレーン・アンダーソン、ハロルド・グーリシャン著「クライアントこそ専門家である-セラピーにおける無知のアプローチ」43-64頁、Anderson, H., & Goolishian, H. (1992). The client is the expert: A not-knowing approach to therapy. In S. McNamee & K. J. Gergen(Eds.), *Therapy as social construction* (pp.25-39,

SagePublications, Inc.)。

物語論的文脈や立場とは、「人は他者との会話によって育まれる物語的アイデンティティのなかで、そしてそれを通して生きる (48頁)」のであり、治療者が会話を通じて理解を進める際、無知の姿勢をとることを強調する。「セラピーはあらかじめ用意された意味づけに基づく質問によって常にはじまる (51頁)」ことが多く、「治療的質問、あるいは会話的質問こそ、セラピストが専門性を発揮する際の主要な道具となる (54頁)」としてこのアプローチの重要性が説明されている。

また、この手法をとおして対話を行うと、クライアントが思う主観的世界との対話が開かれ、クライアントのストーリーから教えられるという。「セラピスト自身の理解の範囲には限りがあることをクライアントに教えてもらうこと (54頁)」、「無知の質問は可能性の領域に踏み込み、未知の事柄と予見できない方向性へと導く (56頁)」、「セラピストは、マニュアル的な質問や特定の回答を求める質問ではなく、『無知の姿勢』で質問するという専門性を発揮する (47頁)」と定義されている。こうして、治療者が会話を通じて理解を進める時、「無知の姿勢」が役立つことを強調する。

この論文では、「どこまでもセラピストとクライアントの間の対話 (62頁)」であるとされている。二者関係ということは、伝統的なセラピー関係が想定されている。関係は

それ以外の社会へと開かれていない。

そしてクライアントの悩みについて知っている者として専門家が話を聞き、理論にもとづき判断や治療を行うという「範列的態度」は「知者の立場」であり、それとは異なるナラティブセラピーは、物語的態度としてクライアントの立場を重視するという。この無知の姿勢は「ソクラテス的問答法」に類似しているともいう。

ここまではセラピーの知識の一つとして共有されている。多くの人知っている手法である。用いている人も多いと思う。しかし、以前からこれは問題点があると考えてきた。それは次のような事情による。

## 2. 無知の姿勢への疑問

無知の姿勢は、理論に基づき解釈を行い、心理的に診断をするアプローチではない物語的手法とはいえ、あくまでもカウンセリング手法なので、やはり戦略的な印象を受ける。来談者はこの手法によってあらかじめフレーム化されている。セラピーなので自然な会話ではなく、組織され、仕組みられた会話となる。

このアプローチについて考えておきたい問題は4つある。第1は、苦悩それ自体が社会的に作られている点についてである。「なんらかの脆弱性をもつことに由来する心理的苦悩があるクライアントを想定してみよう。無知の姿勢という臨床心理の手法はどの程度通用するのか。倫理的に大丈夫なのか。」とこの手法を紹介した時に社会的な脆弱性や属性を持つ人たちから問いかけられたことがある。

セラピーでは、クライアント扱いされる。なんらかの属性に基づく差別や不利益を受け、それが傷となり心理的相談に登場することが多い。具体的には、事件の被害者(家族も含む)、公害被害者、DV、子ども虐待、いじめ、体罰、ハラスメント、性犯罪被害・犯罪被害者、交通事故の犠牲者や家族、医療事故、学校での事故など、トラウマ的体験の被害者やマイノリティの体験だ。

こうしたことを背景にもつ心理的苦悩の初発の原因は多様だが、社会問題や社会病理を背景にしている点は共通である。実在的・実存的な生活の苦難や苦悩がそこにある。心理的苦悩の社会的背景は何なのかという問いを忘れてはならない。無知の姿勢で話を聴く場合、ナラティブをどの程度にすればよいのか悩むクライアントもいる。それは戦略としての無知なのか、背景事情について本当に無知なのかということへの猜疑心である。無知の姿勢に立つセラピストはクライアントに「あなたの話を聞かせて欲しい」という。なんらかの被害や脆弱さをもとにした苦悩が主たる内容の場合、そのセラピストが元凶となっている歴史や経過を踏まえているかどうかは不明である。セラピストの無知の姿勢から発せられるその問いに応答することにどれだけのエネルギーがいるのか、こうした属性をもつクライアントは逡巡するだろう。信頼関係の構築に課題が残る。苦悩の背景にある社会の理解をセラピストが明らかにしていない以上、この無知の姿勢を用いることはクライアントに負荷をかけることがあると知ることには必要だろう。

第2は、物語的対話が意味生成として自由になされる条件の理解がセラピストに求められる点である。物語は意味を生み出す社会構造に拘束される。たとえば加害と被害は非対称に存在している。被害者ポジションに由来する苦悩や苦痛に対応するように加害者や加害の責任が十分に果たされていない場合、物語の構造的な制約があり、意味生成は自由ではない。通例、被害者へは十分な謝罪はなく怒りや悲しみが強くなる。そうするとどのように苦悩を語ることができるのか。ナラティブを要請されること自体が辛い体験となりかねない。強いられる告白や対話のように思える。苦悩の源泉である歴史や背景について知識のない対人援助職者は多いと思う。セラピストの真なる無知の扱いが課題である。この点の自己点検や研鑽がないと無知の姿勢に対応して安

心や信頼をもとにした対話は困難だろう。

第3に、こうした課題がある状況でそれでもなお一種の戦略的コミュニケーションの手法を用いて対話することが嫌悪の対象となりかねない。つまり、来談者を心理療法の対象とし、セラピーの戦略として無知の姿勢を用いるという形式は、やはり援助する者の姿勢であることに変わりはない。専門家というセラピストの立ち位置の形式は変化していないからだ。「専門家としてクライアントを見る」という戦略的な対話の結果の考察の仕方が変容しないおそれがある。そこで使われる分析の言葉は専門家主義でないと言い切れない。

第4に、クライアントとセラピストの二者間対話に閉じているので社会へと課題が開かれていかない。苦悩の社会性がそれ以外に広がらない。セラピストが背景事情について本来の無知が加わるとどうだろうか。こうしたことを知らずに無知の姿勢をとることは危険という倫理に反する事態にもなりかねない。本来は権利擁護のために社会へと課題を開いていくべきだろう。無知の姿勢を活用する場合、こうしたことに無知であってはいけない。

### 3. 「無知の知はない」と哲学者が指摘する

「ソクラテ斯的問答法」と類似していると著者たちは無知の姿勢を例えている。ではソクラテスやプラトンの研究者はこの点どうなのかみてみよう。

ソクラテスを「無知の知を語る者」として祭り上げることになる問答法理解は間違っていると指摘する哲学者がいる。プラトンは「無知の知」といってはいないという。端的な指摘である(以下は、納富信留『哲学の誕生-ソクラテスとは何者か』ちくま学芸文庫、2017年。数字は頁数。納富さんは東大の哲学教授でプラトン研究者である。第6章がこの点を扱っている。要約して紹介しておきたい)。

第1に、自らは「知らない」と表明しつつ

「知者」とされる人々を訪れ、結果的に彼らの「無知」を暴くソクラテスの態度は、伝統的に「イロニー」(ギリシャ語では「エイローネイア」)と呼ばれてきた。プラトンの対話篇に由来し後世に受け継がれたこの概念は、現代では、不知を装うことによる「セラピー的対話手法」とも言われている(308頁)。

第2にソクラテスは人々からもっとも知ある者と思われているのに、自分では「知らない」と言い続けて、他の「知者たち」を徹底的に論駁する。「知らないことを知っている」と言っている以上、自分はけっしてやりこめられることはない立ち位置にいる。

こうした考察を経て、無知の知という訳や理解は間違っているという。無知の知があるとすると、ソクラテスは一番偉いということになってしまう。つまり、高みにたったものの言い方で、無知の知という一段高い、外部にあるまなざしを用いてもう一つの知をもつ優れた者として位置づくからである。

これに呼応するような納富さんの主張はこうだ。無知の知という解釈は、もともとは次の文章に由来する。「どうやら、なにかそのほんの小さな点で、私はこの人よりも知恵があるようだ。つまり、私は、知らないことを、知らないと思っているという点で。」(282頁)。

ここから、ソクラテスを知に関してもっとも優れた者にしていく誤りが始まるという。「プラトンの対話篇で、ソクラテスはくり返し『正しい、美しい、善い』といった大切なことを『知らない』と表明している。これがソクラテスの無知の知あるいは不知の知と呼ばれ、彼の哲学の核心とみなされてきた。『無知の知』という偉大な『知』を唯一手に入れた『知者・教育者ソクラテス』が『聖人』扱いされてきた」(274頁)と結論づける。

納富さんは、一段高みに立つことになる無知の知を得たソクラテスという像は間違いで、あくまでも「知らないと思っていること」、そして知らない内容は「正しい、美し

い、善い」という基本なことであると特定していることを語る。これは「謙虚な言い方」と指摘する。正確ではない問答法理解や無知の知が存在するという誤解に基づく理解がプラトン理解の主流だということ。こうした理解をもとにして「セラピー的対話手法」が流通していることに言及している。本稿で扱う「無知の姿勢」のことであると推測できる。

こうなると、無知の姿勢をとるアプローチも問題を抱えることになる。無知の姿勢で聞いたセラピストは、最後はやはりセラピーの知をもとにクライアントを「患者」としてまとめ上げ、解釈していくことになるのだから、臨床の枠にまた差し戻されていく。誠実な問いではないともいえる。そしてさらに次節で述べるような文脈で無知の姿勢が実践されていくと、やはり再考すべきアプローチとなる。

#### 4. 認識的不正義との関連で

同じことの別の表現だが、このことを意識するために認識的不正義という言葉を紹介した（「臨床社会学の方法(26)認識的不正義—加害者更生のために—」『対人援助学マガジン』第10巻第2号、22-33頁、2019年）。最近では認識的不正義と訳出されるので、「認識的不正義」と「認識的不正義」は同じ意味である。）。身体的暴力は被害者も加害者も認知しやすい事態が起こっている。さらに、心理的精神的暴力、モラルハラスメント、言葉による威圧的コミュニケーション、指導やしつけだと意識した体罰などがある。傷つきの程度に幅があり、相手にも問題があるとか、文脈を把握すべきだと主張する加害者も多い。身体的暴力の前後にはこうした関係コントロール型の暴力があるので、これらを視野に入れた暴力の定義とすべきだ。しかし、まだ十分には加害者対策や被害者救済の重要概念としての共通言語はない。こうした一連の出来事は暴力連続体として把握すべきだとも主張をしてきた。非身体

的な関係コントロール型暴力を視野にいれて加害者対策をすすめるべきであるという意味である。

しかし、加害者が自らの行動の問題点を理解するには社会的に流通している共通言語が足りない。そこでこれらを示す重要な言葉として「認識的不正義」を紹介してきた。差別、偏見、人権侵害、ハラスメント、いじめ、家庭内暴力、ジェンダー、マイクロアグレッション、モラルハラスメント、ガスライティングなど、それを被害として認知できる語彙と意味づけがないと社会問題とまらない。問題化するための語彙を創造することは社会的な責任である。そもそも社会的に共通言語のないところで、一方では被害者のケアを行い、他方では加害者の更生のための対話をおこなうことは難しい。

加害者臨床では「認知の歪み」cognitive distortion という言い方で加害者の考え方に潜む問題行動を正当化する意識を取り出すことにしている。臨床的手法としては認知行動療法という。しかし「認知の歪み」は加害者個人のものの見方や考え方だけではなく、ここで例示してきたような社会の意識に根ざす。そこには法的な認知、心理臨床の相談の実践知・暗黙知、そして援助職者の日常知や常識も関係してくる。専門家も素人も同じような認識的無意識という社会意識を生きている。

そこで、社会が広い意味での加害性を語る語彙と意味の体系がないことを「認識的不正義」として取り出す。「認識的不正義」とは、たとえばかつてはハラスメントという言葉がなかったので現実が構築できない事態だった。被害も認知できず、加害を告発もできない状況だ。実態はそこに存在するのに、認識し、理解し、批判し、告発する回路がない。

社会構築主義の概念である「ワードがワールドをつくる」という言い方を紹介しておこう。ハラスメントと同じように、DV、ストーキング、リベンジポルノ、ヘイトクライム・ヘイトスピーチ等は比較的新しいワー

ド群である。学校恐怖症、長期欠席不就学、登校拒否、そして不登校へと目まぐるしく変化した言葉もある。ひきこもり、発達障害も類似の新しい言葉群だ。

被害を受けている当事者が自分に生起している事態を正確に理解し、適切な行動を取れるようになるにはエネルギーが必要である。たとえばDVの場合、子どものことを考えて離れられないという母子として生きていくには困難な社会の現実がある。女性相談で一時保護になっても帰住先が同じ自宅という場合もある。「在宅DV」と奇妙な言い方でとらえることになる。

もちろん社会啓発が必要であるが、被害を理解し、加害を認識する適切かつ正確なワードの伝え方と、その知識に基づき行動化できる支援と、逃げるだけではない社会制度の構築を示す言葉が認識的不正義の観点から修正されていくことになる。社会病理性の高い事例の場合、カウンセリングで聞いたことを適切な言葉で社会に還流させることはカウンセリングの機能としても重要だろう。

## 5. マイクロアグレッションとの関連で

このことは社会病理の理論的把握にも関係する。今回の主題に関連してマイクロアグレッションという言葉が流通させてきた。ワードがワールドを創るという観点から、実態にそくした差別的行為を把握するための理論である。私たちが翻訳した『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッションー人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別』（デラルド・ウィン・スー、マイクロアグレッション研究会訳、明石書店、2020年）という書物が日本では最初のものである。その最終章は、「心理支援におけるマイクロアグレッションの影響」というタイトルである。心理、福祉、教育など対人援助にかかわる者のマイクロアグレッションを論じている。対人援助が北米社会の白人男性文化に根ざしているので、セ

ラピーにもそうした認知的文化的な枠があり、そのことを自覚しないと援助がマイクロアグレッションになってしまうことを述べている。人種に関わるマイクロアグレッションとして5点指摘している。

第1は被害者非難である。個人主義・自己責任・自律性を心理的健康と同一視する風潮があるという。クライアントには「自己決定すること」「自分の運命に責任をもつこと」が期待されている文化があり、そこに帰着させようとする援助が想定されている。伝統的な臨床的役割は、自分自身のために行動できるよう、クライアントの自己探究を促すことを奨励される。個人に焦点を当てたアプローチは、問題がその人の内面にあると見立てる傾向にある（404頁）。

第2はカラーブラインドである。周縁化される人々の状況は無視できない。中立はあり得ない。みんな同じに扱うということではこうした状況はネグレクトできない。このアプローチはなんら平等を指向する言い方ではなく、「白人をして自身がもつ特権に対して罪悪感を感じずに済むことに役立つ

（406）だけであるという。カラーブラインドの立場に立つセラピーは支援者の無意識的なレイシズムを高め、クライアントが抱いている不安に対する共感的理解を難しくする。

第3は危険性（犯罪性）を帰属させることである。アメリカ社会での黒人への偏見がここにある。威嚇的、攻撃的な特性をもつ集団とみてしまう。

第4は文化に対する無神経と敵対的な治療である。北米の白人男性を基準にした心理臨床をもとに作成された実践、見立て、倫理などの再考を促している。治療者はアドバイスや提案をしてはいけない、臨床家が自らの考えや感情を開示することはクライアントに過度の影響を与え、その個人的発達を阻むため避けなければならないという倫理的指針がある（408）。こうしたことは文化の差異を無視している指針である。黒人の文化からは遠いということを実感すべ

きだという。

第5はセラピストや援助職者自身のレイシズムや人種的偏見を否認することである。偏見、差別、レイシズム、性差別を露骨なものとして理解し、自らはそんなことはしないと考えている援助者がいる(430)。

これらは人種差別についての指摘であるが、偏見をもたれやすいマイノリティ全体に適用できることばかりである。

まとめておこう。①主流となった援助の技法、②政策や制度が想定する仮説、③日常の相互作用や関係性に入り込む思考や信念にこうしたマイクロアグレッションが潜伏している。そうなると、苦悩、援助、臨床、問題、解決、対話などの基本的な事項の問い直しが求められることになる。

無知の姿勢という対話技法やそれをよしとする援助理論は、真の無知や不知の危険を内包していることの自覚が必要だ。

マイクロアグレッション、認識的不正義、心理問題化という歴史的な視野の欠落という点を知ることなく無知の姿勢をとることはやはり問題となる。

## 6. 物語構造を変容させていく経験の聴き方

次に、無知それ自体の検討をしておきたい。何かを知るとする場合のものの見方についてである。鷲田清一さんが「折々の言葉」を『朝日新聞』に連載している。そのうちの一つである(第2051回、2021年1月13日)。

仮に産んでいないということが、ひとつの欠如であるとしても、それは経験の欠如ではなく、欠如の経験です。

(藤波玖美子)

出産経験のあるなしは「私たちを隔てる溝」にはならないと、詩人は「産まない女である私」として語る。「我が子」であろうがなかろうが、子どもたちが将来、無事に生き延びてゆけるよう、ともに案じ、環境を整えておくのが、この時代を生きる大人の責任なのだろう。『シリーズ・いまを生きる』〈5〉(1981年刊行)から。

これはあらゆる経験にいえる。たとえば、失業も欠如の経験とみることができ、そこを起点に、苦悩も含めていろいろな動きがみえる。欠如だけに力点を置かないということだ。「欠如の経験」としてみると、社会のスティグマがそこから透視できる。特定の経験への負の烙印が社会の側から作用する。特にSNSでのコミュニケーションはそうなりやすい。匿名性もこれを加速させる。

ある支配的な物語があり、それは一本調子で、援助職者もそれと共軌するおそれがある。主流となっている意識に巻き込まれる。クライアントはそれが苦悩となる。援助や臨床をとおしてその支配的で主流となった物語を支えてしまうことには留意すべきだ。差別が生じ、偏見が増幅する。心理、福祉、教育、司法などの対人援助や臨床実践は人を鼓舞して自立へと駆り立てることが作用しやすいので、この増悪にならないようにすべきだろう。そのための視座転換に「欠如の経験」として把握することが奏功する。

このアプローチにより、苦悩が照らしだす社会の課題が開かれていく。無知の姿勢もこうした「開かれ」があるといいが、二者関係に閉じた臨床に狭く限定していることもあり、さらに単なる対話のための戦略的なコミュニケーションとして位置づけていることもあり、社会への「開かれ」は難しい。

クライアントの経験を聞く際の視座の転換がセラピストや援助者側にないと、閉塞していく対話にしかならない。クライアントの話が無知の姿勢で引き出したとしても、そのセラピストの知の枠組みが柔軟でないと対話は広がらない。そして、セラピストも、苦悩の物語を、「経験の欠如」として聞くのか、「欠如の経験」として聞くのかという自身の認知の枠が問われるべきだろう。ものの見方を反転させる聴き方の工夫が要るだろう。無知の姿勢はこの点を相手に委ねていることになり、聴き方の変化だけが指摘される。視座の変容や聴いたあとのセラピストの認知の変容は語られない。

## 7. 物語の構造を変容させるためのナラティブと関係性の豊かさ-セラピーを超えていくライフストーリーワークのダイナミズム

ナラティブは自由な物語的対話ではあるが、実在的な重みの上に生成し、物語の構造的な与件となる。歴史の重みがあり、自由にナラティブが生起するのではない。

この点に関わる典型的な領域に生育に関わる真実告知の取り組みがある。物語構造と自由なナラティブの関係が問われる課題である。社会的養育の領域でライフストーリーワークとして取り組まれていることだ。本人に知らされていないことがあり、それをどのように伝えるかというだけではない。物語的対話にしていくためには、人間の生き方に関わる見方を変えることも必要だろう。

社会的養育の子どもの物語には自己の重要な事項について「欠落」があることが多い。このことを当人が理解し、受容していく取り組みが真実告知とライフストーリーワークである。セラピストをはじめとした対人援助職者が子どもの権利の視点を保持しているかどうかは鍵となる。その「欠落」、つまり知らないことへの理解である。

社会的養育をすすめるため、施設養護中心から脱していく取り組みが子ども家庭福祉としてすすんでいる。私は立命館大学人間科学研究所を拠点にし、フォスタリングソーシャルワーカー養成講座に取り組んでいる。里親支援の体系化である。社会的養育の事例研究を中心にして講座を終えた専門職者が集まる機会も設けている。

この講座では当事者たちの経験に学ぶことを重視している。社会的養育から巣立った人(ケアリーバー)、里親とその家族(実子)、特別養子縁組をした人、職親などである。ケアリーバーは自らのことについてすべて知らされていないなかを生きる。ライフストーリーワークは真実告知を中軸にすすむ。それを補助する役目がフォスタリング

ソーシャルワーカーである。自己について未知な部分のある社会的養育の子どもたちがその未知な部分があることを知り、それを踏まえて生きていくことを支援する。知らないことがあることを自覚し、理解をしていく。こうしたケアリーバーの特性があることを肯定的に受け止め、生きている当事者たちに学ぶことにしている。

2023年度の講座では、宮津航一さんを招いた。彼は熊本県にある慈恵会病院が設置したこうのとりのゆりかごに託された最初の子どもである。それから16年、2022年に高校を卒業し大学に進学した。それを契機にカミングアウトした。YouTubeでも発言をしている。真実告知とライフストーリーワークの観点から、体験発表のあと、私と対話した。

3歳の時に親戚に連れられてやってきた。ゆりかごの窓口の向こうに預けられて以降の人生を語る。開設初日だったというからその親戚の方の決意が伝わる。ゆりかごの窓口、親戚とつないだ手、熊本までの電車などを覚えているという。ファミリーホームを営む両親からライフストーリーワークを受けたのだろう、豊かな自己理解にもとづく生い立ちをフォスタリングソーシャルワーカー養成講座で語ってもらった。事前に受講生には「告白-僕は『ゆりかご』に預けられた」(熊本朝日放送)

(<https://www.youtube.com/watch?v=AYHctXykL8Q>)などを紹介しておいた。ライフストーリーワークをしながら出自にまつわる真実が理解されていく。それでもなおわからないことは残っているらしい。そのことについて、講座では「自分の過去についてわからない部分があるということも自分の歴史であること。分かっていることの多くはライフストーリーワークで調べることができたということはそれだけ協力してくれた人がいるということだ。分からないという諸点を理解させてくれた人々に恵まれていたということ。不明な部分があるということとはライフストーリーワークの成果です。」と

話しくれた。

さらに、子ども目線からすると、「親が誰か、いまどこにいるのかなどという点だけを知りたいのではなく、預けられた時の様子、どんな性格の子どもだったのか、何が好きだったのか、見守ってくれた人々はどんな人たちなのかなどの情報が自分であることの理解につながっている」とも語る。自己肯定できるライフストーリーワークであったと話してくれた。

事実は実に個別的である。同じ物語は一つとしてあり得ない。しかし周囲の援助者には理論化できることもある。ケースワークに活かせることもある。ソーシャルワークとして社会に権利養護のアクションをとるべき事項もある。彼は「欠如の経験」として自らの人生を語っていた。だからストーリー化されていたので安心して聞くことができた。それを支えたライフストーリーワークがよりよく機能していたと思える。「欠如の経験」として、自分の人生について不明で未知なことがあることも自分の人生だとわかるようになったと語る。社会的養育の経験の語りとして感銘を受けた。

さらにこの講座に来てくれた別の当事者の体験を紹介しておこう。みそぎさんという。成人し、大学に進学後、情報系の会社に就職していた。特別養子縁組もした。私たちの講座でも体験を話してくださった。他にも公的に発言している部分なので紹介しておきたい。

「血が繋がっていないからだ！」父は怒りに任せて特別養子縁組を告白したという。こうした真実告知の経験をもつ者として自助的グループ origin 代表を務めるみそぎさんである。彼の発言は、「特別養子縁組は、本当に子どものための制度になっていますか？」という視点からのものだ。

「きちんと子ども側の話も聞いてほしい」という理由は、怒りに任せた突然の「真実告知」だったという。つまり、適切なかたちでライフストーリーワークがなされていなかった体験である。みそぎさんの親は、いわゆる

教育ママ、パパだった。小学生の頃からとても厳しく、間違えると平手打ちが待っていたという。数学が苦手なみそぎさんに対し、父は怒りに任せて先のように叱責として真実を告げてしまったのだ。それをみた母は、「20歳までは言わないと言ったのに」と怒りながら泣いたという。生い立ちも自力で調べるしかなかった。自力で調べたが不明なことが多いという。そこで養子の当事者団体をつくった。2020年4月にこれまで繋がってきた養子たちと支援団体「origin」を立ち上げ、養子となった人たちへの支援を行なっているという（講座で話をしてくださったのと同じような話がネットで公表されているので参考にした。Nodoka Konishi 2021年04月11日7時25分 JST、Part of HuffPost News. ©2022 BuzzFeed, Inc. All rights reserved. The Huffington Post、小西和香、ハフポスト日本版）。

宮津さんとみそぎさん、共に養子となった社会的養育の経験者である。それぞれ異なる人生である。しかしライフストーリーワークと真実告知が組織的に取り組まれるべきことは共通に浮かび上がる。社会的養育の領域での課題や教訓である。みそぎさんは当事者としての自力救済のような努力をしているし、その分の苦勞の経験がある。しかしそれをバネにして当事者団体活動を行い、同じことを繰り返さないように活動している。特別養子縁組だとしても家族に閉じることなく真実告知は必要で、ライフストーリーワークとして組織をしていくことが必要となる。里親であれば18歳までフォスターリングソーシャルワーク機関が媒介できる。特別養子の場合でも同じようにして、真実告知とライフストーリーワークを媒介できる組織整備が必要だろう。ここでは子どもの権利の視点がやはり欠かせない。

たとえ否定的なことであっても社会的養育の子どもらはそれを抱えて生きる。その子にとっての真実を構成しているのだから、知らされないまま放置していることは子どもの出自を知る権利を侵害することになる。



不知を強いていることになる。真実の伝え方についての工夫は必要だが、放置はネグレクトに他ならない。懲罰のようにして一方的に投げつけるような真実は「告知」ではない。それはマイクロアグレッションだといえるだろう。罰のような真実告知は論外と思えるが、現実には少なからず存在している。

まとめると、真実告知という基本課題、出自を知る権利、技法としてのライフストーリーワークの熟知、18歳まで持続する里親や養親への支援など、社会へと開かれた対話にすべきだろう。

## 8. 欠落あるいは欠如としてではなく、能動性をみいだすこと

先の鷺田さんは別の書物でこういう指摘をしている。「欠落・喪失といったネガティブな徴候は、逆ベクトルのポジティブな現象-病のなかでの病の表現、解釈、意味づけ-と共軌的な関係にある。支離滅裂な言動も、逆に過度の合理主義も、被害妄想や誇大妄想も、過度の饒舌、過剰な嫉妬心も、常同行動や退行も、たしかにこのような共軌関係のなかで解釈されるべきもの・・・(中略)・・・しかし、やがてはそのような共軌関係のなかにも浸透してきて、フーコーのいう「代替活動のポジティブな充実」をもことごとく解体し、産出的な力を萎えさせ、枯渇させてしまう。ただうずくまるしかないこの「消沈」へとなだれこむ人間性の運動」(鷺田清一『現象学の視線-分散する理性』講談社学術文庫)を語る。

さらに鷺田さんが言及しているフーコーの箇所を紹介しておく。「深い侵襲を受けた患者を前にすると、最初にひとが受ける印象は、なんの埋め合わせもない、総体的な、ずっしりした欠陥、という感じである。・・・機能上のこの空虚は、同時に、原始的反応の渦巻きで満たされている。・・・病は単なる意識の喪失ではなく、ある機能が眠ったことでもなく、ある能力がぼんやりしたことで

もない。・・・病は消失もするが、強調もするのだ。一方でものを廃絶させるとしても、他方ではものを高揚させもするのだ。病の本質とは、ただそれが掘ってこしらえる空虚な穴にあるだけではなく、その穴を埋めにくる代替活動のポジティブな充実のなかにも存在するのである。」(ミシェル・フーコー『精神疾患と心理学』みすず書房)。

二人は共に「代替活動のポジティブな充実」に注目している。心理臨床や精神疾患においてではなく社会病理を例にするとわかりやすいだろう。それは宮津さんとみそぎさんのライフストーリーワークに登場する。紹介してきたような活動や生き様が「産出的な力」「ポジティブな充実」なのだろう。

自分のライフストーリーには欠如している箇所があるがそれも自分の欠如の体験として視座転換しながら「黒歴史」にはしない宮津さんはそうした力や充実がみてとれる。自らの履歴を調査してまわり、情報開示の請求を行い、自生的にライフストーリーワークを展開したみそぎさんにはやはりその同じような力と充実があるといえるだろう。もちろん感動的な物語ではあるが、社会の方へと開かれていく過程がユニークである。

18歳になり満を持して自分史をカミングアウトした宮津さん、その過程では、親戚が遠くからゆりかごの開設日をめぐして託してくれたことを「捨てられた」と意味づけするのではなく「託してくれた」と意味づけていることから、その後の社会的養育環境の質を感じることができる。

社会的養育によってこそ育まれた知性と情動がある。宮津ファミリーホームの育み方をさらに知りたいと思った。その「いま・ここ」の安寧があるからこそ、過去を肯定的に捉えることができている。肯定的な自己を産出する力、ポジティブに自己を語る充実の経過がみてとれる。

みそぎさんはその不幸な「真実のつきつけ」を乗り越えるようにして自分でライフストーリーワークを展開した。制度の壁の厚い福祉制度のなかにあって当事者だからこ

そできた情報開示の仕方を身につけていた。特別養子縁組の制度は決して社会的養育の完成形態ではなく、やはり真実告知は重要で、それをささえるライフストーリーワークの必要性について身をもって体現している。養親へのライフストーリーワーク支援は不可欠だが、家族として閉じていくこともあり、里親による社会的養育のように子育てが公共の課題になりにくい。家族主義的な閉じ方で個別化されていくと、代替養育ではあるが、社会課題へと開かれていかない。それをみそぎさんは自力で開いた。しかも同じような課題をもつ養子のための自助的グループを組織して活動している。産出的な力であり、否定的な経験をもとにした充実がある。無知の姿勢ではなく、セラピストがこうした事情を背景にした対話としてのライフストーリーワークであること前提に告げつつ、対話を進めることが丁寧だろう。

## 9. 物語の構造を超えていく知の産出のために－「無知学」へ

「知らないことがあるという体験」のなかをケアリーバー当事者は生きている。しかし、これは産出的な力や充実をもたらす可能性がある。病理化し、治療対象化しないことが心理・社会・福祉・教育の諸領域の援助者には必要な場合がある。語らない、語り得ない、語りを強いない、自由に語るということが目指されるべきだろう。どうしても治療対象化する傾向のあるセラピーの枠のなかで戦略的に位置付けた無知の姿勢だけでは物語の構造という制約を超えられない。

みそぎさんのように知らされていないというパターナリスティックな事態もあり、無知がつくられている。これは子どもの権利である出自を知る権利を侵害されている事例である。無知であるということは政治的な事項だ。物語的対話を阻害するもの、それはなんらかのパワーである。ナラティブセラピーはパワーには敏感であった。良い点は継承したい。

こうした争点となること含んで無知という現象がある。このこと全体を扱う「無知学」という分野がある(たとえば『現代思想』2023年6月号「無知学／アグノトロジーとは何か」青土社)。

たとえば、原発の危険性や社会的なコスト(安全神話は根強い)、たばことガンの関係(長く不知な領域に置かれていた)、性差医学の指摘(医学的根拠に男性のデータしか採用してこなかったこと)、公害の原因認定に長い時間がかかったこと(水俣病の原因特定に12年かかった)など、知識のあり方を問う学問領域だ。無知や不知という事態がつくられていることを中心にして知のあり方を問う。まとめて「無知学」と総称されている。無知の姿勢や無知の知というような次元を超えた、とても知的な無知や不知の議論となっている。

無知学は研究者の能動性、産出性の成果ともいえる。「知は力」というとそれはマッチョ(男性主義)に聞こえる。自己を自由にするために、自己の外部にある広大な空白を理解したい。しかもその無知はつくられていることにも気づくことを重視したい。いずれ体系的に紹介したい無知学である。

立命館大学教員  
2023年8月31日受理

# 団遊の脱線的経営言論

## 給与（報酬）編 3

### 【報酬宣言制度】安定運用のからくり（最終回）

< 2 よりつづく >

自分の給料をメンバー（社員）自らが決める「報酬宣言制度」を安定運用できるようになるまでには、それなりの試行錯誤がありました。その試行錯誤期間を経て至った安定運用のポイントは、生産部門のメンバーに対し期待係数を付与するというやり方でした。

期待計数とは、自分が宣言した報酬に対して月次で稼ぎ出すことを会社が期待する額を示すもので、例えば期待計数を 1.5 とすると、月間報酬 50 万円を宣言したメンバーは、75 万円の利益を出すことが期待されます。

そもそも、人件費（社会保障費等含む）を除く会社の販管費は、年次である程度予測できます。引っ越しを予定していたらその経費を年次予算に組み込んでおけばいいし、ホームページの改訂を予定していても同様です。要は、年次でかかると予想される販管費を、メンバー全員の稼ぎで賄うことができれば、残りの稼いだ分は、稼いだ人が全部もらえば良いという考えです。ですので、非生産部門のメンバーの人件費は販管費に組み込みました。

具体的に数字に落として説明します。

例えば販管費が生産部門の人件費を除き月に 300 万円かかるとします。これは、言い換えれば、利益が月に 300 万円出れば会社はトントンな状態ですから、300 万円を生産部門のメンバーで稼ぎ出せば良いということになります。

生産部門の期待計数が「1.5」だとして、メンバーが 10 人いたとすると、利益を 300 万円

出すにはメンバーの報酬宣言額の合計がいくらになればいいのでしょうか？

なんだか塾で算数の授業を受けているような気分になってきたかもしれませんが、数式で表してみます。宣言報酬合計額を X とすると、

$$(1.5 X - X) = 300 \text{ (万円)} \quad ※1.5 \text{ は期待計数}$$

$$0.5 X = 300$$

$$X = 300 \div 0.5$$

$$= 600 \text{ 万円}$$

となります。

つまり、生産部門の報酬宣言合計額が 600 万円になれば、会社は安定運営できる計算になるというわけです。これをメンバー10人で割ると、一人平均 60 万円の宣言をしてもらう必要があります。

ちなみに、60 万円の宣言をすると、期待計数が 1.5 ですから、90 万円の利益を毎月稼ぎ出すことが期待されます。それができなければ、会社は単月赤字に転落しますから、生産部門のメンバーは「果たしてそれが可能なのか?」、来期の自分の仕事と向き合う必要があります。つまり、報酬宣言制度とは、年に1度、自分の仕事や、自分の仕事が産み出す価値と向き合う機会でもありました。

実はここも報酬宣言制度を安定運用することができた隠れたポイントで、この内省が働く分、「もらえるなら、もらえるだけもらいたい」という利己的な考えが、利他的な考えに切り替わる契機になりました。

\*\*\*

報酬宣言制度を採用し、10年以上運営を続けた中で、私自身も勉強になったことがあります。それは、

- ・生産部門のメンバーが多いほど係数は低くできる
- ・金額的に大きな宣言をしてくれるメンバーがいればいるほど係数は低くできる

ということです。

言い換えれば、基本的に会社は大きい方が強いということ。そして、スタープレイヤーは、やはりスターだということです。

私自身に拡大志向はなかったのですが、世の中のマネージャーたちが規模を追求する気持ちも、分からなくはないと思いました。また、報酬宣言制度の中では「出る杭」は大歓迎です。生産部門メンバーの杭が出れば出るほど、期待係数は低くなります。期待係数が低くなれば、誰もが宣言額を増やしやすくなるということですから、スタープレイヤーへの嫉妬ややかみなど、出るはずがありませんでした。

\*\*\*

以上のようなからくりから、アソブロックで開催していた年に1度の報酬宣言発表会は、ユニークでした。一番ユニークだと感じていたのは、生産部門のメンバーに「もっと報酬取ろうよ！」と、みなが声を掛け合っていたことです。「こうすればもっと稼げるんじゃない？」というアイデア交換も頻回にありました。

一般的に「報酬が上がる」のは嬉しいことだと思いますが、生産部門のメンバーは、同時に期待額が上がりますから、のせられても素直に頷くわけにはいきません。多い人だと70万～80万円の宣言をしていましたが、そこまで来ると社会保険の控除額や実質手取り等を考えると、それ以上は正直上げたくなくなるようでした。

「稼ぐ」「貯める」のが目的ではなく、「より良く暮らす」には、果たして自分にはいくらの報酬が必要なのか？ 自らの暮らしの長期的安定を考えた上で、自分に必要な額を宣言して、仲間のことも考えながら必要な分だけ働く。そのような考えに、自然と全員がシフトしていきました。

\*\*\*

「給与（報酬）編」、そろそろまとめに入ります。

マネージャーの視点で振り返ると、報酬宣言制度を採用したことのメリットは大きく二つでした。一つは、全員が高い・低いは関係なく「報酬に納得感を持っていた」ことです。報酬についてメンバーから不満が出ないのは、マネジメント的には非常に助かります。伴って、社内でメンバーを評価する必要も基本的になくなりました。これも、元来「ルール」や「評価」が嫌いな私からすると、肩の荷が下りた気分でした。

もう一つは、働き方を個人が自由に考え、実践できる会社になったことです。例えば「今年はまだ小さい子どもの育ちに寄り添い、極力園の行事にも参加して家にいる時間を増やしたい」と思った時には、自分の仕事を減らし、生活が許容する範囲で自ら宣言する報

報酬を下げればいい。逆に、「この1年は死ぬ気でスキルアップ、働きまくって稼ぐぞ」と決めれば、かなり背伸びをしないと届かないような報酬額に上げればいい。

上げるも下げるも、すべては自己決定。

これに勝る納得感や公平感はないと、今でも思います。

文/だん・あそぶ（団遊ヨノナカ編集舎 主宰） <https://www.danasobu.net/>

「人の成長に資する場づくり」をポリシーに、業態様々な会社や組織の経営・運営に携わる。自ら創業したアソブロック株式会社の社長職は21年9月に次世代への委譲を目的に退いたが、終始貫いた独自の経営手法が、働き方改革の流れで注目され、全国でワークショップや講演を行っている。

団遊の組織論； <https://corp.netprotections.com/thinkabout/1536/>

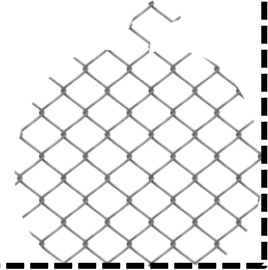
団遊の採用論； <https://job.cinra.net/special/asoblock/>

仕事を辞めたくなくなったときに； <https://goo.gl/bFQdpC>

# 解放の心理学へ

## — 社会的無意識 — (3)

藤 信子



東京電力福島第一原発の処理水が、昨日（8月24日）に放出が始まった。新聞記事によると（朝日新聞 2023年8月23日朝刊）、「廃炉に伴い発生した汚染水を多核種除去装置（ALPS）で処理し、ほとんどの放射性物質を基準値未満にしたもの」で、「東電はアルプスでは取り除けないトリチウムの濃度を国の基準の40分の1（1リットル当たり1500ベクレル）未満まで海水で薄め、年間22兆ベクレルを上限に海洋放出する計画」だということ。これに対して放出に反対している全国漁業組合連合会は、処理水を海

洋放出しても科学的に安全だということも理解しているが、問題なのは、原発事故後に起きた風評被害だということであるという。福島産の果物、コメ、牛肉などは他の県産との価格差があるということだ。申し訳ないけれど、まだそういうことが起きているとは知らなかった。2016年から2019年まで、秋に福島に支援者支援のグループを開催するために出かけていた、いつも福島産の果物を買って家に送っていたが、あれも安かったのだろうか。

今回の処理水の海洋放出による風評被害とは、まず水産物が売れなくなる、また安

くなることだろうか。しかし、福島の産物は事故後、放射能を測定して、大丈夫なものを買ってきたのと思うが、人の考えはさまざまなのだろうか。ある酒造会社の人、研修会に東電幹部を招いたり、原発構内の見学をしたという、そして「初めは、処理水を岸壁からドバドバ流すものだ」と誤解していた」（朝日新聞 8月 25日朝刊）、という。これは私から見るとかなり極端なような考えだけれど、人はいろいろなイメージを持つのだなと思ってしまった。

風評を広めないためには、科学的な知識を得ることかもしれないが、放射能、放射線というのが、私自身の日常生活の中で、理解できているかというとなかなか難しい。大体「トリチウムの濃度を国の基準の 40 分の 1」と言われても、いったいそれが私にどのような影響を与えるのか分からない。国の基準はどうして、その数字になっているのか、説明してもらえると、少しは理解が進むかもしれないけれど、少なくとも新聞記事には載っていない。放射能の測定単位が、原発事故後初めて聞くようなもので、どういう意味を持つかわからない。日常生活の中で考えられるような例を出して教えてもらえないだろうかと思う。海洋放出というけれど、海に流した処理水は、潮の流れでどのように大洋に流れていくのだろうか、誰か説明してくれたらとも思う。東電はそのようなことを専門家に聞いて

ているのだろうかと思うけれど、東電も政府もそんなことを一言も言わないのは、何かまずいことがあるのだろうか。もともとの問題は、多くの人が政府や東電を信じていないことなのだと思う。

政府や電力会社の原子力発電所に対する見解を信じきれないのは、3.11の災害が起きてから、ということではないだろう。Nishimura((2016)は『核エネルギーの平和利用』という名目のもとで、経済的な発展を進めることは、戦争と原子爆弾のトラウマを都合よく隠した。その線に沿って、いつか日本全体が、原子力発電所の脅威を否定するかのように見え、この恐怖を社会的無意識へと押しやった」と指摘している。この考えに沿って考えると、3.11の原発事故の後、福島をめぐる話の中で、極端だと思えるような話も、無意識に押しやっていたものが噴出したと言えるのかもしれない。支援から帰ったところ、家で親から福島に着ていった服は家の外に捨ててくるようにと言われた、という話を聞いて、びっくりしたけれど、抑圧していたものが現れたと考えられる。風評のあまりに極端な話を聞くと、これは放射能が想起させる、原爆や戦争の恐怖を伴っているのではないかと考えてしまう。そこが意識できていないだけに、恐怖、不安は大きくなるのではないだろうか。

大体「核エネルギーの平和利用」という



言葉も考えてみると結構すごいと思う。もともと平和な利用はしていなかったけれど、これからは平和な利用をします、ということだと思うけれど、核エネルギーは、怖いものなんです、と言っているようなものですね。

無意識に押しやっているものなら、少し時間をかけて、意識できるようにすることが、恐怖、不安、そしてそれが風評について考えることとつながっていくことだと思う。その中で、福島産のものを自分はどう考えるか判断していくことが、消費者になる場合、大事なことだと思う。しかし3.11の災害後、福島の人々の間の分断は大きかったと聞く。災害支援者支援のグループも、福島で開催しても参加者は、福島に住んでいても他の県から復興のために来た人だったり、県内でも避難場所となっている土地の人の参加しかなかっ

た。人と話し合うことが避けられているような印象を持った。話し合うということは、難しいという印象を持った。でも2019年に、そのグループで福島に続けて来て、誰か福島の人が参加するのを待とうと思った。しかしCOVID-19のために移動や集まることができなくなった。また福島に行くこと、風評のことを話すことは大事なことのような気がする。

Nishimura, K.(2016) Contemporary manifestations of the social unconscious in Japan; post trauma massification and difficulties in identity formation after the Second World War. Hopper,E. and Weinburg,H..(eds.) The social unconscious in persons, groups, and societies.,volume2. Mainly Foundation Matrices, Karnac.

# カウンセリングのお作法 第36回

CON

Counseling Office Nakajima

カウンセリングオフィス中島 中島(みずとり)弘美

## ～家族面接初回の確認 来所メンバーと面接間隔～



初回面接の後半では、カウンセラーと家族が、今後の面接の進め方について、話し合いを確認する内容があります。今回は、それらのなかで「来所するメンバー」や「面接の間隔」について話します。

### 家族のうちの誰が来所するか

家族初回面接の終盤になると、次回以降の面接について、来所メンバーはどのようにしていくか、家族の思いとともに確認をすることになります。

初回面接は、家族全員が出席することもあります。例えば、父親の参加がむずかしく、はじめは母親だけの来所ということがあります。あるいは、両親が来所し、子ども本人が来所していない場合も多いです。今後もいやがって来所ができない、あるいは、初回カウンセリングの様子を説明すれば、来所できるかもしれないなど、二回目の面接では家族のうちのだれが面接に参加するかなどを打ち合わせます。

家族療法が日本に導入された1980年代は、同居している家族全員で出席するというスタイルが主流で、予約申し込み時に、全員参加を強く求める傾向があり、家族合同面接などという表現もされました。しかし、最近の家族面接は、同居する家族だけでなく、親族

や関係者を視野に入れた、システムに対する支援や介入を行うので、まずは、参加できる人、動ける人が面接に参加することに重きが置かれるようになりました。申し込み時点でも、来所できる人がお越しくください、二回目以降はどなたに参加していただくのが良いのか、面接の中で決めていきましょうと伝えます。

そのため、初回は母親や父親のみ、両親の面接、時には祖父母のみの面接などまちまちです。意欲的に参加されている人が話し合いをして、今後どのようなスタイルが自分たち家族にとって適しているのか意見交換をします。次回は、むずかしいけれど三回目ぐらいの面接でご本人に来てもらえるようにしましょうなど、参加メンバーで考えていきます。

出席がむずかしいと考えられる場合は、カウンセリングに通っていることを親から子どもに伝えているかどうか、伝えていない場合どのように伝えるのが子どもにとっても両親にとっても良いのかなど、それぞれの家族が直面しているできごとを確認めます。

視点を変えて検討することもあります。それは、誰の参加が適切であるかという点よりも、むしろ、家での課題に取り組むことが重要であると、家族に置かれている状況のなかで何が優先なのかを確認します。だれが参加するかよりも、次回の面接までのどのような点について注目して生活をするかという、課題重視です。

#### 当日の来所メンバーの変更の場合

カウンセラーと家族の双方が了解しておくべき点として、二回目以降の予約日当日に、来所メンバーに変更がある場合は、事前に連絡をしてもらうことなどを伝えます。たとえば、初回面接は両親が参加されたにもかかわらず、何かの事情で急に、お二人がそろわない状況が起きてしまった場合は、面接日時を改めて取り直してもらう場合もあると、事前に伝えます。家族カウンセリングに継続してだれが出席するということの重要性を知っていただきます。

ご本人について、家族から間接的に話をうかがう場合に比べると、直接、お会いする方が理解できることも多々あります。子どもさんの参加は大歓迎です。しかし、両親が続けて来所されることで、夫婦が歩調をあわせるができるため、子どもへの対応に効果が期待できるという面もあります。

#### 面接の間隔

もうひとつの項目は、次の面接日時を決めることです。

来所した家族は、次回の予約日時を決めようとするまでに、面接の経過のなかでさまざまな思いをめぐらします。今後もカウンセリングを継続する気持ちになっているのか、あいまいな気持ちなのか、それぞれのメンバーがそのカウンセリングに対して、評価をします。

カウンセラーは、「次回、お会いする日にちについてですが」といいながら、どのぐらいの期間をあけてカウンセリングを行うのかについて説明します。

面接の間隔は、事前にパンフレットや申し込み時のインテイクで、説明済みです。とても急いでいて、詰めて面接をする場合は、1週間から10日に1回の面接がひとつの目安になりますが、多くの場合2~3週間に一度ぐらいの間隔が多く、状況が安定すれば1か月に1回、さらに安定すれば、間隔をあけていくことになります。

例えば、子どもさんのことで来所されたご両親との場合、次の日時を決めるときは、家族それぞれの予定とカウンセラーの空き時間などから、調整します。

次回の予約を決めることが初回面接ですんなりまとまることもあれば、ご家族の方から、「このあとについては、ちょっと考えます、まだ予定がわからない」などの反応がある場合もあります。

また、相談内容によってカウンセリングの効果がむずかしいと考えられる場合は、

「まずは、5回、面接をしてみましょう。すると全体像がわかります。そのあと継続することで効果が見込まれるのか、その時点で、改めて考えるというのはどうですか」

という提案をして、治療契約をすることもあります。

### 予約の変更ルール

予約日時を決めるときには、キャンセルのルールもあわせて説明します。相談機関によってキャンセル料の発生は異なると考えますが、どの時点でキャンセル料が発生するのかを伝えます。とはいえ、ご家族に特別な事情や緊急の状況が発生することも確かなので、できるだけ当日のキャンセルは避けて、前日までの連絡をお願いし、予約変更のルールを理解してもらいます。

このように、家族面接を継続していくためには、初回で了解していただく項目が多く、少し窮屈な思いがあるかもしれません。実際に来所されるご家族は、このようなルールを了解し、守っていただいています。

# 晩年

## D・A・N 通信

### No.5

2023.5.21～2023.8.20

### 団 士郎

来年出したいと思っている本、「グラフィック家族理解入門」の原稿づくりを始めて二か月ばかり。100 ページくらいまで進んで、まあ順調だ。こんなものにしたと思っていた構成に、だんだん近づいている。手を付け始める前に考えていたものとはだいぶ違ってきていて、そうそう、本当はこんな風にしたかったのだと作業を進めながら気づく。

「なにかを叶える」ってことを考えると、いつも思い出すことがある。将来何になりたいかなんて、思春期の問いかげにも当てはまる話だが、最初から将来の姿がイメージできていることが嘘くさくて仕方ない。だってそうだろう、大人になって到達する目標が十代に想像できているわけじゃないか。なにか目指しているものはある。しかしそれについてはまだ、何も始まっていないのだから具体像があっても、それは既存物に過ぎない。自分のそれは未来にあるのだ。そこに向けて動きながら、だんだん目標の形がはっきりしてくるのが当然だ。

だから手を付けることがかなり重要で、勉強や準備ばかりしていても、あまり意味はない。行為の中に発見できる未来は多い。私が誰に対しても、「やってみれば？」と言うのはこれが理由だ。やってみたらさっそく分かることがある。それは何歳になっても同じだ。成功確率を基準にやってみるか、止めておくかを決める人は、現在に飲み込まれている。考えたいのは未来なのに、現在が足を引っ張っている。

本づくりを始めて、全体構成や、追記事項を考えていると、本がどんどん充実していった楽しい。急がずこの時間を重ねていくことで、まだ私も知らない一冊になるのだろうと楽しみに毎日途中経過を眺めている。

5/ \*\*

雨模様の札幌「かでの 2.7」で家族理解 WS。半年に一度、もう 20 年以上になる。今回も一日、快調にやり切れた。世話役の細やかな気遣いに感謝。地元自主勉強会用に提供している DVD(二作ある)が、とてもいいと褒めてもらった。録画したままではなく、巧みな編集が入っているからだろう。私の HP(士郎さん.com)にこの DVD の無料貸し出し規約が掲載されているので、関心があればど

うぞ。

懇親会を終えた頃には雨はあがっていた。

5/ \*\*

札幌遠征のおまけでエスコンフィールドに。球場に足を運ぶことなど滅多にないので、国内の球場の標準がわからないが、この新しいボールパークはいい。

スコーンと抜けた空、グッドタイミングの急な雨にドームが動いて閉じて点灯。ガラッと雰囲気が変わる。試合はしていないので、見学ツアーでグラウンドにも踏み入れた。ベ

ンチの監督が座る椅子にも座ってみて、フェンスにもドンしてみた。



5/ \*\*

今夜は 21 時スタートで、対人援助学マガジン連載執筆者によるトークライブ。鶴谷主一さんが「幼稚園の現場から」の様々な今日の世相を語ってくれた。

いつも思うことだが、世の中がたどり着いている所と、前進しなければならない課題は大方明らかになっていて、確かな次の一歩が作られなければならない時が来ている。

5/ \*\*

土曜の朝、亀岡市での連続講演(年二回、5 年目)に。仕事場から JR 二条駅に出て嵯峨野線に乗るのだが、はたと思いだした。週末の嵯峨嵐山まで、この路線が観光客で満員だった経験があった。始発駅ではない二条駅大混雑で積み残しなんてないだろうなあと不安になった。そこで予定より2本早い列車に乗った万全の結果、ガラガラの車内。私ズレてる？



5/ \*\*

金婚式になるはずだった結婚記念日。五十年前、1973 年 5 月 27 日、同志社大学アーモスト館のチャペルで式を

挙げた。26 歳と 24 歳、今では若いなと思うが当時は平均だった。長寿社会化したいま、76 歳と 74 歳ならまだ元気だろうと考えていたが、人生はまさかに溢れていて、私も例外にはなれなかった。

(このツイートがバズった。いつもはせいぜい500~1000 間のインプレッション数だが、これは 1 万6千を越した。事情通と話していたら、ちょっとセンチメンタルな文面がリツイートを誘ったのだろうという。そういうものか。)

5/ \*\*

明日 6/1 の夜 9 時から。NHKBS でこれを放送する。必見だ。話は 10 年前、ロンドンまで同僚と調査に行った件。「からのゆりかご」は今も印象に残る一冊だし、映画化された「オレンジと太陽」もとても面白かった。

この物語、私も「木陰の物語」の一話として描いて、ノッティンガムの児童移民トラストの主宰者マーガレット・ハンフリーズさんのお土産にした。



6/ \*\*

月はじめは月刊誌連載マンガの下描きに取り掛かる。第 280 話目だから 23 年 4 ヶ月。モチベーションを上げる意味で、書店で目にしたこんなものを買ってみた。作者のエネルギーに触れて、自分も頑張ろうという魂胆だ。マンネリなんて言っていられない。フランスのグラフィック・ノベル「秒速 5000km」。タイトルではなんの話かわからないだ

ろうけど、滅茶苦茶いい。でも伊坂幸太郎が帯に書いている、「映画とも小説とも漫画ともつかない・・・」は違うと思う。これが漫画なんだ。昨今、次々、翻訳されつつあるグラフィックノベルのジャンルが面白い。



6/ \*\*

注文していたプリンターの黒インクカートリッジが届いた。ところが注文とは違うタイプのものが3つ入っていた。交換してもらえないのだが、手続きはただの返品、返金だそうで、メール一本で宅配業者が取りに来た。文句ひとつ言う相手がいない。そして新規に注文。明日、届くとか。その方が合理的か。



6/ \*\*

夕刻から定例の対人援助学マガジン第53号の編集会議。到着している原稿の確認、執筆者短信の確認、新規連載者の確認、その場でメールを入れて未着の人の状況確認。

後はいつものように、coco 壱番の宅配カレーを食べながら懇談。まるまる現役の編集員二人の日常が面白い。6/ \*\*

未明に観たこれがなんとも懐かしく楽しい。1966年、ビートルズを招聘した関係者の昔話ドキュメンタリーである。それほどビートルズ好きでもなく、武道館に駆けつきたいとも思わなかったが、ドーナツ盤の曲は次々手に入れてみんな歌えた高校時代。

ビートルズはグループとしては8年しか活動していなかったそうだが、それで今に至るこの力。



6/ \*\*

静岡市出張の道中。京都駅のポルタ、イノダで週末のWSと講演のパワポデータの校正。向かいのクマザワ書店に入るといつも、知らなかった本に会って買うことが多い。

今回もこれ。奥付をみて、「絵葉書にされた少年」の著者であることを知る。確かあれば、アフリカの飢餓を訴える写真で、やせ細った幼児の後にハゲタカがいるものだった。そのトリミングが作為的だったとか何とか、そんな記憶だが間違っているかも・・・、という著者の本だが、読み出し、メチャ快調である。



6/ \*\*

静岡の豪雨がニュースのなか、静岡市でWS。前夜入りしたので大雨にはあわず。しかし明日の午後、京都で予定があるので、帰路の心配が昨夜は少しあったのだが杞憂に終わる。

初めてお目にかかる人が多い中、楽しんでくださっているようで、快調に終えた。駅ビルでちょっと高いお寿司を食べて帰路に。



6/ \*\*

京都駅ホテルグランヴィアの宴会場で、立命館大学法学部同窓会の講演を引き受けていた。私は卒業生ではないけど。近くてもあまり来ない場所だと思いつつ会場に。掛軸展、最新刊を参加者全員に購入して下さった集まり。

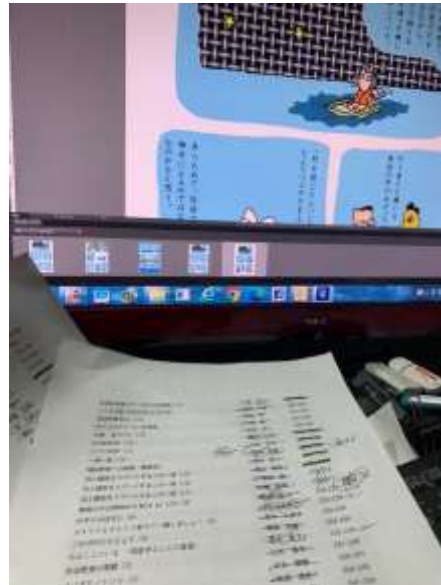
懐かしい、かつての公務員同僚 S さんに会う。あの頃と同じ彼だった。



6/ \*\*

1 日中仕事っぽいことばかり片付けていたら、少々くたびれた。立命館小学校で1ヵ月間漫画展をする作品の選択と発送。スタッフの H さんと一緒に段取りを。

同時並行で、マガジンの編集が大詰めで、抜け落ちや、未着の原稿の対応等、目次作りが絡んで編集者間でバタバタ。相手が多くなると調整がね。



6/ \*\*

作業が一区切りしたので久々にナイト・シャマラン監督作「シックス・センス」を再見してみた。封切映画館で驚いて二度観て以来、25 年近く経った。二時間足らず、とても面白かったが同時に、当然のことながら、初回に感じた驚愕体験は全く再現されなかった。それを抜くと、この作品は上手なホラー。同じ頃に観た「アザーズ」を思い出した。このニコール・キッドマンは再見したい。



6/ \*\*

1 人暮らしになって、気が向けば自炊もしている。しかし買い物やメニューがどうしても偏る。スマホに入るお知らせ



せの中で、いろいろな野菜のパック販売が目についたので試してみた。あれこれ送られてきて、中にこんな見たこともないナスが入っていた。先日友人がくれたゆず味噌で田楽にして食べた。いやー、美味しかった。



6/ \*\*

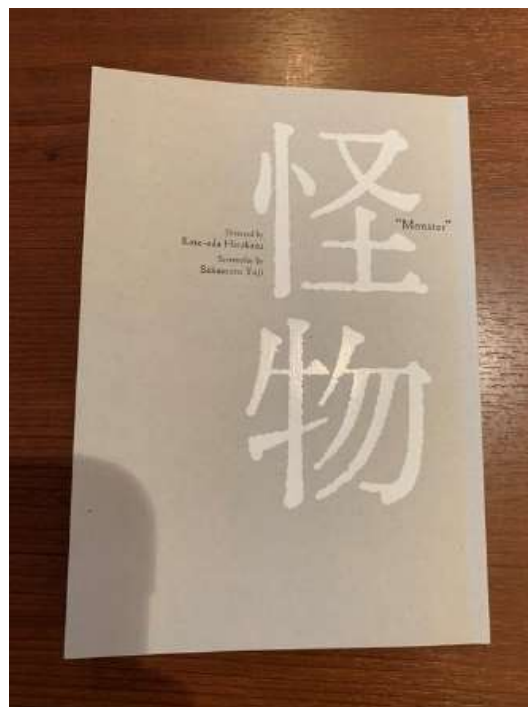
昨夜の草津家族勉強会。こんな風に撮ってみると、なかなか盛況で活発だなと嬉しくなる。長く参加してくれている人がいて、新しく来てくれる人もある。さらに11月には、草津エリアで「木陰の物語」漫画展を開催の計画が動き始めている。



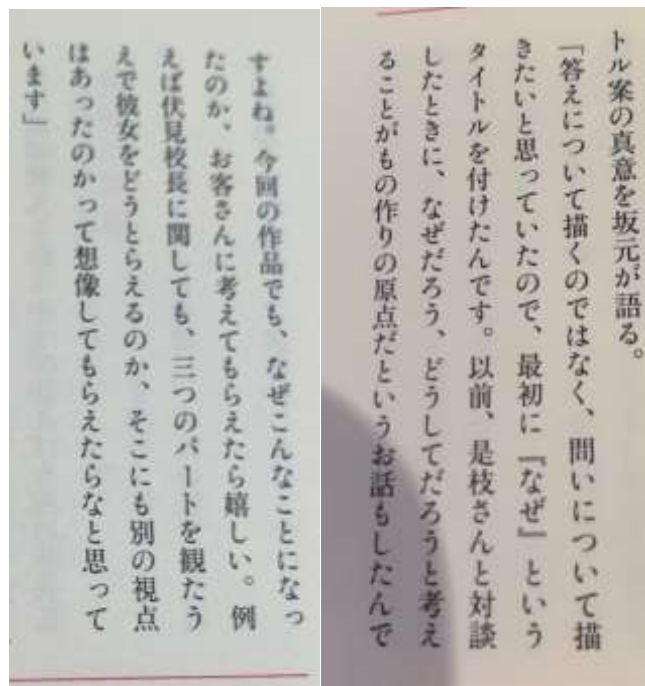
6/ \*\*

映画「怪物」を観た。パンフレットを読む前に何か書いておきたいと思った。いい映画だった。ラストシーンに希望が溢れていた。私が観たと思っている映画なのか、シナリ

オなのかは解らない。深く描けているものなのかも解らない。ただ世界がいくつかの主観的物語で構成されているのは確かだ。



「怪物」のパンフレットに脚本家のこんな言葉がある。これは昨夜の事例検討会で話していたことだ。「なぜこんなことに？」は創造的な疑問で、正解よりずっと豊かだ。それを持って家族に接近するのが王道だと考えている。疑問を持たずに、事実だけ手に入れるなんて、かなりな悪手だ。



6/ \*\*

立命館小学校で1ヵ月間、展示してもらっている。この間に PTA の人たちが見る機会も、児童たちが見て話し合ったりする機会もあるそうだ。

掛け軸、パネルは、ご希望に応じて貸し出しをしている。作品を有効に活用していただけると嬉しい。私のホームページから案内をご覧ください。(土郎さん.com)



6/ \*\*

青森への道中、「ループ オブ コード」を読み始めた。筆者のもの事の捉え方の表現に見られる合理性に、お、お、おと思うプロログである。楽しめそうな予感。帯にある伊藤計劃の著作「ハーモニー」を久々に思い出した。



6/ \*\*

東日本家族応援プロジェクトの定例会に立命館茨木キャンパスに。興味深く終了した帰路の JR が、人身事故のため運行停止。運転再開は 1 時間後というので別ルートを探る。こんな時に限って仕事場泊では対応できない用件があり、どうしても大津まで帰宅しなければならなかった。その結果、余計な出費が。



6/ \*\*

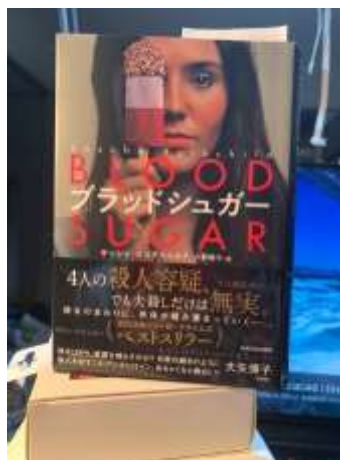
昨夜 20 時～22 時 15 分は八回目になる zoom トークライブ。七十人を越す有料申し込みがあった。後日アーカイブスもお届けするので、オンタイムには都合のつかない方にも聞いて貰える。話し手としては有難いこと。

今回も演題は二つ。楽しんで聞いていただけていたら幸いです。次回は 12 月 20 日開催予定。告知は HP で。



6/ \*\*

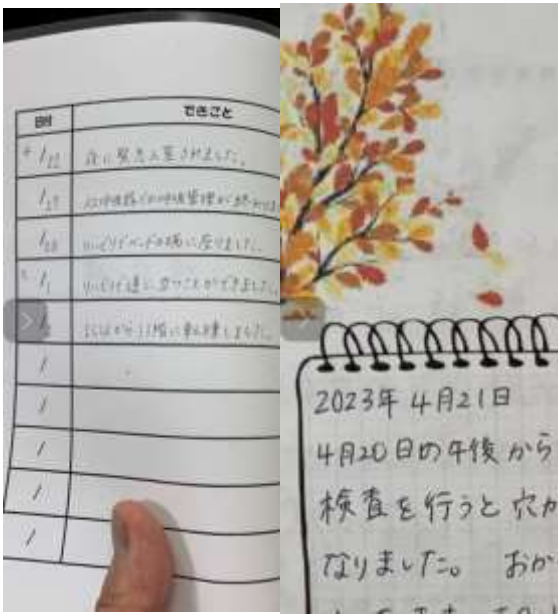
浜松に来ると必ず駅ビルの谷島屋書店の翻訳書棚をのぞく。日常の立回り書店やネット購入とは異なった本への入口がある気がするからだ。今日も出だしの 2 ページ程を立ち読みしてこれを購入。店内のエクセルシオールでアイステイー飲みながら読む。



(いやいや面白かったなあ、最近読んだものの中ではダントツだ。最初からネタが机上に転がっていて、この先どうなっていくのだ？とドキドキ？ワクワク？ハラハラ？結局、はじめの2、3ページで掴まれたままだったな。)

6/ \*\*

手術、治療といくつもの診断用語にまみれていた長年の友人が一息ついたようなので事務所に会いにいった。20%程の生還率？と知らされていたので、痩せてはいるものの、その回復ぶりに驚いた。ICUでナースにこんなノートまで作ってもらって、回復の応援をしてもらっていた。とにかく良かった。



6/ \*\*

併読本が増えた。いろいろな旅人の本を読んだが、この人はダントツにおかしい。2001年4月に所持金160円で前橋を出発して22年、今も世界を旅している。親切な人や面白がって応援してくれる人のおかげでと書いている。高齢者になった今、読者という名の応援団になるのも楽

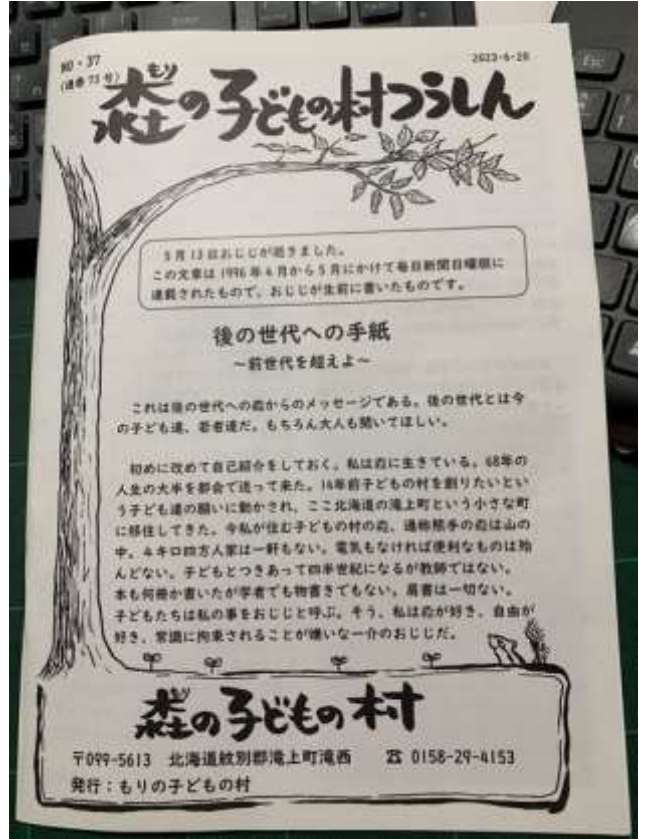


しみの一つだと思う。

6/ \*\*

毎年1度届く通信。息子たちが小学校3年生と1年生の時に、はるばる北海道での長期キャンプに向けて送り出したところからの繋がり。ずっと活動してこられた徳村さんが亡くなったと表紙にある。

40年近く前の事が、現在の息子たちに息づいていると思う。徳村さんは間違いなく次世代を後押しされた。合掌



6/ \*\*

公開初日が動機付になって、爺さんの冒険活劇を、たくさんの爺さん達が見ている劇場で観た。開始直前までトイレに行く人が多い。二時間半の上映時間が不安なのだろう。面白かった。既視感ばかりの安心感、いつも通り追い求めてるものが何やらサッパリ分かんが、とにかくハリソンGが元気で何より。

7/ \*\*

この学会で、「家族関係を生きる」をテーマに教育講演。関西福祉科学大学、近鉄線南大阪エリアはほぼ馴染みのない場所だから、サッパリ分からない。河内国分、初めて降りた駅。ろくに連絡もしなかったのに迎えの女性が見つけてくれた。有難い。

## 術講演会

The 49th Meeting of Japanese Association of Communication Disorders

第49回日本コミュニケーション障害学会  
学術講演会 プレセミナーのご案内

詳細はこちら

オンデマンド配信はこちら

つくるを支援する

会期 2023年7月1日(土)・2日(日)

会場 関西福祉科学大学  
大阪府柏原市旭ヶ丘3丁目11番1号

開催形式 ハイブリッド開催(現地+オンデマンド配信)

会長 工藤 芳幸  
関西福祉科学大学保健医療学部

メニュー ホーム トップ

jacd49.secand.net

7/ \*\*

慌ただしく半年が過ぎた。先日 web にアップした対人援助学マガジンをプリントして製本。古い人間だから、こうするとペラペラ見る。

7月是比较的ゆっくりしている。週末は家族心理学会年報(金子書房刊)の表紙イラスト完成。連載の木陰の物語、色々思う事があり、次回以降のプランを考えながら今月分対応完了。



7/ \*\*

本日午後搬入で一週間、京都河原町三条交差点のギャラリー北野で、日本漫画家協会関西ブロック漫画展開催。私も掛け軸マンガ一点展示している。近くを通ったらご覧ください。



7/ \*\*

今準備している次の本の発行をいつにするのか、締め切りがなかった。来年私は喜寿になる。それで7月7日77歳記念に刊行することを思いついた。

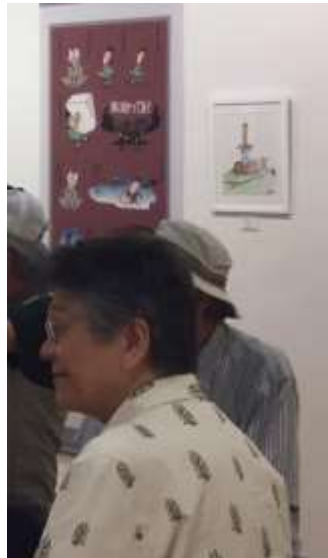
今回は家族支援の専門家向けも意識しながらの新刊「グラフィック 家族理解入門」、短い文章を織り交ぜた一冊の予定だ。



7/ \*\*

午後半日、マンガ展会場にいた。高齢者ばかりで歓談。世の中全体がこのようになっているのだろう。

今、立命館小学校でも個展を開催中なので、そちらには週明けに訪ねてみるつもりだ。



7/9 この集まりで話すために大阪へ。毎年、「猫から目線」の報告も聞かすが、時代が近寄ってきている。面白いものだ。



往復の道中はこれを読んでいる。老婆の殺し屋という荒唐無稽な物語。面白いと言えるかどうか？



7/\*\*

ホンブロックの「木陰の物語」担当編集者 Mさんと展示スタッフ Hさんと立命館小学校に。綺麗に展示してもらっていて、校内で職員さんや父兄が見てくださった。

その後、漫画家協会展の最終日で撤収に。展示も早い

が撤収はもっと早い。高齢男性群とまた来年と約して終了。

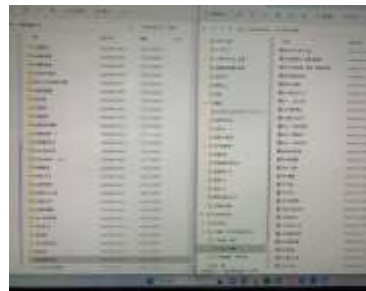


7/\*\*

木陰の物語が 280 話越えとなるとデータ管理が大変。先ず Photoshop 仕上げ原稿データ。PDF 版、JPEG 版の有無。パワーポイント仕上げ版。

単行本掲載済み、配布冊子掲載済みも。パネル制作済み、掛軸制作済み。

英語版、中国語版、ハングル版。2 ページレイアウト版。覚えてられないのに整理不十分。



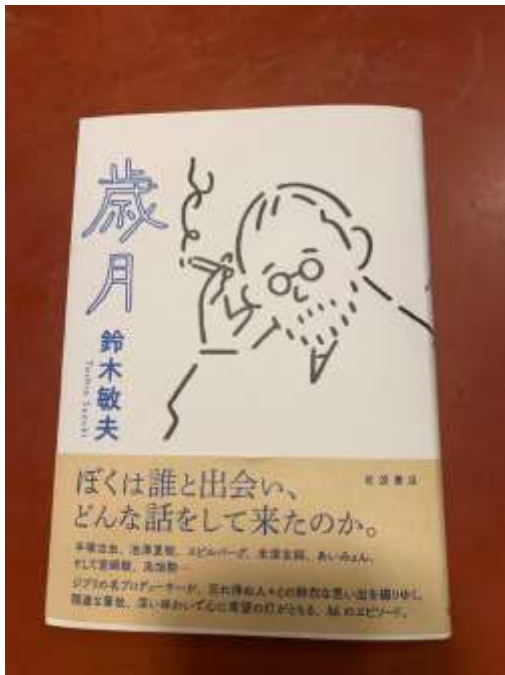
7/\*\*

トム・クルーズの新作メイキング YouTube を見た。世の中の誰よりも古臭い本気が、凄いなあとため息ついた。まだまだ自分も出来ることをしなくてはと励まされた。「トップガン マーベリック」でもそうだった。エンタメ仕事の力を信じているのだろう。そうありがたい。



7/ \*\*

新しくこれを併読追加。鈴木敏夫さんは最近、何やら酷いことを言われてたりした。名の出る人の多くが、SNSなどで不愉快な思いをいろいろしているのだろう。風呂で読み始めたが、楽しい。



7/ \*\*

暑いので自宅に籠って毎月の連載原稿の下書き。気分転換には、構想のまとまった本の原稿を書く。どちらにも飽きたらカレーの作り置き調理に Netflix。

あまりにも運動が少ないので久々にウォーキングマシンをやってみたら、20分で汗だくになった。人間、動いてないと駄目だね。



7/ \*\*

クロネコの集荷を依頼して待っていた。14時～16時、仕事場にいた。来ないので17時過ぎに担当に電話した。すると「15時半頃行ったが不在だった」という。見てみるとポストには不在連絡票が入っていた。在室していたのに聞き逃したらしい。インターフォンの故障も確認したが大丈夫。イヨイヨ呆けたか！

7/ \*\*

帰宅しようと久々に表に出たら、暑くて賑やか。世間は連休かあと思った途端気がついた。そうか祇園祭の宵山。こんな混雑からはとっとと逃れて大津に。仕事ではあちこち行くのに、ここしばらく遊びではどこにも行かないなあ。行きたいところもとくにない。老化だぞ！

7/ \*\*

夜中にこれを読み始める。併読追加だ。それにしてもグラフィック・ノベルなのに600ページほどある。大判本でイメージは電話帳。持ち歩ける重さじゃないので自宅でぼつぼつ読むことに。第一次大戦敗戦後のドイツ。ナチス政権誕生に向かうベルリンの物語。

7/ \*\*

仕事場で目覚め、予約のストレッチに。午後の歯科予約まで時間があるので、ドールで週末の講演会の準備。続けて KISWEC ワークショップのレジュメ。zoom 講座 2 回目のパワポ作成と快調に片付く。

気になってた直木賞本購入。歯科施術は今回で終了。  
夕飯をここで見繕って、戻って連載の仕上げだ。



7/\*\*

まだ夜中だから 20 日気分だけ。今日の予定、最大限の  
の捗りで、何もかも完了。来月号の新作も超早い目の完成。  
ご褒美に明朝、初日幕開けのチケットを予約。たのしみだ。



7/\*\*

こちとらは可能なミッションばかりなので、スムーズに片  
付く爺様だ。先日のハリソン君も今日のトム君も、昔馴染  
みの頑張り屋さんなので、エール気分の鑑賞。安定の追  
いつ追われつにも、手に汗は握らず、すごい頑張っ  
てるなあ后感心する。ランチ後、タリーズで原稿書き再開。



7/\*\*

送ってもらったチケットでグリーン車に乗って講演会の福  
知山に。ここは我が一家で 10 年間暮らした、子供達には  
故郷の街。赴任地だったので私が異動してしまえば、何  
も残らない。出身地とも言わないのかなあ。夫婦二人か  
ら、三人、四人、五人家族になる歴史を刻んだ。



7/\*\*

夏景色ってことだろうか。やけに車窓が美しく感じられ  
る。おや、帰路のここは和知。息子二人とゴムボート下  
りに初挑戦して、ライフジャケットを用意しなかったこと  
を後悔して、川の途中で引き上げた場所だ。川遊びの事故  
のニュースに触れると思い出す。いろいろあったなあ。



7/\*\*

風呂本を本日読了。なかなか楽しい読み物。時代物のエンタメはいいねえ。さて、次ももう一冊の直木賞本にするかな。



7/\*\*

ありがちなことから驚きもしない。audiale の契約をしていたのを忘れていた。郵送されたクレジットカードの明細で見つけた。そこで気になっていたこれを、試しに聴き始めた。以前、朗読と題した作品に手を出した時より、こなれていて楽しい。目を休めつつ、だらっとしながら本が楽しめる。



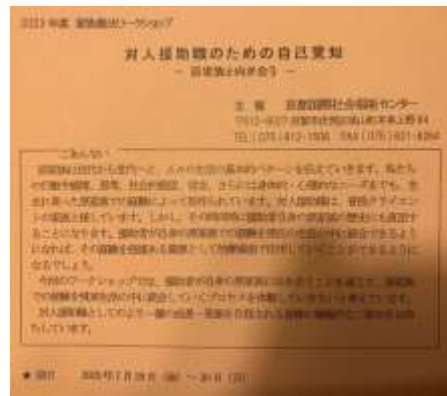
7/\*\*

このようなものを拾い読みしながらゆっくりした1週間。いよいよ明日からは連日、あれこれ実施していかなければならない夏スケジュールに入る。自分の本づくりも着々と進んでいる。8月も駆け巡って報告する日々だ。暑さに打ち負かされないよう用心しながら、さあ。



7/\*\*

今日から三日間、このプログラムをしている。もともと少人数開催の企画だが直前に、本人や家族のコロナで欠席が相次いだ。でも、少人数でじっくりのプログラムの良さはジワリ。



7/\*\*



あれれ、何だこの怪しげなアプリ？と思って、すぐ気付いた違和感の朝。日曜、午前8時前なのに、傘をさして駅まで。仕事に向かう道路の日差しは午後のそれだ。長い信号待ちでXマークを不審がって、ツイログを触っていたら5年前のこれが。まだウクライナでドンパチ始める前のことだ。



8/ \*\*

猫柄のアロハで茨木の立命館大学に。夏のワークショップ二日間のプログラム。十五人の受講で実習中心に気楽なこと話しながら進める。



8/ \*\*

レターパックで梅干しが届く。暑い夏の塩分補給にピッタリ、20年来の手作りだそう。

送り主に初めて会ったのは60年以上前。府立春日丘高校一年のクラス。甘酸っぱかったかどうかは分からないが、仲良くしてもらった。それ以来、各々いろんな時期を過ごして後期高齢者になった。これからも元気で。



8/ \*\*

さてWS 三日目。朝の気温は少しマシだった。8時頃に35度なんて日々から比べると、台風のせいなのか30度位なら。こんな中で23人の人が三日間、大いに楽しんで盛り上がったのだから良かったのだろう。

30年以上もこんなことが続けられているのは、運や巡り合わせもあつての事だろう。

#### A) 家族療法ワークショップ STEPI

日時	第1回 2023年8月4日(金)～8月6日(日) 第2回 2024年1月6日(土)～1月8日(祝)
	第1日目 13:00～19:00 第2日目 9:30～19:00 第3日目 9:30～15:30
受講資格	3日間通して受講できる方で、 ①心理、福祉、教育、医療などの分野で相談援助活動に携わっている方。あるいは、 ②家族理解に関心をお持ちの大学院生。
定員	24名(希望者少数の場合、不開講になることがあります)

8/ \*\*

明日の琵琶湖花火大会の対策だろう。JR 膳所駅構内のどこにも、一席の椅子、ベンチもない。いつもは構内に

もホームにも当然あるのに。

大勢の人がやってくるイベントの準備は、過剰ということはないのだなあと、少し前のソウルの群集事故を思い出す。だから私は今から京都の仕事場に避難だ。



8/ \*\*

ずいぶん前に読書好きの友人に薦められて購入した文庫。なんだか調子が合いにくい時代物に思えて途中で置いてあった。

それを audible で見つけて再度試してみた。引っかけたのは、五寸、約15センチなどといちいち解説の挟まるどころ。でも面白い。シリーズで出ているので続けて楽しむことに。ただいま第3巻目が移動中の友。



(思いがけずこれにはまった。Audible で現在第9巻を聞いている)

8/ \*\*

立命館の大学院で私の授業をとって、2019年蘇州での学会の講演通訳もしてくれたTさんが来日して京都にいたので久々に会った。あれこれ話していたらあっという間に時間が過ぎる。

中国の子供達の学習、受験の事情はニュースなどで見る通りだが、そこにある発達を取り巻く事情など興味深い。



8/ \*\*

数日前の夕刻、TVのニュースを見ていたら凶鑑が流行っていると話題にしていた。そこで子供向けの3冊が取り上げられていたのだが、どれもちょっと興味があって、アマゾンで注文した。その1冊がこれ。風呂で見ているとくすくす笑った。子どもあるあるだなと思って、懐かしいような可愛いような。



8/ \*\*

大学の同窓生二人とランチしてから仕事場に。歳は違うけど同じ児童福祉業界で勤務後、各々大学の教員になり、本を出したり研修会をしたり。

良い大人(もう初老だ)、ああ二人がね、私は立派な？高齢者。そんな三人でワイワイ楽しく話している。なんか知らないが私は相変わらずだ。今日届いた本。



8/ \*\*

徳島県での講演に向かっている。JRで舞子駅まで行って、そこから高速舞子駅乗車のバスに。この路線、初めての混雑を経験。予約客乗車の後、空席があればご乗車いただけます、と到着20分遅れのバスドライバーに言われた。いつも貸切みたいに飛び乗っていたので、お盆休み恐るべしだ。まあ乗れたから良いのだけど。



8/ \*\*

九月の福島県白河での掛軸展の準備。Hさん指定の6作品中の一つが見当たらない。たしか仕事場に数展、置いたままのものがあるが基本的には自宅保管しているはず。探してもないものはないなあ。



8/ \*\*

予定してなかったお盆の大集合。長男、次男一家が勢揃い。事情があつて(帰省渋滞とお店の混雑具合)二班に分かれたちか定の鰻。やっぱり美味しい。帰宅してzoom講座の3回目を自宅から。家に九人いて、空間に人の気配がいっぱいの中スタート。いつもは一人なのに。



8/ \*\*

花火大会も祇園祭も避けていたが、台風は避けられないので仕事場に籠る事に。ハワイの山火事のニュースも酷い。このところ自然が不自然なくらい過激だ。怒っているのか?と思うくらい。こっちのスケジュールと台風のそれを重ねて、隙間を綱渡りのようにこなす日常なんて、勘弁してよ。



8/ \*\* 洗濯機を二回まわして、大量のバスタオルを洗濯して干して、たたんで積んだところで、今年のお盆は終了。8月後半の、講座、zoomの準備。対人援助学マガジン54号の自分の連載と、ポツポツ届く原稿の編集準備。秋には5ヶ所で掛け軸展が計画されていて、その段取りがそろそろ始まる。

8/\*\*

遠来のお客さんが午後、仕事場にのはずだった。ところが朝の7時過ぎに新幹線に乗った状況で運転見合わせになったと連絡が。もう五時間以上、母娘で車内に缶詰らしい。高校野球の中継画面にはこんな表示。どうぞご無事で。どこにどんな災難が待ち受けているかわからないなあ。



8/\*\*

この記事を読みながら、結局金の話にするのだなと思った。若者が引いていったのは、ブラック労働実態だったからじゃなかったか？ 労働環境の見直しはせずに、金で釣るって、二つの問題を、安易にくっつけた事にならないか？ これで採用された人はメンタルな病気にはならないとでも？



### 社員の奨学金を肩代わり、900社超 狙いは人材確保 教員採用でも

人材確保のため、社員の奨学金返還を肩代わりする企業が増えています。同様の取り組みは、教員の志願者減に直面する教育委員会や、若者の流出に悩む自治体にも広がっています。

8/\*\*

昨日は東京国際フォーラムを会場に70回目のWSを賑やかに実施。今朝、神田のホテルで目覚め、孫と娘に会いに。品川の水族館のイルカショーで塩水を被る。しばし一緒に過ごし、その後、三島から修善寺温泉に。明日のWSの前のり。私としては珍しく、賑わう温泉宿で夕食。



# 54・夏の音楽会

原町幼稚園園長 鶴谷主一（静岡県沼津市）

「幼稚園の音楽教育」というタイトルで、マガジン30～32号で考え方や活動をレポートしてきました。“音楽”だけに文章だけでは伝わらなかったのが歯がゆいところでしたので、今回は動画を掲載して、実際の音楽会の様子をご覧いただき、保育のねらいをどういう形で活動に反映させているのか検証していただきたいと思います。

原町幼稚園の音楽教育の大きなねらいは、『**音楽を好きになり、楽しむ心を育てる。**』という漠としたものですが、ねらい設定については、可能ならば[マガジン30号](#)のレポートを読んでいただくとありがたいです。

映像は冬の音楽会の前哨戦と位置付けている「夏の音楽会」の紹介です。コンセプトは、**自分たちの出番もある、見ても楽しい！やっても楽しいコンサート♪**といったところでしょうか。

そのため、オープニングから子どもたちを乗せていっちゃおう♪という先生達のパフォーマンス、ストーリー仕立ての発表、そしてブレイクタイムやエンディングは会場参加型で楽しむところが特徴的だと思います。思わぬハプニングや予想外の行動も織り込み済みで進めていきます。（冬の音楽会は外部会場を借りて保護者も観覧するのでもう少しカッコリ決めていきますが、基本的には同じコンセプトでやっていきます）

実施日は6月28日、新年度が始まって約3ヶ月の子どもの姿です。

園児数：年少23、年中27、年長29人。

園児一人一人の性格を尊重しながらみんなでいっしょにやる。一緒に楽しい音楽の時間を共有しようという考えが基本にありますのでいろんな姿が見られます。

## 原町幼稚園 うたおうあそぼう夏の音楽会2023 保護者向けダイジェスト版



※限定公開のため、他のサイトなどへのコピー・リンクはしないでください。

動画が再生されないときはURLをブラウザにコピーして下さい

<https://www.youtube.com/watch?v=Eq6cvR3noTo>

# うたおうあそぼう音楽会2023夏

提案2023.5.24.原町幼稚園（鶴谷）

## 《音楽教育の大きなねらい》

♪音楽を好きになり、楽しむ心を育てる。

## ●夏の音楽会

◆日時 2023年6月28日（水）午前10時半～11時半 わくわくホール

◆参加 幼稚園の年少～年長組

◆夏の音楽会のねらい

- ・みんなで集まって音楽会を楽しむ
- ・みんなの前で歌う、合奏する経験をする。（ふざけないで発表する）
- ・みんなの歌や合奏を聴く経験をする。（静かに聴ける）
- ・（ある程度）声を揃えて歌うこと、演奏することが楽しいと感じられるようにする。

●楽器のねらい/年少=手拍子などで周りの友だちや先生とリズムに合わせて楽しむ。

年中=カスタネットを使い、曲に合わせてリズムを合わせる事が気持ちいいと感じる。

年長=今後メロディオンを使って技術を習得していくにあたって、まずは楽しいイメージを持って楽器と向き合えるように、メロディオンを吹いてリズムやメロディーを合わせることに気持ちよさ、自分が楽器を奏でる楽しさを感じる。

◆音楽会への姿勢

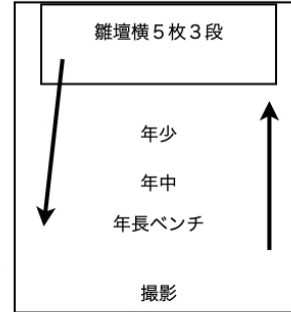
普段歌っている歌やリズム遊びの発表をしながら、ねらいを達成していくので、発表するためのある程度の練習は必要になるが、子どもが行う演出や配置などの練習はさほど必要でない。（大人側では、子どもたちが興味を持って聴いたりできるような演出、工夫は必要です）加えてしっかり舞台に立つ、静かに友だちの発表を聴ける、楽しく笑ったり歌ったりしたあとは、また静かになれる“けじめ”の姿勢を身につけさせておいて下さい。

◆プログラム [担当：オープニング/年長、ブレイクタイム/年少、エンディング/年中]

	曲	担当/p=伴奏、MC=進行	楽器・演出等
<b>オープニング</b>	園長はじめの話	MC…西、林 p…日野原	小太鼓…近藤
<b>年長担当</b>	オープニング：あいさつアイラブユー	協力…稲葉、山田、篠原、松下	笛&WC…千葉
移動		MC…年少	
<b>年中</b>	リズム：たのしいね うた：天気予報をお知らせします にじのむこうに	MC…稲葉 p…日野原 サブp…山田	
移動			
<b>年少</b>	リズム&うた：バナナくん体操 いとまきのうた 公園に行きましょう	MC…松下、篠原 p…篠原、松下	
移動			
<b>ブレイクタイム</b>	おはようクレヨン	年少 p…篠原 MC…眞野 松下、林、西、山田、稲葉、 小澤、千葉	
移動			
<b>年長</b>	合奏：やまのおんがくか 歌：ちぎゅうのシンフォニー	P…西 MC…林 P…林 MC…西	
移動			
<b>エンディング</b>	ふしぎな森の音楽会	MC…稲葉、山田 P…近藤 協力…西、林	G…眞野 Per…志乃 ドラム…小澤

◆その他

- ・曲数、演出、担当は各学年にて決める。
- ・練習日は、わくわくホール使用を調整し、主任がまとめる。
- ・各学年で使う楽器チェック・準備をしておいて下さい。・楽器の破損チェック等
- ・各年齢での練習は事前にしておいて下さい。
- ・放送機器（スピーカー2本）、※園撮影→てのりの配信



### 「幼稚園の現場から」ラインナップ

- 第1号 エピソード（2010.06）
  - 第2号 園児募集の時期（2010.10）
  - 第3号 幼保一体化（2010.12）
  - 第4号 障害児の入園について（2011.03）
  - 第5号 幼稚園の求活（2011.06）
  - 第6号 幼稚園の夏休み（2011.09）
  - 第7号 怪我の対応（2011.12）
  - 第8号 どうする保護者会？（2012.03）
  - 第9号 おやこんぼ（2012.06）
  - 第10号 これは、いじめ？（2012.09）
  - 第11号 イブニング保育（2012.12）
  - 第12号 ことばのカリキュラム（2013.03）
  - 第13号 日除けの作り方（2013.06）
  - 第14号 避難訓練（2013.09）
  - 第15号 子ども子育て支援新制度を考える
  - 第16号 教育実習について（2014.03）
  - 第17号 自由参観（2014.06）
  - 第18号 保護者アナログゲーム大会（2014.09）
  - 第19号 こんな誕生会はいかが？（2014.12）
  - 第20号 ITと幼児教育（2015.03）
  - 第21号 楽しく運動能力アップ（2015.06）
  - 第22号 〔休載〕
  - 第23号 大量に焼き芋を焼く（2015.12） 2019
  - 第24号 お話あそび会その1（発表会の意味）
  - 第25号 お話あそび会その2（取り組み実践）
  - 第26号 お話あそび会その3（保護者へ伝える）
  - 第27号 おもちゃのかえっこ（2016.12）
  - 第28号 月刊園便り「はらっば」（2017.03）
  - 第29号 石ころギャラリー（2017.06）
  - 第30号 幼稚園の音楽教育（その1・発表会）2017.09
  - 第31号 幼稚園の音楽教育  
（その2・こどものうた）2017.12
  - 第32号 幼稚園の音楽教育  
（その3・コード奏法）2018.03
  - 第33号 〔休載〕
  - 第34号 働き方改革・一つの指針（2018.09）
  - 第35号 働き方改革って難しい（2018.12）
  - 第36号 満3歳児保育について（2019.03）
  - 第37号 満3歳児保育・その2（2019.06）
  - 第38号 プールができなくなる！？（2019.09）
  - 第39号 跳び箱（2019.12）
  - 第40号 幼稚園にある便利な道具〈紙を切る〉  
（2020.03）
  - 第41号 コロナ休園（2020.06）
  - 第42号 コロナ休園から再開へ（2020.09）
  - 第43号 ティーチャーチェンジ（2020.12）
  - 第44号 除菌あれこれやってみた（2021.03）
  - 第45号 マスクと表情（2021.06）
  - 第46号 感染予防と情報発信（2021.09）
  - 第47号 親子ソーラン節（2021.12）
  - 第48号 親子コンサート（2022.03）
  - 第49号 うんちでたー！（2022.06）
  - 第50号 子どもが育つ園庭・その1 木登りとブランコ  
（2022.09）
  - 第51号 子どもが育つ園庭・その2 砂場（2022.12）
  - 第52号 子どもが育つ園庭・その3 ストライダーと  
Tonka（2023.03）
  - 第53号 リスクと安全・園庭編（2023.06）
  - 第54号 夏の音楽会・動画（2023.09）
- ▶気になる記事・ご感想質問等ありましたら気軽に連絡  
ください。✉ [office@haramachi-ki.jp](mailto:office@haramachi-ki.jp)



# 福祉系

# 対人援助職養成の

## 現場から 54

### 西川 友理

#### “こどもなど”始動！

2020年の春、本マガジンの40号で「保育者の対話の場を作りたい」という話を書きました。「今、保育幼児教育現場では『アクティブラーニング』ってよく言われるけれど、主体的で対話的な保育の場、って、今ホントにどの保育現場でも出来ているのかな？まず保育者がその『対話の場』を、それも『安心・安全を感じられる対話の場』を経験することができているのかな？だってこんなに人間関係で苦しんで泣いて辞める人たちがいるのに……」という思いを込

めました。

それから、3年。今年2023年7月、私は保育業界初心者のための対話の場「子どもに関わる大人等の会」、通称“こどもなど”の第一回目を開催しました。

#### 対話の場に「保育」の人が来ない

すでに支援者のための対話の場を定期的で開催していた私ですが、この3年間、いやその前から、「なぜこういう対話の場に、保育現場の人は来ないんだろう」とずっと考えていました。



高齢分野や障害分野、低所得者支援等の分野の方は結構参加されます。また、子どもの分野でも障害児分野の支援者の人は参加されることがあります。しかし、保育現場で働いていらっしゃる方はなかなか参加されません。

## “こどなど”に至るまで

ひとりで考えていても埒が明かんなと、私は様々な人に相談してみました。

参加した学会では、対話が必要だ、対話が大それたという発表をされた方に伺いました。保育者養成校の先生方にも伺い、保育現場の先生方にも伺いました。哲学対話の場、当事者研究の場、子どものワークショップをしている方にも伺いました。

「保育者の人が、対話の場に来ないのはどうしてなのでしょう。」

多くの人の返答はこうでした。

「いや、絶対に必要だと思いますよ、そういう場！」

「私も、そういう場、大事だと思います、応援しますよ！」

みなさん、かなり前向きに、とても好意的に受け取ってくださいます。

そして“必要”とおっしゃるのです。

「きっと、西川さんがそういう場をしてるってこと、皆知らないだけじゃないですか」

「もっと宣伝したら？」

そういう声もありました。

そこで、あらゆるところで、ピラをま

いたり、宣伝したり……しかし、どうも手ごたえがありません。

高齢分野、障害者分野の方の参加は増えましたが……うーん、努力が足りないのでしょうか？マーケティングが下手なのかな？

現在保育現場で仕事をしている卒業生にも「こういう場があったら、参加したいと思う？」と聞いてみました。

「うーん、休みの日は、休みたい……」

「わざわざ、行きたいかっていうと、正直言って、寝てたい（笑）」

「それか、遊びに行きたい！わーって、発散したい！」

「休みの日には疲れてそれどころじゃない……」

という彼ら、彼女ら。

「……あー、まあ、そうだよねえ。そうなるよねえ。」

苦笑いの西川です。

そのくせ、卒業生個々からは連絡が来ます。

「先生、しんどい。」

「もうやめたい……。」

「これこれこういうことがあって、すごく難しい。どうしたらいいかわからない。」

ひとりひとりの話を聴き、話をします。

その後、「良かったらこういう場があるけど、来ない？」と、対話の場の紹介をします。

「あー うん、はい、また機会があったら。」

…どうも、気乗りがしない様子です。

「いや、無理に誘ってるわけじゃないの

よ、でも、ええと、気乗りしない、かな？」  
「知らん人もおる中で、そんな話出来ないです……」

「どんな人がおるかわからんし。」  
「私は誰かに聞いてもらいたいわいって言うより、先生に話聞いてもらいたかっただけやから。」

そしてまた、数か月後に電話をしてくる彼ら、彼女ら。

「……あー、まあ、そうだよねえ。そうなるよねえ。」  
ふたたび、苦笑いの西川です。

### あたらしい仲間、まみちゃん！

そんな試行錯誤を繰り返す日々、子どもに関わるアート活動の場で、ある人に出会いました。

「めっちゃわかる。保育者にそういう場ありますよ！ていうか昔、そういうおしゃべりの場をつくってみたけど、見事に誰も来なかったんです。」

この人は、向井真美さん。フリー保育士をしていらっしゃる。

子どもにも「まみちゃん、まみちゃん！」と大人気。面白くてかっこいいお姉さんです。

（やっぱり、場を作っても保育者は来なかったんだ……！）

驚いた私は、彼女から詳しく話を聴きました。

…真美さんは、ご自身がとある園で働いている時に、とともしんどい目に会っていたそうです。でも、すぐに辞める、

という事はしなかった。一生懸命頑張った。けどどうしてもしんどくなってしまふことがあった。

「そういう時ってどうしてたんですか。」

「ええと、保育現場で就職した元クラスメイトと、どんちゃんさわぎやら、暴飲暴食やら……。」

「ああわかる！そんなことしたした、私も！」

でも、それはあまり健康的な発散とはいえなかったと言います（そして私も身に覚えがあります……）。

「どんちゃんさわぎの最中に、友達と話したりするんですよ、仕事の話も。でもそれは単なる愚痴で、ムカつくとかうっとおしいとか、ハラ立つとか、そういう話ばかりで、何も建設的じゃない、ただのうっぶん晴らし。それがまったく意味がないわけではないとも思うんですけど、でも……。」

ちゃんと話す場が、というか、ちゃんと話を聴いてもらう場が欲しかった。だから、一度そういう場を作ってみたというのです。

「保育現場で働いている人、みんなで話そうよ！」

日時会場を設定して、SNSで告知して、いざ開催！…したけれど、一人だけしか来なかった。その一人も、保育者の人ではなかった（この人はこの人で、またとても面白い人だったので、それについてはまた別の機会に書きます）。

「なんでや?!みんな、要らないの、そういう場?!」

思わずつぶやいた真美さん。

「…ちょっと待って真美さん、一緒じゃないですか、私の経験と。」  
「え、そうなんですか?!」  
「うん、めっちゃ似てる。というか『なんでや?!みんな、要らないの、そういう場?!』って、一言一句たがわず、私も言ってる。」  
「え————! そうなんや!」

### 「さて、なんでなんやろか」

というわけで、唐突に「保育者が語り合う場があると思うけど、なぜかうまくいかない問題」仲間が増えました。

真美さんが考えたのはこう。

「働き始めた最初は、みんなしんどい、と思ったり、自分の職場で“学校で、勉強してきたことと違う”“保育ってもっとこういうものはず”とか、感じると思うんですよ。けどとにかく、日々の仕事をこなしていかなきゃいけない。そのためにはとにかく上の人のいう事を聞いて、その職場で“生き抜いて”いかなきゃいけない。目の前の忙しさの中で紛れて、疑問を持つ前に、とにかく動かないと、日々の業務が動いて行かない。」

「頑張って頑張って、たまの休みはもう倒れてしまって、何をやる気も起きない。あるいは、どんちゃん騒ぎなどで、うっぴん晴らして終わらそうとする。」

「しんどさを解消させること優先で、“保育って?”とか“子どもと一緒にいるって?”ということに、向き合う

余裕がないのかもしれない。」  
それは、私の感覚とも合致しました。

### 私の感覚

本マガジンの40号に以下のように書きました。保育者だけの対話の場を作る、という事を思いついたころです。そのアイデアを保育士として働いている友達に話してみました。

.....

すると、

「うーん…保育士ってあんまり孤独やないからね…。」

とのお答え。

「どういうこと?」

「女の人が多いし、なんだかんだ言っておしゃべりするから。別に対話っていう場がなくてもええんやないかなあ」「そう…いいアイデアやと思うんやけどなあ」(本連載40号より)

.....

そう、職場が「おしゃべりする」場所である人は、そこでおしゃべりが出来て、その職場にいることができるのではないかと、思うのです。

問題は、そうじゃない人たちです。

### 1年で職場を辞める人たち

厚生労働省の令和2年度の統計によると、新卒社会人の3年以内の離職率は25%、このうち1年以内に離職した人は約半数の11%となっています。ところが、保育士の離職率は3年以内で離職率50%近く、1年以内の離職率は25%となっています。他業種と比較しても、結構早いうちに、その職場を辞めてしまいます。

さらには、2023年3月に発表された令和4年度版「東京都保育士実態調査」によると、離職理由の第一位が「職場の人間関係」となっています。前回調査、平成30年も同じ理由が1位となっています。

私の友人が言った、「女の人が多いし、なんだかんだおしゃべりするから。」という理由はとても大きいと思います。つまり、「人間関係がばっちりハマって、園の文化になじむことができ、その園で“なんだかんだおしゃべりする”波長が合うかどうか」が、その仕事を続けていけるかどうかのポイントになるということです。

同じく本連載40号で、「保育者は他者との違いを受け入れることがもしかしたら難しいのかもしれない」と書きました。

.....

……しかし、保育分野は、誰かや何かとの違いに出会うと「出来るだけ同じ部分、共感できる部分」を探して、それに寄りそう努力をする。そうして「共有する対

話」に結論を持っていこうとする。それが「安心・安全な場の確保」につながる方法になる、という論理が存在しやすい場なのではないかと思うのです。（本連載40号より）

.....

子どもや保護者にとって、何とか「安心・安全な場」を作ろうとしている保育者たち。その保育者たち自身に「安心・安全な場」が確保できないと、まずそういう場を作るための精神的な安定が得られません。その園が自分のコミュニケーションパターンと合致する人間関係が築ける場だと、安心してその園に「居着く」ことができるのではないのでしょうか。すると「居場所」を見つけたという状態になります。あるいは、その園の文化に「出来るだけ同じ部分、共感できる部分」が多い自分になろうと、つまりその園の文化になじんでいこうと努力する。居場所としての職場を見つけることができた、あるいは園の文化になじめた人は辞めない一方、どうも自分のコミュニケーションパターンと合致する人間関係が築けない、ここは「居場所」ではない、と感じる人は辞めていく。自分の居場所でないと感じるところに長く居るのはつらいものです。だから「早めに辞めて、次の職場を探す」。

「だれかにとって居心地のいい居場所」は一方で排他的になりがちなのかもしれません。また、いったん「居心地がいい、安全・安心な場」に居られる自分になったら、その場を揺るがすような「保育ってこれでいいのかな」「もっと

こうしたらどうだろうか」と、場を変化させるようなことを考えるのは、危険だと考えられる場合もあるのかもしれませんが。

.....

「違う部分がある、どうしても相いれない部分がある。だけど、いや、だからこそ、あなたと共にいたい」「違いがあるからこそ、お互い一緒に変化しあうことが出来る、この社会でいっしょに生きていける」といった視点は、もともと保育や幼児教育の場面では言われているはずなのです。その手法は、出来るだけ共感的で安定的な場を作る、という方法ではなく、いつでも不安定でいられる、変化できるという安心と信頼のある環境の確保が出来るような方法をとるほうが、子どもにとっても、保育者にとっても、生きやすい場になるのではないかと感じるのです。（本連載40号より）

.....

もともと異質な、違う園の、全然知らない人と会う機会や、「うちの園はこうだから」「保育者ってこういうことをする人だから」という園内文化を「本当にそうかしら」と見つめる機会、これらはとても大切であると考えます。しかしそれはもう「自分の働く園」に染まり切ってしまうと、もしかしたら難しいのかもしれませんが。まだ園の文化に染まり切っていない段階で、「〇〇園の保育者」になる前に、「保育者としての自分」を探

っていく場として、対話の場をつくる、というのはどうでしょうか。

### どんな人の場をつくる？

以上を踏まえて、真美さんに提案してみました。

「もし場を作るとしたら、まだ職場になじんでいない、1年目、2年目の人たちの場にしたらどうでしょうか？」すると真美さん、ちょっと考えて、答えられました。

「うーんそれもいいけど、私、学生のうちからやったらもっといいと思うんです。」

「えっ、学生のうちから！……なるほど、確かに！」

「まだ全く現場の雰囲気にならないうちから、青田買い笑！！」

「青田買って笑！！でも確かに、学生のうちから“自分と違う考えの人と一緒にいる場も居心地がよく居られる”というお作法を体感できる場を持つておくって、いいかも！！」

### はじめる事、続ける事

とにかくこうじゃないかな、ああじゃないかなと色々考えていたのですが、具体的にこの春、

「よっしゃ、とりあえず、やってみよか！」

と始めてしまいました。

スタートまでに3年ですよ、3年。あんなんという亀の歩みでしょう！でもとにかく始めてしまったのです。

「どこでやってるのかわからん」

よし、では、チラシ以外でも、Twitter（現X）でも告知しようじゃないですか。もちろん、チラシを撒ける所なら、どこだって持っていきますよ。

「休みの日には寝たい」

よし、では、オンラインでも開催してみようじゃないですか。ギリギリまで寝てよ、なんだったら布団の中から参加してよ。

色々と手探りが始まります。

そして私は、このマガジンのおかげで、「続けること」の意味を知っています。あまりたくさん集まらないかもしれませんが。でも、必要な人がいるという感じはしています。少なくとも、私や真美さんは、1年目にそういう場が欲しかった。続けてさえいたら、必要とする誰かに、いつかご縁が繋がるかもしれません。そしていずれは、私達の手を離れて、参加者の皆さん自らが場を作っていくことを目指して。

というわけで皆様、そして皆様の周りの方に、どうぞお知らせくださいませ。以下、告知です。

.....

## 【子どもとかかわる大人などの会“こどなど”～関西の保育現場初心者、集まって話そうよ～】

保育実習生、そして子どもと関わる仕事をしている1年目～2年目くらいの人、ちょっと吐き出していかへん？

「実習が不安！」「指導案ってこれでええん？」「働き始めたけど、ちょっとキツイいわ～」「これって他の園や施設はどうしてるの？」「私が目指す保育ってね…」「この前子どもがこんなことしてさ…」等、他の養成校、園、施設のみなどと話してみませんか。

現役フリー保育士&保育士養成校スタッフが、「初心者こそ、そういう場、いるんとちゃうん？」と考えてつくった場です。色々考えちゃう人、とりあえず話そう。

**日時）**2～3か月に一度、日曜日に開催。次回は11月か12月に開催予定。

**場所）**大阪メトロ谷町線 太子橋今市駅から歩いて5分のコミュニティスペース（連絡くださった方に直接場所をお話します）

**料金）**100円～200円くらいのカンパ、あるいはみんなで食べられそうなお菓子を持ってきてください。

お問合せ & 参加申し込み）西川（[lily\\_n@hotmail.com](mailto:lily_n@hotmail.com)）にメールするか、Twitter（現X）で「NY【支援するひとの対話の場】@NY20220222」を検索の上、DMください！

.....

以上です。よろしくお願ひします！

# ああ、相談業務

## ～ 海斗君の話 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

14

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

学校現場では、発達障害があると疑われる子が通常学級に10%近く存在している。ADHDや自閉症スペクトラム障害などが主であるが、精神発達遅滞の子も混ざっている。そういう子どもたちの対応に手を焼き、学級崩壊状態になってしまった先生方に何人も会って来た。今回は、問題児とされ、学級崩壊の原因とされた子どもをめぐって学校の先生の支援を行った事例である。

### 家族

海斗君は小学校5年生、父親は38歳、母親は36歳、中学校1年生の姉と小学校2年生の弟の三人兄弟の真ん中である。父親は公務員、母親は日中パートで働いている。家は新興住宅街に新築で建てられた一軒家であった。父親は道外出身で、父方祖父母や兄弟は皆、本州在住で健在。母方祖父母や兄弟は、道内だが道南在住で、健在。父親

の仕事の関係上、転勤が多かった。今回家を建てたのは、姉が中学に入ったからで、今後は父親の転勤は単身赴任の予定とのことであった。

### 相談経過

支援開始は、夏休みが明けてしばらくたった、初秋という時期である。母親からの相談がきっかけで、海斗君（以下本児）が、「学校で問題児とされ、しょっちゅう呼び出されてパートもほとんど行けない。学校から発達検査と支援級への措置替えを勧められたが納得できない。」とのことであった。

こういう話はよく聞く。落ち着きのない子、先生の指示にまったく従わず反抗的な子、教室で切れて暴れる子、ちょっと勉強についてこられていないかなと思われる子等々。指示が通り、先生の思い通りに動く、所謂良い子ばかりを求め、そこ

から少し外れると、もう問題児とみてしまう、そんな先生がまだいる。勿論素晴らしい先生方もたくさんいらっしゃるのだが、一部に、「子どものことが好きじゃないんだな」と思われる先生がいらっしゃるのも事実である。発達障害者支援法が出来て10年以上になるのに、発達障害の理解も十分とは言えない。それでも学校現場は社会全体で見れば、理解のある方だと思う。本ケースは、発達障害者支援法が施行される以前の話で、ADHD が学級崩壊の原因であるという誤った考え方が少なからずあった時代の話である。

母親の訴えを聴き、本児の生まれてからの様子なども一通り聞いた。家族状況も最初に聞くことにしているので、前述の通り聴いている。母親自身は、知的にも問題なく、しっかりした印象で、家を建てたからパートに出て少しでもローンや子どもたちの学費の足しにしたいと思って頑張っていた。父親は仕事が忙しく、家のことや子どものことは母親任せになっている状況ではあった。

本児に会ってみたいと伝え、母子で一度相談に来てもらうことになった。当時筆者は、市のスクールカウンセラーとして相談を受けている立場であった。就学前の子どもであれば、保健師が関わっていることも多く、どのような母親で、どのような子どもなのか、健診の経過などを得ることもできる。就学と同時に資料が破棄されるのが普通である。家庭児童相談室でケースとして挙がっていれば、18歳までは保管される。この地域で暮らしてきた子であれば、本児のことを保健センターの保健師が覚えている、或いは弟のことで覚えているということもあるかもしれないが、本児は、その年の3月に転入したばかりである。以前住んでいた地域に問い合わせるほどの内容でもない。したがって、会って話してみよう確認するか本児の状態を知る手立てはない。母親に本児を連れてこられるか確認する。「連れてこられる」という人や「連れてきます!」という人や、「母親の言うことは聞かないので、父親と相談してみます」など、反応は様々で、それによってある程

度のアセスメントが出来る。母親が子どもをどの程度コントロールできるかをこれで確認できる。また、子どもにどのように説明して連れてくるかを確認することもある。母親が説明できそうもなければどんなふうに言うかも一緒に考える。例えばカウンセラーについての説明の仕方や、連れてくるにあたっての説明として「お母さんは、あなたのこと何も問題ないと思っているけど、学校はそう思っていないみたい。カウンセラーはあなたの味方になってくれる人だよ。自分の味方になってくれる人を増やそう。」というような話や、「あなたにも言いたいことあると思うの。だからそれを聴いてもらいに行こう。お母さんがいない方が良ければカウンセラーと二人だけで話してもいいよ。」などなど。海斗君の母親は、「連れてこられる」と言ったので、特にどのように説明するかは相談はせずに、お任せした。

今回の来室日を調整して母親が帰った後、教育委員会の内部で、担任の先生について何か情報が無いか確認した。学級崩壊状態になっているとなれば、何かしら情報が教育委員会に入っていることも多いからである。確認してみると、そのクラスはかなり大変な状況らしく、担任がアップアップ状態で、精神的にも危ういとの情報があった。

数日後の放課後、母親と本児で来室された。本児は怪訝そうな顔で入室し、やや不貞腐れた態度で椅子に座った。小学校5年生と言えれば思春期に入っている。反抗期でもある。いきなり「カウンセリングに行くよ」と言われて、喜んで来る子などほとんどいない。喜んで来る方が問題かもしれないくらいである。したがって、まあその態度は想定内である。母親がどのように説明して連れてきたのか。学校でも先生にきつと叱られてばかりなのだろうから、また何かお説教でもされるのではと思ったとしても何の不思議もない。向こうが構えているならその構えを壊すしかない。

まずは自己紹介をして、「今日来てくれてありがとう。どんな風に言われてここに連れて来たのかな?」と聞いてみる。大体の答えは「特に説明もなく連れてこられた」とか「あなたと会いたい



って言われたから」とか「専門家に話を聞いてもらおう」とかである。大抵説明不足で、本人は納得していない。従ってまずはそこから始める。

「先日お母さんがいらして、学校のこといろいろお話してくれたの。海斗君は、担任の先生とあまりうまくいっていないみたいだから、その話を聴きたいなと思ってお母さんに連れてきてとお願いしたのよ。」等と、カウンセラーが会いたくてお願いしたという形を通す。そして、母親が同席でよいかの確認をする。母親があれこれ口を出すタイプの場合は、子どもと二人にしてもらうこともあるが、基本は子どもの意向を聴く。本児の場合は母親がいても構わないというのでそのまま母子面接となった。

いきなりそのまま学校の話をするのは、本児も嫌だろうから、まずは、本児の心をほぐすことをしなければならない。

「海斗君はどんな遊びが好きなの?」とか「何が得意なの?」「ゲームする?」など、まずは本児の興味関心のある話を探す。釣りが好きな子もいれば、スポーツが好きな子もいるが、まあ一番多いのはゲームである。当時も既にゲームは流行っていたので、振ってみると「ゲーム」と答えた。小中生の面談ではゲームの話をする人が多いので、筆者もゲームはあれこれかじっている。特に流行っているゲームはどんなものかくらいは見ておく。本児がその当時はまっていたのはモンハン(モンスターハンター)で、一通りその話を盛り上げる。そうすると本児の表情が段々緩んでくる。

ゲームの話をしているが、その間にやり取りがスムーズか、言語理解のレベル、体の落ち着きなどをついでに観察していく。雑談だけでもかなりのアセスメントが出来る。ゲームの話から、ゲーム以外に好きなことは何か、運動が得意か、どんなスポーツが好きか、音楽や絵を描くことなどはどうか、勉強では何が得意か等々、少しずつ聞いていく。好きな話で盛り上がった後だと、割合スムーズに答えてくれる。

その結果、本児は、運動も得意、特に走るのが

速い、リレーの選手、歌は好きだけど絵を描くのはあまり好きではない、勉強では理科が好き、算数はまあまあ、5年でクラス替えになったが、前のクラスの方が楽しかったし担任も良かった、今の担任は嫌い、クラスはみんなうるさく騒いでいるから自分もふざけている、友達は沢山いる、友達と喧嘩をすることもある、食べ物の好き嫌いはそれほどない等々様々な情報を得られた。話している間の本児の体の様子は、多少貧乏ゆすりが見られるものの、話をしっかり聞くことも、答えることもできるし、立って歩いたりということはなかった。多少室内外の刺激に左右されることは見られたので、注意散漫なところはあるのかもと思われた程度であった。発達検査をすればおそらく多少のばらつきは出るかもしれないが、あえて検査を進める必要性は感じないし、学校がどうしてもというなら検査を受けることも考えればよいかという程度であった。

いろいろ話を聴いた後、本児に、「いっぱい話してくれてありがとう。海斗君と話せて楽しかった。」などと感謝を述べ、「また話に来てくれるかな?困った時でいいよ。」と伝えると、「うん」と少しはにかんだ笑顔で頷いてくれた。これで関係性はほぼ構築できたと感じられた。

この間母親は黙ってやり取りを聴いていてくれた。この母親にも問題性は感じられないし、一対一で話すときの本児の様子からは、発達の問題が大きい、支援級への措置替えが必要などということは考えられなかった。

さてそうすると、本児の問題をどうとらえるかである。一対一だと問題ないが、集団になると不適応行動をとる子もいる。そこで、学級での様子を確認したいと思った。この件については、母親にも本児にも「一度学級の様子を見に行きたいけど良いかな?」と了承を得る。勿論、本児と筆者が知り合いという様子は見せないという約束もする。母親も本児も「構わない」とのことで、学校に電話をする。こういう時は担任にというのはなく、教頭に電話をすることが多い。ただ、教頭や校長などの管理職も様々なので、スクールカ

ウンセラーに対して好意的かどうか、どういう人物かなど、教育委員会の方で知っている人が居れば一応聞いてみる。当時は学校のことは学校がやるから入るなという感じの管理職もまだいる時代だったので猶更であった。確認してみると、校長も教頭も好意的だとのことだったので、教頭に電話をした。

母親の了解のもと、母親から相談があったこと、本児とも面談をしたこと、その時の様子なども一通り簡単に伝えて、学級の様子を見たいと伝えた。教頭からは学級の状態が落ち着かないので、教頭や担任外の先生などが時々入っているし、担任にも指導しているが、中々うまくいかない様子だとのこと、是非入ってみてほしいと言われた。

時間割を聴いて、こちらの空いている時間と調整して、日時を決めた。一応二時間目と三時間目の中休みを挟んだ二枠をお願いし、授業は体育や音楽と言ったものではなく、算数や国語のような、動きのない授業にしてもらった。

大抵学校で困る授業は、じっと座って勉強に集中してもらうものである。集中力が続かない子どもたちも多いので、あれこれ工夫が必要である。それも低学年ほど集中させるのが難しい。本児は5年生なので、ある程度集中することが出来て良い学年であるが、それも先生の持っていくかた、授業の展開の様子によるだろう。

参観当日、最初の25分くらいは、だれにも見えないように、廊下でじっとクラスの様子に聞き耳を立てていた。いきなり知らない人が入るといつもの様子が見られないからである。廊下にいると、先生の声がほぼ聞こえない。子どもたちが勝手にしゃべっている様子がわかる。立ち歩いているのだろう音も聞こえる。椅子が動く音、笑い声、物が落ちる音など、まあ騒がしい。担任は40代半ばの男性である。もっと大きな声はでないのだろうかと思いつつ聞いていた。国語の授業であるが、先生は何か黒板に書いていたり、教科書を読んだりしているのだろうか？教科書を読ませたりしているのだろうか？あれこれ想像しながらしばらく聞いていたが、途中で、教室に入った。

入るとすぐ何人の子が、「誰？」とか「誰かのお母さん？」とか見たことのない人の出現に、反応する子が出てくる。今は授業中なので、そうした質問には答えずに、ただ笑顔だけ返しておいた。担任に軽く会釈して、後ろでじっと見学していた。

見学していてまた驚いた。筆者の存在はそのうち忘れられて、廊下で聞いていた時と同じ状況が展開された。あっという間に子どもたちが勝手に大きな声でおしゃべりをはじめ、部屋の中を自由に立ち歩く子もいる。担任は教科書を片手に説明をしているが、前の方に座っている数名のみが一生懸命先生の話の聴こうとしているし、板書も書き写している。あとの子は、全く先生などいないような振る舞いであった。先生は先生で、うるさい子たちがいないかのように、淡々と小さな声で授業を続けていた。これでは上手く統制できるはずもないだろう。

国語の授業が終わった後の中休みに、先生と少し話をした。もう少し大きな声が出ないか確認すると、そういう元気がもうないとのこと。更に子どもたち一人ひとりの様子が見えているか確認しても、やはり、そんな余裕はないとの答え。先生自体、かなりお疲れで、鬱っぽくなっているなと感じた。

さてさて先生が潰れずに、このクラスを立て直す方法を早急に考えねばと思い、次の時間、筆者が子どもたちの様子を見る中で、子どもたち一人一人の良い点を探していくことにした。メモ帳を持ち、授業が始まる少し前の休み時間から教室に入って、様子を確認した。座席表ももらって、どの子がどの子かわかるようにし(最近の名札を付けていないので)、名前を書きながら、その子の良い面を探して一言書いていく。次の授業が終わるまでに、35人の児童全員に一言ずつ入れることが出来た。それを帰りの会で読んでもらうことにした。

3時間目が終わってから、先生にやってほしいこととして前述のことを伝えた。それだけなら先生に負担にならないし、先生自身が子どもたちの良い面に気づいてくれるのではという淡い期待

もあった。そして、最後に先生から「みんなもお友達の良い面に気づいたら先生に教えてね」と付け加えるよう伝えた。更に大きな声が出ないのであれば、注意を向けるために音を出すのも良いかも、ベルや手を叩くなどでも良いし、何か音楽でも良い、はやりのゲーム音楽とかも良いかもしれない、また、注意を向けてくれたら、いち早く注意を向けてくれた人に、「一番！」などと言ってみるのも良いなど、幾つか先生がそれほどエネルギーを使わずにできることを一緒に考えながら決め、更に眠れているか、食べられているか等先生の精神状態を確認し、眠れていないなら眠剤を使ってでも寝るようにと伝えた。眠剤は内科でも言えば貰えるのでと。先生も辛かったであろうと、その辛さを認め、共有し、頑張りすぎずにほどほどでやっていこうという、先生も少しほっとした様子であった。

その後しばらくしてもう一度授業参観に行ったが、その時は、クラスはかなり落ち着いていて、先生の様子も以前より力強くなっていたし、声も大きくなっていた。教室の後ろまでしっかり声が届かないと、子どもたちは先生の話の聞かなくなる。聞こえないから面倒くさくなるのだ。でも先生の声が聞こえると、聞くようになる。この時はその日の最後の授業で、終わった後帰りの会があったが、そこで先生から子どもたちへの褒め言葉が聞かれた。褒められた子への拍手もあった。小さなことでも、頑張ったこと、気遣いをしたこと、優しさを見せたこと、給食を全部食べたこと、片付けが速かったこと、掃除が丁寧だったこと、発表や発言が多かったこと、褒めどころは沢山ある。そして小さなことでも褒められた子は、照れながらも嬉しそうにする。クラスに笑顔が増え、先生にも笑顔が見られるようになっていた。

相談に来た海斗君の母親と二回目の参観の1か月後に面談した。母親からは、クラスが落ち着いたため、本児の措置替えの話は消え、本児も楽しく学校に行っているとの話が聞かれ、終了となった。

## まとめ

学級崩壊の原因を子どもの問題にしてしまうのはおかしな話である。子どもは未熟である。学校という集団生活に適應するのも中々大変なところもある。未熟な子どもたちを何とか成長させ、集団という社会に慣らしていくことが教育であろう。それが出来なければ社会に出ても子どもたちは働けなくなる。子どもたちを成長させるには、子どもたちの力を信じ、子どもたちを嫌わず、褒める、認める、そして、ダメなことはダメを通す、こうしたことが必要であろう。

先日ある支援級で、先生の指示が通らず、罵詈雑言を並べ立てる子に対し、暴れるからという理由で、一日中別室で YouTube を見せているという話を聞いた。支援級には情緒の子も多い。今は誰もがタブレットを持っている学校の状況が、子どもへの教育の場を奪っているのではないだろうか？集団での行動を修正するには、集団内でやっていかねば出来ない。そんなことは言うまでもないと思うのだが、まだこんなことが行われているのかと、嘆かわしく思った。学校現場でもこのような状態なのだから、社会で発達障害者が、その特性故に困ったときに周囲が理解し手を差し伸べてくれる社会など、ずっとずっと先のことになるのだろう。そんな今の時代から過去を見た時に、海斗君のように、子どものせいにされたケースがきっと沢山あったのだろう。そうやって育てられた子が大人になったときに、大人への不信感や学校への不信感を持つことになって、クレイマーと呼ばれているのではと思う。

## ドラマセラピーの実践・研究・手法

### ドラマセラピーにおけるアセスメント

尾上 明代

今号では、ドラマセラピー実施に際して、クライアントやセラピープロセスの進展等を査定・評価する指標について記述する。さまざまあるアセスメント方法の中でも私が特に重要だと思うアプローチを紹介したい。それは、ドラマセラピストの Susana Pendzik が創った「6つの鍵のモデル」という統合的な方法で、「ドラマ的現実 (dramatic reality)」という概念に基づいた質的査定である。

以下、Pendzik の論文から、6つそれぞれを説明する。

ドラマセラピーには本当にたくさんの多様な手法とアセスメント方法があるため、査定はとてもチャレンジングな分野だと Pendzik は言うが、「6つの鍵のモデル」はすべてのドラマセラピーに共通な概念である「ドラマ的現実」を使うので、私はとてもわかりやすいと思う。

「ドラマ的現実」というのは、内なる想像の世界を表現する場である。それは投影された構造を持っていて、人の内的世界、他者との関係、自我機能等について多くの情報を与えてくれる。一般的な心理療法においては、治療同盟、「通常の現実 (ordinary reality)」における言語的な場、メタレベルでの転移・逆転移の場等で機能するが、ドラマセラピーではそれとは対照的に「ドラマ的現実」と、2つの現実（「ドラマ的現実」「通常の現実」の）の移行期に枢要なプロセスが起こる。ゆえに、この視点からのアセスメントが重要となる。

以下が6つの鍵である。

- 1 「通常の現実」と「ドラマ的現実」の間の通路（往還）
- 2 「ドラマ的現実」の質とスタイル
- 3 そこに出てくる登場人物と役

- 4 筋、テーマ、葛藤等の内容
- 5 「ドラマ的現実」への外側からの反応
- 6 メタ現実、または表明されていないサブテキスト

これは質的な方法なので、ドラマセラピストによる主観的な観察を基本にしたモデルである。セラピストがセッションのプロセスをする際に、この6つの鍵をアンカーポイントとして使う。

### **第1の鍵**：通路（「通常の現実」から「ドラマ的現実」への移行）

これは個人の感情的な状態、認知的な能力、発達上の障害、自我強度と機能、そして対人関係の問題などを反映する。「ドラマ的現実」に出入りできる能力は、人間のパーソナリティーの様々な側面を明らかにする。これには良い境界線を示すことや、はっきりした自己という感覚、心の中で構成物を作り上げてそれを現実的な対象に投影する能力などを含む。

### **第2の鍵**：「ドラマ的現実」の質とスタイル

ここでの1つ目のポイントは、「ドラマ的現実」の質、つまりどのくらい上手にできているかという点である。これは演技技術の評価ではなく、作り出した想像的な世界に本心から入り込める能力の評価だ。ドラマセラピーが効果を発揮するためには「ドラマ的現実」が十分な良いレベルであることが必要である。簡単に言えば、この質とは、劇に流れと安定性があること、適切に劇に参加していること、そして美的距離、コミュニケーション、参加を他者と分かち合えていること、深さ、そして内面の統一性である。

2つ目のポイントは、その劇に独特の特徴、つまりスタイルがあるかどうかである。「ドラマ的現実」というのは人形劇から鬼ごっこ、儀式場面演技まで様々な形があるが、そこに、他とは違う、劇を創った人やグループの独特の特徴があるかどうかである。この側面を考慮に入れることは大変重要だ。スタイルの変化は治療的な進展または後退のサインとしても見られ、（作っていく劇の）ジャンルを変えることは、治療的介入として使われることもあるからである。

### 第3の鍵：登場人物（キャラクター）と役（ロール）

登場人物と役は違う。例えば、王、母、天使、大統領などは役である。俳優、観客、脚本家、演出家なども、演劇の機能を遂行しているという意味において役である。それと対照的に登場人物は、具現化された役たちである。（例えばオバマ大統領の場合、オバマはキャラクターで、大統領は役である。）一般的に登場人物は、よりダイナミックで流動的な構造を持ちたくさんの役を演じることができるので、人のパーソナリティに近い。

査定のポイントとして、たとえば、以下のような点を観察する。

- ・ 登場人物や役はどのように結びつき統合されているか。
- ・ 登場人物はたくさんの役を代表しているか、または皆同じ原型的な役と結びついているか。
- ・ クライアントは、どのような機能的な役（演出家、観客、演技者）を演じているのか、いないのか。
- ・ そのような登場人物と役たちは、「ドラマ的現実」の中で現れてきているか、それともクライアントはそうすることが難しいのか。

### 第4の鍵：内容一筋、テーマ、葛藤

内容には筋、テーマ、葛藤、象徴、イメージ、感情、コンプレックス、又は強迫観念などが含まれる。「ドラマ的現実」は投影されて形作られるものであり、人の内的世界であるから、心の中の核になる問題やメカニズムが表現される傾向にある。

査定のポイントとして、たとえば以下のような点を見ていく。

- ・ 筋または葛藤で、繰り返し現れるパターンは何か。
- ・ 筋は進んでいるか、行き詰っているか、この物語が進んでいくためには何が起きる必要があるのか。
- ・ ドミナントストーリーの影にオルタナティブストーリーはあるのか、それは何か。

### 第5の鍵：「ドラマ的現実」への反応の仕方

この鍵は「通常の現実」に戻る時、体験を統合して評価することに関してのものである。自分が演じたものにどのくらい価値を置くかは、その人が現実で達成したことをどのように評価するかのパターンを反映している。これは、クライアントが、主観的な体験をプロセスして統合する能力や、自尊感情について査定する助けになる。またその人が、ドラマセラピーから獲得でき得た恩恵が反映されるので、「ドラマ的現実」で演じられたワークがその人の人生に与えた重要性を評価することができる。

たとえば以下のような点について見ていくと良い。

- ・ 「ドラマ的現実」でしたことを、その人がどのように見ているか。
- ・ それをその人は重要な体験と考えているか、またはあまり価値を感じていないか。
- ・ その反応はその人の判断のパターンをどのように反映しているか。
- ・ 「ドラマ的現実」の中で演じられたワークは、現実生活にインパクトを与えているか。

## 第6の鍵：メタ現実、または表明されていないサブテキスト

6番目の鍵には、転移や逆転移のプロセス、隠された問題や葛藤、言語化されていない外界からの影響(政治的な出来事や社会的緊張、または天気や健康に関する心配など)がある。この鍵はドラマセラピーで必ずしもアクティブになるものではない。精神力動的アプローチが転移をメインの治療的介入に使うのとは違って、「ドラマ的現実」は、安全にこの側面に光をあてることができる。ドラマセラピーではこの鍵は必要不可欠ではないが、もしそのようなことが起きたときは、他のすべての鍵が機能するのを邪魔してしまうため、注意深く観察していなければならない。

たとえば、以下のような点を見ていくと良い。

- ・ セラピーのプロセスに伴って、直感や説明できない感覚や考えが浮かんできたか。
- ・ それらはどこから来ているのか。
- ・ それは、転移と関係していることか。
- ・ 逆転移など、セラピストが吟味しなければいけない問題はあるか。

以上が6つの鍵である。私自身は、長年の実践から得られた感覚として、クライアントの背景や診断名等より、この「ドラマ的現実」という概念からアセスメントすることが、大変有効であると感じている。この感覚は、実践開始初期から今まで変わっていない。私はこのアセスメント法が発表されるよりずっと前からドラマセラピーを

実践してきたが、私自身が発見したものと合致している。この方法を知ったときは、Pendzik が私の代わりに言語化してくれたと感じた。

Pendzik は、あるトラウマ研究を紹介し、「想像的な領域に入っていける能力は、PTSD の症状を作り出すことなくトラウマを生き抜くという健康的な対処メカニズムと同様の働きをすることが明らかになった」と述べている。このように理解すると、現実と想像との間の往還という第一の鍵は、ドラマ以外のモダリティーを使うセラピストやクライアントにも役立つと言えるだろう。

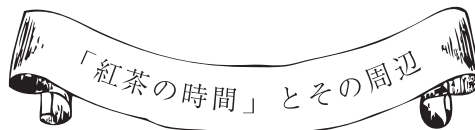
## 文献

Dickinson, P. & Bailey, S. (2021), *The Drama Therapy Decision Tree: Connecting Drama Therapy Interventions to Treatment*, Bristol, UK: Intellect.

Pendzik, S. (2012), The 6-Key Model-An Integrative Assessment Approach. In Johnson, D. R., Pendzik, S. & Snow, S. (2012). *Assessment in Drama Therapy*, Springfield, IL: Charles C. Thomas Publisher.



# きもちは、 言葉を さがしている



## 第 51 話

水野 スウ

### スウすごろく

年に一度、心の病気を体験した方たちの働いている東京調布のレストラン、クッキングハウスへお話に行きます。代表の松浦幸子さんから「スウさんのピースウォーク」の通しタイトルでその年々のお話をいただければ、私なりの平和の歩き方を語って今年で19年です。

今回のご注文は、「紅茶の時間」の原点。となれば、その中身はビフォーア—紅茶の私ともおおいに関係のあることで。そもそも、今こうして在る私は、どうなってこうなって現在の私になったのだろう。私の成分はいったい何でできているのだろう。それを考えるのって、「私」の当事者研究かも。そう思ったら楽しくなってきて、私のオギャー！から始まる「スウすごろく」をつくり、当日はその年表みたいな紙をみなさんにお配りしてから話しはじめました。

マガジン連載のサブタイトルは、「紅茶の時間とその周辺」だけど、今号は、紅茶の時間以前の私もふりかえりながら、スウすごろくの中身と、すごろくをつくってみてわかったことなどを。

### 憲法とおない年

私が誕生したのは日本国憲法が公布された日と施行された日の間、1947年の1月、つまり憲法と私はおない年です。父が53歳、母が36歳の時の子どもでした。当時の初産年齢からすれば母はかなり遅めでしたが、母との年齢差を感じたことはなく。明るくておもしろい母は、私にとって太陽みたいな存在でした。

そんな母が中2の時に病気で亡くなり、その半年後、年の離れた兄を突然、自死で亡くしました。そうして始まった、68歳の父と32歳の義姉と15の私、遺された者同士のぎこちない3人暮らし。家族で兄の死について話すことは一切ありませんでした。父も姉も自分を責めていることが私にもよく伝わってきたので、暗黙のうちにそうなる。兄の死についても、こんなぎこちない家族のことも、同級生たちには言えないまま、私はふつうの顔して学校に行き、内にも外にも吐き出せないグチャグチャの気持ちは文字にしていつも紙にぶつけていました。

## 銀座月光荘画材店

高一の時、絵の好きな友人が連れて行ってくれた銀座の月光荘画材店。銀座にあるお店なのに澄ましてなくて、そこだけがらくた箱のようで、自由な居心地。その店主で、父と偶然同い年の月光荘おじちゃんに出逢えたことは、私の人生にとって大きな意味ある出来事でした。

スケッチブックを買いによく通うようになったある日のこと、おじちゃんが私をじっと見ながらほとほと感心した口調で言ったのです。「スウヤ、お前さんは、おもしろいなあ〜!」。それまで周りから「水野さんって変わってるね」とよく言われていた私にとって、その言葉はめっちゃくちゃうれしかった。人と同じでないところ、少し違う感じ方をすると、その感性を、おじちゃんは両手広げておもしろい、と言ってくれた。私をまるごとで認めてくれた、そんなふう感じられて。

以来、月光荘は私の居場所となり、そのスケッチブックが日記帳がわり、私の心の吸い取り紙になりました。その日から半世紀以上たった今でも、おじちゃんのあの時の言葉は私の胸に灯るあかりです。

そのうち月光荘のノートには、グチャグチャのきもちだけじゃなく、ふっと心に浮かんできた詩も綴るようになっていきました。大学生の時、バイトして貯めたお金で、そうやって書きためた詩の原稿を自分で印刷所に持っていき、『☆のおしゃべり』という青い表紙の手づくり詩集を出しました。

できたての詩集を月光荘おじちゃんに見せると「もっと持ってこい、店で売ってやるよ」。その言葉通り、小さな詩集は月光荘おじちゃんの応援もあって、銀座からいろんな人のところへ飛んでいきました。その20年後からずっと産直本をつくるようになった私だけど、原点はここだったかとあらためて気づきます。

## アメリカへ

詩集を出してしばらくした頃、以前から時どき聴いていた永六輔さんのTBSラジオ番組「誰かとどこかで」に1リスナーとしてはじめて手紙を出しま

した。明治生まれの父がいかにわからんじんであるか、娘の私のことをちっとも理解してくれない、的な、いわば父への愚痴を書き綴ったような内容の手紙。なんとその手紙が番組内で読まれて、そればかりか、手紙と一緒に送った例の詩集がきっかけで、その番組内で放送される詩を書くようになりました。

ところがその1年後に突然、仕事を辞めて結婚してアメリカに飛んで行ってしまった私。その頃付き合っていた人がアメリカへ行くことになり、彼と結婚して二人でアメリカで暮らすことを決めたのです。だけどその生活はうまくいきませんでした。

つきあいはじめてすぐに紹介された彼の家族のにぎやかさ、明るさ、オープンさ。自分の家族にないものがここにあると思えて、家族中で私を受け入れてくれたうれしさに私は舞い上がってもいたのでしょう。結婚相手は彼という個人なのに、私はどこか勘違いしてしまっていた。アメリカで実際に2人で暮らしてみても、お互いの合わなさにどんどん気づいていきました。このまま一緒に生きていくのは無理だと、私だけでなく彼にもわかったのは本当に幸いなことだったと思います。

## 何をしたいの？

その彼と別れ、3年後の1973年に日本に戻ってきた時、なんとしても仕事しなきゃと思ったものの、考えつくところはTBSしかなく、赤坂にある局を帰国早々に訪ねました。スタジオで再会した永さんに、結婚に失敗したことを伝えるのは相当に恥ずかしかった。けれども、番組の中で「何をしたいの？」と永さんに訊かれた時、「書きたいです!」と瞬時に答えた私は、まったく若さゆえの怖いもの知らず。今思い出しても冷や汗が出ます。

向こう見ずな私の言葉を受けとめてくれたのが、この番組のディレクターの橋本さん。出版社で編集を担当している松田さんを紹介してくれて、それから私は毎日、書きたかったことを原稿用紙に綴りました。そうして私のはじめての単行本として出版されたのが『セントラルパークの詩』。ホンダ350というバイクのお尻に乗っけてもらってニューヨークからカリフォルニアまでを3週間かけて大陸横断した物語。以来、松田さんとは7冊の本を一緒につくり、

親しいおつきあいが今も続いていて、彼はこの日のクッキングハウスお話会にも参加しています。

帰国するなり会いに行ったTBSの橋本さんから同時に、電通の人も紹介してもらいました。おかげで、別の局の深夜のラジオ番組でコマーシャルを兼ねた詩を書くことになったのですが、電通の人との初対面の場面、今もよく思い出します。

私のことを「こちら、コピーライターの水野スウさん」と紹介する橋本さん。当時の私はコピーライターという単語なんて聞いたこともなくて、え？何それ？って一瞬頭の中では固まった。だけどここで聞き返しちゃさすがにまずいと、何くわぬ顔して、内心ドキドキしながら会話を続けて、なんとか仕事をもらうことができたのでした。

50年前の私のドキドキ、今回のクッキングハウスのお話会に参加した橋本さん、この日はじめて知ったはずです。

## 金沢へ

学生時代につきあっていただけお別れしてずっと離れていた彼と、日本に帰って再会しました。私の結婚の失敗も知った上での出逢い直し。一緒にいて、まったく等身大の私でいられると感じたことは何にもまさる安心でした。帰国した翌年、彼と結婚して、彼の生まれ故郷の金沢に移り住み、今年で49年になります。

知らない北陸の町での初めての暮らし。私には見るもの聞くものすべてがおもしろくて、その発見を、連載していた雑誌や金沢のタウン誌や地元の新聞に書くことに夢中になりました。金沢の人にしたらとうに知っていて当たり前のことごとを、東京から来たえんじょもん（遠い所のひと、と書く言葉で、地元のひとでないという意味の金沢弁）の私が発見して、おもしろいと感じて、書く。それをまたおもしろいと思う人も少なからずしてくれたのでしょう。それらの連載が回数を重ねるごと、ありがたいことに松田さんの編集で出版社から何冊かの単行本になっていきました。電通のコマーシャルの仕事も続けていて、NHK金沢放送局のリポーターをすることも何度か。

## 紅茶の時間のはじまり

結婚して3年目の頃だったろうか、産婦人科で診てもらったところ、卵管が閉じているので妊娠は難しいかも、と告げられたのです。そのこともあったのでしょうか。いっそう書くこと、取材することに打ち込んでいたら、思いがけず結婚から8年半目の1982年、娘が生まれてきてくれました。

産んでから気づいた、ありゃ、私には子育て仲間が一人もいない。仕事ばかりしてきて、友人と知り合いはいっぱいいいたけど、いのちと一緒に育てあう仲間と呼べる人がいなかった。はて、そんな仲間と出会うにはどうしたらいいだろう。

ちょうどそんな時、前から私の本を読んでくれていたという金沢のある人から声をかけられました。「うちで家庭文庫をしているの、そこにお話にきてくれませんか。文庫のお母さんたちにスウさんの子育ての話をしてほしい」。

家庭文庫。初耳の言葉でした。自宅を毎週決まった曜日に2時間ほど開放して、地域の子どもたちに絵本を貸し出したり、文庫のお母さんが子どもたちに絵本を読んだり、おはなしを語ったりする、いわば私設ミニミニ図書館のようなところのこと。その一つに呼ばれたのでした。

その文庫にお話に行くと、ほかの場所で文庫をしている何人かのお母さんたちとも知り合うことができました。そして、娘を抱いていくつかの家庭文庫をハシゴしてみても思ったのです。週に一度の決まった時間、自分の住む場所が地域にひらかれた小さな公共空間になるっていいな、自分ちをそんなふうにひらいたら、仲間と呼べる人たちともおそらく出逢えるんじゃないだろうか。

私を呼んでくれた文庫のお母さんに「絵本がないからうちで文庫はひらけないけど、週に一回、誰でも来れるオープンハウスをはじめ、っていうのはどうだろう」と相談すると、「大賛成！文庫に来てお母さんたちの中にも行きたい人、きっといると思う」。そんな言葉にも背中を押されて、最初は「赤ちゃん連れのひと誰でもどうぞ、お互いの胸のうち話しませんか」という呼びかけで、週1の午後、家

をひらいてはじめてのが「紅茶の時間」です。娘はまだ0歳でした。

コピーしたはがきサイズのお知らせを金沢のいくつかの文庫に置かせてもらう、というだけの宣伝。それでも口コミで徐々に紅茶という場所が知られていき、私たち一家の暮らす金沢城近くの小さなマンションは、それからの数年間、毎週毎週、赤ちゃんや小さなひと、お母さんたちの集まる週1未満児保育園さながらのにぎわいでした。母たちは、赤ちゃんにおっぱいあげながら、おしめ替えながら、膝に子どもを抱っこしながら、時に子どもにぐずられながら、子育ての悩みや家庭内のこと、自分のこと、うれしい、悲しい、しんどい思い、などなどもう夢中で、実によくよくしゃべりあいましたとも。

若いママたちとひと回りは年の違う私も、その一人。話す、は、放す、なんだ。胸のうちにあるモヤモヤもザワザワも、思いは誰かに話すことで放していかないと心が便秘する。そのことを、私自身が回を重ねるごとに体で学んでいく毎週の紅茶でした。

### 多目的空間紅茶

そのうち、いつもの紅茶を「ふつう紅茶」、ゲストをお呼びしたり上映会をする時は「とくべつ紅茶」とよぶようになり、わがやの生活空間が、毎週水曜日には異次元の多目的空間となりました。おさな子たちのためのクリスマスおはなし会もすれば、紅茶遠足もする。すてきな保育をしている保育園、幼稚園の園長先生をお呼びしてお話を聞く。講演会で知り合った絵本作家のまついのりこさんのお話をひらく。さくらんぼ保育園の実践を映画にした「さくらんぼ坊や」全6回の上映会を2年かけてする。

せまいマンションの和室とリビング合わせてたった20畳の空間。特別紅茶も含めて、そのすべてに親も子どもも一緒に参加する。毎回大人より小さい子のほうが多い空間で、泣いたりぐずったり、時にしっちゃんかめっちゃか。今ふりかえると、そんな状態でよくまあ、こんなにもいろんなことができたものだ后感心します。

紅茶の時間でとりくんだもっとも大きなとくべつ

紅茶は、デパートの催事場を会場に星野富弘さんの「花の詩画展」を開催したこと。実行委員会の場所も紅茶なら、詩画展会期中は紅茶が保育室になって、仲間たちが代わりばんこで保母さんをし（実際、仲間の中には元幼稚園、保育園に勤めていた人たちが何人もいて）、会場係のお母さんは子どもを紅茶にあずけてからデパートに行く、という一週間。娘も毎日、紅茶保育室のお世話になりました。

紅茶の外の人たちの協力もたくさんあったことだったけど、詩画展にはたくさんの人が足を運んでくれて、それぞれにおさなご抱えてた当時の紅茶仲間にとって、それは大きな自信になりました。

### 社会とつながる

子育て仲間とつながるために始めた紅茶だったけど、紅茶は社会ともつながる場所。そう意識するようになったのはチェルノブイリ原発事故がきっかけ、とずっと記憶していたけど、スウズごろくをつくりながら、その前に「国家秘密法に反対する女性の会・金沢」を弁護士さんとたちあげていたことを思い出しました。

国家秘密法は別名、スパイ防止法。かつての治安維持法によく似た法案が国会に出されるかもしれないと知り、なんとなく嫌だな、という違和感があった、同じマンションの下の階で事務所を開いているママ友弁護士さんのところへ、詳しいことを聞きにいったのです。聞いたら違和感が危機感に変わり。「そんなあぶない法案が出されているんだ。でもそのこと皆まだ知らないかも。ぜひこのお話を紅茶でしてほしい」と頼んで、すぐにとくべつ紅茶をひらきました。そして、危機感を共有したその弁護士さんと紅茶仲間とで「女性の会・金沢」を1987年につくり、金沢市内の広い会場で200人が参加する会を3回も開いたのでした。全国各地の弁護士会でも、同様の主旨で反対する会が次々つくられていた頃です。

今考えても、小さな市民グループの集まりに毎回どうしてそれほど多くの人が参加したのか、不思議です。想像するに、40年近く前は「ちあにいじほう」という言葉に肌感覚で反応する人がそれだけ多かったということかもしれません。戦前にあったその悪

法が人々の内心をどれだけ縛っていたか、怯えさせてものを言わなくさせていたか、身を持って知っている人たちがまだまだ健在でした。過去の戦争が今ほどには遠くない時代だったのです。

その法案を推進していたのが自民党、それを後押ししていたのは統一教会の政治部門である国際勝共連合でした。当時の法案は廃案となり法律にはならなかったけど、その後の安倍政権で姿や名前をかえ、似た中身の法律ができてしまっています。特定秘密保護法であったり、共謀罪法であったり、重要土地利用規制法であったり、と。

### いのみら通信

1986年に起きたチェルノブイリ原発事故のあと1年ぐらいすると、紅茶でも原発に対する不安をお母さんたちがよく口にするようになりました。私もすごく不安なきもちがあり。詳しい人呼んで勉強会をしたり、講演会で聞いてきたことをふつう紅茶でおすそわけしたり、わかりやすい原発関連の本を取り寄せては紅茶の玄関で売ったりするようになりました。

そうやって見聞きし知ったことを他の人にも伝えたい、と思うのが私の身上なんでしょう。新聞やテレビで報じないこと、とりわけ保守的な地元紙が書かない原発のことを、金沢のタウン誌、毎日新聞の月いち別刷り「女のしんぶん」に、よく書いていました。そんな私に「損するよ」と忠告してくれる人もいて、実際、地元紙からはすっかりお声がかからなくなったけど、そういうことって昔も今も、私はあまり気にしないちみたい。

1988年からは原発を知らせるための「いのちの未来に原発はいらない通信」、通称いのみら通信を手書きで出し始めました。

### 産直本『まわれ、かざぐるま』

いま思い返してもどこでその人と知りあったかわからないのだけど、ある出版社の社長さんが、雑誌か新聞に載った私の文章を読んで興味を持ち、本を出しましょう、と連絡してきました。

私がそれまで書いてきたのは、娘が生まれてからのこと、紅茶の時間のこと、仲間たちと原発を学び、

原発はいらないという意思表示の一つでかざぐるまフレンドシップキルトを仲間と縫い始めたこと、キルトの型紙をいのみら通信の付録にしたら全国で同じキルトが次つぎ縫われていき、針と糸を動かしながら原発の話をしあう場が全国に生まれていったこと、などなど。子育て、自分育て、それと地続きの脱原発の話でした。

ところが、書きためた原稿をその社長さんに送り続けていたある日、いきなりこう言われたのです。「原発の本なら、もっと派手なことしなきゃ売れねえ」。は?! 目が点になると同時に、怒り沸騰。こんな下品なこと言う“おっさん”に、私といとしい娘と仲間たちとの大切な物語をゆだねてたまるか! 直感的にそう思って、これまで渡していた原稿をすぐに、すべて奪い返しました。

チェルノブイリ原発事故から数年たって、街の本屋さんには原発関連の本がいっぱい並んでいる頃でした。それが当時の売れ筋、トレンドだったんでしょう。だけど私が伝えたいのは、原発のことだけじゃなかったんです。娘が生まれていのちと向き合うために始めた紅茶の時間。そういうときに原発事故が起き、仲間と学んだら、原発はいのちと共存できないことがわかった。そのことを伝えたいのであって、派手で目立つ“反原発運動”について書きたいわけじゃなかったんです。

さてこの原稿、どうしたら本にできるだろう。これまでほとんど出版社を通してしか本をつくったことがなかったけど、不思議と不安はありませんでした。紅茶仲間の何人かが、自費出版したい人のための、女性だけの小さな出版社を手伝っていることは前から知ってました。よし、それなら編集はそこに頼もう。星野富弘さんを私に紹介してくれた人は金沢の印刷会社の社長さんでした。よし、それなら印刷はそこに頼もう。預金通帳に、本づくりにかかる実費のお金はありました。うん、これで本がつくれる。

出版社の代表をする人から、「スウさん、うちは出版のお手伝いはするけど、営業はしてないのよ」と言われたけど、それも承知。いのみら通信の読者は当時1000人、この本に興味をもって読みたいと思

う人はきつというはず、と迷わず産直本つくることを決めました。この、論理によらず根拠もないけど、直感アンテナで行動しちゃう、というところが実に、私の私たるどころだなあと思います。

そうやって1990年に生まれた『まわれ、かざぐるま』の本は、顔の見える人の手から手へ、いのみらでつながっている全国の人へと、本当に羽がはえたように飛んでいきました。中には1人で100冊注文したつわものもいて。この人は友人の出産祝いにこの本をよく贈ったそうです。子育ての本と思って読み始めたら、紅茶の時間を知り、原発を知り、本を読み終わる頃には脱原発になってる、そういう下心でプレゼントしてたの、と笑いながら後のち彼女が教えてくれました。

原発のお話出前の会場でも、多くの人が本を買ってくれました。いのみらという自前のメディアと自前の産直本を持つてることの強みを、たびたび実感したものです。あの時、もう自分で本をつくるっきゃないと思い切らせてくれたあの“おっさん”の一言に、今ではむしろ感謝してるほど。

いのみらは今も出し続け、現在116号になります。途中から、原発に限らず社会で気になるさまざまを綴るようになって、その中には、HIV/AIDSも差別も性の問題も人権も憲法も。現在、定期購読の人は500人ほど。不定期で年に2回ほど発行されるいのみらは、今では「いのみら通信」と呼びたいくらいスローな、私から読者さんへのラブレターです。

### 津幡町へ

金沢の中心部から隣の小さな町、津幡に家建てて越したのは1992年。車で金沢駅から30分、電車だと1時間に1本のローカル線に乗って最寄駅から徒歩10分余り。団地の端っこに建つ煙突のある木の家は、部屋数の少ない分、空間と窓を広くしました。そういう間取りを提案したのは夫。開放感のある暮らしを彼が望んだこともあるけど、「紅茶、続けるだろ、なら広い方がいろんなことできる」と言われた時は胸が熱くなりました。紅茶の時間があい

ているのは平日の午後なので、会社勤めの夫がその場にいたことは一度もないけど、私の話から、本から、紅茶という場を彼がそんなふう理解し、認めてくれていたことが本当にうれしく、ありがたかったです。

ちなみに、四方の窓を大きくとって風の通り道を確保し、薪ストーブを置いたエアコンなしの家づくりは、夫婦で設計士さんに提案しました。少しでも電気に頼らない生活がしたくて。庭に植えた木々が次々に育っていき、風と緑の自然エアコンのおかげで、夏でも扇風機だけで過ごすことができます。(だけど年々夏の暑さが厳しくなっているの、これ以上暑くなるとうなるかなあ……)

さて、津幡に移った紅茶には、以前から紅茶に来ていた人、津幡の紅茶になって初めて来る人とがまざりあいましたが、紅茶初期の、子育て真っ最中ママと赤ちゃんたちでごちゃまぜのにぎやかさはとうになく。金沢から遠くなったこともあって、紅茶はだんだんとはやらない場所になっていきました。

すると来る人の顔ぶれも少しずつかわります。胸のうちに重いものを抱えた人、しんどい人、不登校やひきこもりの若者、そういう息子、娘さんを持つ親御さん、といった人たちが、人数は多くないものの割合的に多くなっていったのです。はやらない紅茶はその分ゆっくり話ができ、そんな人たちにとって少しは安心できる場に思えたのかもしれない。

でも逆に、その頃の私はとても不安でした。重たい話、深刻な悩みを打ち明けられても、それをどうきいたらいいかわからない。私の言葉で目の前の人を傷つけてしまったらどうしよう……。こんな不安をどうにかしたくて、その頃から私は少しずつ、聴くこと、受けとめることを、我流で学びはじめるようになりました。

### クッキングハウスへ

クッキングハウスの松浦幸子さんを知ったのは、21世紀になる直前。私なりの必要に迫られて独学しはじめて数年たち、学んだことを紅茶で実践してはまた学ぶ、そんな試行錯誤を繰り返しているうちに、だんだんしんどい人と向き合うことが不安でな

くなってきた時期でした。

ある日届いた、紅茶とつながりのある、不登校を考える富山のお母さんたち主催の講演会のチラシ。そこに書いてあった松浦さんの名前もクッキングハウスも初耳、でもこのお母さんたちがお招きする人なら、となんだか気になって出かけていったのです。

お話を聴きながら、不思議だけど紅茶との共通点をいっぱい感じました。クッキングハウスは平日に毎日開く、心の病気の人たちの働いているレストラン。紅茶は週一午後だけ開く無料のカフェみたいな場所。規模もスタイルも全然違うから、並べるなんておこがましい。だけど、一人ひとりのきもちを受け止める、まっすぐに聴く、それをとても大切にしながら松浦さんがクッキングハウスをしていること、紅茶で私が大切にしたいと願ってしていることはあい通じている、と勝手に思ったのです。

会場で売られていた松浦さんの著書『クッキングハウスからこんにちは』を買って帰り、一晩で読む。うん、やっぱり通じる、と確信して翌日、出版社に電話、40冊注文。『まわれ、かざぐるま』を100冊注文した人と私、50歩100歩ですけど、その時の私には、この本を必要とする人が紅茶にはいっぱいいる、と思えたのです。

その翌月、東京のクッキングハウスを訪ねました。その頃には紅茶の玄関本屋で平積みしていた松浦さんの本は、ほぼ完売。SNSもない時代、紅茶に来た人たちに個別に、これ、いい本だよ～、って熱心に勧めながら私、クッキングハウスの話もいっぱいしてたんでしょうね。

それからの数年間、私は夜行列車でよくクッキングハウスに通いました。クッキングハウスにはレストランだけでなく、ランチタイムの前後に、メンタルヘルスを学ぶ会、コミュニケーションを練習するSST、サイコドラマ、などなど、メンバーさんと一緒に市民も参加できる学習プログラムがさまざまあります。そのどれもがその頃の紅茶の時間と私にとって必須の学びに思えて。そこで学んだことを翌週の紅茶で会えた仲間たちにその都度、少しずつおすそわけしました。

2004年に『きもちは、言葉をさがしている～20年目の紅茶の時間』という本を、松田さんに編集をお願いして出しました。紅茶の話、家族の話が中心の書き下ろしエッセイ集ですが、今まで一度も触れずに来た兄の自死のこと、私が育った水野の家のこと、義姉と本当の家族になっていったことなど、はじめて文章にした本でもあります。

それができたのは、紅茶の場が育って、聴くことには静かな力があると確信できるようになったのに加えて、松浦さんはじめクッキングハウスのメンバーさんたちと出会えたことも大きかった。内に抱え込んだものを話そう、書くことで手放そう、と思えたのはクッキングハウスから受けとった勇気のおかげです。

松浦さんはこの本のことを「精神保健分野の人たちに読んでほしい本ね、専門家がむずかしく書くところを、スウさんが市民の言葉でわかりやすくやさしく書いてくれている」と言ってくれました。そんな意識はかけらもなかったけど、結果的にそうなら本当にうれしいことです。

### クッキングハウスでおはなし会

この本を出した年、松浦さんからリクエストをいただいて、私はクッキングハウスのメンバーさんやお客様たちの前ではじめて語りました。その時のテーマは本と同じ、『きもちは、言葉をさがしている』（あ、このマガジンの連載とも同じタイトルですね。実はこの本のタイトルからとったのでした）。それ以後毎年一回、「スウさんのピースウォーク」と題してみなさんの前でお話させてもらうようになって今に至ります。

今年のお題は、「紅茶の時間」の原点。ということで、今回のお話会のために用意したスウすごろくの右ページには、松浦さんのご注文に添って語った「ピースウォーク」のテーマが順に記してあります。どんなことを語ってきたのか、2回目以降の一覧を見てみると――。

### 2005年「憲法の主語は誰？」

それは私たち。加えて、ベアテさんの贈りものことも。

### 2006年「9条のいいところを見つけ」

元ベトナム戦争帰還兵アレンネルソンさんの語る9条のことも。

### 2007年 おやすみ

### 2008年「スウさんのピースウォーク人生」

私の心の旅。がんばりすぎて心が迷子になった、前年の私のことを、弱さの情報公開。

### 2009年「ほめ言葉のシャワーから平和へ」

前年に娘とつくった冊子『ほめ言葉のシャワー』。そこから平和につながる話を親子で語って、とのご注文。それに応えようと憲法を読んだ娘が、13条を新解釈。「わたしは、ほかの誰ともとりかえがきかない」ではじまる13条やさしい日本語訳をつくった。

### 2010年「ほめ言葉は認め言葉」

ある方から「ほめておだてる本をください」と言われた時の違和感から、ほめるって、認めるって、どういうことだろうと改めて。

### 2011年「いのみら通信の由来」

3.11原発事故が起きた年のご注文。「いのちの未来に原発はいらない通信」を出し始めたわけを語る。

### 2012年「私の心の居場所の原点」

居場所ってなんだろう。月光荘おじちゃんのこと。

### 2013年「コミュニケーションを巡る物語」

前年に出した本『紅茶なきもち』のこと、クッキングハウスに通って学んできたコミュニケーションのことなど。

### 2014年「13条のうた ほかの誰とも」

2009年に娘がクッキングハウスで語ったことから、娘流の13条わたし語訳が生まれ、それをもとに13条のうたをつくったこと。

### 2015年「私の12条宣言」

ふだんの努力の12条のこと。憲法のおはなし出前で全国に行くようになった私、この年、初の憲法本『わたしとあなたのけんぼうBOOK』を出す。

### 2016年「私の1票は大きな、12条すること・民主主義を生きる私たち」

### 2017年「自由を求めて」

今ある自由は、過去からたゆまず求め続けてきてくれた人たちがいたおかげ。とりわけ心の自由は今、さらに求めていかないと。この年、クッキングハウス30周年記念コンサートが開かれる。

### 2018年「私たちは平和のメッセンジャー」

このテーマは、前年の30周年コンサートのテーマでもあり。この年、2冊目の憲法本『たいわけんぼうBOOK+』を出す。

### 2019年「『私』から始まるpeopleの力」

自分は平和のひとかけら、という自覚を持つこと。「私」「私たち」の力をもっと信じよう。

### 2020年「地球市民として一緒に生きるために」

壮大なテーマが偶然、2020年コロナ下のおはなし会と重なる。利己と利他、前年に亡くなった中村哲さんの生き方についても。

### 2021年「文化と憲法」

これまたすごいテーマ。文化の語源はculture「耕す」、ということ糸口に語る。上から目線の文化と、人々の暮らしや営みから生まれる文化。クッキングハウスで実践しているさまざまな学習プログラム、オリジナルの歌づくりなど、一人一人が豊かな文化のいない手になっていること。

### 2022年 親子対話をオープンダイアログで

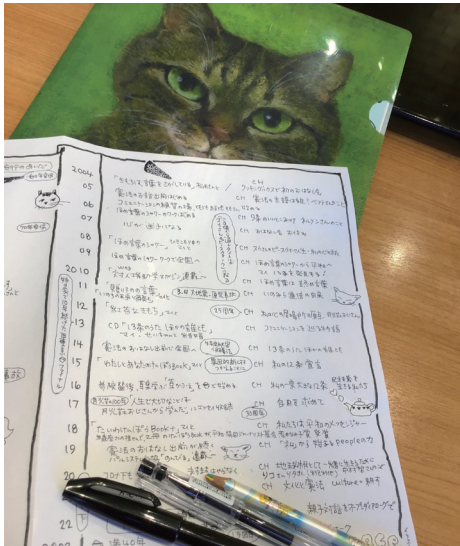
前年の夏、クモ膜下出血で倒れた娘のリハビリの道のりを、翌年の総会で親子対話する。退院してからクッキングハウスの講座に通うようになった娘にとって、リハビリ伴走者が松浦さんやクッキングハウスのメンバーさんたちであることもあわせて。

### 2023年「私のピースウォーク」

紅茶の40年だけでなく私の歩んできた道も俯瞰して。

すごろくをこうしてたどると、その年々に私が何に関心をもって動いてきたか、はっきり見えてきます。いのみら通信を毎号熟読してくれる松浦さんが、「スウさんは今ここが気になってるな」とキャッチして、リクエストのお題を私に振り、それに私が応





答する。そうやって続いてきたピースウォークのおはなし会は、松浦さんと私のコラボでもあり、社会と連動することでもあり。そもそも、心の病気があっても地域で当たり前生きていこう、というところから始まったのがクッキングハウス。その出発点からして、クッキングハウスは社会や時代と連動する場所なのでした。

### ほめ言葉のシャワーから平和へ

松浦さんから毎年違うテーマのご注文をいただいて語ることに、それは自分と社会のつながりを見つめて真剣に考えることでした。クッキングハウスでスウスゴろくを語らせてもらい、そして今、語らなかったこともふくめてこうして文章にしなが、ああ、なんて貴重な機会を、私は毎年贈られ続けてきたことだろう、と改めて感じる。贈られたのは私だけじゃない、13条を発見して新解釈した娘にとっても、クッキングハウスでのその機会が、まさに贈りものだったと思います。

2009年の「ほめ言葉のシャワーから平和へ」というテーマは本当に画期的でした。その前年、ひきこもっていた娘と一緒に作った『ほめ言葉のシャワー』は、「あなたがあなたに贈りたい言葉はなんですか」という問いかけにこたえる言葉を集めた冊子。その頃の娘は、何も社会に貢献していないこんな自分がここにいていいのだろうかと感じていた。そんな自分自身に届けたくてつくった冊子だったけ

れど、その翌年、よもや「ほめ言葉のシャワーから平和へ」なんてタイトルで話すことになるとは。

でもそのお題のおかげで娘は憲法13条と巡りあえたのです。平和といったら憲法くらいしか思いつかないし……そうやって開いた憲法の13番目の条文。「すべて国民は個人として尊重される」と謳う「個人」の意味を、「私は誰ともとりかえのきかない存在なのだ」と、娘は解釈しました。それは、戦前、いのちが「とりかえのきく部品」みたいだったことと、真逆の価値観です。

——13条は、私が私らしく生きることを許し、認めてくれている。だけどそれだけじゃない、過去の深い反省に立って、個を持った一人として生きよ、と私に求めてもいる。誰もがまわりに流されるだけなら、国がまちがった方向に暴走した時、誰にもそれを止められないのだから。

娘がクッキングハウスでそう語った13条の発見と解釈に、私は目を開かされる思いがしました。以前から憲法のお話出前をしていたけど、この時から私の憲法の語り方が確実にかわった。9条を中心に語っていたのが、以後は、13条からはじまって9条へとつながる話になりました。憲法は私のことだよ、あなたのことだよ、と感じてもらえる話、そのためにもっと平らに話したい、私自身、流されずに生きたい、個の人であり続けたい、そう願いながら語るようになっていったのです。

### けんぼうぶつくを書く

その延長線上に、2015年と18年に出した2冊の憲法の本があります。

娘は当初、専門家じゃないのに憲法の本を書くなんて無理だよ、と反対。だけど私は出前の行く先々で、憲法のコアである13条も、憲法を守る義務を負っているのが私たち国民でなくて国家権力の側であること(99条)も、多くの人はまだよく知らないということを実感していました。だから、難しい専門用語でない普段着の言葉で、私なりの憲法を書くことはきっと意味のあること、そう確信して原稿を書き続けたんです。その途中からは娘も私の意図がわか

って、本づくりの編集、構成、デザインを担当してくれました。もとはといえば、私の伝えたい13条は、娘が身を持って発見し解釈してくれた13条だったのですし。

憲法と同じ年の、専門家でない私が、後年、憲法の本を書くということ。そこにも私は特別の意味を見出しました。私の父は弁護士をしていて、岸内閣の時代につくられた内閣憲法調査会の委員の一人でもあったのです。何年にも及ぶその調査会の中で、父は、9条をかえることに反対する、それは徴兵制につながりかねない、という意見を国会で述べていました。憲法をかえようという意見が多い中で、父は少数派の1人でした。

父が亡くなったずっと後にそのことを知った私が、母娘でつくる憲法の本の中に、半世紀以上前の父の言葉を記すことの意味。53歳も歳が離れている父と娘だったので、生前ゆっくりと互いの想いを語り合う機会なんてほとんどなかったけど、私の誕生から実に長い歳月を経て、親子が憲法を介して共通の符号で一致して呼応した瞬間、だと感じました。父はいつも口癖のように「のち、悟らん」と言っていた。まさにその通り。人生は、のち、悟らん、だらけです。そこが不思議で、それゆえ奥深い。

### 私は何でできている

誰のためでなく、私自身が子育て仲間と出逢いたくて、まったく自利のためにはじめた紅茶の時間。当時は、子育て支援という行政の言葉も子育て支援センターもなかった。母親たちが自由に集まり、仲間と出逢い、自分の胸のうちを誰に気兼ねなくフラットに語りあえる場所。そういう場を求めていたのは、きっと私だけじゃなかった。ほかの多くの人にも求められていたのだと思います。

初期の大入り満員にぎわった時代を経て、仲間たちといろんな勉強会や活動もしてきて、住まいも金沢から隣町に移し、今は、退職後の夫と2人でただ静かにひらいている、という場になっていった紅茶の時間。その年月は同時に、私のアンテナがキャッチする「いいな、すてきだ、おもしろいな」に加えて、

社会で起きている「これ、へんだ、おかしい」も見つけては言葉にし、本にしてきた時間とも重なりあります。

60年安保の時は子どもすぎて、70年安保の時は関心もって良さそうな年齢なのにまったくノンポリだった私。娘を産んで、紅茶をはじめて、子育て仲間や私より先に社会とつながっている人たちと出逢っていく中で、ああ、この私も今の社会を構成している小さいけど確かなひとかけらだ、と自覚して変化していった、私にとって紅茶の40年はそういう年月でもありました。

ひとは、自分で自分のことはなかなか見えない。他者との出逢いが合わせ鏡になって、自分がどういう人間か見えてくる。若い時の私は、ごく狭い人間関係の中で生きていて、自分ってものがほんとは見えてなかったと思います。

娘が生まれて、紅茶をはじめたことで、自分の好き・嫌いで選ぶこと（って、そもそもなんて傲慢）ができない、実に多様な人たち、自分とは違う人たちと、次々出逢っていくことになった。そのおかげで、私は私のことが前よりは見えるようになった気がします。

そうやって出逢ってきたすべての人、もの、こと、できている私が、今のこういう私と出逢っている。その私は同時に、ちいさな平和のひとかけらでもあるのです。その思いから、スウすごろくの最後の言葉は、“I am a part of all I have met. I am a piece of peace.” としました。

この二つの言葉は、クッキングハウスで大事にしている、自分を主語にして語る「私メッセージ」ともぴったり重なっていて、その発見も私にはうれしいことでした。

クッキングハウスで語るためにつくったスウすごろくを何度も見返しながら、うん、私ってやっぱり相当おもしろい。15歳の時もだし、その途中もだし、そして今だにおもしろい、あらためてそれを再確認しているところです。

2023/8/23



# 男は 痛い



國友万裕

第 48 回

『渇水』

## 1. 狭くなる人生

サイトで何気なく名前を検索して、あっと思った。

教え子だった男の子がどうやらアナウンサーになったみたいなのだ。それで、SNSを切ったのかと思った。マスコミに出る身になったから、LINEやインスタグラムをしていると変に詮索される可能性がある。また落ち着いてきたら、オフィシャルなインスタグラムを始めるだろう。そうなったら、リクエストを送ってみようか。

彼に関しては特別だった。何しろ、俺の授業を4つぐらいとっていたのだ。授業中よく喋る子で、しかも話のセンスがいい。俺がこれまで教えた子の中でも、ベストスリーにはいるくらいの子だった。

長年教えていると色々な学生と出会う。なかには嫌な絡みをしてくる学生もいて、本当に傷ついたこともあったものだ。

もうだいぶ前のことだが、英文レポートの課題を出したら、ある女子学生がまるごと全部俺の悪口を書いてきたことがあった。普通はアンケートであっても、あそこまで露骨に先生の悪口なんて書かない。

すっかり混乱して、他のところで他の学生たちにそのことを話したところ、「そういう子はツンデレなんですよ。先生に構って欲しいから、わざとそういうふうなことをするんですよ。小学生くらいの子が自分の好きな子をいじめるのと同じ心理ですよ」と言われた。

なるほどねー。確かにその子はいかにも目立ちたがりという雰囲気の子だった。そうだとすると、ああいう形のスタンドプレイをする子は、俺は不愉快である。今でも彼女のことは根に持っている。

しかし、そのアナウンサーになった子は違っていた。いっぱい話すし、クラスで一番目立つ子だったのだが、決して俺を傷つけることは言わない。周りを不愉快にさせることも言わない。むしろ、

楽しい話で授業のムードを盛りあげてくれる。しかも、ただ単にたくさん話すだけではなく、的をいたことを言うてくれるため、彼がいると授業がしやすかった。

そのうえ、イケメンで、体育会だからガタイもいい。まさにアナウンサーは天職だったのだろう。

彼とは2人でご飯を食べたこともある。彼にとっても俺は特別な先生の1人であることは間違い無いだろう。卒業前にもう一度ご飯を食べようと彼の方が言っていたのだが、結局果たせずじまいだった。とは言っても、彼とは本当に近い仲だったのである。

彼がニュースにレポーターとして登場している姿を見て驚いたのは、話し方や声色が変わっていることだった。やはり、アナウンサーになって、研修があって、おそらく自分の癖を直されるのだろう。別人のような話し方になっているのだ。なんとなく寂しい気持ちにもなったものだった。

何回かそのテレビ局のインスタにコメントを書いたりもしてみた。彼は気づいただろうか。あまりし過ぎるとストーカーと思われるので、もう止めましょう。いつか彼の方も気が向いて、縁があればまた会う機会もあるかもしれない。それにまだ入社したばかりで忙しいだろうし……。

そんなわけで、ベスト教え子の1人が有名になっていくのは嬉しいような、寂しいような複雑な気持ちだった。もちろん喜ばなきゃいけないんだけど、なんとなく胸が痛い。

大きな世界に出ていく彼ら。俺はこれからどんどん生活が狭くなっていくだろう。もう60が目前なのだ。

とはいうものの、特別悪いことが起きているわけではないのだ。むしろ、こここのところ生活そのものは好調なのである。

今学期も一度も休講しないで、まっとうすることができた。別に何も悪いことは起きていない。学生たちとのコミュニケーションも好調で、何故か今年の学生たちは俺を食事に誘ってくれる。この歳になって、若い学生とこれだけ付き合えると

いうのは、先生の役得である。親子以上に歳が離れているのに、彼らはフレンドリーに接してくれる。

授業自体ももう教歴30年で、慣れているので、適当にこなす自信はついてきていて、それほど授業の運営に悩むこともなくなった。

貯金もある程度はあるし、60になったら年金や年金基金は払わなくてもよくなるので、経済的にはゆとりがでるかもである。もちろん、できる限り長いこと払っておいた方が、支給額が高くなるので、払っておくに越したことはないのだけれど。

ただ、つらいのは60近くになって、希望がもてないということなのだ。若い頃だったら、まだ将来何かある、未知な世界が開けるといふ幻想があったのだが、今となってはもう何も特別なことは起きないだろうし、あと寿命がどれくらいあるのかわからないけど、それをどう生きこなしていくのか、それを考えざるを得なくなっているのである。

## 2. 死を見つめる

実は先日ミニドッグに入った。毎年のことなのだ。

俺は芸術家保険に入っているので、毎年ミニドッグを多少のお金を払って受けるのだが、今年も年度中に60になるのでジャスト検診で、無料で受けることができる。

実は3ヶ月ほど前から保健指導も受けている。

60になるとさすがに死を意識するのだ。人間の人生って、本当に上手くいかないもので、上手いこと出世コースをたどっていた人が、早死にしたり、癌になったりする。鬱病や統合失調症で辞めていく人もいた。

その点でいくと俺は、結婚とか子供をもつことはできなかったけれど、京都という街でそれなりのライフストーリーを築いて、どうにか全うしようとしている。

幸せな人生なのかもしれないのだ。

しかし、だからこそ、ここで落とし穴が待っているのではないか、不幸が待っているのではないかという不安がよぎるのである。俺の人生はどういう形で終わりを告げるのだろうか。

母はまだ 85 歳で元気だ。まだ親が生きているのに、自分の死のことを考えるのは早いだろう。母は本当に苦勞の多い人生を歩んだ人だったけれど、60 歳過ぎてから人生が開けて、今は幸せな老後を送っている。

そんな母に息子が自分よりも先に死ぬなんてそんな過酷な運命が待っているとは思えない。前にも書いたと思うが、25 年ほど前に弟がなくなっていて、3 人の息子のうちの 2 人も親より先に行くなんて、そこまで過酷な運命はいくらなんでもないはずなのである。

それに俺の体は病気の兆候はまったくくない。

まだミニドッグの結果が来ないことにはわからないが、つい 1 ヶ月ほど前に尿検査を受けた際は、全く問題はなかった。血液検査も半年ほど前に受けて問題はなかったので、今回も大丈夫だとは思うのだが、つい絶望的な予想をしてしまう。

死は誰にも避けられない。むしろ死ぬことで人は平等になるのだ。この世はあれこれ不平等なことだらけだから、死後の世界の方が平等なユートピアなのかもしれないのだ。しかし、死後の世界なんて誰にもわからない未知の世界だから怖い。これから 90 歳、100 歳まで生きてとしても、それほど大していいことは起きないだろうとわかっている、やはり死は怖いのである。

その一方で生きることの苦痛もこの頃切に感じている。時間が潰せないのである。

俺はまた例によって、入眠剤をオーバードーズしている。といっても、過激なオーバードーズではないし、薬をもらっている心療内科の先生にもそのことは話しているし、俺は予定よりも 1 週間くらい早くにクリニックに行っている、俺が多めに飲んでいることはわかっているだろう。俺の行っているところは、調剤薬局でダブルチェックが入るところなので、もし危ないほどたくさん

飲んでいるのだったらストップがかかっているだろう。

それに俺の飲んでいる眠剤は、それほど残らないと聞いている。貯めて、大量に飲んでも自殺できない眠剤なのである。もう 30 年も飲み続けていて、この眠剤があったからこそ、仕事がこなせてきたのである。

ただ困るのは意識が覚醒してしまうことだった。

俺は普段意識を覚醒させて生きている。非常勤講師という身だから、仕事はたくさんこなさなくてはならない。そのため、ちょっとでも暇があると先のテストの準備をしたり、採点をしたり、先へ先へと仕事を進めていく。

そのため、常に神経が緊張しているため、暇ができると逆に何もすることがなくて、手持ち無沙汰になってしまうのである。そのため、早く寝ようかと眠剤を早目に飲んでしまい、しかしすぐには眠れなくて、眠剤の入ったかったるい体の状況のまま、時間を過ごしてしまい、結局実際に寝る頃には眠剤が切れている。

その悪循環がずっと続いているのだ。

こうなったのは比較的最近で一時期は眠剤は極力少なくして寝ていた時期もあった。あれは 30 代の頃だろうか。あの頃はまだしたいことがあったのだ。

しかし、この頃はしたいことがない。暇な時に、一番したいことは寝ることである。

今の心療内科の先生とのつきあいももう 30 年近くである。最初の頃は他の先生のところにも行っていたが、いつの間にかこの先生のところに着してしまい、もう 20 年ぐらい他のクリニックには行っていない。

この先生はダンディで、やさしい先生で、もう 70 代である。他の先生たちからの評判もいいようだ。実は、10 年ぐらい前までは他の場所でクリニックをなさっていた。ところがそこは若い先生に譲られて、今はもっと中心地の大きなところでなさっている。

俺は前のクリニックを他の先生に譲られた時に、

この先生、もう引退することを考えていらっしやるのかと考えていた。しかし、そうではなく栄転だったのである。あの時、この先生もう 60 過ぎくらいだったはずだから、本当にお元気で、生涯現役。

だけど、いつまでこの先生に頼ることができるのだろうか。心配になって行くのだった。

つくづく、人生は上手くいかない。

今の時代、戦争で死ぬという人は少ないけれど、実際の戦争はなくても、人間はみんな戦争を生きているのだと実感させられる。

俺の場合は、ジェンダーとの戦争だった。

### 3. かわいいお爺ちゃん

ここにきて、ボクシングジムに行くたびに動画をとっている。とは言っても、自主的にとっているのかというところではなく、ジムに来ている高校生の男の子がふざけて俺のスマホを使って、俺のトレーニング風景をとってしまうのである。

それをその後、インスタに上げるのだが、これが意外に好評でたくさんいいね！がくる。

先日は、「むちゃ、可愛いです」というコメントが来た。

俺は、「かわいい」と言われるのは結構嬉しいのだ。60 近くになった爺さんがかわいいだなんて、むしろ変なのかもしれないが、俺は若い頃、きもいと言われ続けたので、かわいいと言われることで少しずつ若い頃の禊をうけているような気持ちになる。

ボクシングジムは男ばかりだ。女の人もいるのだが、俺の行く時間帯に女性がいたことは一度もない。

俺は子供の頃、男子校に行くのは怖いという思いがあった。俺は女の腐ったような子だと言われる子だったので、男子校なんかに行ったら、いじめられるだろうと思っていた。

ところが、実際にはそうではないのだ。ジェンダーを吹き込むのは同性よりも異性である。

異性がいると変に見えを張ったりしなきゃいけない。男ばかりだとそれがない。

俺はボクシングジムでは、この年になって平気で上半身裸でトレーニングすることもあるし、マッチョポーズの写真を撮る。はい！とデカイ声を出したり、オーライと言いながら、パンチの練習をしたりする。体育会気分を味わえるのである。

先日、保健指導でジムに通っているという話になって、「ボクシングジムはこの頃なんですけど、ジム自体は 20 代の頃からなんです。40 過ぎてからはそれほど真面目に言っているわけではないんですけど」というと、保健指導の女の先生は驚いた様子だった。

「大抵の人は一時期ジムに通っていた人はいるんですけど、そんな何十年も通われている人なんて、他にいないから」と彼女は言った。

俺はきっと若い頃のコンプレックスのせいで、行かなくても一応はジムに籍をおいておかないと気が済まないのである。

もし、子供の頃にスポーツが曲がりなりにもできていたらと思うことは今でもある。もし、スポーツができていたら、男の子たちと同一化することにここまで困難をきたすことはなかっただろう。

スポーツができないことでの数え切れないくらいのトラウマ。週 3 日も体育の授業はあるから、その度に胃が痛くなる日々。

真面目にやってもできないのに、そんなつらい状況にある俺を怒鳴りつけ、虐待する体育教師たち。

他の大人に相談しても、あの頃は無駄だった。あの当時は先生が絶対の時代。生徒のほうが合わせるしかなかったのだ。合わせられない場合は生徒の方が負け犬と烙印をおされる。

今でもそう言う状況はあるのだろうが、今だったら少なくとも文句は言えるだろう。しかし、あの頃は、誰も理解してくれなかったのだった。

若くして心が壊れてしまうと、もう取り返しはつかない。その後の人生も俺の人生は重い十字架を背負った人生だったのだった。

#### 4. 何かが欠けている。

さて、台風が来る。

今、この原稿を書いている時点（8月14日夜）で、明日は台風で大荒れだという予報がされていて、インスタグラムを見ていると、飲食店はほとんど明日は臨時休業を決めたみたいである。

映画館も軒並み休館を決めている。

これはコロナパニックのピークだった頃以来のことである。

俺も今日の朝、明日までの分の冷凍食品などを買い溜めて、明日の台風に備えている。

今日はマッサージの人にまた来てもらった。実はマッサージの人は、明日までお盆休みで奥さんの実家に行っていたのが、台風が来るので、急遽予定を早めて帰ってきたのだ。

どうということのない、よもやま話が続いた。

「この間友人と焼肉食べに行ったんだけど、そこで追加で、エビとホタテを注文したら、エビが小さいの1匹で750円もしたんだよ。この間写真インスタに載せたはずだけど」

「確かにこれで750円だと小さいですよね」

「何かの間違いかと思って、アルバイトの人じゃわからないだろうから店のご主人に聞いてもらったんだけど、間違いなみたいなんだよね。だけど、場所が大阪の通天閣でしょう。ああいうところだと威勢のいいお兄ちゃんもいるから、こんなんで740円なんて、高すぎる!!!と怒り出す人もいるんじゃないのかね??」

「いるでしょうねー。たぶん、肉がメインの店だから海鮮とかは頼む人が少ないから、それでそうなっちゃっているんじゃない?」

彼とは付き合いが長いので、だいぶ馴れ合いになってしまっている。

「俺は人のことを羨む性格が治らないんだよね。子供がいていいよねー」

「育てるのは大変なんですよ」

「たまに遊ぶだけでいいんだったら、子供欲しい

けど」

「人と比べる性格を変えなきゃいけないですよ。ボクシング行ったり、ピアノ習ったり、美味しいもの食べたり、普通の人よりはるかに楽しそうにしているくせに」

「根源的な部分で俺は何か欠けていると感じてるんだよ」

このかけている根源的なものとはなんなのだろうか？

#### 5. 『渇水』(高橋正弥監督・2023)

これは生田斗真の主演の映画である。水道料金の滞納世帯を回り、給水停止をしていく水道局職員の話である。

そういえば、俺も若い頃はガスを止められたことが何回かあった。ガスだったらまだどうにかなるけど、水道だったらもっと大変なのではないかと思った。人間は水がなかったら生きれないわけだから。

生田斗真扮する主人公は決してエリートタイプの男ではなく、仕方なくこの仕事をしているという男である。

彼が滞納世帯を回っていく中で、さまざまな人たちと出会う話なのだが、やはり世の中には下層の人はいるのだ。

俺だって、一時期はそうだった。

30代の終わり。男性グループの人と確執を起こし、グループを離れてからの3年ぐらいが一番辛かった。

何よりも収入が激減したので、何も払えなくなったのだった。

あの頃家に帰ると留守電が点滅していて、「國友さん、保険代、約束してくださっていたはずなんです、、、」と唸々と取り立てやのおじさんの声が入っていた。

区役所に相談に行くと、「確かに、この収入でこの額は高いと思うんですけど」と係の人も同情してくれた。

しかし、あれから 20 年以上も経っている。

40 になってから仕事が増え、非常勤とはいえ、独身なので比較的余裕のある生活ができるようになった。

非常勤は 1 年更新なので、いつだって次年度の出講が希望通り来るかどうか不安だった。実際、不本意な減コマになりかかったことも何度かあった。しかし、それも全て乗り越えて、今はどうにか困らない。

もちろん、今でも非常勤なので次年度の不安はあるが、もう 60 歳である。その不安にも慣れてきている。これまでも不安に苛まれながら、崩れそうになりながら、どうにかしのいできたんだから、あと 10 年ぐらいいはどうかかるだろう。

それに俺は確信犯的非常勤だから文句は言えないのだ。好きで非常勤を貫いてきて、あえて専任にはならなかったのだ。自分の気に入ったところならなってもいいが、気に入らないところで専任になるのはいやだと言う気持ちがあった。

結果、京都の大学ばかり 5 つも教えられる。条件も学生もいいところばかりだ。つくづく、その意味では幸せだ。

俺はアイデンティティにこだわるのである。だから自分のアイデンティティと合わないことはしたくないとずっと意地を張り続けた人生だった。

京都アイデンティティは生まれてきた。教えている大学への愛着もある。このあと、クリスマスには受洗するつもりでいる。水泳やボクシングもやってきた。ピアノも習っている。英語は英検 1 級である (笑)。

どこが物足りないのか。それはおそらく子供がいないからだ。

この映画でも、悩める主人公に息子から電話がかかってくるところで、エンドとなるのである。誰かの居場所になること。それが悩みの解決策となるのである。

もう自分の子供はもつことはないが、これから歳をとって、わずかでもお金のゆとりがあったら、子供へのボランティアをしたいと思っている。

是枝さんの映画じゃないけど、「そして、父になる」。これが俺の終活かな (笑)。



# 臨床のきれはし

Sheet22

浅田 英輔

## Chronic

臨床場面ではいろいろな問題を抱えた人と出会うが、その人が持っている問題の多くは、慢性的なものである。なのに、世間ではどうしても、急性的な問題を「問題」としがちである。

喉元過ぎれば熱さを忘れるとはいうが、急性期はなんとか乗り切れても、そのあとに続く慢性的な状況に一番困っていることも多いのではないかな。

虐待でいえば、身体的虐待でいう暴力ひとつひとつは問題だし、あとにひく怪我や、死につながる暴力は大変に大きな問題である（軽い暴力を容認する意味ではない）。でも、そればかり取沙汰しても解決にならない。何度か書いているが、「どの程度殴れば虐待なのか」という問題ではないのだ。「愛のムチ」という言葉もあるが、タイミングと双方の（無意識的な）了解があれば、暴力が功を奏することもゼロではない。「強い刺激で目が覚める」ということは起きうる。でも、単発の暴力ももちろん問題であるが、継続的、慢性的な暴力環境がなによりも問題なのであり、子どもへの悪い意味での影響が強い。でも、法律でそれを記述することはとても難しいように思うし、わかりやすく「殴るのは虐待です」とするしかないのかもしれない。その反面、現場にいと、暴力が収まっても「子どもがビクビクしていなければならない状況」は続いていたりすることもある。

だから、身体的虐待と呼ばれる単発の暴力を受けた人よりも、恒常的に否定的なかかわりつまり精神的

虐待を受けてきた人の予後（その後の生活がいい感じになるかどうか）が悪いように思われる。当然ながら、日常的に「暴力 + 否定」の場合はよりつらいことだろう。

身体的虐待についても、単発の暴力そのものよりも、「いつ殴られるかわからない状況に常に居続けなければならない日常」というものが精神的なダメージが大きい。常に緊張状態にすることは、非常に精神を削られるのだ。

いじめも同様である。「悪口を言った」「無視した」その行為一回が問題なのではない。それが一定期間以上継続するということが問題である。もちろん、ずっと良い関係だったのに、一言の失言がその関係を壊してしまうということもあるが、それは「いじめ」とは様相を異にするだろう。

いじめとは、一回の悪口、暴力、無視などではなく、それが継続し、「いつ終わるかわからない」ことが被害者に大きなダメージを与え、蓄積させていく。就学年齢の人にとっては、学校とは生活そのものだし、人生の多くを学校で過ごしている。そういう生活の場が休まらない環境で、「いま」いじめられていないにしても、いつ何をされるかわからないというのは非常に精神的に削られる。

この文章を書きながら、これらの慢性的なつらい状況に置かれると、どういうダメージを受けるのかを考えて

いた。「疲弊する」だと弱いし、「ダメになる」だと行き過ぎている。「殴られてないのにダメージを受ける」ということだから、直接的なものではないのだ。そう考えていて、「精神が削られる」というのが一番しっくりきている。健康度が削られていく。当然、直接的な暴力や搾取によって、大きく削られる。直接何かされていないときでも、だんだんと削られていく。その加害者がその場にはいない、多少安全な場にいたとしても削られていく。見やすい「削り」だけでなく、みえにくいものもキチンと考えることが大事だ。

仕事だって同じだと思う。ただ、虐待やいじめと大きく違うのは、「自ら望んでその場にいる」ということだ。「働くのが大好き！」「職場にいるのが大好き！」という人も多くはなさそう（大好きであってももちろんいいんですよ）だが、いろいろな事情はあるにせよ、自分が選択してその場にいる人が多いだろう。

でも、そこで慢性的につらい状況になることはままある。自分で選んでそこにいる、ということも逆に逃げ出しにくい要因になるのかもしれない。自分で選んだ状況だからこそ、「クソつまらないことがずっと続く仕事」

（「つまらなさ」は人それぞれ）とか、「いつまで続くか先が見えない忙しさが常態化している職場」とかは、かなり削られる。「何がいやなの？」と聞かれたとしても、明確にコレコレがいやだと言えない場合もあるかもしれない。そういう、慢性的な不満というか不快感というか不具合感というか、そういうものが続く場所というのも結構精神が削れてしまうのではないだろうか。当然、人間関係がギスギスしていたり、いやな上司が毎日話しかけてきたり、偉い上司がいつも怒鳴っていたり、といった状況が「いつも」であればなおさらに削れるだろう。

どうやら、慢性的にストレスフルな状態においては、「ストレスの強度が強いこと」「それが続いていること」「いつ終わるかわからないこと」「強いストレスがくる予見ができにくいこと」などが問題になるようだ。最近体

験したものは、コロナ対応だ。保健所におけるコロナ対応は、毎日の処理すべきものが非常に多く、ずっと続き、いつ終わるのか先が見えず、次の山（感染拡大）がどうなるか予見できないというものであった。あれはやばかった。

どうも、我々は、目に見えやすい、「パッと見てひどいこと」などに気を取られがちだ。確かに、殴られたり怒鳴られたりしている子どもは「かわいそう」であるが、一回殴るのを止めたら終わりではないのだ。その背景には、長く続く虐待環境があるのだ。子どもが「ただ手を上にあげたらビクとした」のを体験したことがある人もいるかもしれない。それは、その子が常に警戒態勢にあるということ、警戒態勢をとっていなければならない環境にあることを意味する。その場に「殴る人」がいない場合でも。

虐待やいじめなどの明らかな問題でなくとも、大人であっても自分自身を慢性的な「精神を削る場に身を置く人」は結構多いのではないだろうか。「仕方ないじゃん！」という場合も多くあるだろう。でも、選択できるなら、違う場所を選んでほしいなと常々思う。

法律でも政策でも、目の前のことに対応することはとても大事なことだが、たとえば自殺対策は「死にたいと思っているひとに相談対応することだけに取り組んでいても、自殺は減らないっていうことはみんなわかっているはず。でも評価されるのは直接的な対応（相談窓口を作りましたとか、SNSで相談できるようになりましたよとか）である。ハラスメントにしたって、法律で「ハラスメントはいけません」とするのはよいが、そもそもハラスメントが起きないようにするにはどうしたらいいかという方向になりにくい。せいぜい「ハラスメントが起きないように対策を講じなければならない」とかくらいである。

人口減少だとか長引く不況だとか言われるけど、そろそろ慢性的な問題に根っこから取り組まないとまずいよなあ。

# 発達検査と対人援助学

## ⑬ 見立てと援助 Ver2.0

大谷多加志

所属している大学では臨床心理士・公認心理師の養成を行っていることもあり、院生さんが学内でケースを担当し、教員もカンファレンスに参加して一緒にケースのことを考えています。また、児童福祉施設等での事例検討会やケースカンファレンスに同席させて頂くことも、ひと月からふた月に一度くらいのペースで継続しています。そんな中で、改めて気になってきたのが「見立て」のこと。以前、「見立て・診断・所見」というテーマで連載を書いたこともあったので、今回は Ver2.0 ということで、「見立て」について今思うことを書いてみようと思います。

### 見立てにおける「想像力」と「正しさ」

改めて見立ての重要性を思ったのは、やはり支援方針や理解・対応はそのケースをどのように「見立てたか」によって大きく異なってくると感じたからです。そして、色々な人の見立てを聞くうちに、人によってケースの見立てには「クセ」というか、「傾向」のようなものが含まれていると強く感じるようになりました。例えば、「この人は割と親子関係からケースを考えようとするなあ」とか「クライアントさんの発言内容に忠実に見立てを考えるなあ」とか「非言語的な情

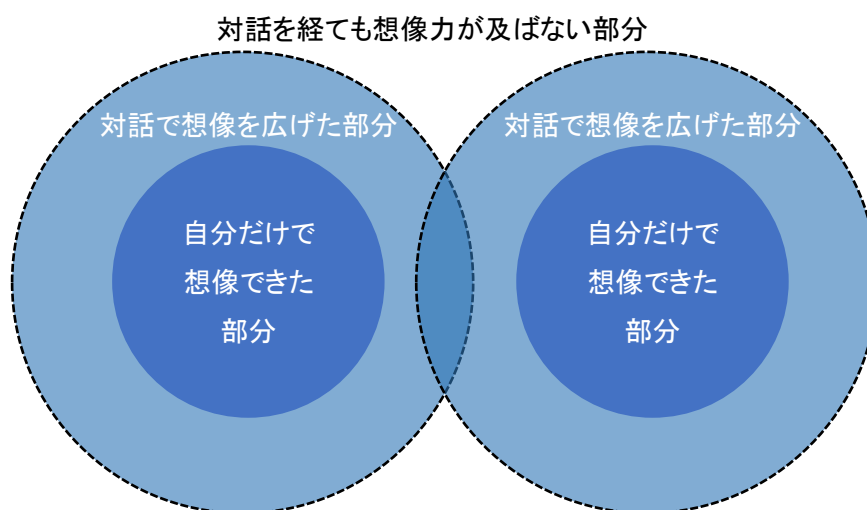
報や、発達的な視点も含めて対象者の言動について理解しようとしているなあ」とか、人によりそのスタンスはさまざまです。もちろん、相対的に自分自身のクセに気づく機会にもなり、自分にはない視点からケースについて考えることは、自分自身の見立ての幅を広げてくれる有意義な時間になっています。

イメージとしては以下の図1のようになるのですが、事例検討での思考の中に①自分でケースを読み込むことで考えることができる範囲、②他者の意見や考えを聞くことで理解し、自分の視点にも取り入れられる範囲、③他者の意見や考えを聞いても自分の視点には収めきれない範囲、の3つの領域が存在するように思います。理想的な形で事例検討を行うことができれば、この②の部分に参加者同士で重ね合わせることで、それぞれの見立ての基盤となる想像力や視点を広げることがその後の参加者の臨床の力を高めることになるのではないかと思います。

このようなプロセスを経て、ケースに対する自身の想像力を広げていくことは、実践の力を養うことにもつながっていくと思いますし、単純に事例検討の面白いところだとも思います。しかし、その一方で事例検

討において「正しさ」を求める傾向も見られるように感じます。色々な意見が出る中で、一見すると相反する意見に見えるものも当然出てくるわけですが、その際に「どちらが正しいか」にこだわってしまう、あるいは

正しい意見だけを採用しようとしたりしているように見える場合があります、これはすごくもったいないことのように感じています。



改めて「構造化された観察場面」を考える

少し前置きが長くなりましたが、ここからは発達検査における「見立て」について考えてみます。ここで、新版K式発達検査を作成した生澤雅夫先生の「検査は構造化された観察場面である」という言葉を紹介します(生澤, 1996)。この言葉は検査場面における「行動観察」の重要性を強く指摘しています。この考えに基づいて検査者が検査場面でやっていることを整理するとおおよそ次の3つのことを並行して実施していると思います(図2)。

① **検査の実施**: 検査にどのように導入するか、どの検査課題から始めるか、今の反応は通過か不通過か、この課題の教示はどうするのだったか、次は何の課題を実施するのか…など、検査を完了するまでに必要な手順を遂行します。通過・不通過

の判定や、次に実施する課題は、その場その場で子どもの反応をもとに判断する必要があるため、この部分にも常に検査者の意識が割かれています。

② **子どもへの対応**: 検査場面において、子どもはさまざまな反応を見せます。「これ、やらない!」と特定の検査課題を拒否することもあれば、部屋の中を走り回る、検査者の指示が全然届かない…など、検査を進める前提をどう整えるか、ということも検査者にとっての課題となります。検査者にとっては悩ましい場面ですが、「どういう事態が、どういう場面で起こるのか」を把握することで、日常場面でも同様のことが生じている可能性を推測することができますし、「どのような対応が、うまくいくのか/いかないのか」を検査者自身が探る機会ともな

り得ます。

- ③ **発達の見立て**：子どもの発達の評価は、検査が完了して数値的な結果を出すことだけを指すではありません。検査を進めながら、子どものおおよその発達水準や、得意・不得意、反応や思考・行動の傾向などを整理し、理解していきます。おおよその発達が理解できるからこそ、「じゃあ次はこの課題をやってみよう」という検査者の思考も生じるわけです。慣れていない検査者はとにかく目についた課題をやってみる…という形をとる場合もありますし、それでも一応検査の完了まではたどり着けるわけですが、

見立てを含みながら検査を実施している場合と比べると、得られている情報の量も質も大きく異なることになります。

このうち②と③を行うために必要なことが「行動観察」です。①の検査の実施や判定については、基本的にマニュアルを読み込んでいれば事前に準備できることなのですが、②と③は子どもの様子を見ながらその場で判断するしかありません。逆に言えば、どのくらい子どもの行動や様子に目を配れるかで、子どもへの対応や見立ての精度も変わってくることになります。

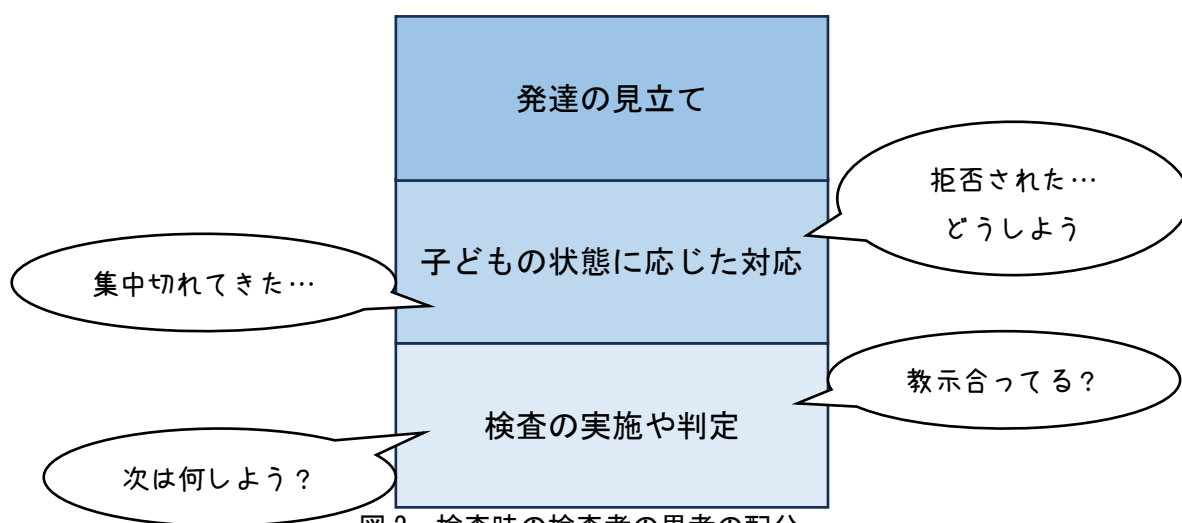


図2 検査時の検査者の思考の配分

検査を取り始めたばかりの頃は、検査者の思考の大半は①の「検査の実施や判定」に割かれてしまいます。図解するとしたら、図3のような状況であり、検査の実施に大半の意識を割かれており、子どもの行動観察が十分にできません。『検査は何とか取り終

わったものの、この結果をどう見立てたらいいの？』と検査が終わってから悩んでしまう検査者も少なくないのですが、その背景には検査中の行動観察の質と量が不足しているという要因があるのではないかと思っています。



図3 検査中の意識配分の図解（左：初心者 右：熟練者）

そういう意味では、検査者としての最初のステップは、まずは検査の実施や判定に関する知識を固め、検査用具の扱いに慣れることです。まずは3～5例くらい検査を取ってみるだけでも、初回とは検査者の余力が大きく異なります。車の運転と同じで、最初はアクセルやブレーキ、ウインカーの操作、左右のバックミラーやルームミラーの確認など、やることが多くて苦勞するわけですが、慣れるとある程度無意識的にこなせる部分も増えてきます。一方で、無意識的であるにも関わらず、視界のすみにチラッと移った自転車に気づいたり、その進行方向や速度を予測して、あらかじめブレーキを踏んで速度を調節するような予期的な対応もできるようになってくるわけです。検査場面も同じで、余力ができれば、子どもの様子を観察したり、子どもに合わせた対応を取る余地も出てくるわけで、その後はこの「対応」や「観察」の経験が蓄積されていきます。

そして、発達の見立てができれば、「じゃあこういう風に関わったら検査にものってくれるかな？」と対応がわかりやすくなり

ますし、対応の成否で子どもの発達についての見立てもより精緻化していきます。このように、検査中に検査を実施しながら子どもの見立ても進んでいくようなプロセスになるのが、もっとも理想的な検査の展開と言えるかもしれません。

子どもの「見立て」においては一見不可解に見える子どもの言動について、想像力を働かせてその背景を探っていくことが重要になります。事例検討での議論が、そのような多様な可能性と発達のあり方について想像・理解する力を養うような場として機能することを願ってやみません。

# 講演会 & ライブ な日々 ③⑥

古川 秀明

## 『自殺防止と健康観察』

目的：K 中学校における生徒の自殺予防

### 中学生の自殺について

#### ① 日本全体の現状

2022 年度版の政府による自殺白書によると、コロナが蔓延する前の 2019 年、女子中学生の自殺者は 46 人でしたが、感染拡大後の 2020 年には 69 人、2021 年には 74 人に増加。日本の自殺者数は 2022 年度で前年度比 4.2%(874 人)増の 2 万 1 8 8 1 人となり、2 年ぶりに増加。児童生徒の自殺は 2016 年から増加傾向が続いています。

2022 年度の小中高校生の自殺者は 5 1 4 人で初めて 5 0 0 人を超え、1 9 8 0 年の統計開始以降最多となりました。そのことに厚生労働省、文部科学省は強い危機感を持っています。

中学生の自殺は 2020 年度、2021 年度の 2 年連続 100 人を超え、その約 6 割が原因不明ですが、学業不振や入試の悩みなどが多くなっています。

特に 1 8 歳以下の自殺は、4 月の初めに大きく増加します。

また、令和 5 年 3 月 7 日に文科省より、各都道府県教育委員会に、児童生徒の自

殺予防に係る取り組みを実施するように指示が出て、各中学校に伝達されていることから、現在、児童生徒の自殺問題がいかに深刻なのかがわかります。

## ② K 中学校の現状

自殺の前兆である「自傷行為・リストカット」「自殺企図」「抑うつ症状」の相談が年々増えており、自殺未遂により、医療機関に繋げたケースも 2022 年度だけで 5 事例ありました。

K 中学校は 2021 年度における生徒数は 1073 人と大規模校であり、最近では一般的な規模である 300 人程度の中学校と比べて、自殺者が出る確率も必然的に高くなります。

スクールカウンセラー（以下 SC）の人数や時間数を増やすのは予算や制度の課題があり難しく、また時間や人員を増やしても、個別のカウンセリングだけでは生徒数の多さから、すぐに限界がきてしまう可能性が高いです。

SC として、学校マネジメントを考えるうえで、チーム学校の考えに基づき、個別カウンセリングだけではなく、学校全体として全校生徒の自殺防止に関するアセスメントの必要性を強く感じます。

その為の基礎資料として、生徒一人一人の日々の心と身体の状態を把握、分析し、自殺の前兆と思われる変化を早期に察知して、その対応策を講じることにより、K 中学校生徒の自殺防止に役立てたいと思います。

「なぜ、自殺防止のために、生徒の毎日の心と身体の様子を知りたいのか」

2016 年、2020 年に別の中学校で起きた生徒の自殺案件に関しても、2 名とも不登校ではありませんでした。しかも、そのうち 1 名はカウンセリングも受けていません。

また、他の中学生の自殺ケースを調べてみても、必ずしも不登校やカウンセリングにかかっていたこととの関連性が見つけられません。

つまり、毎日「普通に」登校している生徒が、自殺しているという現状があるということです。



それにも関わらず、現状ではカウンセリングや不登校生徒を中心に注意が払われ、毎日登校しているノーマークの生徒にはなかなか注意が向けられません。

K 中学校でも、自傷行為・自殺をほのめかす生徒の 8 割は不登校ではなく、毎日登校しています。

また 2022 年度に実施した教育相談アンケート（1 年、2 年対象）では、生徒の日々の悩みの 1 位は「成績のことがとても気になる」でした。

これは中学生の自殺三大要因と思われる「親の叱責」「家庭不和」「勉強、進路問題」と連動していますし、児童生徒の自殺原因として「学業不振や入試の悩みなどが多くなっている」という先ほどの文科省の報告と一致しています。

またその事実は、生徒指導提要（令和 4 年 1 2 月文部科学省・以下同じ）8・2・4 に記載されている、厚生労働省が発表した（「令和元年版自殺対策白書」）の、警察庁の資料を基に作成した統計結果とも一致しています。

## 『自殺防止と健康観察』 第二回

※この記事の掲載については、学校長の許可をもらっています。

### 「京都市立神川中学校における生徒の自殺予防」

#### ● 児童生徒の自殺の兆候

児童生徒の自殺の兆候は、以下の身体症状に現れる

- ① 不眠 ② 食欲不振 ③ 孤独感 ④ イライラ
- ⑤ 抑うつ症状

（倦怠感・身体がだるい・何もする気がしない・全てが面倒くさい）

生徒指導提要 8.3.3 にも、自殺の危険の高まった児童生徒の早期発見・早期対応において、自殺直前のサインとして、

\* 不安やイライラが増し、落ち着きがなくなる

\* 不眠、食欲不振、体重減少など身体の不調を訴える

が明記されており、身体の状態が自殺の前兆と連動していることがわかる

#### 【神川中学校の現状 その 1】

2020～2022 年の 3 年間で

- ・ 相談受理件数 85 ケース
- ・ 相談のべ件数 1470 ケース

この中で生徒に自殺の兆候があるケースは 85 ケース中 63 ケース  
相談内容の 7 割が「自殺」に関する相談であった

自殺兆候のある 63 ケースのうち

- 自傷行為が見られた・・・53 ケース（約 8 割）
- 発達障害が認められた・・・18 ケース（約 3 割）
- 家族問題が認められた・・・55 ケース（約 8 割）

## 【神川中学校の現状 その 2】

- ・ 自殺の前兆である「自傷行為・リストカット」「自殺企図」「抑うつ症状」の相談は年々増えており、自殺未遂により医療機関につなげた事例は 2022 年度だけで 5 事例もあった
- ・ 神川中学校は 2021 年度における生徒数が 1073 人と大規模校であり、一般的な規模である 300 人程度の中学校に比べ、自殺者の件数は必然的に多くなる

スクールカウンセラー（以下 SC）の人数や時間数を増やすのは、予算や制度の課題があり難しく、また時間や人員を増やしたとしても、個別のカウンセリングだけでは生徒数の多さから、すぐに限界がきてしまうと思われる。

特に自殺防止に関しては、物理的に対応しきれない個別カウンセリングだけでなく、学校全体で全校生徒の自殺防止に関するアセスメントを実施する必要性を強く感じている。

その為の基礎資料として、生徒一人一人の日々の心と身体の状態を把握、分析し、自殺の前兆と思われる変化を早期に察知して、その対応策を講じ、神川中学校生徒の自殺防止に役立てたい。

## 【なぜ自殺防止のために、生徒の毎日の心と身体の様子を知りたいのか】

2016 年、2020 年に別の中学校で起きた生徒の自殺案件に関して、2 名とも〈不登校〉ではなかった。しかも、そのうち 1 名はカウンセリングすら受けていない。また、他の中学生の自殺ケースを調べてみても、必ずしも不登校や

カウンセリングにかかっていたこととの関連性は見つけられない。

つまり、毎日「普通に」登校している生徒が自殺している、という現実があるということである。

それにも関わらず、現状ではカウンセリングや不登校生徒を中心に注意が払われ、毎日登校しているノーマークの生徒にはなかなか注意が向けられていない。

神川中学校でも、相談室で自傷行為・自殺をほのめかす生徒の8割は不登校ではなく、毎日登校している。

また2022年度に神川中で実施した教育相談アンケート（1年、2年対象）では、生徒の日々の悩みの第一位は「成績のことがとても気になる」であった。

これは中学生の自殺三大要因と思われる「親の叱責」「家庭不和」「勉強、進路問題」と連動しており、児童生徒の自殺原因として「学業不振や入試の悩みなどが多くなっている」という文科省の報告と一致している。

またその事実は、生徒指導提要（令和4年12月文科省・以下同じ）8.2.4に記載されている、厚生労働省が発表した「令和元年版自殺対策白書」の、警察庁の資料を基に作成した統計結果とも一致する。

厚生労働省 「令和元年版自殺対策白書」

原因・動機別自殺者数の平成21～30年10年間の累計

●中学生男子

1位	学業不振	18.7%
2位	家族からのしつけ、叱責	18.1%
3位	学校問題その他	12.3%

●中学生女子

1位	親子関係の不和	20.1%
2位	その他学友との不和	18.3%
3位	学業不振	14.0%

### 【児童生徒の自殺の兆候】

児童生徒の自殺の兆候は以下の身体症状に現れる

- ① 不眠 ② 食欲不振 ③ 孤独感 ④ イライラ
- ⑤ 抑うつ症状

（倦怠感・身体がだるい・何もする気がしない・全てが面倒くさい）

生徒指導提要 8.3.3 にも、自殺の危険の高まった児童生徒の早期発見・早期対応において、自殺直前のサインとして、

\* 不安やイライラが増し、落ち着きがなくなる

\* 不眠、食欲不振、体重減少など身体の不調を訴える

が明記されており、身体の状態が自殺の前兆と連動していることがわかる  
神川中学校における、自殺兆候のある 63 ケースのうち、身体症状が認められたのは 63 ケース

つまり、全員に身体症状が認められた

### 【神川中学校において

#### 自殺兆候のある生徒に認められた 11 の身体症状】

1 頭痛 2 腹痛 3 睡眠障害 4 めまい、立ち眩み  
5 発熱 6 吐き気 7 倦怠感 8 動悸  
9 耳鳴り 10 手の震え 11 食欲不振

#### ◎身体症状の大きな特徴

ほぼ全員に頭痛、腹痛、睡眠障害がみられた

先ほどの神川中学教育相談アンケートにおいても、不眠、食欲不振、孤独、イライラ、抑うつなどの症状を訴える生徒は、どの学年でも 10 人を超えている。

各学年 300 人中 10 人というと数字的に少ないように思えるが、自殺の兆候を身体症状で表している生徒が全校で 30 人もいる危険性を無視することはできない。

このように、心の状態と身体の状態は連動しており、友だちや大人（親、教師、SC 等）に相談できない生徒がいても、日々の身体の不調を調べることで、心の不調も推測できる。

以上のことから、毎日の生徒の身体と心の様子を観察して、そのデータを集め分析すれば自殺防止に繋がられる、ということがわかる。

### 【方法】

身体の状態と心の状態が連動するのであれば、両方を調べることができれば自殺防止に関してより有効となる。

その為に、新しいアセスメントツールを開発するまでもなく、既存の健康観

察を活用すれば合理的である。

健康観察は平成 21 年からは法的に位置づけられている。

学校保健安全法（H21.4.1 施行）

（保健指導）第九条 養護教諭その他の職員は、相互に連携して、健康相談又は児童生徒等の健康状態の日常的な観察により、児童生徒等の心身の状況を把握し、健康上の問題があると認めるときは、遅滞なく、当該児童生徒等に対して必要な指導を行うとともに、必要に応じ、その保護者(学校教育法第十六条に規定する保護者をいう。第二十四条及び第三十条において同じ)に対して必要な助言を行うものとする。

健康観察は、中央教育審議会答申（H20.1.17）の中でも、以下のようにその重要性が述べられ、学級担任や教科担任等の役割を明記している。

健康観察は、学級担任、養護教諭等が子どもの体調不良や欠席・遅刻などの日常的な心身の健康状態を把握することにより、感染症や心の健康課題などの心身の変化について早期発見・早期対応を図るために行われるものである。

また、子どもに自他の健康に興味・関心を持たせ、自己管理能力の育成を図ることなどを目的として行われるものである。

学級担任等により毎朝行われる健康観察は特に重要であるため、全校の子どもの健康状態の把握方法について、初任者研修をはじめとする各種現職研修などにおいて、演習などの実践的な研修を行うことやモデル的な健康観察表の作成、実践例の掲載を含めた指導資料作成が必要である。

以上の法的根拠により、健康観察は中学校で毎朝行われているものであり、その項目に心の状態を加えれば、生徒の自殺の兆候を把握できる可能性がより高まる。

このように、教育相談アンケート、健康観察、SCによる心理査定を連動させて考えることは、生徒指導提要 8.2 自殺予防のための学校の組織体制と計画 8.2.1 自殺予防のための教育相談体制の構築に書かれている以下のことと矛盾しない。

\* 生徒指導提要 8.2（以下生徒指導提要）より ここから抜粋

### 【自殺予防のための学校の組織体制と計画 8.2.1】

自殺は、専門家といえども一人で抱えることができないほど重く、かつ、困難な問題である。

きめ細かな継続的支援を可能にするには、校内の教育相談体制を基盤に、関係機関の協力を得ながら、全教職員が自殺予防に組織的に取り組むことが必要である。

そのためには、校内研修会などを通じて教職員間の共通理解を図るとともに、実効的に機能する自殺予防のための教育相談体制を築くことが求められる。

具体的には、第一に、生徒指導部や教育相談部（教育相談係として生徒指導部内にいちづけられている場合もあり）など、児童生徒が課題や悩みを抱えたときに対応するための既存の組織を自殺予防の観点から見直し、教育相談機能の実効性を高める必要がある。

第二に、教育相談コーディネーターと養護教諭を構成メンバーの核として位置付け、各学年や生徒指導部・保健部などの他の校務分掌と連携した体制づくりを目指すことが望まれる。

その際、次の点に留意する必要がある。

#### ① 教育相談コーディネーターと養護教諭との連携を密にする

〔教育相談コーディネーターと養護教諭が相談体の中核となり、児童生徒の生活状況や心身に関する問題についての理解を深め、自殺の危険の高い生徒をスクリーニングする〕

また、生徒指導部や保健部と合同で生活アンケートなどを実施し、児童生徒が抱える問題点の共通理解を深めることも重要である

#### ② 教育相談部（教育相談係）と生徒指導部の連携を図る

〔非行や暴力行為などの問題行動の裏側に自殺の危険が潜んでいることも少なくない〕

生徒指導部と教育相談部（教育相談係）が密接に連携して情報を共有（第8条自殺192に記載）し、そのような児童生徒にも積極的に関わっていく必要がある

#### ③ カウンセリングルームや保健室の日常的活用を進める

[児童生徒と最も距離の近い学級・ホームルーム担任と教育相談コーディネーター、養護教諭、SCやSSWが日常的に協力し合って課題解決に取り組む姿勢を保持する]

学級・ホームルーム担任は児童生徒の言動の変化に気付いた時点で情報を共有し、連携しながら対応にあたる

そのためには、保健室やカウンセリングルームを密室にせず、児童生徒にも教職員にも開かれた場にしておくことが大切である

→ この「学級・ホームルーム担任は児童生徒の言動の変化に気付いた時点で情報を共有」において、担任が生徒の言動の変化にいち早く気付くことに活用できるツールが、健康観察を活用した自殺予防の取り組みである

#### ④ 情報を共有して協働的な教育相談体制を築く

[問題を学校全体に投げかけ、情報を交換し、学校を挙げて解決に取り組んでいくことが求められる]

自殺の危険の高い児童生徒を担任一人で抱え込むのではなく、チームで組織的に対応することによって初めて、安全で丁寧な関わりが可能になる。その際、面談やアンケート、家庭訪問や小中高間連絡会などで得られた情報を十分に活用しながら支援にあたる

\*抜粋ここまで

神川中学校では週に一度SCが参加する会議があり、そこには養護教諭、各学年教師、教育相談コーディネーターなどが出席する。そのため、上記生徒指導提要の①②③④をより充実した内容にできる。

また、健康観察に心の状態を加えて生徒の自殺防止を考えるこの方法は、生徒指導提要「8.2.3 自殺予防の3段階に応じた学校の取り組み」にも書かれている。

### 【自殺予防の3段階に応じた学校の取り組み】

- ① 自殺を未然に防ぐための日常の相談活動や自殺予防教育などの「予防活動」(プリベンション)
- ② 自殺の危険にいち早く気づき対処する「危機介入」(インターベンション)
- ③ 不幸にして自殺が起きてしまったときの

## 「事後対応」(ポストベンション)

健康観察に心の状態を加えて生徒の自殺防止を考えるこの方法は、上記の①②に該当する。

### ① 自殺を未然に防ぐための日常の相談活動や自殺予防教育などの「予防活動」(プリベンション)

上記において全ての教職員を対象とした研修の必要性が明記されている。

この方法により、健康観察を使った心の状態の把握がなぜ自殺防止に有効なのか、またその効果の検証について、校内研修会や教職員向けゲートキーパー研修を SC が実施することが可能である。

### ② 「危機介入」(インターベンション)における、自殺の危機の早期発見とリスクの軽減に関しては、この方法により、自殺の危険性が高いと考えられる児童生徒に対して以下の3つの方策を取ることが可能である。

- a. 校内連携型危機対応チーム(必要に応じ教育委員会等への支援要請)の構築
- b. 緊急ケース会議(アセスメントと対応)の開催
- c. 本人の安全確保と心のケアの実施

また生徒指導提要では危機介入(インターベンション)に関して、「危機介入は、自殺の危険の高まった児童生徒をスクリーニングし、アセスメントに基づいて、自殺企図への対応や自殺未遂直後の処置や心のケアなどを行います」と書かれており、健康観察を用いて心の状態を把握すること

が、まさに児童生徒をスクリーニングし、アセスメントすることになる。

→ → 次回に具体的な方法を説明します。

シンガーソングカウンセラー  
ふるかわひであき



## 対人支援点描 (32)

「スピリチュアルケアと公共性 (3)」

小林 茂 (臨床心理士/牧師)

### 4. チャプレン、スピリチュアルケア師と臨床宗教師

公共性と宗教性の狭間で、どのようにしたら適切なスピリチュアルな面のケアが可能となるのだろうか。この問題について二つの点を考慮しなければならないと思われる。一つは、仏教やキリスト教や神道などの個々の宗教の枠を超えた共通項を想定したものを想定することである。宗教性で見なされるものや、ここでテーマとして取り上げているスピリチュアリティという概念をもってして人間の普遍的な要素として、そういうものがあるという基盤を持つことである。つまり、身体や心 (精神)、社会といった対象と同じく、人間には特定の宗教に寄らないスピリチュアリティというものがあるのだから、それをケアの対象としなければならないという理屈が成り立つ。この関係は、宗教学の個々の宗教と宗教の関係にも似ている。だが、それでも問題はある。世の中に多種多様な宗教があったとしても宗教という名の宗教は存在しない。あるのは、個々の宗教とそれを信じるものだけである。世界宗教や普遍宗教と名の付く統合した宗教団体を作ったとしても、世の中にまた新たな宗教団体が増えるだけのことであり、世の中に宗教という

名の宗教がなく、宗教を信仰するという信仰は現実には存在しない。存在しないものをケアできるのかという問いかけが生じる。似た問題として、そもそも人間に心や精神という実態があるのか、という問いかけにも似ている。心理現象をすべて脳の働きや遺伝子の影響に還元する物質還元主義の立場である。心というものの実体に対して問題とされるならば、そもそもスピリチュアリティというモノがあるという見方は愚昧な思考と見なされるかもしれない。しかし、こうした疑念に対して注目したい動向がある。最近の認知心理学の潮流として神経神学や宗教認知科学と呼ばれる分野で、日本でも 2023 年に Newberg, A.(2018). *Neurotheology: How Science Can Enlighten Us About Spirituality*. Columbia University Press. の翻訳 (『神経神学』) が出版された。また人間の宗教に対する根源的な志向性についてバレット, J.L.(2023) 『なぜ子どもは神を信じるのか?: 人間の宗教性の心理学的研究』といった翻訳も出版されている。これらの研究はスピリチュアリティの実体を証明するものではないが、現象としてスピリチュアリティの存在があり、扱われる対象であることを示唆する。もしこれを否定してしまえば思考も

含めた心も社会も扱うことができないものとなってしまふ。

次にもう一つの考慮しなければならないことは、仮に人にスピリチュアリティというモノがあり、個々の宗教の宗教者がいたとして、宗教者が公共性をもって（スピリチュアルな）ケアに携わろうとした場合の解決策として公共的な立場や資格を確立することである。この動向としてチャプレン、スピリチュアルケア師、臨床宗教師という立場、資格をもってして公共性を担保して実社会では行われている。これはこれで現実的な対応であるといえる。しかし、この場合、個々の宗教の本質はスピリチュアルケアであり、個々の宗教は社会の制度の一形態であり、宗教者はその構成員に過ぎないということにならないだろうか。こうしたことから暗に自分が所属する宗教を否定するメッセージとなる。特にスピリチュアルケア師、臨床宗教師に対して私が耳にする実際に伝わっている批判にも、何か新しい宗教団体を作っているのではないか、自分の所属団体の布教をそのまますれば良いのではないか、といったものがある。仏教の場合、臨床仏教師という独自の資格制度を持ちケアの現場に入っている活動がある。これは“キリスト教”のチャプレンに近い活動であるといえる。だが、臨床仏教師では半ば公共性を実現できていない。なぜならば臨床“仏教”師という名称のとおり仏教間の宗派の枠に普遍性を持たせただけで仏教の立場の宗教的ケアの枠に留まっているからである。仏教の布教の延長といっても良い。話題を戻すが、チャプレン、スピリチュアルケア師、臨床宗教師という立場を別に作ることで公共性は担保され、スピリチュアルケアが可能となるのだろうか。これについては、そもそもスピリチュアルケアのあり方につ

いて今一度確認しなければならない。スピリチュアルケアとは、スピリチュアルなケアを必要とする人に、霊能者のようにスピリチュアルな何かを分け与えたり、施すことがスピリチュアルケアではない。スピリチュアルなケアを必要とする人が、その人のスピリチュアルな面をより良く機能するように“手助けすること”がチャプレン、スピリチュアルケア師、臨床宗教師の役目である。したがって、その行為そのものは公共性に反するものではなく、一つの好況におけるスピリチュアルケアの可能性の解決策となる。ただ問題は残る。所属団体との関係性、社会的な資格の認知や信用といったことである。こちらは思想や学問的問いというよりも実社会における問題といえるので、その活動が社会に如何に実装されていくかが問われている。

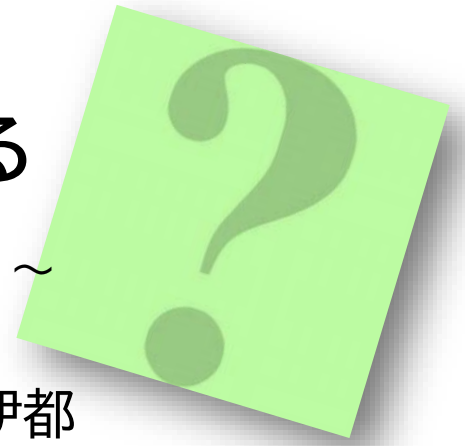
(つづく)

# 立場が変わると何が見える



～その6 子どもの生きる世界～

坂口 伊都



## はじめに

今年の夏、とても暑いです。暑いと言っても仕方ないのですが、言わずにはいられません。皆さま、夏バテもせず、お元気でお過ごしでしょうか。暑さの中にいるだけで、疲労します。この暑さを体感して、シエスタが日本にもいるのでは？と切実に感じるのは私だけでしょうか。

6月に元里子と娘、夫と四国水族館に行ってきました。元里子が、珍しく行ってみたいと言い出したので、それなら是非となりました。四国水族館は、テレビで観たそうです。元里子が覚えているかどうかわかりませんが、水族館と一緒に暮らしている時に最後に出かけた場所でした。だから、私にとっては胸がチクチクする場所で、その時から水族館に足を運んでいなかったのです。元里子に「次は、どこに行きたい？」と聞いても、「ない」「わからん」と言われることがほとんどだったので、水族館と言われたのは意外でした。一緒に暮らしている時、いろいろな水族館に行っていたので、そちらの記憶の方の印象が残っていたのかも知れません。片道3時間ぐらいかけながら、日帰りで弾丸ツアーを決行しました。

四国水族館は、それほど大きな規模ではなく、生き物の説明がキレイに描かれていました。元里子は行きたいと言っていました。いざ着くとテンションが上がるわけでもなく、いつも通りに回っていました。あまり興味がないのかなと見えますが、嬉しさの表現が控えめようです。最後にお土産コーナーに行くと大学4回生の娘がコウイカのぬいぐるみを見つけ、「これ欲しかったんだ」と言うので、記念に買ってあげようとなりました。もちろん、元里子にも好きなの選んでいいよと伝えると同じぬいぐるみのタコを選びました。仲良くイカとタコを買う大きな子どもたち。喜んでくれるなら、買う側も気持ちよく支払うことができます。二人の顔を見ていると、私が救ってもらっている





のだなと感じました。この子たちを育てたことを許されたような気持ちになりました。

水族館の後、父のリクエストで香川名物の骨付き鳥を食べに行きました。昼食だったのですが、店に入ると食堂というより、ビアガーデンっぽい。何の情報もなくついて行ったので、甘辛い味付けかと思ったら、とてもコショウ辛くてびっくりしました。このパンチが癖になるのでしょうか、何の覚悟もなかった私たちはヒーヒー言いながらほおばり、食べ終わってからも口の中が熱いので、落ち着かせるためにアイス売っている店を探しました。そういう時に限って店を見つけられず、やっとの思いで冷たくて甘いアイスを口に含ませると、「生き返った」と全員で大笑いしました。

前回に引き続き今回も、夫と娘、私で立命館大学主催のフォスタリング・ソーシャルワーク専門職講座で話したことを書こうと思います。前は 2 月に話をしたことを書きました。今回は家族で話す 2 回目の機会を 7 月にいただきました。前回から半年も経っていないのですが、今回は里兄のコメントをもらったので、そのことについて触れました。息子のコメントは辛辣なものでした。内容については後ほど触れますが、娘が代弁することに決めました。兄のコメントの内容を読んで、「賛同できない部分もあるけど、同じ子どもという立場で納得する部分もあるから、私から伝えるのがいいと思う」と言ってくれました。確かに母である私が語ると、母としての解釈がかなり入ってしまうと予想できるので、娘に任せました。今回は、子どもからみた世界を中心にお伝えできればと思っています。どうぞ、最後までお付き合いください。

## 里兄からのメッセージ

親子 3 人で話す 2 回目の依頼をいただき、息子に人前で話さなくてもいいから、何かコメントが欲しい。嫌だったことを書いてもらって構わないと伝えました。息子から送られてきたコメントは、息子にしては珍しく長文でした。そのコメントを読み、まずショックで眩暈がしました。見事に拒否され、その文章から怒りを感じました。そこから冷静さを取り戻すと、息子が今の生活に悩んでいるのだと伝わってきました。先の見えなさに不安になったり、上手くいかないと感じる時は、何か大きな出来事に理由を求め、楽になりたいと願います。そこに里親の経験は簡単に結びつきます。それ程、家族にとって大きな出来事だったと改めて確認できました。

息子のコメントの概略は、  
親族の反対を押し切ってまで、里親をすることに反対の立場であること  
その上で里親をするのなら、母親なりに秘策があるのだらうと思っていたこと  
里子にいろいろ教えようと思ったけど上手くいかなかったこと

里親をして得るものは何もなかったと感じていると締めくくられていました。

娘は、兄の文章を読み、

最初に「兄は、母を信頼しているのだ」と言いました。

私は、「???」。

「お兄ちゃんは、母には何らかの秘策があり、母に任せておけば何とかなるのだと信じていたと思う。」娘からは、そんな風に読めるのかと脱帽です。

娘に、親族に里親の話をした時、何も言われず、里子との交流が進み具体的になってくると急に反対されたと説明すると、

「お兄ちゃんは、何が起きているかわかっていないし、知ろうともしていない。でも、私も兄と同じように大人の世界で何が起きているかわからなかった」と話しました。

そして、「お兄ちゃんとして、下がもう一人できることが嬉しかったのではないかな。年下のいとこが慕ってくれているような関係をイメージしたけど、同じようにできず諦めてしまったのではないかな」

「里親をして得るものは何もなかったことは、絶対にないと私は思う。お兄ちゃんは、プラスになるものしか認めようとしていないように見える。里親をしてきて、いい事もしんどい事もあったけど、そういうこと全部ひっくるめて得るものはあったし、今の私ができていると感じている。私は皆の前で話さないとならない状況に置かれて、母と打ち合わせもしたし、時系列を間違えて記憶していたとわかり、自分が知らなかった背景が見えるようになって、そういうことがあったのかと思えるようになった。兄は勘違いしたままで、家族と話そうとしてこなかったから多くの憤りを感じているのだと思う。お兄ちゃんが勘違いしたままのように、子どもは本当に大人の中で何が起きているのかわからないし、見えない、聞いてもいけないと思って過ごしてきた。」と教えてくれました。

娘の発言、すごいなあ。

親として、子どもを巻き込まないように、何とか守ろうとしてきたつもりですが、子どもに気を遣わせる結果になったと知りました。この話を聞いた時、申し訳なくて涙が出てきました。



息子は、里親をしたいと私が言い出した当初、反対はしていなかったと思います。

母が言い出したことを受け入れようとしてくれたのでしょう。

辛辣なコメントでしたが、私を責め立てるような言葉ではなかったところが、息子の優しさでしょうか。息子自身の今の人生に悩み、やるせない気持ちをぶつけている面も感じます。里親の経験は、家族の誰にとってもインパクトがあるもので、何か上手くいかないことの原因にしくなります。

息子は、小さい頃から口数が少なく、いつも何を考えているのだろうと彼の中を知りたいと思い続けてきました。このコメントは、里親について初めて語った大きな一歩。

あまり家に寄り付かない息子ですが、何か困ったことがあれば帰ってもくるし、頼ってもきます。今は、それでよしとしましょう。

そして、息子がコメントをくれたことで、そこに織り交ぜられたメッセージを受けることもできました。コメントは LINE でもらったので、それに対して返信もしました。そこから、息子が何を感じたかはわかりませんが、今置かれた状況がずっと変わらないことはあり得ません。息子が、しんどそうにしていた時も、とても嬉しそうな顔をしてチャレンジしている姿も見てきました。少しでも、自分との対話ができることを願っています。

## 娘の人間不信

今回の講座では、娘が兄の代弁をすることになり、前回よりも娘と打ち合わせをしました。似た立場の兄妹ですが、抱えている気持ちは別物なので、兄のコメントと自分の気持ちの伝え方を悩んできました。いろいろ思案した結果、わかりやすくするため、まず娘の気持ちを先に語り、最後に兄のコメントを紹介することにしました。

娘は、自分の思いを何度となく語ってきていますが、今回の登壇で初めて涙ぐみました。

親戚や教師から家庭の様子を質問され、友達からは「私はそんなの無理」と言われ、誰も信じられなくなったと語った時でした。この人々は、娘の思いを考えようともせず、里親制度のことについて知ろうともせず、無知のまま娘の心を土足で踏みつけるような質問をしました。きっと、悪気なくしていたのでしょう。そのことが、娘の奥にある傷つき体験なのだとわかりました。

何度も語る経験をし、親の語りを聞き、第三者に受け止めてもらい、兄のコメントに触発され、やっと自分の革新部分に触れられるようになったのかも知れません。

その娘を救ったのは、高校で出会った友達でした。娘は、通学に1時間はかかる高校に進み、同じ中学からは、誰も進学していません。中学では、幼馴染も大勢いて、下のきょうだいが急に増えると不思議がられますが、高校では、きょうたいがいると言えば済み、敢えて里親をしていることを説明する必要はありません。



敢えて里親をしていることを語らなかった中で、一人だけに里親のことを話した際、その友達は、その場で里親制度について調べ始めたそうです。中学時代は、里親制度について知ろうとしてくれた人はなく、興味半分だったり、知ろうともせず否定され、人間不信に陥りましたが、この友達は娘のことを理解したいからと調べてくれたそうです。そんな人がいるのだと知り、人を信じられるようになったと教えてくれました。

娘の話聞き、ひどく胸が痛みました。

娘は、将来自分が里親をしたいかしたくないかと問われれば、里親をしたいと言います。でも、自分に子どもがいたらしないと思うとも話していました。

率直な気持ちが、嬉しくも、悲しくも感じます。

人の前で里親家族として感じてきたことを語り聞くと、驚かされるのが毎回あります。

里子を含めて、「家族」が生き物のように変化し続けているのだとわかります。

常に生きている私たち一人ひとりが、里子と別れた後も物語を作り続けていました。

一緒に暮らしている時、里子を「家族」と感じていました。

久しぶりに出会うと、今は元里子に何の権限も持っていないボランティアですが、家族の感覚が蘇ってきます。

不思議なのですが、自分の父親よりも里子の方が家族の感覚があります。父とは一緒に暮らしたことがなく、生物としての父親だという理解はありますが、家族と言われるとピンときません。他界しているので、この感覚はそのまま変わることは難しいと感じます。「あなたの家族を思い浮かべてください」と聞かれたら、父親よりも先に里子の顔が浮かびます。

父とは孫を含めて交流してきましたが、お互いによそよそしさがありました。父が歩みようとした時、私はそれを受け入れられなかったし、その逆もありました。私たち親子は、阿吽の呼吸どころか、一つの歯車を噛合わせることも上手くできずにいたのだと思います。

私も父も出会っている時、会話が弾むことは少なく、お互いに会話に困っていました。よく話すタイプならいろいろなことを話せたかもしれませんが、会える回数が少ない上にその時間を有意義に過ごせなかったと感じます。

第三者に父と一緒に父子関係を話す機会があったら、この感覚は変わったかも知れませんが、お互いをもっと近くに感じられたのではないかと。そう考えると、とても勿体ないことをしたなと感じます。もっと近く感じられたかも知れないのに。

## 守っていると感じているのは大人だけ

娘と息子の語りから、大人になるにつれ、子どもの頃の感覚が薄らいでいき、記憶は置き換えられていくものなのだと改めて知りました。

子育てをしていく中で、子どもを大人のいざこざに巻き込まないように必死に守ってきたつもりでしたが、子どもから見れば大人は何も教えてくれない。自分たちはいつも蚊帳の外に置かれ、そのことについて尋ねてはならないというサインを読み取り、断片的に見えるものから自分なりに推測するしかない。その行動が、大人の顔色を読む学習になります。

私自身も子どもの頃、大人の行動に理不尽さを感じ、怒りを持っていましたが、親になってから自分も子どもに同じようなことをしていました。本当に皮肉なものです。

では、何でもかんでも子どもに伝えれば、それが誠意になるのかと問われれば、それは違うと思います。子どもにどこまで言って、言わないかの線引きは難しいということだけはわかりました。子どもに言っても言わなくても、大人に反発心を覚えることは避けられないのかも知れません。この世は、不条理に満ちています。大人であっても、どうしてもできないことは山程あります。

小さい頃、親や大人は絶対的な存在で、全てを委ねられる相手でしたが、大人も万能ではないことを大人自身が認識することから始まるのではないかと感じています。子どもよりも経験を積み、自分ができなかったこと、失敗したことをさせないようにと行動したくなりますが、子どもの行く手にレールを引くと、子どもが身に着ける力をそいでしまうことになります。子どもの権利を守ろうとするなら、大人自身の構えから見直すことから始まるのだと教えられました。大人になった子どもたちから、語りのカウンターパンチをもらって、わかりました。人生のレッスンは、どこまでも続くものだと知りました。わかっているつもりになって、結局わかっていないことに気づく。大人になっても未熟なままです。この世の中のことをわかったつもりになって子どもと接すると、失敗させないようにさせてようと必死になり、失敗したらやり直しがきかなくなると訴えてしまいそうになります。大人でも未来が見えているわけではないことを示し、子どもと一緒に悩み考える人でありたいと感じています。





## 周辺からの記憶 40

# 2021年度 むつ

村本邦子（立命館大学）

7月はオーストラリアに行った。ユネスコ世界遺産にも登録されている世界最大級の一枚岩ウルル（エアーズロック）の体験は際立っていた。1万年以上前から先住民がこのあたりに住んでいて、ウルルはその聖地だった。1985年の土地返還以降、99年の契約でオーストラリア政府が土地を借り、先住民8人（女性4人と男性4人）と白人4人で運営委員会を構成してこの国立公園の運営にあたっている。オーストラリアでも珍しく協力がうまくいっている例らしい。何冊か本を買ったが、『私はウルル』というファミリー・ライフストーリーがとても面白く、先住民の歴史が生き生きと描かれていた。絵本も魅力的で、ウルルの人たちのシンプルで大切な教えが書かれている。「大地と自然と精霊たち、すべてと繋がっていれば、迷うこともなくひとりぼっちになることもない。私たちは土地の一部であり、土地は私たちの一部である」という言葉には感銘を受けた。孤独を感じるのは、自分自身が自分を取り巻く自然に閉ざしているからだ。キャンベラやメルボルンで、戦争博物館はじめ、いくつもの博物館を訪れたが、戦争や先住民支配の歴史との向き合い方、多様な移民からなっているからこそそのアイデンティティ形成など新鮮だった。オーストラリアは何度も訪れているが、ようやく全体像がつかめ始めてきた感じである。

8月はネパールに行った。南アジアは初めてで、たくさんのおもしろい経験をしたが、まだ十分に消化しきれていない。ここもヒマラヤがポイントだと感じる。飛行機から美しい山々を見たが、雨季でトレッキングは断念した。次は是非乾期に行ってみたいものだ。海もそうだが、山というのも人々の存在に絶大な影響力を持つことを実感する。

ありがたいサバティカル。こんなに自由に動けるのも人生最後のチャンスかもという気がして、精神的に動いているが、それなりに人としての視点が大きく拡げてくれているような気がしている。



## 2021年度 むつ最終年の取り組み

最終年となる今年こそ現地に行きたいと思っていたが、プロジェクト開催時、コロナ禍は改善せず、むつ市ではコロナの予防接種のために9月まで全てのイベントを中止し、市の職員の方もコロナ対策に専念する方針になったため、残念ながら、またもやオンライン開催となった。

漫画展に関しては、8月6日(金)からむつ市立図書館で予定どおり現地で開催してもらったが、29日(日)までの予定だったところが、公共施設の閉鎖により25日(水)までとなった。感染状況が落ち着けば、秋に現地フィールドワークを実施しようと考え、様子を見ていた。10月15日(金)から17日(日)、下北のフィールドワークを実施することができた。併せて紹介する。災禍における制約と変化する状況の中で、柔軟に工夫を凝らしてできることをするという心構えを身につけることは、本プロジェクトの大きな成果であろう。

## 2021年度むつプロジェクト@ZOOM

### 8月27日 14時30分～16時 支援者支援セミナー座談会「家族の笑顔を支えるむつのか～東日本家族応援プロジェクトの十年を紡ぐ」

院生たちが頑張ってくれ、何度も集まって事前準備しながら、タイトルや進行を考え、座談会部分の司会もしてくれた。座談会には、むつ市児童相談所から眞手課長と桜

庭さん、そして今年からOGとなったが、初年度からずっとプロジェクトを支えてくれた杉浦さんが、立命館からは中村さんと私が参加し、これまでの成果を振り返り、後半では今後の可能性に向けて議論した。

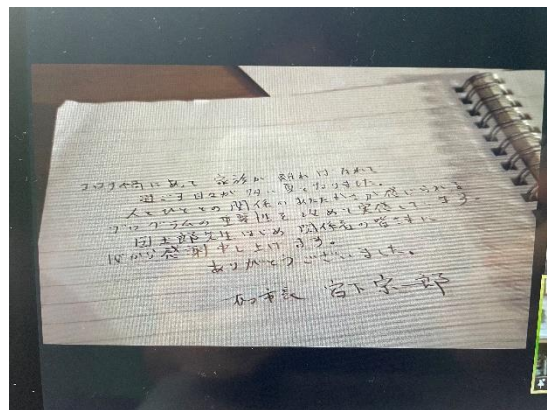
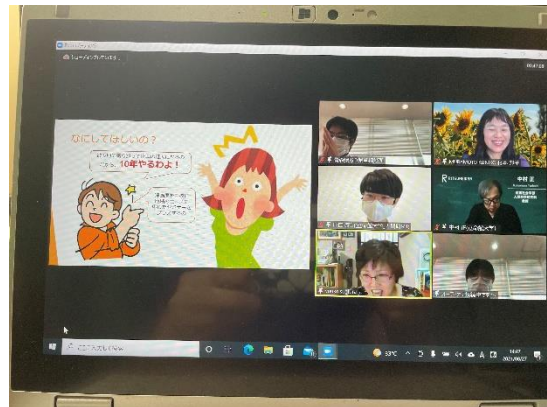
杉浦さんがプロジェクトの始まりから、経過までをパワーポイントにまとめてくれ、コンパクトに十年を振り返ることができた。最初は、児童相談所と立命館の企画だったものを、地域の力を引き出すためのプロジェクトだからと、各機関に連携を呼びかけ、2年目からは実行委員会を設けて続けてきたご苦労とともに、毎回、プロジェクトの確かな手ごたえがあり、それぞれの機関が、このプロジェクトを自分の事業であると位置づけて現在に至ることを語ってくれた。「立命館と見相だけではなく、地域を巻き込んでこのプロジェクトを進めるのにもものすごく馬力が必要だった。それを10年やってきた結果がここにある」「結果として、むつ市は我がものとしてこの支援者支援セミナーを喜んでくれ、市が事業を続けていきたいと言っている」ということである。

むつで生まれ育ったという眞手課長は、むつに興味を持ってもらったことが嬉しかったこと、家族に興味を持って家族のことを考えること自体が支援なのだと言われ、繰り返して言っておられた。支援者の思いを先行させるのではなく、あくまでも家族主体の支援ができるよう研修を続けていきたいとのこと、若手の桜庭さんも、セミナーがそんなトレーニングの場になるのではないかと言っておられた。支援者主体ではなく、当事者主体、家族主体という発想の転換、肯定的関心を向けることから始まる支援は、支援者支援セミナーを通じて共に学んできたこと

であり、これも大きな成果のひとつと言えるだろう。

院生たちは、そこに継続の力を読み取り、現地の方々が苦労もありながら、地域の問題解決力をいかに高めるかに焦点を当てながら、このプロジェクトを大切に思い育ててくださったことに感銘を受けていた。

むつ市連合PTA、図書館、公民館、むつ市子育て支援課などからもメッセージがあり、プロジェクト終了後の新たな展開への期待が寄せられた。後半では、今後の課題や可能性についても議論し、このプロジェクトはこれからも育っていくに違いないという手ごたえを残した。今後の展開が楽しみだし、地域が地域の力に気づき、パワーアップしていくプロセスに学び、このような動きがあちこちに広がっていくことを願う。

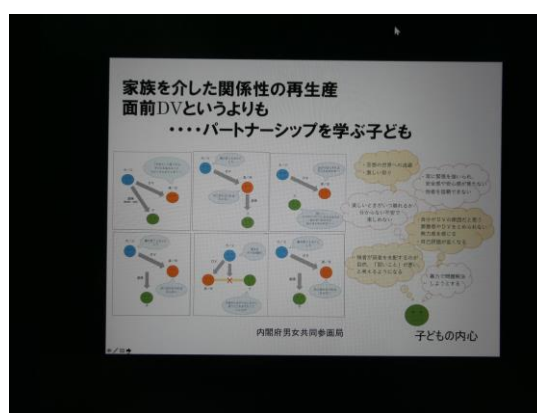
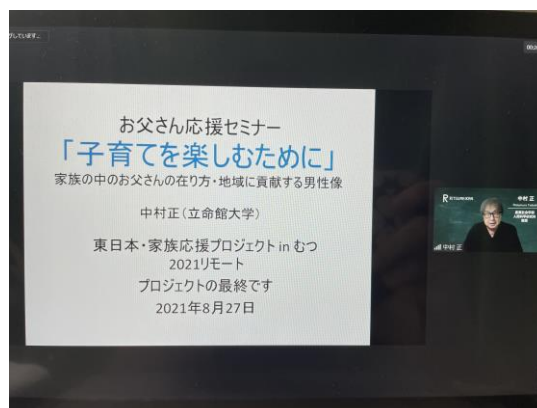


## 8月27日(金)18:30~20:00 お父さん 応援セミナー「子育てを楽しむために-家族 の中のお父さんのあり方・地域に貢献する 男性像」

例年は男性限定のグループワークとして  
いる企画だったが、最終年度はオンライン  
となったこともあり、オープン参加の講演  
となった。常連だけでなく初参加者、むつ市  
以外からの参加者もあり、計34名、新たな  
広がりを感じさせてくれた。

例年、「男性のコミュニケーション力」の  
実習を行ってきたが、今回の講演では、この  
背景と経過、中村さんが取り組んでいる「男  
親塾」(大阪で取り組む虐待する父親向けの  
プログラム)、またプライベートな家族・育  
児体験についても話があった。さまざまな  
事例やエピソードを通じて、ジェンダーが  
いかに大きく影響しているかがわかりやす  
く伝わったと思う。

最後には、過去十年のお父さんセミナー  
の思い出話も語られ、セミナーの間、子  
どもたちが調理室でパンを焼いていた時のこ  
となど、その光景が目には浮かび懐かしくな  
った。伝統的な地域でジェンダー問題をテ  
ーマにするのは必ずしも容易ではなかった  
側面があることを知っているが、これもむ  
つの今後につながっていけばと願う。



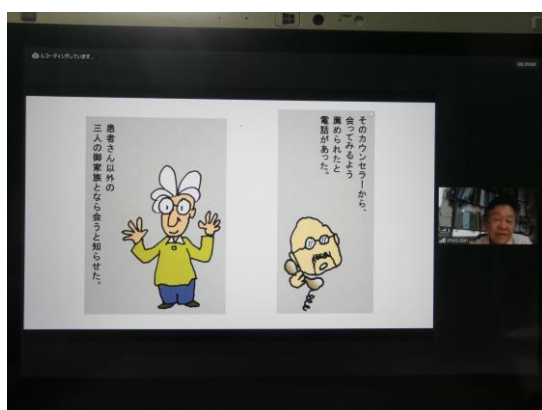
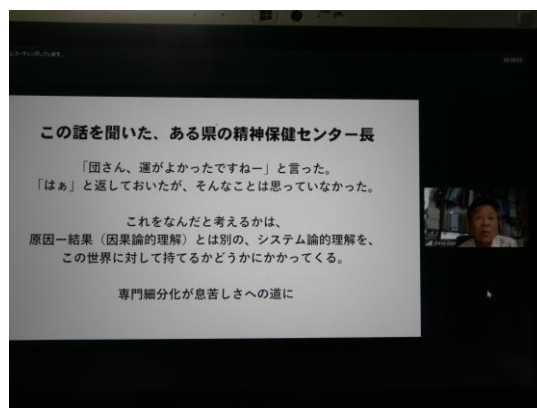
### 男性のコミュニケーション力

- ① レポート・トークとラポート・トーク
- ② 「I」メッセージと「You」メッセージ
- ③ 後出し負けじゃんけん(勝つことに慣れている)
- ④ 沈黙とおしゃべりの肩もみ練習
- ⑤ 自分の親父の思い出トーク(同じこととする?)
- ⑥ コミュニケーションワーク(聞いてる?他己紹介)
- ⑦ 男はつらいよ体験トーク(弱い部分もある)
- ⑧ 自分のために花を買ったことありますか?
- ⑨ 男性の友人は?何を話す?……

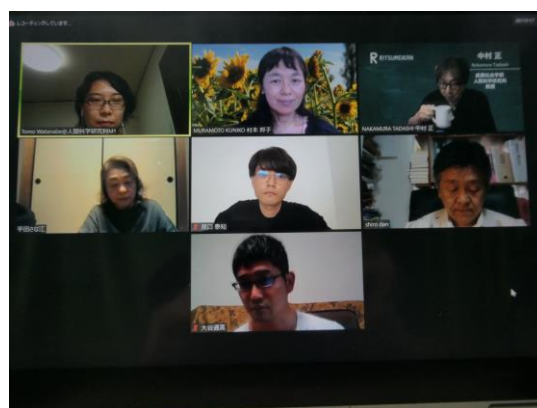
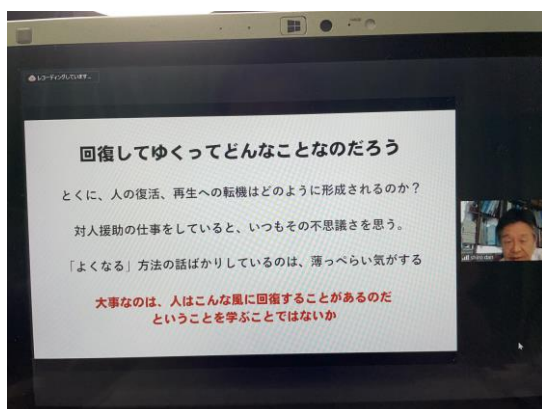


## 8月28日(土)10:30~12:00 団士郎漫画トーク

漫画トークでは、いつものように具体的な家族の物語を通じて、さまざまに思いをめぐらす内容だった。例えば、本プロジェクトのアイデアの源となったむつ市立図書館のギャラリーがあり、そこで毎年漫画展とトークを行い、これから先も地元の方々の力で漫画展は続いていく。私たちにとっても、地域と関わるという濃密な経験となった。トークの途中には含まれるバズトークタイムは、院生たちが現地の方々と交流する貴重な機会となり、現地には行けなかったが、ほんの少し現地感を味わった時間だったと思う。



その後、12:30~13:30、スタッフメンバーで振り返りの時間を持って最終プロジェクトのプログラムを終えた。



## 下北フィールドワーク

コロナ禍の様子を見守っていたが、何とかフィールドワークに行けるだろうということで、10月15日(金)から17日(日)、院生たちを下北に連れて行くことができた。六ヶ所村からむつ、恐山、大間と自分たちで回る計画を立てていたが、プロジェクトの始まりからずっと中心にお世話くださっていた杉浦裕子さんご夫妻が、キャンピングカーで案内してくださることになった。院生3人と中村さん、私の5人で参加した。



### 10月15日(金)1日目

JRで七戸十和田駅まで向い、そこで杉浦さん夫妻と合流、道の駅で昼食を食べてから六ヶ所村へ。私は何度も行っているが、院生たちには是非、六ヶ所村の様子とともに原燃PRセンターを見せたいと思っていた。PRセンターでは、杉浦さんがガイドの予約をしてくれていて、初めてガイドツアーに参加した。限られた時間でガイドされる内容は、自分自身で見て回るのとはまた少し違って、核燃料の再利用がどれほど合

理的で良いものかということが強調されているようだった。





それから日が落ちる前にと、尻屋岬まで車を走らせ、灯台と寒立馬を見せてもらった。下北には十年通ってきたが、尻屋岬まで来るのは私も初めてだった。いつもポスターで見ていた寒立馬と会い、その愛らしい姿と優しい振舞いに、またひとつ下北の新たな魅力が加わった。



夜は、むつの「なんこう」で、むつ市児童相談所の眞手課長と PTA 連合の大見会長を交えた交流会を持った。むつでのプロジェクトは今年で最終となるが、現地では、このプロジェクトを今後も継続して開催して下さる予定で、その打ち合わせも兼ねた会食だった。こんなふうに暖かい関係が築き上げられてきたことは本当にありがたい。その夜は、定宿のむつグランドホテルに宿泊した。

## 10月16日(土)2日目

朝、7時半にロビー集合して恐山へ。何度も来たところではあるが、今回、あらためて地形が変わっていることを感じた。台風や大雨などで容易く地形が変わるのだろう。宇曽利湖の色が硫黄でこんなに黄色く染まっているのを見たのも初めてで、時期や気候によっても変わるのかもしれない。この湖は何か人を引き込んで離さないパワーを感じさせる。それにしても、恐山の正面に見える釜臥山のガメラレーダーは、土地にそぐわず、何とも興ざめな感じがする。







それから、台風の影響で予定していた道路が遮断されており、経路変更して川内ダムへ。川内川は昔から氾濫を繰り返し、大きな被害をもたらしていたが、水源としてダム建設が決まり、1981年、36戸が全戸移転、20年の歳月を経て、1993年竣工となったという。



ダム湖にかかった橋に並ぶ当時の地元小中学生によるリリーフがとても面白かった。複数の学校はすでに廃校となっている。1992年の作品だが、学校ごとに工夫がこらされ、大きくなったら「パチンコやになるぞ」「老人ホームで働きたい」「お父さんの工場で働く」「悪人を注意する婦人警官になりたい」など、将来の夢が書かれ、この子どもたちは今頃どうしてるのかなと想像を巡らせた。



その後、佐井村にある三上剛太郎の生家に案内してもらった。三上家は代々医者の家系で、剛太郎も、新聞記者を経て村医となった。1905年の日露戦争で軍医として従事し、満州に野戦病院を設営して治療にあたっていたが、攻撃の危機に曝された時、ジュネーブ条約を思い出し、手縫いの赤十字旗を掲げて、敵味方なく多くの負傷兵の命を救ったという。

ジュネーブ条約とは、1864年に締結された戦時国際法で、傷病者及び捕虜の待遇改善のための国際条約である。日本では戊辰戦争で榎本武揚らが1868年に箱館に樹立した政権が野戦病院で敵味方の区別を行わずに治療を行い捕虜を保護する方針をとっていたという。これは諸外国から信頼を得るため、榎本らが西欧的な方法を重視したことも背景にあるといわれ、「日本最初の赤十字活動」と称されている。

日本は1886年に最初のジュネーブ条約に加入している。第二次世界大戦時、日本軍の捕虜収容所のサバイバーたちが、日本は捕虜を大事に扱うことで有名だったので、初め日本軍の捕虜になったことで安堵したというような証言をしていることを知っている。第一次世界大戦時の広島や徳島の捕虜収容所の話は有名で、徳島にある坂東俘虜収容所の説明には、その理由を、所長が戊辰戦争に敗れた会津藩士の子として屈辱と悲しみを知っていたからだと書かれていた。こういった精神が途絶え、第二次世界大戦では捕虜たちが非人道的扱いを受けたこと（結局のところ、それは、自国軍の兵士たちの扱いの延長線上にありわけだ）はとても残念である。

三上は、退役後、村に帰り、村医と

して地域医療に勤め、生涯勉強であると、晩年はフランス語を独学し、90才にて『レ・ミゼラブル』を原語で読んだ。1963年、ジュネーブで開催された赤十字の百周年記念イベントでは、赤十字の心としてこの時の旗が展示された。初めて知る話だったが、下北の小さな村に立派な人がいたのだと感銘を受けた。



次は大間のあさこハウスへ。監視のいるわかりにくい入口から、有刺鉄線にはさまれた細い道を走り、建設中の大間原発の建屋が見えるメルヘンチックな庭と家である。厚子さんは、相変わらず笑顔で暖かく私たちを迎えてくれた。



それから、大間崎まで車を走らせ、北通り総合文化センター「ウィング」に立ち寄ると、一階の展示スペースにも原発関連施設の説明があった。



たまたまトイレ休憩に立ち寄っただけだったが、後で調べてみると、HPには、この施設は、下北郡北通りの三ヶ町村（大間町、風間浦村、佐井村）の人々を対象とした「文化・教育・健康および原子力に係る知識向上」を目指す複合型文化施設であると書いてあった。貸会場・ホールの他に、温水プール、図書館、屋内運動場などもあり、町村民が使用できるようである。

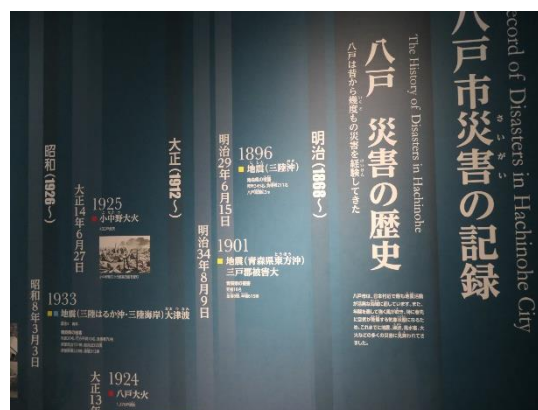


それから遠い道のりを車で走り、すっかり夜になってから八戸まで戻った。宿の近くの「みろく横丁」で夕飯を食べた。

それから、津波伝承館（みなと体験学習館）を訪れた。八戸も津波常襲地であり、今回の震災でも結構な被害を受けていた。八戸に住んでいた杉浦さんから、過去の津波についてもお話を伺った。

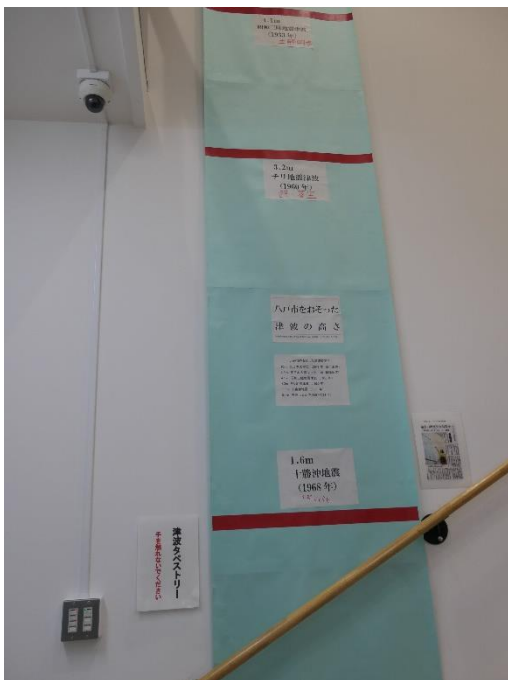
## 10月17日(日)3日目

朝は早起きして、かの有名な館鼻岸壁朝市に行ってみた。コロナ禍の影響だろう、聞きしに及んでいたほどではなかったが、それでも大勢の人々が朝早くから集まり、にぎわっていた。





その後、蕪島神社、種差海岸、是川縄文館、まで案内して頂いた。八戸は初めてだったが、車の中で、八戸で育ったという杉浦さんの昔の話や被災当時の話を聞かせてもらったことで、イメージも膨らみ、院生共々貴重な体験となった。





市場でたくさんのおみやげを買い、八戸からまた長い旅路についた。



## フィールドワークを終えて

今回の旅で院生たちが受け取ったものは大きかったことだろう。院生たちのレポートを一部紹介したい。

まずは、臨床心理学領域 M1 の原口泰知さんである。恐山とレーダーの不自然について。「本州の最果て下北半島で、周辺人たる私たちが待ち受けていたのは、不自然な自然だった。それは、私が持つどんな言葉をも跳ね除ける重量で立ちはだかった。その感覚はある意味で認知的不協和、またある意味でダブルバインドだった。矛盾の真只中で無防備だった私には、どこか遠くの映画のワンシーンを観ているようにすら思えた。あるいは、一旦そう思っておく他になかったのだろう。そうでなければ自己の揺らぎに耐えきれなくなってしまうからだ。だが、これはファンタジーなどではなく、確かにそこに在る現実なのだ。言い換えるなら、私が感じたのは圧倒的な無力感だっ



た。・・・そんな無力の果てで、際立つものがあつた。ひとつは、人間によるどんな思惑にも、開発にも、狼狽にも、揺るがずそこに在り続ける自然への畏怖である。・・・無力な私の目に際立つたもうひとつは、共振する他者の存在である。険しい大地を進む車内を囲うテーブルは、人と人の共振の場だった。異郷の他者である私たちが、その土地を生きる人たちと共に旅をすることで立ち上がる語りには、あの時あの場所でしか生まれ得なかつた迫真性がある。東通村の社会的養育。丘から見物した八戸の津波。変わりゆくものと変わらないもの。異郷の者たちが語らうことで、荒削りだった現実が奥行きを見せていく。こういう出会いの中に、ほんとうに役立つ言葉があるのだろう。そうした言葉を拾い上げてゆくことが旅人の役割であり、証人の役割なのだろう。

下北で経験した強烈な感覚を原口さんは「ダブルバインド」という言葉で語つたが、臨床心理学領域 M1 の大谷通高さんは、「アンビバレンス」という言葉を使つていた。

「今回のフィールドワークで感じた下北半島の印象は、アンビバレンスである。下北を巡る道中は、広大で豊かな自然と、軍事施設を含む科学技術の粋を集めた施設とが入り混じる特異なもので、特に原発関連施設は、その建物ごとのスケールが非常に大きく、下北の自然のなかにドカッと存在感をもって点在していた。道行きの車窓には、木々から空に突き抜けた巨大風車がゆっくりとまわり、豊かな自然と巨大な人工物の

存在感とが日常に溶け込んでいた。こうした下北の風景に身を置いたとき、普段の自分が全く逆の環境に身を置いていることに気づかされる。普段私は、街で暮らしており人工物に囲まれたなかに自然が点在する環境に身を置いている。・・・人それぞれの生きる力はその土地土地に影響を受けて、今日もそれぞれの日常が紡がれている」。



杉浦さんご夫妻に感謝します。

つづく



## 精神科医の思うこと③〇

### 「ほめる」ということ

松村 奈奈子

毎年、夏に「虐待医学会」というのがあって、ここんとこ毎回参加しています。今年の学会テーマは「支援を考える」でした。家族支援を考えると、上手く立ち回れない家族を「怒って」も上手くいかないというのは、関係者はみんな知っている事です。家族支援の場で、支援者と家族が互いの手を取り合っていくには、まずは家族から助けを求めて手を伸ばしてくれた事を「ほめる」関わりで評価する事が大事です。家族をサポートする支援者の発表からも「ほめる」という言葉が繰り返され、なんだか「ほめる」という言葉が頭に残った学会でした。

精神科治療をしても、「ほめる」事の大切さはよく感じます。なので、今回のテーマは「ほめる」ということ

実は「ほめる」という言葉、私の人生でもけっこう気になる言葉でもあります。私の母親は「ほめる」という事をしない母親で、10代の反抗期に「なんでほめへんや!」「ちゃんと言葉で言って欲しい!」と大ゲンカをしました。しかし、母親は「だって私もほめられたことないし」「口ではほめへんけど、ちゃんと評価はしてるんやで」てな反応で、「はあ?」「あーあ、言ってもムダか、あきらめるか」と、精神的自立がいきに進んだ記憶があります。子どもって誰でもほめて、欲しいですよ。ただ、評価してくれているのは感じていたので、大きくグレずに成長しました。大人になるにつれてわかってきたのですが、生きていくうえで大切な「そこそこの自己評価」「自分を好きでいれる事」を獲得するためには、「ほめられる」という経験が必要なんだと私は思います。

そんな感じで、子どもの頃はちょっぴり自信がなくて、自己評価が低かった私ですが、関わってくれたいろんな大人や、友人がほめてくれたことで、私は自信をもてる大人になれたのかなあと思っています。ほんと、周囲の人に感謝しています。

「ほめる」ことの大切さにあらためて衝撃を受けたのは、医師になって数年の頃に特別支援学校の精神科嘱託医となり、初めて授業を見せてもらった時の事でした。障害のある子ども達の授業では、先生方は子供たちをいっぱい「ほめる」のです。子ども達の能力に合わせた個別の課題が用意されていて、子ども達は課題をクリアして、「ほめられる」事を繰り返し受けます。終わりの会でも、子ども達は楽しく出来たことを発表し、笑顔で終わります。みんながニコニコして授業を受ける姿に「おーこれが障害児教育なのか！」と驚きました。

もちろん、これだけが障害児教育では無いのですが、兄弟と比較されたり、社会の中で「できない」事に直面してきた障害のある子ども達に、「いやいやできる事いっぱいあるやん」「今、よく頑張ってるのわかってるで」というメッセージを出し続ける事が、「そこそこの自己評価」「自分を好きでいられる」ために大切な関わりなんだーと再認識した瞬間でした。「ほめる」事を意識した関わり、いいなあと思いました。

支援学校のお母さん達からも「そういわれると、支援学校の先生ってよくほめますよね。ほめるとこそんなに無いのに（笑）」と感想を聞く事が多いです。そういう時、決まって私は「どーしてもできない事が気になっちゃいますが、出来る事をほめた方がどんどん伸びるみたいですよ」と話します。そんな経過もあって、その後20年以上同じ支援学校の嘱託医を続けさせてもらっています。今も授業見学は結構楽しみであり、勉強になります。

一方、標準化された課題をみんなで解き、たんと進む授業を受けて来た私は、学校でほめられた記憶がありません。「いやいや、ちゃんとほめたぞー」と当時の先生方に怒られそうですが、標準化された課題はできて当然ってな感じで、ほめられた記憶ないです。逆にできない事はコンプレックスでした。勉強は標準的にできていましたが、「跳び箱飛べない」「鉄棒できない」「早く走れない」ので、私、体育が嫌いでした。大人になった今は「跳び箱を飛べなくても人生は楽しい」と自信をもって言えますが、小中学校時代はできない事を突き付けられるのがツラかったです。「鉄棒できなくてもいいんじゃない？」なーんて反発もできないし。だから、逆に勉強が苦手な子供たちは、学校の授業が嫌いになるだろうし、しんどいだろうなーとずっと思っていました。大学になって、体育の授業で、1km走で標準タイムをクリアしないと追試というシステムがありました。意味がわからないので、レポートのついでに「医師として必要な持久力を試しているなら、このテストは現実と相関しない。長時間実習に耐え切れず倒れているのは、全員標準タイムをクリアした学生である。私は倒れない。真の持久力はこのテストで測れない、追試の意味はあるのか」てな意見書をつけました。体育教官が意見書を読んでくれたせいか偶然だったのか、翌年からこの追試システムはなくなりました。ああ、大人になってちゃんと意見できるっていいなって思った瞬間でした。子どもの頃

はツラかったー

で、「ほめる」こと。

特別支援学校で強く考えさせられたので、診察でも必ずしています。

子ども達の診察では、よく成績の事を聞きます。学期末には「通信簿どうやった？」と聞くと、みんな丁寧に「算数3、国語2・・・」と話し、それなりに気にしているのかよく覚えています。学校の先生には怒られそうですが、どんな成績でも「いいんじゃない」とほめるようにしています。だって、悪い成績を取りたい子供なんていないし、勉強できなかった子供は、勉強ができない理由があるんだから、と思っています。そして、成績と幸せな人生は必ずしも相関しないと、大人になって自信をもって言えるようになったので、出来ない理由を聞きながら、出来る事を一緒に探します。好きなことは得意なことが多いので、趣味は必ず聞きます。「良いところ探し」で「ほめる」ことは、診察で大切だと思っています。

それは、もちろん大人の診察でも同じ。大人でも子どもでも、どんな人も必ず私より優れたところがあります。医療の情報を届けるのは私の仕事ですが、患者さんの持つ優れた何かを発見して、評価して「ほめる」言葉を返し、教えてもらったりする感じの診察が、私は好きです。

で、支援の中で「ほめる」ということ

児童相談所や診察にくる子どもやその家族は、「ほめられる」体験が少なく、「自分に自信がない」「真の自分が好きになれない」状態なんだなあと思います。もちろん口頭では「わかっています」「できます」と言って、真の姿を虚勢をはって隠すことも多いですが。

「自分の事が好きな人」は自分の事を傷つけないし、相手を傷つける事は相手の怒りとなって返ってきて、結果的に自分を傷つける事になるので、相手も傷つけないです。それは、精神的・心理的にも身体的にも。

そして、「支援を受け入れる」というのは、相手を信じる事が出来ないと難しいものです。子どもの頃から人に「ほめられた」体験がなく、「責められた」「怒られた」「裏切られた」体験ばかりだと、人と関わるのも怖いし、ましてや信じる事なんか、なかなかできなくてあたりまえだと思います。

支援者が「支援」を受け入れてもらうために、まずは「人っていいもんだ」という感覚を支援が必要な人に持ってもらう事なのかなあと思います。そこには、「責めない」「怒らない」「裏切らない」人が、相手を認めて、「ほめる」という関わりを続ける事が、大切なんだな、と思います。

もちろん、私も完璧にはできないではいますが、多くの大人に「ほめて」もらって今の私があるので、キチンとお返ししなくてはと思っています。

# 居場所の大人にできること

## - 子ども食堂篇Ⅲ -

馬渡 徳子

7月30日、地域の皆さんとともに「反核平和のつどい」を開催した。

7年目となるこの企画のきっかけは、地域の校長先生のこんなつぶやきから始まった。「夏休みの登校日が8月6日か9日でなくなり、長年継続してきた直接の戦争体験を子どもたちに語って頂く機会がなくなってしまった。とても残念だ。」

たまたま私の地域包括支援センター転勤と重なったことから、新規事業の認知症カフェと子ども食堂創設一年目の夏休み企画として、このつどいを開催することとなった。

語り部は、元患者さんをお願いし、快く引き受けて下さり、校長先生が子どもたちにもチラシを配布下さったことから当日は賑わった。

この企画は、コロナ禍も止めることなく継続し、昨年度からは、子どもた

ちと金沢大学学生ボランティアとで、2カ月前から演目を選び、コツコツと人形劇の準備をして本番に備えてきた。今年度は、子どもたちの提案でペープサートに変更し、教科書より「ちいちゃんのかげおくり」を作成し上演した。子どもたちも大学生たちも、しっかりと教科書を読み込み、作成と練習に励んできた。

当日、長崎での被爆体験を記されたお手製絵本「カーネーション」のご保人による朗読もあり、続いて出来立てほやほやの「たみちゃんのノーモアヒロシマ」を大学生3人と子ども食堂スタッフで紙芝居を行った。また、4年ぶりに地元のうたごえサークルをお招きし、「折り鶴」「青い空は」「翼を下さい」のマスク越しの合唱も叶い、懐かしい楽曲に、心豊かなひと時だった。



つどいに参加された地域の方々は、口々に現在の日本の情勢を慮って心を痛めておられる発言をされた。大学生は「私たち世代も、目をそむけないで、平和のバトンを受け継いでいかななくてはならない」とそれぞれの言葉で決意を述べた。

さて、昨年度からは夏休み企画として、毎週火曜日と水曜日の昼時間帯に子ども食堂を追加し、ランチと「広島・長崎原爆展」「平和を考えるアニメ映画」「木工教室」「勾玉づくり」「冷お抹茶会」を開催しており、毎日賑わっている。

体調不良の為つどい当日に参加できなかった子どもたちとは、これらの企画を通して感想を交流してきた。夏休みを利用して北欧に留学する大学

生の現地への手土産にと、ホストファミリー経験のある子どもが呼びかけて、自主的に千代紙で折り鶴を作成する姿もみられた。

その大学生には、留学先の小学校で特別授業を行うという課題があるようで、「日本の折り紙・折り鶴の由来について話し、現地の子どもたちと一緒に折り鶴を折る」という授業を行うそうだ。その国は、長引くウクライナ情勢の影響で、国の外交のあり方が変化している。帰国後の報告会を、子どもたちと楽しみにしている。

そう、今年初めに、タレントのタモリさんが「徹子の部屋」で「今の日本は、戦争前夜」と表現しておられた。怖がってばかりはいられない。

自分の言葉・行動で、恒久平和への

願いを伝え継いでいかななくてはなら  
ないと思う。

加賀の地に  
平和を願いし  
仲間あり  
明日は晴れと  
千億の星に頼んでおいた

NHK 朝ドラ「舞い上がれ」  
梅津隆司さんの本歌取りより



# 東成区の昭和 やぶにらみ日記

絵と文・柳たかを

## 「恩返し」

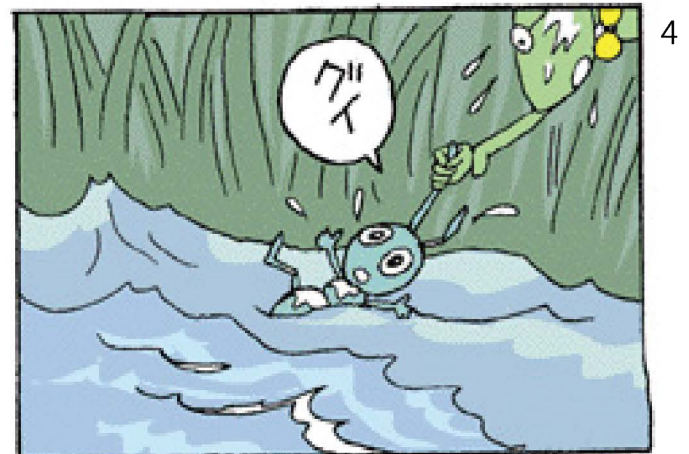
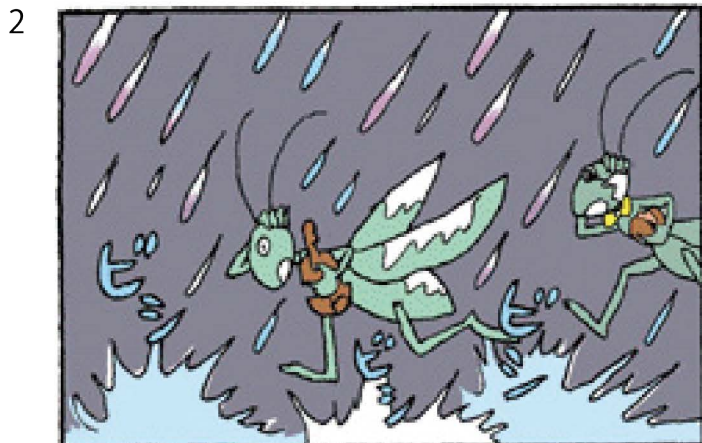
困っている時に、「どうかしましたか？」と気づかう声をかけてくださる心優しい人がいます。

じっさい私も自宅の前、遮断機の降りた登り坂の小さな踏み切りで停車した自動車の後ろに並んで止まろうとして、地面に足がとどかず自転車に乗ったまま横向きに倒れ（立ちどけ）、「まいったなあ」と思いながら起き上がろうとしていたら、前に止まっていた車から若いドライバーさんが飛び出してきた。「だいじょうぶですか？」と自転車を起こしてくださったことがあります。

こちらはドジな自分が恥ずかしいばかり、若いドライバーさんが真剣に心配してくださるのがありがたいとも照れくさく、起き上がりながら小さな声で「だいじょうぶ…ありがとう」とお礼をいうのが精いっぱいでした。

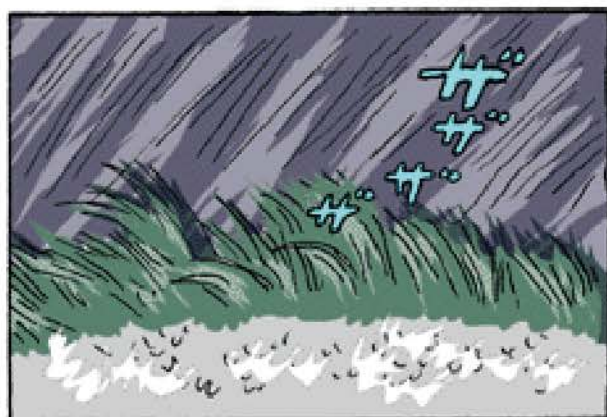
こういう見ず知らずの人から受けたささやかな優しさや思いやりの経験は、心にずうっと残っていて、チャンスがあれば今度は自分が誰か困っている人を助けたいと思う力になるように思います。

イソップ寓話「アリとキリギリス」は将来にそなえることの大切さを説いた話、小学生低学年の私でも意味の重みがズシンと心に残った、担任の先生に「紙芝居にして」と頼まれ、すごくやりがいを感じた記憶があります。このマンガではそこに（恩返し）の味付けを加えています。



やぶにらみ日記 (558)  
**東成区の昭利** 

(100) 写生



やぶにらみ日記 (559)  
**東成区の昭利** 

(101) 写生





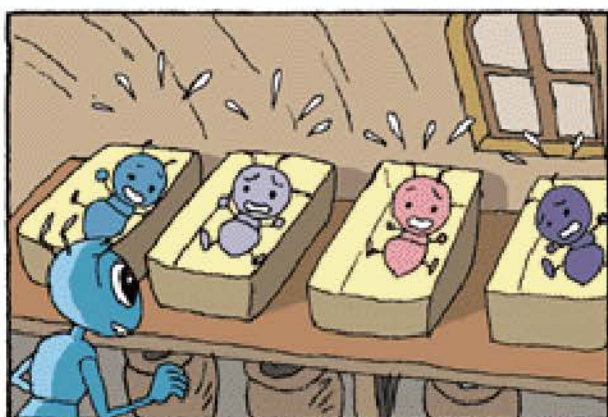
やぶにらみ日記 (560)  
**東成区の昭利**

(102) 写生



やぶにらみ日記 (561)  
**東成区の昭利**

(103) 写生



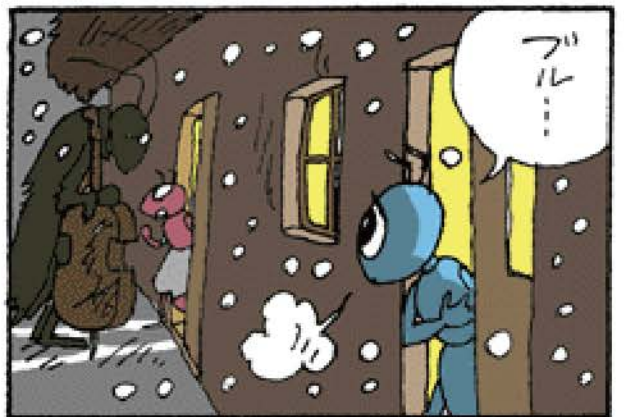
やぶにらみ日記 (562)  
**東成区の沼利** 

(104) 写生



やぶにらみ日記 (563)  
**東成区の沼利** 

(105) 写生



やぶにらみ日記 (564)  
**東成区の沼和** 

(106) 写生



やぶにらみ日記 (565)  
**東成区の沼和** 

(107) 写生





やぶにらみ日記 (568)  
**東成区の昭利** 

(110) 写生



やぶにらみ日記 (569)  
**東成区の昭利** 

(111) 写生



やぶにらみ日記 (570)

# 東成区の昭和



(112) 写生



やぶにらみ日記 (571)

# 東成区の昭和



(113) 写生





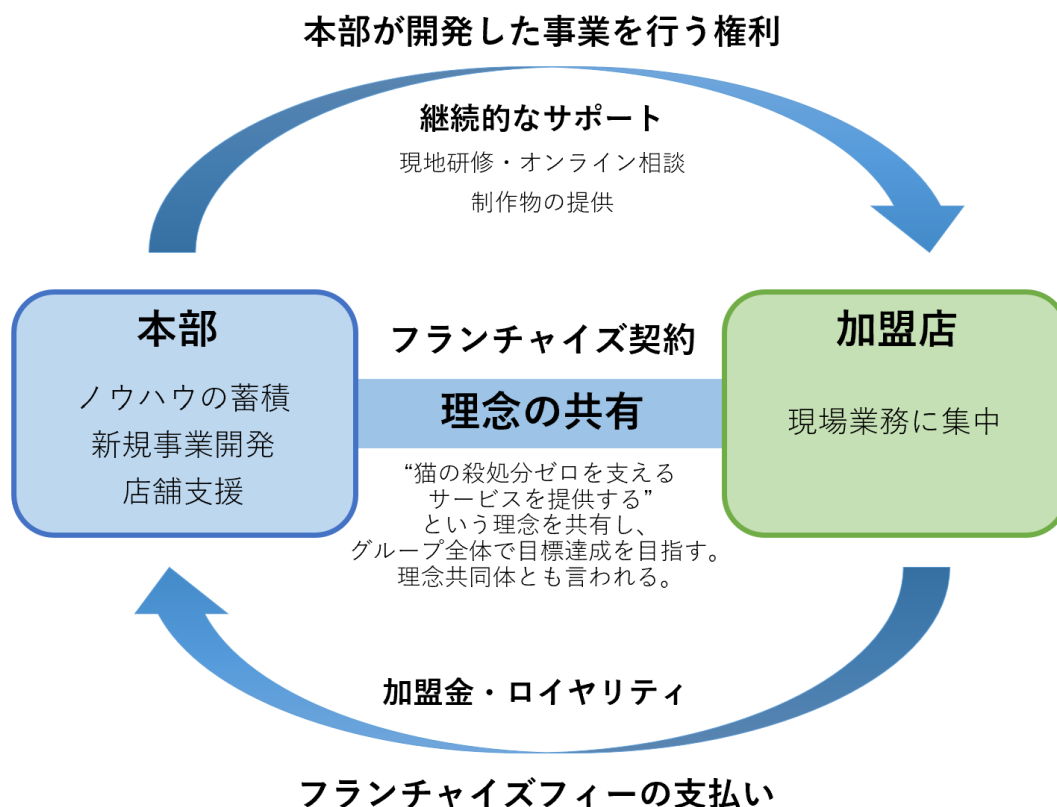
## ねこから目線。沖縄 誕生！

ねこから目線。～猫専門のお手伝い屋さん～も気が付けば開業6年目に突入していました。“願い事は口に出しておくといつか叶う”の精神で、開業4年目辺りからは、「猫問題も地産地消！ねこから目線。をフランチャイズ（以下FC）にして広めたい！」とことあるごとに呟いてきました。あちこちで言っていたら、それを聞いた人が「ねこから目線。がFC募集するんだってよ」とまたあちこちで言ってくださり、とうとう公にFC募集を開始する前に「ねこから目線。のFCに興味がある」という方と繋がることができました！場所は、なんと沖縄！



そもそもなぜフランチャイズという形態を選んだかの話をしたいと思います。全国に小さなねこから目線。を広げていく方法としては、大きく分けて2つ。直営店を増やすかフランチャイズ店を増やすかです。本部がめちゃくちゃお金持ちであちこちに営業所を建てて人を雇って…ということができればなら直営店を展開していく！という手段が手っ取り早いのですが、お察しの通りそんな財力はありません。また、猫の問題は地域性もあり関西でうまくハマっている方法をそのまま地方にもっていったとして上手くいくとは限りません。一方、FCは「保護猫活動を仕事として取り組みたい！けど、どうやって立ち上げて

いったらいいか分からない・・・」という方に、フランチャイジー（加盟店）になってもらい加盟金と研修費をいただく代わりに、本部からノウハウ、看板、運営サポートを提供するという仕組みです。



	直営展開する場合	FC 展開する場合
スピード感	遅い（開業場所探し、求人雇用から全て本部が行う必要がある為）	早い（開業に必要な事は加盟店オーナーが主体的に動いてくれるので、動きが早い）
費用負担	大きい（家賃、人件費等すべて本部持ち）	少ない（サポート人件費のみ本部負担）
収益	高い（店舗の売り上げは全て本部に入る）	低い（本部に入るのはロイヤリティのみ）

本部が既に成功したノウハウと知名度を使って新規店舗を立ち上げることができるので、いちから個人事業や法人設立にチャレンジするよりもリスクが少なく、安心感があり、短期間で独立開業に踏み出すことができます。開業後も、本部は加盟店が安定的に仕事をこなせるようにサポートし、共通の事業目的（猫の殺処分ゼロ）を達成するためのチーム関係を継続していきます。

加盟店として参加する側の人から考えると、直営店に雇用される形と比較すると負担も覚悟も必要です。だからこそ、軽い気持ちで入ってすぐ辞めていくような人材に振り回されるリスクも抑えることができると考えました。



スピード感をもって仲間を増やしていける実現可能性の高い方法が FC 募集という手法でした。FC は、理念を共有し、グループ全体で目標達成を目指す“理念共同体”とも言われるそうです。それであれば、ねこから目線。の場合は、“殺処分ゼロを支えるサービスを提供する”という理念を共有し、目標達成に挑戦するチームだと言えます。この理念に共感してくれる人はきっと沢山いる。そう信じて、FC 事業をスタートしました。

今回は、フランチャイズ1号店「ねこから目線。沖縄」が誕生するまでの話を書いていきたいと思います！

### 3月FC契約

公募前に口コミの紹介で、興味を持ってくださったのは、沖縄で保護猫活動や TNR 活動をされている伊波さん。まずは ZOOM で事業説明と FC の仕組み概要説明を実施します。ねこから目線。からは私と FC の仕組みづくり担当の中嶋さん（フランチャイズのプロ！）、メイン担当の浅岡さんの3名が参加します。次に情報開示書面（ねこから目線。の直近3年間のリアルな業績や雇用人数、加盟店数や加盟解除件数、これまでの訴訟数（今のところ無いです笑）、といった内部情報、FC 契約における細かい取り決めについて開示した書面）を提供し、それでも加盟します！となれば加盟申し込み書を送っていただき、やっと FC 契約締結！となります。



### 4月大阪本社で研修

ねこから目線。としての動き方を学んでいただく為に、まずは大阪に来て5日間みっちり現場研修をしてもらいます。宿は大阪のシェルタールームと小池宅に半々で宿泊してもらい、ひたすら現場に同行し、隙間の時間で座学をみっちりやっています。観光していただく時間を1時間も取れないほどみっちり・・・苦笑

とはいえ、伊波さんは猫ボランティアとしての活動歴も長く、経験値もすでに豊富。考え方も芯が通っていて、人柄も明るく、一緒に研修期間を過ごす中でどんどん引きこまれる頼もしい方です。伊波さんがねこから目線。FC 1号店に名乗りを挙げてくだ



さって本当に心強いなと思いました。1日だけ、京都スタッフも大阪スタッフも全員集合して伊波さんの歓迎 BBQ も開催しました。なかなか大阪スタッフと京都スタッフが一緒にしゃべる機会が少ないので、色々な意味で良い時間になりました。気が付けば、なんか大所帯です。

TNR 病院との連携も大切なポイントです。ちょうどこれから京都で TNR 手術の受け入れ先として提携していただく動物病院の先生方を TNR 手術の見学・実習として、ねこから目線。の医療アドバイザーになってくださっているハッピータビークリニックさんへアテンドする機会がありましたので、伊波さんにも同席していただきました。連携先病院さんとの打ち合わせや、大型の TNR 病院の様子も一緒に見てもらいました。



## 5 月沖縄で開業前支援

6 月からの始動に向けて、5 月に沖縄入りして開業前支援を実施しました。TNR の手術対応をされている動物病院さんや、関西の先生に紹介していただいた一般病院の先生へご挨拶や打ち合わせ、パンフレット設置のお願い周りをします。

せっかく沖縄に居るので、ボランティアさん向け講座もやりましょう！ということで猫に優しい捕獲講座@沖縄を開催しました。沖縄開催のリアル講座、はたして人が集まるのか??と不安もありましたが、25 名もの方が参加してくださいました！リアクションもよくてとても話やすかったです。沖縄にも頑張り過ぎて疲弊してしまっているボランティアさんや、これから猫ボラの活動に踏み出したいけれど、不安で足踏みをしてしまっている方もいらっしゃる事が分かり、ちゃっかり講座の最後にねこから目線。が沖縄にできることを広報させていただいたのですが、「とても心強いです！」といったポジティブなリアクションを沢山いただけてとても嬉しく思いました。



そして、すでに伊波さんが個人的対応している現場の TNR の為の捕獲に同行し、捕獲後

の猫さんの保管場所の環境や搬送の方法など1つ1つ確認をしていきます。猫の苦情として糞尿問題が街中では上がってきやすいですが、沖縄では牛舎でネズミ退治にと猫に餌をやっているものの、量が十分ではない上に、不妊手術をしていない為、状態の悪い猫さんが増え続けてしまう問題や、野生動物との棲み分け問題など、関西とはまた違った深刻な問題がありました。関西のやり方をそのまま持つていくだけではおそらく不十分で、これから伊波さんと知恵を出し合いながら解決策を考えて行く必要があると感じました。



そして、業務管理の方法、レシート発行のやり方、など細かい部分をひたすら詰めていきます。あと、「そんな事ある?!」と言いたくなるくらい偶然なのですが、大阪でねこから目線。を何度も利用してくださっているお客さまが、ねこから目線。沖縄の事務所近くに転居される予定となり、大阪から沖縄への猫さんの多頭引越しのお手伝いの打合せもしました。飼い猫さんは4匹ほどですが、保護猫さんでまだ人馴れしていない子たちも居るので、引越し当日はねこから目線。大阪のスタッフが室内捕獲の上、飛行機に載せます。そして沖縄でねこから目線。沖縄の伊波さんが受け取り、飼い主さんの新居へお届けする段取りになりました。

沖縄では、保護猫が多すぎて島内だけでは里親探しに難しい為、関西や関東の保護猫カフェさんに空輸し、街中で里親募集をするという連携が頻繁に行われているそうです。そのため、空輸の手続きや注意点など、伊波さんが熟知しており、頼もしい限りでした。こうやって、各地でそれぞれの知恵を持った優秀な人が仲間になって、知識の共有がスムーズにできる体制が整っていくのはわくわくするほど魅力的です。



## 6月いよいよ開業！

 **ねこから目線。** HOME [ねこから目線。とは](#) [里親募集中](#) [サービス](#) [対応エリア](#) [ブログ](#) [お問い合わせ](#) [メディア](#) [採用](#)



### ねこから目線。沖縄

間接的にでも猫にメリットがあると  
考えられることなら何でも  
ご依頼を承ります

2023年の6月から、ねこから目線。沖縄がスタートしました。初月からありがたいことに、TNRのご依頼や迷子猫の捜索対応のお依頼をいただいて動き出すことができました。とはいえ、仕事としてしっかり回り出すまでは時間がかかってしまうと思います。

ねこから目線。の理念に共感し、信頼して、一歩踏み出してくださった伊波さんに心から感謝し、その想いを裏切らないよう、本社としても全力でサポートしていきたいと思えます！

毎月1回 ZOOM で現場スタッフミーティングを実施し、技術やヒヤリハットを共有し、難しい現場はみんなで知恵を絞ります。大変な社会問題だからこそ、楽しみながら取り組んでいくスタイルでこれからも皆で頑張っていきたいと思えます。

皆さま、ねこから目線。沖縄もぜひよろしく願いいたします！

そして、我こそは！と FC 加盟に名乗りを上げてくださる方も大募集中です！！

## おわり



小池英梨子

ねこから目線。～保護猫とノラ猫専門のお手伝い屋さん～ 代表  
NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク  
「人もねこも一緒に支援プロジェクト」 プロジェクト代表  
ご意見・感想・お問い合わせ：e.kosame12@gmail.com

# 先人の知恵から

## 41

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

ここまで続けていると同じような諺を載せないようにと過去の諺を振り返ることも増えた。今回も「夕行から」以下の7つ。

- ・宝の持ち腐れ
- ・他弓挽く莫れたきゅうひ なか
- ・叩けよさらば開かれん
- ・ただより高いものは無い
- ・立つ鳥跡を濁さず
- ・蓼食う虫も好き好きたて
- ・楯の両面を見よ

### <宝の持ち腐れ>

すぐれた才能があるのにそれを活用しないことのたとえ。また、役に立つものを持っていながら、利用しないことのたとえ。折角の宝を手を持ったまま腐らせてしまう意から。

最近の子どもたちの中には、目立つことを嫌がる子が見受けられる。能力も高く、誇れるものをもっているにも関わらず、目立つといじめられるという恐怖感から、能力

を隠しているのだ。「能ある鷹は爪を隠す」とは言うが、折角持っている能力を発揮しないのは勿体ない。本当は体育が得意なのに、わざとあまりうまくない風を装ったり、算数が得意なのに、100点を取らないように操作したり……。小学校だけではなく、中学校や高校の生徒でもあえてやっていると聞くことがあるのだ。こんなことを子どもがするのは、本当に悲しいし、馬鹿げている。

可愛ければ妬まれ、運動が出来ても妬まれ、勉強が出来ても妬まれ、そしてこうした妬みがいじめに繋がるのである。

一人一人の良い面を先生方が認め、褒めるなどの行動があれば、だれもが褒められ、認められる学校であれば、妬みに繋がることは少なくなるのではないだろうか？

良い面をどんどん引き出し、宝を磨いていけるような学校であってほしいし、親子関係でも同様に、自分の子どもの良い面を褒めて伸ばし、輝かせてあげられるような関係性であってほしい。

そして、自信をもって自分の良い面、得意なことを出して、誇れるような子どもたち

であってほしい。そんな願いから、この諺を伝えている。

英語では・・・

Between treasure buried under the ground and wisdom kept hidden in the heart, there is no difference. (地中に埋められた宝物と胸中に秘められた英知の間には、何の差異もない。)

Waste of treasure. 又は、Waste of talent. 等とも表現される。

### <他<sup>た</sup>弓<sup>きゅう</sup>挽<sup>ひ</sup>く<sup>な</sup>莫<sup>な</sup>れ>

他人のことに干渉してはいけないということ。たとえ。他人のことに気を取られることなく、自分自身の領域を守って自己の充実に勤めよということ。他人の弓は引くなという意から。

出典 無門関

他人のことはよく見えるものだし、自分のことを棚に上げて、他人のことをあれこれ言う人というのは今も昔も変わらずいる。他人のことを笑う前に、自分自身の言動を振り返るべきである。また、反対に、他人の眼ばかり気にして、自分を出せずにいる子もいる。こういう子にもこの諺を使う。

自分がしっかり自分らしく、正しく、一生懸命頑張っていれば、だれに指さされることもないし、指さされたとしても気にする必要もないのだ。人の目を気にするあまり動けなくなるのは勿体ない。こういう子が結構いるが、人の目というのは結局自分自身の視線であると伝え、無駄なエネルギーを使っていると説明している。

小学校などではお世話焼きの子というのがいる。そういう子に限って、自分のことがお留守になる。お世話をすることで、自分の存在感を得ているので、それをやめることは難しい。それでもやっぱり自分のことを先にするよう伝えざるを得ないだろう。学校では「人のことは良いから自分のことをしなさい」と先生方から言われる。助けてあげることが悪いことではないが、助けてあげることで、本人が出来ることを奪ってしまう可能性について理解させることも必要だろう。

子どもだけではなく、大人も同様である。他人のことに首を突っ込む人、余計なお世話を焼く人などである。他人は他人、自分は自分で生きていくことが出来ればよいのだが、他人のことに振り回されている人もいる。そんな人たちにこの諺を伝えている。

### <叩<sup>たた</sup>けよさらば開<sup>ひら</sup>かれん>

何事もじっと待っているのではなく、積極的に努力することを進める教え。ひたすら待ち続けても神の国の門は開かれないが、こちらから進んで叩けばきっと開かれるという意から。

出典 新約聖書マタイ伝

友達が出来ないと嘆いている子がいる。自分からは行けず、相手が声をかけてくれる、誘ってくれるのを待っているのだ。口では「友達などいらない、一人の方が楽だ！」などと言ってはいるが、実は寂しくて、友達が欲しくて仕方がないのだ。

そんな子に、聖書の言葉だけだと断りつつこの諺を伝えている。やってみなければ

わからないことも多い。まずは友達になりたい子に声をかけてみよう。付いてはこんな風に声をかけてみたらなどと話し合う。また、こういう子に限って自分とまったく合いません子と仲良くなりたがったりするので、そこも要検討である。相手の気立ても考えながら、なるべく失敗しないように、この子が傷つかないように最大限気を付けて考えていく。その結果、上手くいけば、友達を作る自信にもなる。上手くいかない時は慰めながら、次のアタックを考える。

門を叩くには勇気がいる。その勇気を持たせてあげるのも我々支援者の務めである。

母親たちも、同様に悩んでいる。公園デビューや幼稚園、小学校でのママ友など、同じことが起きている。一人は寂しい。でも傷つくのは怖い。人関係で傷ついた経験から、人と関わることが怖いのである。対人トラウマを処理して、成長させることが出来れば、変化していけるのだ。

母親たちにも、子どもたちにもこの諺が伝わると良いなと思っている。

英語では・・・

Knock, and it shall be opened unto you.

(門を叩け、さらば開かれん)

#### <ただより高いものは無い>

ただで物をもらおうと、お返しに金がかかったり、無理な頼み事も聞かねばならなくなったりして、かえって代償が高くつくということ。

今の時代、SNSとかスマホの広告で、「今

ならただ」とか今なら何%オフとか、キャッチーなフレーズが目玉に留まる。そういうものに、引っかかるとろくなことにはならない。子どもたちに注意してもらいたくて、この諺を使っている。

昔も今も変わらず、ただって怖い！！

英語では・・・

Nothing costs so much as what is given us.

(貰い物くらいたかくつくものはない。)

#### <立つ鳥跡を濁さず>

立ち去る者は、あとを見苦しくしないよう綺麗にしておくべきであるという戒め。

また、引き際が潔くきれいであることのとえ。水鳥が飛び立った後の水辺は、濁ることなく清く澄んでいるという意から。

「飛ぶ鳥跡を濁さず」ともいう。

卒業シーズンになると、教室や下駄箱等、今まで使っていた場所をきれいに掃除する。これは日本のとても良い風習だと思う。引っ越しの時も同様に、きれいに掃除し、ごみ一つ残さないようにする。勿論業者に依頼する人も増えた。最近は何をいろいろ残して、処分しておいてくださいという人も増えたという。

もう、50年くらい前の話になるが、かつてアメリカでお世話になったホストファミリーのパパとママが日本に来た。彼らがびっくりしたのは、どこの路地もきれいに掃除されていることだった。家の周りにはきちんと箒で掃き清める。そんな時代だった。

最近では、平気でごみを路上に置いていく

人、空き缶やペットボトルを投げていく人が増えた。誰がやっているのかはわからないが、観光地でもホテルでも、「立つ鳥跡を濁さず」を心掛けたいものだ。

### < 蓼<sup>たて</sup>食う虫も好き好き >

人の好みは様々で、理解しがたいような多様性を持っているものであるということ。よりによって、辛い蓼の葉を好んで食べる虫がいるという意から。他人の悪趣味について言うことが多い。

これは有名なので知っている人も多いだろう。人の好みは様々ということである。蜘蛛が大好きな人もいれば、蛇やトカゲが好きな人もいる。猫が好きな人もいれば犬が好きな人もいる。何が好きでも構わない。食べ物も好き嫌いは誰でもある。

何が好きでも、だれが好きでも、それについてとやかく言うものではないということである。

英語では・・・

Every man as he loves. (めいめいお気に召すままに)

Tastes differ. (人の趣味はそれぞれ異なる。)

### < 楯の両面を見よ >

物事には表と裏があるから、一面からだけ見るのではなく、表と裏の両面をじっくり観察した上で正しい判断をせよという教え。

道で出会った二人の騎士が、木にかけて

ある楯の片面をそれぞれ見て「これは金の楯だ」「いや、銀の楯だ」と言い争い、あわや決闘になろうとしたところへ、別の騎士が通りかかり「この楯は一面が金でもう一面は銀ではないか」と言ったという西洋の昔話から。

英語では・・・

Look at the both sides of the shield.

### 出典説明

#### 無門関・・・一巻

宋代の禅の書。臨濟宗の僧無門慧開<sup>むもん えかい</sup>の著。完成は1228年。悟りの話題四十八を集め、評釈を加えたもの。「碧巖録」「臨濟録」<sup>へきがんろく りんざいろく</sup>とともに、禅宗で重んじられる書。

#### 新約聖書マタイ伝・・・

新約聖書におさめられた四つの福音書の一つ。伝統的に、「マタイによる福音書」が新約聖書の巻頭におさめられている。第7章に、「求めよさらば与えられん、叩けよさらば開かれん」とある。ひたすら神に祈り、救いを求めれば、神は必ず答えてくださる。積極的に努力すれば必ず目的を達成することが出来る。



# うたとかたりの対人援助学

## 第26回「高齢ろう者の人形劇『浦島太郎』を観る」

鵜野 祐介

### 1. 人形劇「浦島太郎」を観る

今年（2023年）7月20日、愛知県春日井市の文化フォーラム春日井で、「高齢ろう者×アートプロジェクト2023 成果発表会 人形劇『浦島太郎』【聴覚・ろう重複センター桃版】」を観ました。



今回の公演の企画制作に携わっておられた池内剛志さんが、ろう文化における民話の語りの活動について私が研究していることを耳にされて、お誘いくださったのです。

会場は、本格的な照明設備を具えた、舞台を階段状の座席から見下ろす形の立派なホールでした。ろう・聴覚障がい児学校の子もたちとその保護者や、出演者の聴覚・ろう重複センター桃の家族や関係者と思われる方がたを中心に、百名ぐらいの方で客席はほぼ埋め尽くされていました。

出演は、当日配布のパンフレットによると、前述の聴覚・ろう重複センター桃の24名と、デフ・パペットシアター・ひとみの団員4名で、第二部のトークではそれに加えて手話通訳者が付いていました。前口上の後、第一部は、全三幕からなる約1時間の上演で、第二部は、池内さんの司会による、出演者や桃のスタッフ、構成・演出者同士のトークや、観客との質疑応答で構成された30分あまりの交流会でした。

殆ど手話が分からない私のような者にとっても、昔話「浦島太郎」のあらすじは知っており、配布されたパンフレットを予め読んでおいたので、十分に楽しめる内容でしたが、ろう者のセリフは手話であり、その全てを通訳者が音声日本語でナレーションするわけではないので、手話が分かったらもっと楽しめただろうと思いました。

「人形劇」と銘打ってはいますが、出演者自身の身体表現を主としつつ、人形による表現を各所に取り入れた演劇でした。このお芝居の最大の特徴は、助けた亀に連れられて浦島太郎が訪れた竜宮城で、出演者の高齢ろう者たち自身のさまざまな「竜宮体験」を目撃するという構成でした。そして、最後に玉手箱を開けた浦島太郎が白髪のお爺さんになった後、この事態を彼がどのように受け止めるのかが、この演目を高齢ろう者の方たちが演じることの意味と大きく関わってくるのですが、その種明かしは後ほどにします。

### 2. デフ・パペットシアター・ひとみ

当日配布のパンフレットによれば、デフ・パペットシアター・ひとみは、公益財団法人「現代人形劇センター」が運営しています。

現代人形劇センターは1969年、人形劇団ひとみ座を母体に、文部省認可の財団法人として発足しました。日本には人形浄瑠璃文楽をはじめ、多くの伝

統人形芝居が継承され、いっぽう現代人形劇も豊かに演じられています。設立の趣旨は、その両者の架け橋となることでした。以来今日まで50年にわたり、次のことを目的として活動を続けてきました。

- ・人形劇の創造に、新たな可能性を提起すること。
- ・社会に対して人形劇の芸術としての多様な魅力を伝えること。
- ・地域社会の中で、人形劇が果たせる役割を追求すること。

一方の、デフ・パペットシアター・ひとみは、ろう者と聴者がともに創造する、世界でも数少ない専門人形劇団です。ろう者の感性を生かし、視覚性豊かな新しい表現をめざしています。1980年の設立以来40年にわたり全国700箇所(1800ステージ)で公演。海外でも11カ国、28都市で公演しています。観客は障がいの有無や年齢を越えて広がっています(同上のパンフによる)。

### 3. 聴覚・ろう重複センター桃とプロジェクトのあゆみ

当日配布の別のチラシによれば、春日井市にある聴覚・ろう重複センター桃(NPO法人つくし)は就労継続支援B型事業所です。「tatami des momo」というブランド名でたたみのへりなどを使った自主製品を販売したり、下請け作業をしたりしながら、高齢ろう者の集う場所になっています。

高齢ろう者×アートプロジェクトは2021年に始まったもので、芸術家チーム(デフ・パペットシアター・ひとみ/花崎攝)と一般の高齢のろう者が一緒にアートに取り組む企画です。2021年度は、神奈川県、岡山県、愛知県の高齢のろう者へのピアリングとワークショップを実施。高齢ろう者の子どもの頃の思い出を元に、芸術家チームがパフォーマンスを創作・発表しました。

2022年度、「桃」のみなさんと、絵や人形のワークショップを実施し、これを通じて仕事や家庭、学校などについてのエピソードを深め、小さな人形劇にして共同で発表しました。そして2023年7月、「桃」のみなさんと芸術家チームで人形劇「浦島太郎」(以下、桃版「浦島太郎」)を発表しました。

### 4. 「竜宮ガイドマップ」の作成

先ほど述べたように、今回の桃版「浦島太郎」の最大の特徴は、助けた亀に連れられて浦島太郎が訪れた竜宮城で、出演者の高齢ろう者たち自身のさまざまな「竜宮体験」を目撃するという構成です。

台本の元になったのが、「桃」のみなさんがひとりひとりの思い出のエピソードやこだわりを盛り込んで作った「竜宮ガイドマップ」です。絵と文でできしており、次の4つのコーナーに分かれています。

「乙女の天国」……「母の手料理がなつかしい。煮物がおいしかった。家族3人で囲んだ食卓」(K.K.さん)。「北海道で暮らしていた15歳の時、母がいろいろな料理を教えてくれた」(H.M.さん)。「テレビを観ながら家族4人で囲んだ食卓。父はお酒とプロレスが好き。よくケンカする両親だった」(K.K.さん)。「20歳ぐらいのときに姉と一緒に食べたスガキヤのラーメン。デザートにソフトクリームも欠かせない」(M.O.さん)。「健康の秘訣は毎朝の養命酒。もう20年くらいは飲みつづけている」(Y.S.さん)etc.。

「遊樂園もも」……「18歳のときに理容の先輩に教えてもらった魚釣り。あじ、ぶり、ひらめ、くろだい…いろいろ釣った」(K.E.さん)。「ボウリングの腕に自信あり! 会社のボウリング大会では優勝して賞品を持ち帰った」(S.S.さん)。「子どもの頃は一人遊びが好きだった。じょうぶな砂団子を作るには秘訣がある」(K.M.さん)。「趣味のウォーキングは健康のため。昔は食べ物の好き嫌いが多くて体が弱かったから」(M.S.さん)。「昔のパチンコは玉の動きをゆっくり追って楽しめた。今のパチンコはスピードが速い!」(T.A.さん)。

「ズ〜」……「まだ結婚する前、縁の下にいた猫に自分のごはんの残りをあげていた」(T.M.さん)。「小学生の時、猫を飼っていた。自分は聞こえないから、猫が顔にふれて起こしてくれた」(S.M.さん)。「猫にさわるとかゆくなる」(K.I.さん)。「テレビで見たカメ。かわいい!」(K.F.さん)。「カメはかわいい! 乗ってみるのが夢」(H.O.さん)。「55歳くらいの時に飼っていた小型犬。かわいかった。毎日一緒に散歩した」(Y.H.さん)。「息子家族が夏休みにリスザルを連れてきた。すばしくて、逃げ出さないかヒヤヒヤした」(S.K.さん)。

「シャチホコ竜宮パーク」……「親戚で行ったフラワーフェスティバルの思い出。私はポインセチアが好き!」(J.R.さん)。「娘と砺波チューリップ公園に行った思い出。雪の残る山が遠くに見えてきれいだった」(S.O.さん)。「ろう学校で学んだ洋裁を活かして色んな服をつくった。友達にスーツやスカートをつくってあげたことも」(S.A.さん)。「家族で見た名古屋城の花火が忘れられない。実はシャチホコにはオスとメスがある」(Y.O.さん)。「昔はスナックのフロアで飲んで踊って。ルンバ、ワルツ、サンバ…。色んな男性に誘われた」(J.K.さん)。

ここに紹介された、自分史としての22のエピソード

ードは、高齢者一人ひとりにとってかけがえない「竜宮体験」であり、それを舞台上で演じることで追体験することの喜びを感じることができたのではないのでしょうか。また、周りの出演者や観客たちにとっても、当事者が体全体で表現する喜びや楽しさを目の当たりにして、その感動を共有することができるでしょう。演劇には、絵や文章だけでは伝えきれないものを伝えることができるのです。それは、手話言語という身体的言語の表現を長年にわたって用いてきた高齢者の方がたにとって相応しいツールであるということも指摘できるでしょう。

## 5. 何が「めでたしめでたし」だろうか？

最後に、元の昔話「浦島太郎」のストーリーと同様に、玉手箱を開けた浦島太郎は白髪のお爺さんになります。「桃太郎」や「花咲爺」をはじめ、有名な日本昔話の多くが結婚したり、ほうびや宝物をもらったりして、「めでたしめでたし」で締めくくりますが、「浦島太郎」の結末ではそうはなりません。元いた家も親もなくなって、絶望してタブーを侵して玉手箱のフタを開けた結果、老いさらばえてしまうという、「めでたしめでたし」とは言えない結末です。

通常の昔話らしからぬ結末を、今回の桃版ではどのように収束させようとしたのか。この点を、台本を確認しながら検討してみましよう。

上演終了後、企画・制作者の池内さんから送っていただいた台本第二稿の最後の場面（第三幕）は次の通りです。

### 第三幕 地上に帰った浦島

捲りをめくる。「浦島のふるさと村」 上手奥から登場した浦島は、不思議そうに辺りを見まわす。確かに住んでいた場所のはずだが、まるで変わっている。家があったはずのところにやってくる。

浦島「ない！ 俺の家がない！ どうなってるんだ？」  
浦島は頭を抱えて、途方にくれる。

玉手箱を思い出し、……、3つ目には、「開けるな！」の張り紙が貼ってある。浦島は、開けるか開けないか迷うが、開けてしまう。中から煙が出てきて、浦島は一気にヒゲの真っ白な老人になってしまう。浦島は白いヒゲやまがったコシに気がついて、驚き、途方に暮れて、座り込む。

桃のメンバー(A さん)が出てきて、浦島に語りかける。

A「歳をとってから始めたグラウンドゴルフは楽しいよ」

K「バーベキューは美味しいよ！」

E「釣りは楽しいよ。一緒に行こう。」

など、口々に浦島に声をかける。

浦島「釣りに行こうか、歳をとっても楽しくやっつけようだ！」

口上（手話と音声通訳で）浦島太郎が、竜宮から生まれ故郷の村に帰ってみると、村のようすがすっかり変わり、家もなくなっていました。竜宮で楽しく過ごしている内に、地上では時間がものすごく経っていたのです。浦島太郎が、乙姫様からもらった、開けてはいけないと言われていた3つ目の玉手箱を開けると、急にすっかり年老いてしまいましたね。浦島はすっかり落ち込んで、悲しんでいました。でも、楽しそうなお高齢の方たちの話を聞いて、また元気が出てきたようでした。

皆さんは歳を重ねることは、悲しいことだと思いますか？ それとも、歳を重ねても、その歳ならではの楽しみを見つけていけるのでしょうか？ どう思いますか？（幕）

この台本と実際の公演内容との違いについて、池内さんから次のようなコメントをいただきました。

実は、公演当日の朝に話し合っただけで変更した部分なのです。浦島が「年をとっても楽しみがある！」と勇気づけられるという大意は変わらないのですが、いろいろな楽しみを列挙するのを取りやめて、素敵な場所である「桃」に誘われるという流れにしました。

「心配いらないよ、桃という場所に行けば手話で話せる仲間がたくさんいるよ」「仕事もたくさんあって、毎日楽しいよ。おいだよ」「そうか、それなら僕は年をとってしまったけれど大丈夫だ」という感じです。

桃は本当に楽しい空気に満ちた事業所で、利用者さんも桃に来られることを毎日とても楽しみにしています。実際に「今いちばん楽しいことは何ですか？」と利用者さんに質問すると、「桃に来ること」という答えがたくさん返ってきました。

ですから、キチンと定義してはいないので曖昧ですが、演者自身の過去の思い出が留まる竜宮という空間と、今の幸せを象徴する「現世の竜宮」みたいな空間＝桃という対比がうっすらと、結果的には生まれたかなと思います。

## 6. 3つの要素

昔話の語りが行われる時、その物語に込められたメッセージに対して、「語り手は誰か」「聞き手は誰か」「どのような語りの場か」という3つの要素が大きな影響を与えられます。

今回の上演において、「語り手」とはすなわち出演者の高齢者たちとデフ・パペットシアター・ひとみの役者たちです。次に、「聞き手」とはすなわち

自分のセリフを聞いて（＝手話を読み取って）くれる同じ舞台上のろう者たちや役者たち、そして客席の観客です。そして、「語りの場」とは会場です。

とりわけ重要な位置を占めるのが、語り手であり聞き手でもある高齢ろう者たちであり、また、彼ら／彼女たちと親密な関係を持ってきた施設のスタッフや家族でしょう。そうした人びとへのメッセージであればこそ、「皆さんは歳を重ねることは、悲しいことだと思いますか？ それとも、歳を重ねても、その歳ならではの楽しみを見つけていけるでしょうか？」という口上で締め括られたに違いありません。

老いや死を絶望することが、元の昔話「浦島太郎」の主題であるはずなのに、これを捻じ曲げてしまったのは良くないと批判することも可能かもしれません。けれども私は、上の3つの要素によってメッセージは変わっていくものであり、むしろ変えていくべきものであって、それこそが「本物の」昔話の語りだと考えています。

ですから、このような「めでたしめでたし」もアリだったのではないかと考えています。

## 7. 出演者への取材

後日、聴覚・ろう重複センター桃のスタッフ・伊藤久枝さんにメールを送り、出演された皆さんに質問をしていただき、回答を得ました。

### ① 今回の公演の中で一番楽しかったことは何ですか？

▷カメをいじめるシーン(75歳・女性)。

▷箱から煙が出て、おじいさんに変身するシーン(70歳・男性)。

### ② 「浦島太郎」の話は子どもの頃から知っていましたか？ 知っていたという方は、本を読んで知りましたか？ テレビ番組などをみて知りましたか？ それとも誰かから、手話で教えてもらいましたか？

▷ろう学校小学部の時にろう学校の先生が紙芝居で「浦島太郎」を話してくれた。音声日本語で話したただけだったので、内容はよくわからなかった。家に帰り両親に「浦島太郎」の絵本を買ってもらい、自分で絵と文章を繰り返し読んで覚えた。小学部1年～3年までは発音訓練ばかりやっていたので、本を読むようになったのは小学部4年生からだった。ほかに紙芝居で見たのは「ももたろう」と「花咲じいさん」だったが、貧乏な家庭だったのでその本は買ってもらえなかった。(75歳・女性)

▷8～9歳のころに「浦島太郎」の絵本を父が買ってくれ

て自分で読んだ。学校も家庭も手話は禁止されていたから自分で本を読み、わからない言葉はろう学校の先生に質問していた。わからない言葉だらけだったが、絵を見れば内容はだいたい分かった。ほかに「ももたろう」「きんたろう」を読んだ。(92歳・女性)

▷ろう学校小学部2年生の時の学芸会で、3年生が「浦島太郎」を演じていた。しかし、手話ではなく音声日本語のみでの演劇だったので内容はわからなかった。絵本で読んだこともなかった。(75歳・男性)

▷ろう学校小学部4年生のころ、学校に置いてあった絵本で「浦島太郎」を読んだ。ろう学校の先生や両親から話の内容を教えてもらったことはなく、自分で絵だけを見て想像していた。昨年、地元の手話サークルで「浦島太郎」の手話語りをしてほしいと日本語の文章を渡された。手話学習者にわかるように手話表現するために繰り返し練習をして、初めて「浦島太郎」の内容を知った。ほかに「ももたろう」を本で読んだり、テレビで「鶴の恩返し」をみたことがあった。(70歳・男性)

▷「浦島太郎」の話は、手話ではなく音声日本語で聞かされただけなので、内容を知ることはできなかった。ろう学校は手話が禁止されていたから。(74歳・女性)

▷ろう学校小学部2年生ぐらいのときに「浦島太郎」の本を見たことがあるが、文章が読めず内容は分からなかった。ただ、絵だけを見ていた。小学部5・6年生になったときに文章が少しわかるようになったが、物語の内容は誰も教えてくれなかった。ろう学校の中に手話はなかった。漫画本を友人から借りて読んでいたが、漫画は絵が多いから内容がよくわかった。今回人形劇をやって、「浦島太郎」の内容を初めて知ることができた。(82歳・女性)

▷ろう学校小学部3・4年生のころ「浦島太郎」の劇をやった。手話ではなく、音声日本語で。うまくセリフは言えないし、内容もさっぱりわからないまま13歳ごろにまた、ろう学校の先生が「浦島太郎」を音声日本語で話してくれた。そのときには内容は50%ぐらい理解した。60歳になって手話サークルで、サークルメンバーの聴者が手話で「浦島太郎」の話をしてくれた。そのとき初めて物語の内容が100%理解できた。ろう学校時代、他の学年が劇をやっていたことは覚えているが、音声日本語による劇だったので何も記憶に残っていない。今回、人形劇を見に来てくれた人から「面白かったよ」と言われるが、面白い劇をやったわけではないのに「面白い」と言われ、とても不思議に思った。(87歳・男性)

ろう学校時代、本を読んだ経験は一切ない。本は発音訓練のために使うものであって、読んで内容を理解するものではなかった。正しい発音かどうか分からず、とにかく声を出していた。ろう学校では手話は禁止されていたので、先生や親から「浦島太郎」の話の聞いたことはない。「浦島太郎」という名前も聞いたことはない。今回、桃で人形劇をやって初めて「浦島太郎」という名前を知った。

ろう学校で本を読んだ経験はない、手話は禁止されていた、内容も分からないまま音声日本語で劇をさせられたなど、痛切な体験に胸が痛みます。

## 8. 架け橋としての「手話による民話の語り」

これまで、民俗学や口承文芸学では、「語り」と言えば、音声言語のことであり、口から耳へと届けられる「声の文化」のことしか考えてこなかったように思われます。

けれども、2016年7月に英国スコットランドで出会った若い民俗学者から、手話という身体表現の言語を用いた、昔話や伝説や世間話、それから自分自身の体験を語る「生活譚」を含めた総体としての「民話」の語りの文化が、ろう者の社会の中で受け継がれてきたということを知らされてショックを受けて以来、日本ではどうだろうかと調べてきました。

取材を重ねていく中で、さまざまな形で「手話による民話の語り」を実践する人びとが全国各地にいたことが分かってきました。これまで本誌での「うたとかたりの対人援助学」の連載の中でも取り上げてきた、私自身が出会ってきた方がたのお名前を具体的に挙げておきます。民話の絵本を手話で読み聞かせする奈良県立ろう学校教師の吉本努さん（第8回）、民話の絵本を手話で読み聞かせするとともに、民話のストーリーの歌を「手話うたパフォーマンス」で演じる大阪府吹田市の藤岡扶美さん（第10回）、そして、仙台市を拠点として素話（すばなし）で民話の語りをしておられる半澤啓子さん（第22回）。

この研究を通じて、「語りの文化」というものは決して、口から耳への、音声によって届けられる聴覚情報によるだけではなく、手話という身体表現によって届けられる視覚情報によるものもあること、そしてそれは時代を超え、民族や社会を越えて傳承されてきたことを知りました。

今後、そのような手話による民話の語り文化の価値を、ろう者の方だけでなく、聴者（聞こえる人）の方にも気づいていただき、一緒に物語の世界を楽しむ機会を持つこと、それによって、マジョリティ（社会的多数者）である聴者が、「ろう者の世界（deaf world）」というマイノリティ（少数者）の文化を知

るきっかけとなり、両方の世界の架け橋となることが期待されます。今回の桃版「浦島太郎」の公演もまたその一環となるものと言えるでしょう。

## 9. おすすめの昔話「うぐいすの浄土」

桃版「浦島太郎」では、「ろう者の世界」という「異郷（異界）」を訪問するという設定となっています。昔話や伝説には「異郷訪問譚」と呼ばれる話型群があり、「浦島太郎」の他にも、「天人女房」「鼠浄土（おむすびころりん）」「こぶ取り爺」などがあります。

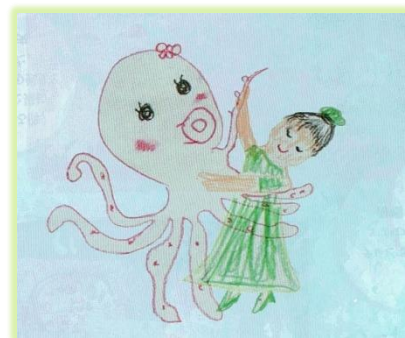
その中でも、異郷としての「ろう者の世界」を表現するのに相応しいと思われる昔話として「鶯（うぐいす）の浄土」があります。あらすじは次の通り。

- ①若者が野中で道に迷い、立派な屋敷に泊めてもらい娘の婿になる。
- ②娘は若者に、四つ目の倉だけは見るなと注意して外出するが、若者がつぎつぎに倉をあけて四季の農村風景に見とれていると、鶯が飛び出る。
- ③娘が、姿を見られたので行（ぎょう）が後もどりし人間にはなれない、と告げて鶯になって飛び去ると、屋敷は消え若者はもとの野中にある。  
（稲田浩二『日本昔話通観 28』同朋舎出版 pp.268-269）

見てはならないとされる部屋（場所）の数は、四季にちなんだ4の他に、1年12か月にちなんだ12として、楽しいお祭りや年中行事が順に描かれるという類話もあります。そこでは、出演者の住む地域の年中行事を紹介するとともに、ろう者の方がたがこの行事にどのような形で参加していたのかを紹介するという構成を取ることができるでしょう。

元のあらすじを枠組みとして押さえた上で、語り手や聞き手のニーズに応じてアレンジしていくというこの手法は、他のお話にも適用できると思われ、今後いろいろな可能性に向けてチャレンジしていただければと楽しみにしています。

最後に、小文の執筆にあたり、ご協力いただいた池内剛志さん、伊藤久枝さんに御礼申し上げます。



# ああ、 結婚！

—婚活日記—

第27回

黒田長宏

<2023年5月22日>

それにしても結婚難問題は自分自身を筆頭としてまるで何も動きがない。これでは小説にもドキュメンタリーにも漫画にもドラマにもならない。こうした状態のほうが現実には充満しているはずだと思うのだが、あまりに発表される場というのはそういう現実と逆になっている。だから発表という行為には幾分にも粉飾懸念があるのではないかと疑っている。

<5月28日>

人生は急に終えるかもわからないものの、結婚に関しては急には起こらないだろう膠着状態の中、こういう現実があるのだというのを証拠として残すためにこの一文を書いてみた。

<6月11日>

結婚にさらに難しい56歳になってしまった。『婚難救助隊』のYouTube がきりよく280人の登録になったが、これは上下する数値だ。年齢は上下しない。

<7月16日>

さすがに暑い日々となっている。清宮幸太郎びいきの日本ハムファイターズファンになってしまったが、1点差で7試合連続で負けているというプロ野球記録に付き合ってしまう、清宮も今ひとつ調子を落としてしまい、結婚難問題を自らも含めて解決をどうすれば良いのかと、気持ちが悪く動いている。しかし私の状況より日本ハムのほうが簡単に好転するだろう。

高校時代に書店で得た、石川達三の『生きるための自由』は、徳川時代の自由あたりでずっと止めてしまったままだが、それより前に、『新潮』に昭和47年頃から数年連載していた、『流れゆく日々』は7巻のうち、3巻めまで読み進めた。どちらも現在は絶版だろう。石川さんは私が高校生の頃まで生きていたらしく、一度くらいお話を聞いてみたかったが時すでに遅し。この人は生涯にわたり、男女関係の混乱を嘆いていた人

で、かなり頻繁にそうした<ウーマン・リブ>思想の破壊的な面を批判している。こうした情報が隠蔽されて、今の壊れた日本、結婚できない日本があるのだろうが、50年前に石川さんは日本の人口が多すぎるとか、どうすれば子供の数をコントロールできるかというような、現在と真逆のことを書いている。当時はまさか結婚難時代が来るとは石川さんも思えなかったんじゃないかな。

<8月7日>

マガジンの54号の締め切りの通知が来たのをみたら、直観的に希望の活力がこのごろ無くなった原因がもしかしたら、マッチングアプリを全部辞めてしまったからかも知れないと思った。

実生活でも結婚できず、ダメでもともどもマッチングアプリで新しい人を募集しまくっているうちに、気が紛れていたのかも知れないところ、辞めてしまったので希望が持てなくなったのではないかな。

だからと言って、無駄なマッチングアプリを再びはじめても結婚できないだろう。期待の YouTube 活動は、上がり下がりがあるものの、打率よりは落ちないようではあるが、現在のところ301人の登録数となっている。

<8月12日>

私の56歳という年齢が、世間の固定観念に影響されて、結婚とか再婚という

面に高い壁として立ちはだかり、この頃急激に敵わないのではないかという意識が強くなり、悶々としている状態が続く。他には、日本ハムファイターズの清宮幸太郎選手をけっこう応援し始めてしまったことがあるが、結婚関係で繋げてみると、彼のお父さんはラグビー界のお偉方であるが、私と同学年の人らしい。

私は、結婚難は、男女関係の乱れた社会意識の影響の蓄積だと思っているのだが、50年前に芥川賞初代受賞者でもある、石川達三さんが、その頃文芸誌『新潮』に連載していた、『流れゆく日々』が参考になると思い、読み進めている。7巻あるのだが5巻まできた。三島由紀夫の事件や、浅間山荘の事件など、田中角栄のことも書かれているが、物価高は、私も子供の頃に思い出があるが、似たような時代であるようだが、50年前は世界的に、実は日本でもこのままでは人口爆発になると危惧され、家族計画など、現在と真逆の状況であったことに、実は現在の少子化問題のヒントがあるのではないかと思っている。石川さんは時代に染まってしまい、人口抑制しなければと憂慮されていた。ここで連載されていたのは、日記形式であるが、『流れゆく日々』が日記形式であることから、私もどこかしら石川さんのような文章をここで残せないものだろうかともっと意識すべきだろうと思ったりするのだが、素質や人間力の問題は言い訳であろう。

茨城新聞を勤務の休日に数日分まとめて読むのが朝一番の私の日課だが、

立岩真也さんの訃報が掲載されていた。この方が、対人援助学会の主催であろうところの立命館大学の先生だと言うことを私は知っていたので、きっと対人援助学会の先生にも一緒に学ばれてきた先生方がいるのかも知れないと予想していたが、予想するまでだったが、訃報をみて、少しネットで調べてみたら、『生存学会』だろうか、対人援助学会の先生方の中に、重複されている方を数名見つけ、仲間の死というのはとてもショックだろうと思われる。

なぜ私が立岩さんを知っているかという、名前だけだったが、私が今の職場で14年半の勤務になっているが、それまでは40歳頃まで、3年続いた勤務先が無く、20社近くは転職したかも知れないが、このまま私の人生はどうなってしまうのだと危惧していたところ、書店で、青土社の『現代思想』の2009年12月号だっただろうか、2006年かな？タイトルが、『自立を強いられる社会』という号で、そこに『ベーシック・インカム』が紹介されていて、私のように仕事の続かない人間にはこれだと思い、そういう関係の号には、立岩さんが巻頭の言葉のような位置づけでいらっしまったため、名前を知っていたのであった。ただ、立岩さんがどういう考え方の人だったのかは、書かれている内容が難解で、今も知らない。しかしそれでは失礼だから、執筆されたものを読むべきだと思う。

私は繰り返しになるかも知れないが、56歳であるが、たしか10歳も年齢が違

わない方だと思う。今の時代だと若いと言われてしまう年齢だと思う。しかし、社会的に不器用な人達にとっても難しい年代だと思う。

ベーシック・インカムはなんとしても実現して欲しいと思い、10年以上も前になるかも知れないが、執筆者の何人かには会いに行ったが、住所の関係で関東地方の先生方に会いに行ったのだった。関西は遠かったので立岩さんには会えなかった。今は、結婚難問題だが、それまでは食料問題からお金の問題に関心があった。結婚は生存に通じるし、対人援助なら仲人の事だと思う。



〔PBLの風と土 第26回〕

## 大学での活動が地域における学習機会に

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授・立命館大学サービスラーニングセンター長）

### 【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でPBL（Problem-Based Learning）を導入していることで知られています。

連載1年目は現地報告を中心に、連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにオールボー大学以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ね、4年目はコロナ禍での立命館大学の科目への影響を、連載5年目からは米国での大学・地域連携の教育に関わる理論を解題しています。

### 1. 視察に留まらない対話と交流の旅に

前回の本連載（[第25回](#)）で触れたように、3月5日から3月9日にかけて、アメリカ合衆国のインディアナ州の[インディアナ大学・パデュー大学インディアナポリス校（IUPUI）](#)に訪問する機会を得た。コロナ禍により、もっぱら海外との交流はオンラインで行われてきたこともあって、少なくとも筆者にとっては4年ぶりの海外渡航となった。前回は記したとおり、渡航にあたっては2つの研究プロジェクト（立命館大学の北出慶子先生を代表者とするJSPS科研費19K00723「[日本語支援者の学び解明と促進を目指した多文化サービスラーニングの開発](#)」および筑波大学の唐木先生を代表者とするJSPS科研費21K18479「[初等中等高等教育におけるパートナーシップに基づくサービスラーニングの実装化](#)」）の支援を得た。多くの支援を得たこともあり、前回の予告のとおり、今回から複数回にわたりIUPUI訪問の報告を重ねていく。

訪問したメンバーは唐木清志先生（筑波大学）、石筒覚先生（高知大学）、秋吉恵先生（立命館大学）、宮崎猛先生（創価大学）、そして筆者の5名である。5名に共通するのは日本サービス・ラーニング・ネットワーク（JSLN）の運営メンバーかつ、唐木先生が研究代表者となっている科研費の研究分担者という点にある。もっとも、当該の科研費はJSLNの活動の充実を図る中で獲得できたものである。すなわち、JSLNが目指す「教育機関と社会の往還による知と経験、理論と実践との再統合を進める

サービス・ラーニングの広がりと発展」を具体化する中で応募し、採択に至った研究プロジェクトである。

今回の視察にあたって、全体のコーディネートをいただいたのは、本連載でも何度も取り上げている[ロバート・ブリングル先生](#)である。ブリングル先生はIUPUIのサービスラーニングセンター設立時のセンター長であり、サービス・ラーニングの理論の一つであるSOFARモデルの開発したチームのメンバーでもある。ここで唐木先生が代表研究者となっている科研費について、公開されている概要から研究の目的を確認すると「パートナーシップに基づくサービスラーニングの実装化に向け、プログラム開発・評価モデルを確立するとともに、モデル実施を可能とする方法を解明する」と掲げられていることが確認できる。ここからも、今回の視察において、ブリングル先生の協力が得られたことは、研究の進展と共に、今後のJSLNの取り組みの充実、さらには日本のサービス・ラーニングの発展に寄与するものと確信している。

今回はブリングル先生に加えて、IUPUIの教養学部（School of Liberal Arts）の日本語プログラム（Program in Japanese Studies）の主任（Director）の[栗山恵子先生](#)の協力も得ることができ、対話と交流の旅となった<sup>1</sup>。栗山先生とは今回のIUPUIへの訪問計画を具体化する中で新たに関係構築が図られた。手元の記録によれば、2022年12月16日のJSLN理事会の際、IUPUIの日本語コースの存在と、そこで勤

表1：視察の行程

日	時間	場所	内容	対応(敬称略)	写真
3/5	18:00～ 20:00	SAKURA	IUPUI日本語プログラム(JPS)の取組内容と日本の大学でのサービス・ラーニングの状況などについての懇談	栗山 恵子 (IUPUI, JPS主任・特任准教授) ハリス 田川泉 (IUPUI, JPS講師) 河野 錦 ゆりか (IUPUI, JPS講師)	①
	9:30～ 11:00	The Legacy Center	IUPUI健康・人間科学部による地域連携事業「Physically Active Residential Communities & Schools(PARCS)」見学	Christopher Rash (IUPUI, PARCS主任・School of Health & Human Sciences講師)	②
3/6	13:00～ 15:00	IUPUI [Joseph T. Taylor Hall]	AAC&U (アメリカ大学・カレッジ協会)のLEAPイニシアティブのもとでのIUPUIの「RISE」プログラムの紹介	Jerry Daday (IUPUI, Executive Associate Dean, Institute for Engaged Learning) Charity Bishop (IUPUI, Richard M. Fairbanks School of Public Health講師) Stephanie Leslie (IUPUI, Office of International Affairs留学担当主任)	③
	15:15～ 15:15	IUPUI [Joseph T. Taylor Hall]	1993年設立のインディアナ・キャンパス・コンパクトを2022年に改組したCommunity-Engaged Allianceの紹介	Elijah Howe (Community-Engaged Alliance事務局長)	④
	16:30～ 18:00	IUPUI [Joseph T. Taylor Hall]	Robert G. Bringle先生と共に、SOFARモデルをテーマにZoomミーティングを用いて意見交換	Patti H. Clayton (PHC Ventures顧問、ノースカロライナ大学グリーンズボロ校 Institute for Community & Economic Engagement客員上級研究員)	⑤
	10:00～ 12:00	Arsenal Tech High School	IUPUI教育学部による地域連携事業「Urban Teacher Education Program (TEP)」見学と高校独自の取組紹介	Monica Medina (IUPUI, School of Education特任准教授)	⑥
3/7	14:00～ 15:30	IUPUI [Business/SPEA Building]	IUPUI教育学部による地域連携事業「Collaborative for Equitable and Inclusive STEM Learning」の分析枠組解説	Cristina Santamaria Graff (IUPUI, School of Education准教授) Jeremy Price (IUPUI, School of Education助教) Maxim Bulanov (IUPUI, Educational Program Specialist, School of Education)	⑦
	17:30～ 19:00	National Institute for Fitness & Health	IUPUI健康・人間科学部による地域連携事業「Adapted Movement Programs(AMP)」見学と意見交換	Katie Stanton-Nichols (IUPUI, AMP主任、School of Health & Human Sciences准教授)	⑧
	9:30～ 12:00	The Sam H. Jones Center	当初はチャータースクールでの実践を現地でどう予定も前日の発砲事件で地域連携オフィスでの懇談に変更	Jim Grim (IUPUI, University/Community School Partnershipsディレクター)	⑨
3/8	14:00～ 15:30	IUPUI [Informatics & Communications Technology Complex]	IUPUI情報系学部が2015年に開始した高校生向け事業「Informatics Diversity-Enhanced Workforce(IDEW)」紹介	Vicki Daugherty (IUPUI, Luddy School of Informatics, Computing & Engineeringプログラムマネージャー)	⑩
	16:00～ 19:00	Hamilton East Public Library	IUPUI教養学部JPSによるフィッシャーズ地区の図書館での科目「Individual Studies in Japanese」の見学	栗山 恵子 (IUPUI, JPS主任・特任准教授) ハリス 田川泉 (IUPUI, JPS講師) 河野 錦 ゆりか (IUPUI, JPS講師)	⑪
3/9	11:00～ 12:00	IUPUI [Eskenazi Hall]	IUPUI芸術系学部のビジュアル・コミュニケーション・デザインに関する修士プログラムでの取組の紹介	Youngbok Hong (IUPUI, Visual Communication Design主任・Herron School of Art & Design教授)	⑫
	13:00～ 15:00	IUPUI [Business/SPEA Building]	IUPUI教養学部が受け入れた米国内のNPO「FHI360」による英語教師25名向けの国際ワークショップ参加・傍聴	栗山 恵子 (IUPUI, JPS主任・特任准教授) Robert G. Bringle (IUPUI, サービスラーニングセンター設立者) Matthew Hume (IUPUI, Director, Educational Programs 主任・教授)	⑬

務されている日本人教員のお一人として栗山先生の在籍が明らかとなり、ブリングル先生への協力とあわせて、栗山先生との懇談も働きかけていこう、という運びになった。そして既にIUPUIを退職されたブリングル先生にはノースカロライナ州から駆けつけていただいて全体のコーディネートをいただきつつ、栗山先生には他の日本語コースの先生方との調整もいただいて授業の見学も含めて対応いただけることになった、という具合である。

## 2. 写真で辿るハイライト

現地で過ごした5日間の行程を表1にまとめた。前述のとおり、5人での視察ではあったが、年度末の出張であることと全国各地からの参加ということもあって、宿泊先だけは同一箇所にするという原則のもと、日程面での合流・離脱は互いに柔軟に受け入れることとした。ちなみに筆者は3月5日の午後にインディアナポリス空港に到着し、3月9日の夕方にインディアナポリスを出発するという旅程とした。以下、表1に基づいて、13枚の写真から、それぞれの訪問先の特徴について簡単に紹介していく。

### 1日目) 日本食レストラン「SAKURA」で懇談

初日はIUPUIの日本語コースの先生方との懇談となった。日本からのメンバー5名、そして

IUPUIの日本語コースからは栗山先生に加えてハリス(田川)泉先生、河野(錦)ゆりか先生の3名が参加となった。「日本から来られた方を日本食レストランでお目にかかるのも不思議な感じですが」といった感覚を日米双方に覚えたようであったが、初対面ながらも和気藹々と互いの実践や関心を語り合った。とりわけ現代の学生の気質について日米での共通点・相違点について探り合ったのが印象的だった。



写真1：日本食レストラン「SAKURA」にて

### 2日目) 地域と大学の確かな関係構築を実感

2日目は朝からアーセナル技術高校に隣接するコミュニティセンター ([John Boner Neighborhood Center](#)、1974年に住民が設立) 内のジムに伺い、IUPUIの健康・人間科学部の地域連携事業「[Physically Active Resi-](#)



写真2：JPモルガン・チェース銀行が支援するジム

dential Communities & Schools (PARCS)」での学生と教員によるフィットネス部門の運営状況について、[クリス・ラッシュ先生](#)と学生からお話を伺った。その後、IUPUIのキャンパスに向かい、参画型学習機構のジェリー・ダディー副機構長やサービスラーニングセンターの暫定センター長を務めるチャリティ・ビショップ先生らから「RISE」(Research, International experiences, Service Learning Experiential Learningの頭文字から命名)プログラムのもとの[High Impact Practices \(HIPs\)](#)を展



写真4：CEAのホウ事務局長とブリングル先生の初対面



写真5：TRESは「トゥリーズ」と発音することを認識



写真3：IUPUI「RISE」は急学状況から脱却が可能と説明

開しているとの説明があり、現在のIUPUIでのサービス・ラーニングの位置づけについて理解を深めた。その後、サービス・ラーニングの推進のための学長連合「[キャンパス・コンパクト](#)」のインディアナポリスの地域支部を2022年に改組して設立された[Community-Engaged Alliance \(CEA\)](#)の[エリア・ホウ事務局長](#)に取り組みの紹介をいただいた。そして夕方には、ブリングル先生と共にSOFARモデルの開発者の1人である[パティエ・クレイトン先生](#)とZoomで対話し、改めてSOFARモデルの活用を通じた組織間関係の構築(inter-organizational relationship)が重要だと確認することができた。

### 3日目) 高校生や住民と交わる学びの場に直面

3日目は朝から[アーセナル技術高校](#)を訪問し、IUPUI教育学部の[モニカ・メディナ先生](#)から、20年以上にわたって多様な人種や経済格差などを前提とした都市部の教育環境への批判的思考のためにサービス・ラーニングを展開してきたことについて案内いただいた。その後、コカ・コーラ社の工場をリノベーションした地区

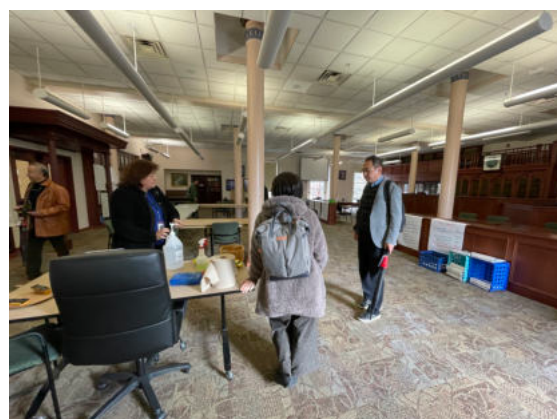


写真6：高校内の模擬法廷での授業運営の様子を体感

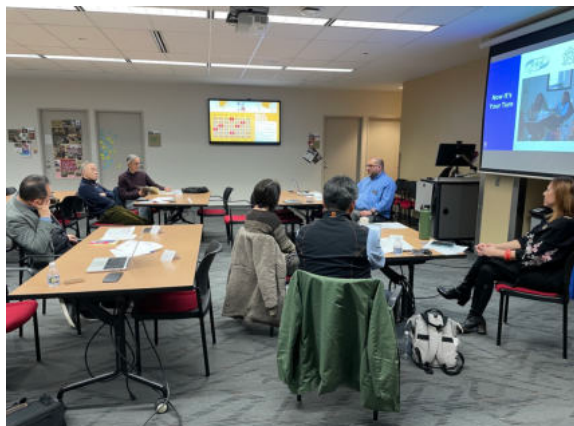


写真7：教育学部のラーニング commons での対話



写真8：スペシャルオリンピックスを目指す方の指導もを訪れ、フードコート (The Garage Food Hall) で昼食を取った後、IUPUIのキャンパスに向かった。午後には教育学部のラーニング commons にて、地域連携事業「[Collaborative for Equitable and Inclusive STEM Learning \(CEISL\)](#)」において、SOFARモデルとブルーノ・ラトゥールのアクターネットワーク理論における「Links & Knots」(Latour, 1999)、そしてタニア・ミッチェルとマーク・ラッタによる批判的サービス・ラーニング (Mitchell, 2007; Mitchell & Latta, 2020) の3つの理論的観点から、変容的な関係構築への分析・設計に取り組んでいることを紹介いただいた。そして夕方から夜にかけては、IUPUIが建物を所有しNPOが運営するフィットネスセンター「The National Institute for Fitness and Sport (NIFS)」にて、障害のある人への運動機能向上のサービス・ラーニングとして健康・人間科学部が展開している地域連携事業「[Adapted Movement Programs \(AMP\)](#)」を見学した、AMPの主任であるケイティー・ニコルズ先生と意見交換した。

#### 4日目) 大学と地域との組織的な関わりを実感

4日目は前日にインディアナポリスで起きた発砲事件により朝の予定が変更になった。当初は当初は地域のチャータースクール ([Matchbook Learning at Wendell Phillips School 63](#)) に伺いIUPUIの[Music Technology Academy](#)の取り組みなどについて懇談の予定だったが、学校が一斉閉鎖となったため、2日目のプログラムから随行いただいていたジム・グリム氏がディレクターを務めている地域連携オフィスにて、それまでの視察先に関する意見交換を行うこと



写真9：2012年にIUPUIは地域の学校との協議会を設立



写真10：iDEWにもJPモルガン・チェース銀行が支援



写真11：公共図書館ゆえ可能な日本語交流授業を見学

とした。午後は情報系の学部による中高校生向けのキャリア教育プログラム「[iDEW](#)」について[ヴィッキ・ドーアティ主任](#)から説明を受け、学生たちがアシスタントとなって相互にITスキルの向上を図っているとのことであった。そして夕方はインディアナポリス郊外の[フィッシュヤーズ地区の図書館](#)に向かい、現地駐在員の家族などを対象としたIUPUIの日本語コースでのサービス・ラーニング科目 (EALC-J 498: Individual Studies in Japanese) を見学の後、先生方と懇談させていただいた。

### 5日目) 構造的な社会問題に接近する実践を議論

5日目は筆者にとって滞在最終日だった。チェックアウトの後にIUPUIに向かい、[ヨンボク・ホン先生](#)から芸術系学部ビジュアル・コミュニケーション・デザインに関する修士プログラムの事例として、[認知症患者の介護](#)、[電動スクーターの導入による都市モビリティの向上](#)、[ラテンアメリカ移民の抑うつ防止](#)、[季節労働の農民への健康調査のニーズ把握](#)など、暗黙知の形式知化の取り組みを紹介いただいた。午後には米国内のNPO「[FHI360](#)」の支援のもとで行われたIUPUI教養学部による外国語としての英語 (English as foreign language: EFL) 教師25名向けのサービス・ラーニングをテーマとした国際ワークショップ ([Using Service Learning to Teach 21st Century Skills to English Language Learners](#)) の第7分科会 (Making the Shift to a Service-Learning Approach) に参加し、栗山先生の話題提供やブリングル先生のコメントなどを傍聴した。終了後、筆者は空港へと向かい、帰路に就いた。



写真12：サムソンで製品開発等に従事した[ホン先生](#)

### 3. SLからCEへ

今回の視察の素朴な感想は、IUPUIでのサービス・ラーニング (SL) はコミュニティ・エンゲージメント (CE) としての意義が強調されていた点である。もちろん、学生の学びと成長の方法論としてはSLである。ただし、そうした教育法を推進する上で、大学は教育を通じた社会貢献を展開している自覚と責任のもとで各種の取り組みがなされていると確認できた。そこには、1969年にインディアナ大学とパデュー大学が個別に設置していたインディアナポリス校の合併によりIUPUIとして運営してきた枠組みを解消し、[2024年秋には独立した2大学とする](#)、といった動きも無関係ではなからう。

こうした関心のもと、5日目に傍聴したワークショップの報告記事 ([2023年6月13日](#)) に目を向けてみよう。その中で、ブリングル先生の発言から、現在のサービス・ラーニングは「奉仕」の精神から「地域社会への参画と協力」への進化」の傾向にある、と記されている<sup>2</sup>。本連載[第10回](#)で紹介したアンドリュー・フルコ先生の指摘を用いるなら「ために (for) 」から「ともに (with) 」への移行である。すなわち、対等なパートナーシップが重要ということになる。

もっとも、SLからCEへの関心の移行や重点化はIUPUIだけの傾向ではないだろう。今回、2日目に紹介を受けたHIPsという概念は、2005年から2018年にかけてアメリカ大学・カレッジ協会 ([AAC&U](#)) が展開した[LEAP](#) (Liberal Education and America's Promise) キャンペーンにより「市民的・経済的の両面でより広範な社会のニーズを学業につなげられるよう学生のレディネスを育む」<sup>3</sup> ([Schneider, 2021, p.ix](#)) こと



写真13：24ヶ国から25名のEFL教師が参加した

を各大学に呼びかけられたものである。ちなみに本連載では国際サービスラーニング・地域貢献学会と訳してきた国際学会「[IARSLCE](#)」は、2001年にカリフォルニア大学バークレー校で第1回大会が開催された後、2005年に組織化され、2007年に法人化された。ここに、HIPsの概念が普及する過程で、教育法としてのSLと、その推進役となる大学が果たす使命としてのCEの双方が重視されたと見てとることができる。

#### 4. 地域と時代に向き合う意義

以上、今回は5日にわたるIUPUIの視察内容について、その全体像をまとめてみた。次回からは訪問を通じて触れた理論や実践について、個別に取り上げていく。ちなみにJSLNは、2023年10月21日に公開研究会「[サービスラーニングに関する米国調査報告会](#)」を開催する。そし

て、筆者も発表者の1人である。そのため、今回はこの公開研究会での議論も盛り込みたい。

ちなみに前回の結語において「批判的人種理論 (critical race theory)」に触れた。それに関連する事柄として、IUPUIで撮影した2枚の写真を紹介して結びとしよう。1つは5日目の昼に泉先生にご案内いただいて拝見した教養学部の中庭にある日本語コースの先生方が植樹された広島での被爆銀杏から育てられた苗木 ([2021年4月16日に植樹](#)) で、もう1つは渡り廊下 (sky walk) に掲げられた [\[Black Lives Matter\] のメッセージ](#) である。これらは、サービス・ラーニングや地域参画などの教育実践や大学の社会貢献を展開しつつ、それらの取り組みを推進する大学が、過去を見つめつつ、よりよい未来を見据えて社会的・文化的な複雑さを丁寧に紐解いていることを目の当たりにした証である。

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)



写真14: [Taylor Hall中庭のHiroshima Peace Tree](#)




写真15: [2020年にBLMのメッセージをskywalkに掲示](#)

#### 【引用文献】

- Latour, B. 1999. Pandora's hope. Essays on the reality of science studies. Harvard University Press. (川崎 勝・平川 秀幸(訳). 2007. 『科学論の存在——パンドラの希望』 産業図書)
- Mitchell, T. D. 2007. Critical service-learning as social justice education: A case study of the Citizen Scholars Program. *Equity & Excellence in Education*, 40(2), 101-112.
- Mitchell, T. D., Latta, M. 2020. From Critical Community Service to Critical Service Learning and the Futures We Must (Still) Imagine. *Journal of Community Engagement and Higher Education*, 12 (1), 3-6.
- Schneider, C. G. 2021. Making Liberal Education Inclusive: The Roots and Reach of the LEAP Framework for College Learning. AAC&U.

#### 【注】

- <sup>1</sup> Directorに「主任」と充てたのは、栗山先生がご自身で執筆の記事「[アメリカの教育現場から：地域社会との繋がりを目指す日本語言語教育 - IUPUI日本語プログラムの取り組み](#)」（一般社団法人海外日本人研究者ネットワーク、2022年5月21日）にて用いておられたことによる。
- <sup>2</sup> 原文は「current trends in service-learning, including an evolution from just "service" mentality to one of "community engagement and cooperation."」である
- <sup>3</sup> 原文は「to foster students' readiness to connect their academic learning with the needs of the wider society, both civic and economic」である。



# 接骨院に心理学を入れてみた

## 〔25〕 寺田接骨院 寺田弘志

### 自律訓練法とこりの改善（続き）

JR 茨木駅近くの接骨院が、私の職場です。

前の号では、自律訓練法とはどのようなものなのかを、佐々木雄二先生の著書を参考にして書きました。この号では、自律訓練法で私の肩こりが改善したという話を書きたいと思います。

ただ、ここで紹介するのは、自律訓練法をしたらたちまち肩こりが改善したという話ではありません。むしろ、私は自律訓練法がうまくできなくて、習得するのに長い年月を要しました。

「えっ、そんなに長くかかる話なら読みたくない」と思われたかもしれませんが、ちょっとお待ちください。私は習得するまでに長くかかったという苦勞話をお聞かせしたいわけではありません。

むしろ私のように回り道をしないためにはどうすればいいのか、何に気をつければいいのかを、これから自律訓練法を始めようとしている方や、なかなかうまく習得できないという方にお伝えしたいと考えています。

（ですから、自律訓練法が簡単に習得できたという方には、この話は必要のない話です。必要性も興味も感じられないという方は、この記事は飛ばしてください。）

## ◆自律訓練法との出会いと習得の失敗

さて、私が初めて自律訓練法に出会ったのは、高校生の頃でした。

私は、暗記科目が苦手で、記憶力不足に悩んでいました(過去形で言うと改善したように聞こえますが、今でも記憶力は良くありません。人や物の名前が出てこないことは日常茶飯事。友達や家族が昔話をしていると、よくそんなこと憶えているなあと感心することがしばしばあります。つまり忘れていくことすら気づいていません)。

ある日、記憶力不足に悩む私は、雑誌で「自律訓練法を習得すれば、記憶力が劇的に向上する」という広告を見つけました。

「自律訓練法を身に着けて、成績が上がった人がたくさんいます」

「テープに録音された暗示を繰り返し聞くだけで、自律訓練法がだれにでも簡単にマスターできます」

そういった謳い文句でした。

「成績不振に悩む友人が自殺したけれど、もし、この方法を身につけていれば、友人は自殺しなくて済んだだろう」そんなエピソードも添えられていました。

「これだ！」と飛びついた私は、父に無理を言って、決して安くはなかった自律訓練法の習得テープを買ってもらいました。

数日たって、6巻のカセットテープと説明書が届きました。

まず第1巻で、自律訓練法の標準練習の中の背景公式と第1公式を習得します。

第1巻がうまくできるようになれば、第2巻に進みます。第2巻では、背景公式と第1公式に加えて、第2公式を練習します。

第3巻で第3公式を追加。

第4巻で第4公式を追加。



第5巻で第5公式を追加。

第6巻で第6公式を追加。

6巻全て終わると、自律訓練法がマスターできているという仕組みです。

しかし私はしょっぱなから完全につまずいてしまいました。

いくらテープから流れてくる「両腕が重たい」という公式を聞いても、いくら自分の心の中で「両腕が重たい」と自己暗示をかけても、ちっとも腕が重くならないのです。

うまくいかないと焦ってしまいます。

焦れば焦るほど、背景公式の「気持ちが落ち着いている」がそらぞらしくなってきます。

すると、次第に焦る気持ちが強い疑いの気持ちになってきます。

「ほんとうにこんなテープを聞いて、記憶力が上がるのだろうか？」

「時間の無駄ではないだろうか？」

雑念も湧いてきて、余計に練習に集中できなくなります。

「お金を出してくれた父に何と言おうか？」

「地道に、単語帳をめくって繰り返し憶える方がよかったのではないか」

「楽をして記憶力を上げようとした自分が馬鹿だった」

「だまされたのではないだろうか？ ひょっとして悪徳商法？」

やがて疑いの気持ちは確信へと変わります。

「自分には自律訓練法は合っていない」

「自律訓練法には効果がない」

誰がこのテープを製造販売していたのか、今となっては分かりません。

私が高校生だったのは、1975年から79年でした。

前の号で次のように書きました。

「1960年代後半から70年代前半は、大学病院を中心に自律訓練法が普及していき、さらに、一般の診療所などにも広がっていきました。

しかし、指導技法の習得が不十分な指導者も現れるようになるなどして、弊害が生じてきました。

そこで1977年に、池見先生、佐々木先生らが呼びかけ人となって、日本自律訓練学会発起人会が結成され、会合を重ねて、1978年に第1回日本自律訓練学会が九州大学で開催されました。」

まさに、弊害が生じていた時期と重なります。

私は、指導技法の習得が不十分な人が作ったテープで自律訓練法を学ぼうとしたために、自律訓練法の習得に失敗し、「自分には自律訓練法は合わない」と思い込んでしまいました。

#### ◆ 2度も学び直すチャンスを逃す

大学に入学して、佐々木雄二先生というすばらしい指導者のゼミに入れていただいたのに、私は4年間ただの一度も自律訓練法を学びなおそうとしませんでした。

「やってもうまくいかない」という先入観があるので、興味が湧かなかったのです。

佐々木先生と出会えたのは本当に幸運でしたが、佐々木先生から自律訓練法の指導を受けなかったことは、この上ない不幸であり、一生の不覚でした。

大学を卒業して出版社に勤めてから、佐々木先生が自律訓練法を指導されている病院を訪ねたことがあります。

なんという病院だったか、記憶力が足りず、名前が出てきません。隣で診察されていた桂戴作先生をご紹介賜ったので、桂先生がお勤めの日大病院か関連の病院だったのではないかと思います。

『臨床心理学辞典』を出版できないか佐々木先生に相談に伺ったのだと思いますが、その時初めて先生に「君は自律訓練法をやったことがあるのか？」ときかれました。

私は正直に「高校生の時にやってみたのですが、どうしてもうまくいなくて」と答えました。

「じゃあ、やり方は知っているんだな」ときかれ「はい」と答えると、佐々木先生は「バイオフィードバックというやり方もあるんだよ」と、バイオフィードバックの装置の使い方を少しデモンストレーションしてくださって、それきり自律訓練法の話は出なくなりました。

あの時、「高校生の時にやってみてうまくいきませんでした。うまく習得できるコツを教えてください」とお願いすればよかったのに、ほんとうに悔やまれてなりません。私は2度目のチャンスも逃してしまいました。

#### ◆不肖の教え子だからできること

私は自分のことを佐々木先生の「不肖の教え子」と言っています。それは、謙遜からではなく、出来の悪い生徒だったと心底思っているからなのです。

でも、そんな出来の悪い不肖の教え子でも、少しは役に立てることがあるものだと思えるようになりました。

タイトルをつけるなら「自律訓練法の習得に失敗し、10年の空白を経て習得できた一事例」。そんなケース紹介が今ならできます。もう読んでいただけないのが残念ですが……。

#### ◆私は緊張しやすい

私は子どものころから、うまくリラックスできず、とても緊張しやすい質です。

保育園に通っているとき、昼寝の時間がとても苦痛でした。心の緊張が強いので、リラックスできず、昼寝ができないのです。

カーテンを閉めた真っ暗な部屋で、昼寝の時間が終わるのをじっと待つのが、とても長く感じられました。悲しいことに、それがもっとも印象的な保育園の思い出です。

その保育園には私のように昼寝のできない園児が他に2人いて、3人はいつも一カ所に集められて目を開けたまま寝かされていました。

緊張が強い人は、一定割合いるものです。

小学生や中学生の頃はそうでもなかったのですが、高校生の頃は、緊張がさらに強くなって、人前で話そうとすると、すごく上がりました。教室で立って発言をしようとする、心臓がバクバクし、膝はガクガク震えました。

成長とともに、だんだん緊張は少なくなりましたが、それでも人前では緊張しやすいほうです。

例えば、スーパーのレジで会計する、たったそれだけでも緊張します。緊張すると声が出にくくなります。

精算が終わって自然に「ありがとう」と言えるようになったのは最近のことです。

私のように緊張しやすい人は、眠ろうとしても眠れなかったり、人前でリラックスしようとしても上がってしまったりします。

緊張しやすい人がリラックスしようとしてもなかなかできません。

緊張しやすい人ほど、リラックスしにくくて、自律訓練法などは習得しにくいと考えられます。

リラックスしやすい人は、おそらくいともたやすく自律訓練法を習得でき、ますますリラックスできるでしょう。

緊張しやすい人にこそ自律訓練法が必要なのですが、皮肉なことに、私のようにうまく習得できず、あきらめてしまう人もたくさんいるのではないのでしょうか。

人生において、スポーツや勉強、仕事、人間関係など、リラックスしている方が有利であることは間違いありません。

自律訓練法が普及すると、緊張している人はうまく習得できないのに、リラックスできる人はますますリラックスでき、心理状態にさらに格差が広がるかもしれません。

#### ◆変化のきっかけ

緊張しやすい私に変化が現れたのは、社会人になって何年か経った時です。

出版社に勤めていた私は、長時間のデスクワークと著者の先生方や関係先との折衝、売上目標や締め切りに追われ、もともと緊張しやすいところにさらに緊張が加わって、肩こりや腹痛、咳に悩まされていました。

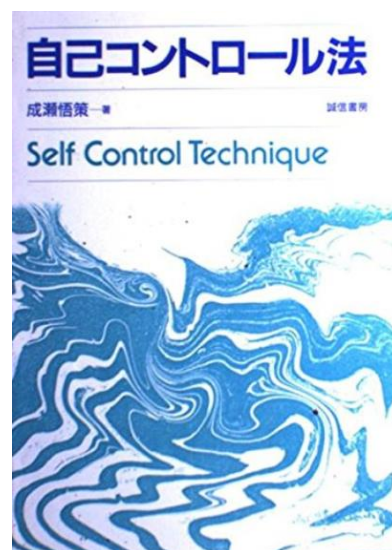
腹痛や咳は、病院に行っても原因がわかりませんでした。大学時代にラグビーで首を傷めたのが治りきらないままでした。首や肩を傷めると、眠りが浅くなるので、睡眠不足となり、余計に肩こりが改善しないという悪循環に陥りました。しばしば寝違えをして、首が回らなくなり、接骨院通いをしました。

接骨院に通っていないときは、寝転がって、背中や肩を、家内に膝や足でグリグリとけってもらっていました(手でもんでもらっても効かないくらいこっていたので、足でやってもらっていました)。

ある日「自律訓練法」という訳語を考案され、日本で初の自律訓練法の本を開発者のシュルツ氏と共著で出版された成瀬悟策先生を訪ねることになりました。

成瀬先生は、当時、九州女子大学の学長に就任されたばかりでしたので、1989年のことです。

九州に向かう新幹線の中で、



成瀬先生の『自己コントロール法』（誠信書房 1988）

という本を読んでいました。

その中に漸進的筋弛緩法が紹介されていたので、新幹線の席に座りながらそれをやってみたのです。

自律訓練法のように、自分にはうまくできないだろうと思っていましたが、漸進的筋弛緩法は思いのほかうまくできたのです。

うまくできたというのは、眠っているような、覚めているような、半覚半睡の状態になれて、明らかに心身の状態の変化が感じられたのです。それを変性意識状態（ASC）あるいはトランス状態と呼んでいいのかどうかわかりませんでした。 （以下トランス状態と書きます）。

そして初めて、手足が重い感覚や温かい感覚とはこういうものなのかと知ることができました。

このとき漸進的筋弛緩法が成功したのは、次のような要因があったからではないかと考えています。

漸進的筋弛緩法に何も期待していなかった。

新幹線の座席では、走行音や振動があり、リラックスできるとしていなかった。

横になっていなかったので、眠りに落ちてしまうことを免れた。

目の前に読まないといけない本があって、それが適度に難しく、自然とまぶたが閉じてきた。

言語的な暗示だけではトランス状態に入りにくかったが、非言語的な身体のを抜くという作業が加わることによってトランス状態に入る糸口ができた。

トランス状態や、手足の重い感じや温かい感じが理解できたたん、自律訓練法や自己催眠法も少しずつできるようになりました。

漸進的筋弛緩法でも、自律訓練法でも、自己催眠法でも、たどり着くべきゴールは同じトランス状態だからです。

私は緊張しやすいので、それほど深いトランス状態に入れているわけではないと思います。

ですから「手が上がる」という自己暗示をかけても、そんなにスッと手が上がるわけではないのですが、それでもある程度は自己暗示あるいはイメージすることで手が上がるようになりました。

実に、自律訓練法に出会ってから10年以上たっていました。

空白の10年。ずいぶんと遠回りしたものです。

ただ、遠回りだったけれど、無駄だったとは思っていません。

緊張しやすく、自律訓練法を習得しにくい人の気持ちがよくわかりますし、そういう人へのいくつかのアドバイスもできると思うからです。

#### ◆「間（ま）」の大切さ

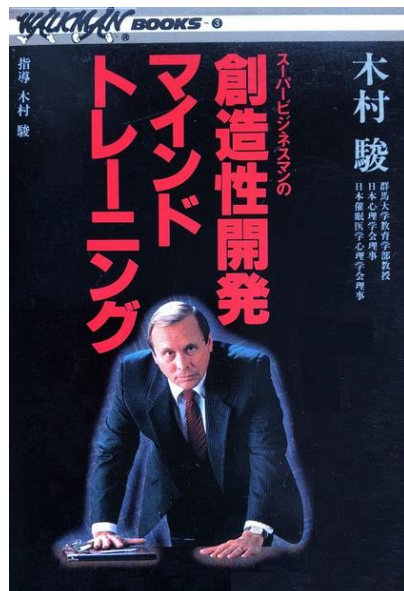
また別の日、群馬大学の木村駿先生を訪ねることになりました。

その時も伺う前に、先生の『創造性開発マインドトレーニング』という（EPIC/SONY RECORDS 1988）というテープを聞いて、マインドトレーニングをやってみました。

このテープが秀逸でした！

何が良かったのかというと、自己催眠トレーニングの際、暗示と暗示のあいだの「間（ま）」が絶妙だったのです。

暗示と暗示のあいだに適度な「間」があるので、刺激がない時は、眠りに落ちようとしています。



しかし、眠りに入る寸前でまた暗示が来るので眠りには落ちず、覚醒へと向かいます。

けれども、また暗示のない「間」があるので、眠りへと落ちていきます。そしてまた暗示で眠りは阻止されます。

こうやって覚醒と眠りの間を行ったり来たりするうちに、覚醒でも眠りでもない、半覚半睡の状態、トランス状態になることができます。

高校生の頃に聞いた自律訓練法のテープには、暗示と暗示のあいだに「間」があまりありませんでした。

暗示を繰り返しかけ続けるというのは、一見効果的なようですが、自律訓練や催眠の場合、かえって逆効果なのです。あまり暗示を繰り返すと、トランス状態に入ることができなくなり、場合によっては覚醒してしまいます。

#### ◆ストレッチングも導入に役立つ

その後私は、漸進的筋弛緩法だけでなく、ストレッチングをしたあとで手や足の重い感じや温かい感じが出やすくなることに気が付きました（佐々木先生もストレッチングを利用されていたようです。前々号に記載）。

心と体の緊張は相関が強いので、体が緊張していると心も緊張します。

一方、体が弛緩すると、心も弛緩します。

ストレッチングも、グイグイ力を入れて体を伸ばすのは良くありません。力を抜いて、自分の体の重みなどを利用して、無理のない範囲で軽く伸ばします。

痛くなるまで伸ばしたり、痛みが出る方向に伸ばしたりしてはいけません。

そして、固くなった筋肉が伸びた感じに注意を向け、伸びた感じを味わいます。

ストレッチが終わると、筋肉が弛緩して脱力できることで重い感じが現れやすくなり、血流が増えることで温かい感じが現れやすくなります。



## ◆心理療法の仕事で自律訓練法を使う

出版社を辞めてから、心理療法の仕事に就きました。不眠や対人緊張で困っていらっしゃるクライアントさんには、初回面接で自律訓練法を練習していただくことがよくありました。初回は聞き取りが主で、アドバイスすることがあまりないので、かわりに汎用性のある自律訓練法を憶えて帰っていただいて、気に入ったら、あとは自宅でやってくださいねというスタイルでした。

緊張の強いクライアントさんは暗示にはかかりにくい傾向があるので、私なりに自律訓練法をリメイクしています。

まず、簡易な漸進的筋弛緩法やストレッチングを導入時にさせていただきます。

面接時間は限られているので、簡略化した方法になります。漸進的筋弛緩法を使う場合は、手と腕に5秒くらい力を入れていただきます。そして「手と腕の力を抜いてください」と伝えます。そして力を抜いた感覚を憶えていただきます。他の部位は力を入れていただくのは省略し、その部位に注意を集中して力を抜いていただきます。

肩→首→あご→舌→目→顔→頭→背中→腰→両あしとゆっくりお願いしていきます。舌や目など、普段力を抜くことを意識しない部位の力を抜いていただき、力を抜くことに気が付いていただくようにします。

ストレッチングを使う場合には、座っている椅子の座面などをつかんでいただき、「頭を右に倒してください」→「元に戻して左に倒してください」→「元に戻して前に倒してください」・・・と頭を横や前後にゆっくり倒して首や肩、腕の筋肉を伸ばしていただきます。

このような導入をすると、筋肉が弛緩し、血流が良くなって、手や足に少しは重い感覚や温かい感覚が現れてきます。

「手や足に注意を向けてください。手や足に重たーい感じや温かーい感じが現れていませんか？ ジーンとする感じとか、トクトクと心臓の拍動が伝わってくるような感じかもしれません。そういう感じがしていたら、その感覚に注意を集中してください」

私の場合、そこからは第1公式と第2公式をミックスしたような暗示を使います。

重いとか温かいとかいう言葉は使わず「その感覚」と表現しています。人によってトランス状態で現れる感覚は同じではありません。私自身「重い」とか「温かい」と言われても、ピッタリこないとかしっくりこないとか、重いとか温かいとかもあるけれどももう少し別の要素が加わっているような感覚に思えました。それで、あえて限定せずに「その感覚」と呼ぶようにしました。

また「その感覚」でまとめれば、時間の節約にもなります。

そして木村駿先生から学んだ「間」をしっかりと暗示と暗示のあいだに入れます。

「注意を集中していると、その感覚がだんだん強くなってくる」

(間)

「その感覚がだんだん強くなってくる」

(間)

「その感覚がだんだん広がってくる」

(間)

「その感覚がだんだん広がってくる」

(間)

ただ、重いとか温かいと言うよりも、感覚が強くなるとか広がると暗示した方が、トランス状態は深化すると考えられます。

クライアントがトランス状態に入れたようでしたら、消去動作をしていただきます。

第3公式から第6公式へは進みませんが、心身の弛緩を得るためには、ここままで十分だと思います。

佐々木先生に怒られるかもしれませんが、「気持ちが落ち着いている」という背景公式は、省略しました。

一般的な人には抵抗なく受け入れられるかもしれませんが、気持ちが落ち着かないから相談に来ているクライアントさんの場合、「気持ちが落ち着いている」といきなり言われると、心理的な反発を生じてしまうかもしれないからです。高校生の頃の私がそうでした。

#### ◆不眠症の人への自律訓練法

面接中は座って自律訓練をしていただきますが、不眠症の人には自律訓練法のテープを作って、自宅で寝る前に布団に入ってテープを聞いていただきました。

片面60分なので、吹き込むのに時間がかかりますが、成績は良かったと自負しています。

寝た姿勢では体の重みを使ってストレッチすることができないので、漸進的筋弛緩方法を導入に使います。時間は十分あるので簡易な方法ではなく、フルバージョンで導入に入れてもよいでしょう。

うまくいくためのポイントは2つあります。

1つ目のポイントは「リラックスする練習をするためのテープ」と伝えて聞いてもらうことです。

決して「眠るためのテープ」とか「不眠症が治るテープ」と言って渡してはいけません。

クライアントさんの期待は大きくなり、一生懸命聞いてしまいます。この寝よう寝ようとする努力が、不眠症を治りにくくさせているのです。

2つ目のポイントは「間」を十分にとることです。面接室で自律訓練をするときは、眠ってしまわれない程度の「間」で暗示をかけなければなりません。不眠症の方に渡すテープの場合は、眠ってしまっても構わないので長めに「間」をとります。

2回目の面接では、「リラックスする練習はうまくいきましたか？」と質問します。すると、たいていは「途中で眠ってしまって最後まで聞けませんでした」という答えが返ってきます。「それはいけませんね。引き続き練習してください」と言って、日常生活や人間関係に話題を切り替えます。

この練習はパラドックスになっていて、成功すればクライアントは自律訓練法でトランス状態に入れるようになることが期待できますし、失敗すれば眠ってしまいます。いずれにしても大抵は何回かの面接で「最近眠れるようになりましたから」と終了になります。

#### ◆自律訓練法で肩こりがなくなった

会社勤めの頃はガチガチの肩こりで辛かったのですが、漸進的筋弛緩法やストレッチングを組み合わせる自律訓練法をするようになってからは、あまり肩こりを意識しなくなりました。

柔道整復師になり、自分で首や肩を治せるようになってからは、さらに体は楽になりました。

仕事が忙しかったり、ゴルフの練習をしたりすると、たしかに筋肉疲労は出てくるのですが、電気治療などをおけば日常生活に差し障りありません。

#### ◆緊張しやすく自律訓練法がうまくできないという人へのアドバイス

催眠療法の第一人者でいらっしゃる斎藤惇正先生との会話です。

「一番暗示をかけにくいのはだれだと思う」

「うーん。疑り深い人とかですか？」

「それは自分。自分に暗示をかけるのが一番難しい。ある程度、権威がある人に暗示をかけてもらうほうが暗示はかかりやすい」

「そうなんですね」

「ところで私が暗示をかけられなかった人が過去に一人だけいる。だれだと思う？」

「ええー？ もしかして先生ご自身ということですか？」

「違うよ。うちの奥さん」

「ブツ」

「うちでだらしがないとこ見られてるからね、権威もへったくれもありゃしない」

後半は先生のジョークですが、自分で自分に暗示はかけにくいというのは分かります。

自分には権威を感じることはないでしょうし、眠りそうになればなるほど、自分に暗示をかけるのが難しくなります。

やはり、指導技法に習熟されたセラピストに習うというのが一番の近道ではないでしょうか。

それが無理なら、自分に合った先生の録音を聞くのが良いでしょう。今なら YOU TUBE などでも、見つけることができるのではないのでしょうか。

手間はかかりますが、自分向けに暗示を録音して自律訓練をするのも良いでしょう。

その際、自分にじっくりこない暗示を省略したり、暗示を自分に合いそうな表現にアレンジしたりしても良いでしょう。

暗示と暗示の間には「間」を、眠ってしまわない程度にしっかりと取りましょう。

自宅で横になって練習すると眠ってしまうという人は、座って練習すると良いでしょう。

それでも眠ってしまう人は、乗り物とか図書館とかで練習すると良いかもしれません。

導入部分に漸進的筋弛緩法やストレッチングを入れてみましょう。

過大な期待は止めましょう。

例えば、記憶力や成績。少しは上がるでしょうが、劇的に上がるものではないと心しておきましょう。期待しすぎると失敗します。

性格や人間関係も改善はすると思いますが、持って生まれた緊張しやすさなどベース部分は大きくは変わらないでしょうから、うまく付き合って行動変容していきましょう。

一生懸命やりすぎではいけません。テキトー、ホドホドが大事。頑張りすぎると緊張します。

焦りは禁物。私のように10年以上かかることもあります。すぐには習得できないこともあると心しておきましょう。焦るとかえって習得しにくくなります。

私の経験が、これから習得する人やなかなか習得出来ない人、だれかの習得を助けようとする人の参考になれば幸いです。

ではまた

## 現代社会を『関係性』という観点から考える

②⑥ 「今の社会」に対する若者の不安に、大人としてどう向き合うのか

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦 恵子

連載 14 では『「開く」ことと「閉じる」こと』について書かせていただきました。

その後、連載 15 では『つながりが支えるところ』と題して、我意を通し続けた結果「閉じる」生活となり社会的孤立に至り、心身状態の悪化を招いた高齢者（単身生活者）の事例を紹介しました。連載 16 では、連載 14、15 の流れを引き継いで、『「見える」ことと「見えない」こと』という切り口から、現代社会を関係性という観点から考えてきました。それを受けて連載 17 では、これまで述べてきたことを踏まえ、「地域社会」との「関わり方」を考えるというタイトルで、まさに「地域社会」との「関わり方」を私なりに考察してみました。

つまり、「地域社会」で生きるということ、について考えてきたともいえます。また、現代社会においては、（望まない）「孤立」「孤独」が問題となっています。支援機関とつながらないまま命を落としてしまうような事態になったり、拡大自殺的な事件が発生する例もあります。例えば家族介護が行き詰ってしまった上での介護殺人、子育てに悩んだ末の子殺しなどがその例であると言えます。これに関しては連載 19 で「自分は誰かとつながっている」という感覚があるかということというタイトルで問題提起をさせていただきました。連載 19 回では「自分は誰かとつながっている」という感覚を持つために私が必要だと痛感している『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽について、連載 20 では、『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽というタイトルで、コロナ禍の中を生きていくうえでの関係性について、連載 21 では、Society から Home へ矮小化していく社会について述べさせていただきました。

連載も 5 年を超え、コロナ禍はじめ連載開始時と社会情勢は大きく変化しています。私自身も、自身の専門性の殻に閉じこもることなく、業務上・業務外での連携において学んだこと、触発されたことをこの連載原稿に落とし込んでいきたいと考えています。

連載 23 では「自助、共助、公助」の他に、制度が既存のものとして含んでいる「家族助」についてというテーマで、現在議論されている地域包括ケアシステムの在り方について私論を述べました。

連載 24 では自分が「知っている」だけの世界で生きることの危うさというタイトルで、私自身が実際に直面したり間接的に関わったことをベースに、「知っている」ことだけの生活で生きるということに含まれる一種の「危うさ」、「知らない」ことが「意識しない排他性」につながるなどについて私見を述べさせていただきました。

た。

連載 25 となる今回は、「知らないことが不安や排除につながる」ということをテーマで私見を述べたいと思います。

連載原稿として一定の一貫性は保持したいと考えており（現代社会における関係性に関する考察という観点を大切にすることが主目的）、冒頭でこれまでのテーマを振り返ることが必要と考えており、連載 14 以降では、これまでの連載をまとめる短い文章を記載していることを御了解ください。

## 1 今の社会は若者にとってどう映っているのか

私はこの職について比較的早い時期から、学生の方などに更生保護や刑事司法の話をする機会に恵まれました。昨今、特にコロナ禍が収束の方向に向かい質疑応答がしやすい対面型のゼミや授業形態に戻るようになった頃から、ゲストスピーカーを務める機会が増えるようになってから、刑法犯認知件数が 19 年連続で低下している（令和 4 年版犯罪白書）にも関わらず、次のような質問を受けることが増えたと感じています。これまで類を見ない質問でもあります。

その内容は、

○自分はどんな犯罪の加害者になってしまうおそれがありますか。

○犯罪の加害者にならないためにはどうすればいいですか。

といったものです。

これまでも、例えば、電車内など逃げ場がない状況での放火事件、通り魔事件などが大きく報道されると、いわゆる体感治安の悪化といった現象が見られることもありました。「自分が被害に遭うかもしれない」という恐れを背景としたものであり、「被害に遭うのが怖い」というという感想も耳にしました。

また、私は平成 9 年に薬物依存症回復支援団体の活動の一環として、薬物依存電話相談を立ちあげていましたが、薬物を使っていた（らしい）人の犯罪が報道されると、「うちの家族が同じようなことをおこすのではないか」という不安を訴える家族からの電話が増える傾向にあったことを記憶しています。

しかし、先述のような質問が、世間一般で優秀と評価される大学の学生から発せられることについては、違和感が拭えないでいます。

ただ、彼らの話を落ち着いて聞いてみると、「これは犯罪を犯すことへの不安というよりは、これから自分が出ていく社会全般に対する不安なのだ」と感じるようになりました。

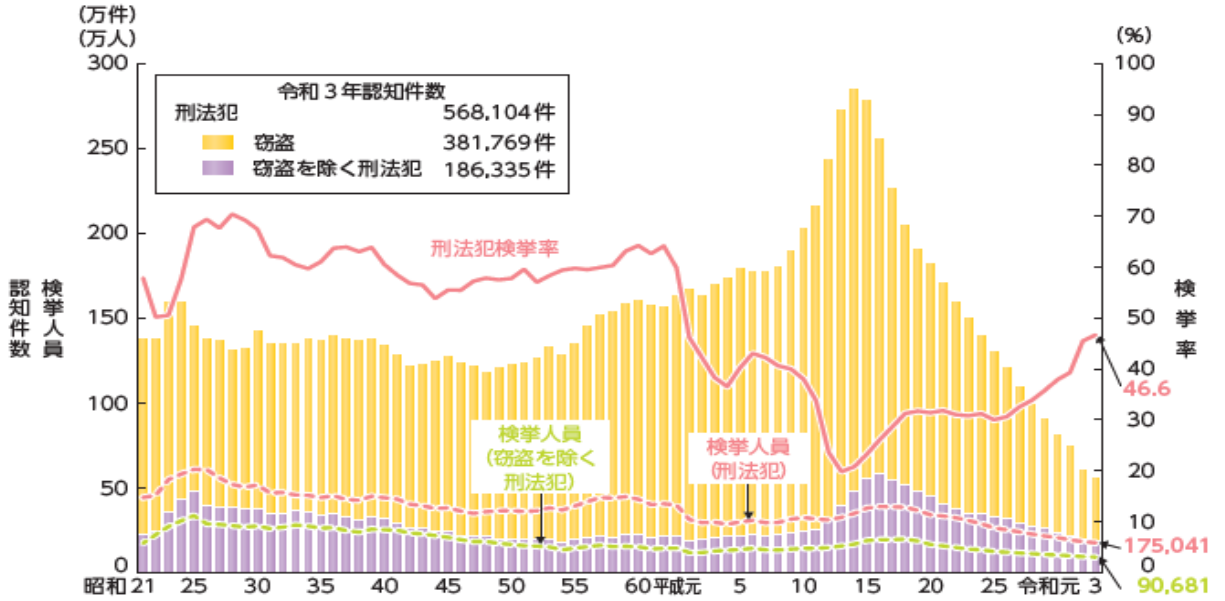
参考までにいくつかのデータを提示します。

**報告者注：刑法犯認知件数の推移（出典：令和 4 年版犯罪白書 3 ページ）**



(昭和21年～令和3年)

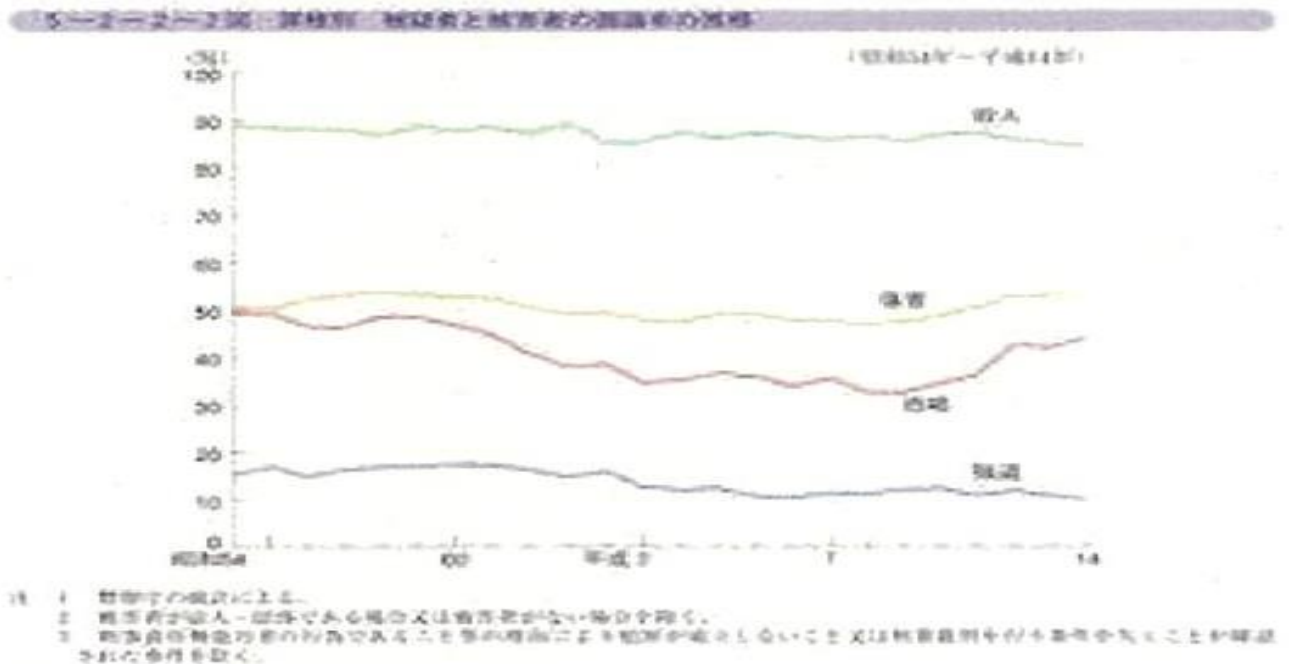
① 刑法犯



刑法犯認知件数の大幅な減少がこのデータからも見て取れます。また、犯罪の多く（7割程度）は窃盗犯（黄色部分）で締められている事が分かります。

また、無差別殺傷事件が報道されると、殺人事件とはそういったものだと思われる傾向もありますが、殺人は実は対面率が高い犯罪です。それを示すのが下記のデータです。

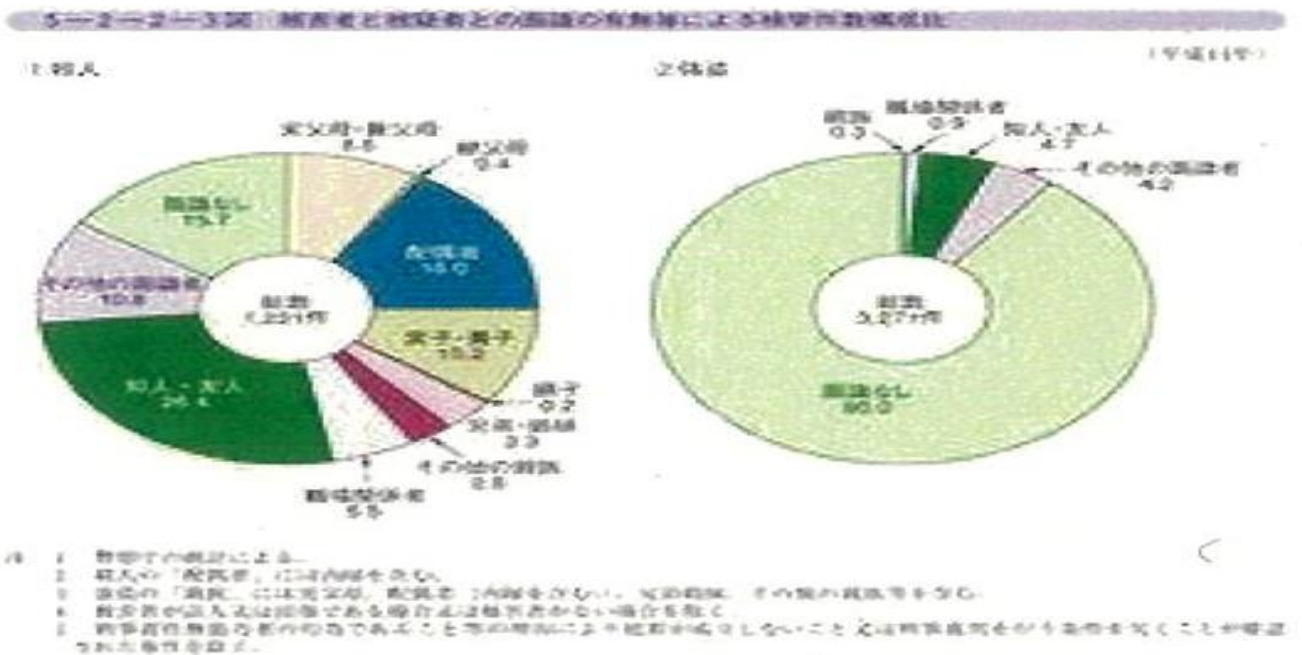
罪種別 被疑者と被害者の面識率の推移 (平成15年版犯罪白書)



## 被疑者と被害者の面識（平成 15 年版犯罪白書より引用）

犯罪はその材種によって、被疑者・被害者間の親疎の程度に差があり、殺人は動機犯罪と呼ばれ、被疑者・被害者間に葛藤や利害相反等密接な関係があって行われることが多く、面識率（被害者に占める面識ある者（親族を含む。）の比率をいう。）が極めて高いのに対して、強盗は、被害者と早退して金品等の奪取を行う場合が多く、その性質上、面識があっては捜査機関に検挙される事態を招くこととなるため、面識率は極めて低い。傷害、恐喝等殺人と強盗に隣接する犯罪は、その中間的存在であって面識がある場合もあればない場合も通常考えらえるところである。下記の図はこれら犯罪の面識率の推移を見たものであるが殺人は面識率が 80%を超える高率であり、強盗は 10%台と低く、傷害は 50%前後、恐喝は 30 ないし 50%の間で変動していることが分かる。

下記の円グラフは、殺人と強盗の平成 14 年の検挙事件について、面識の有無・被害者から見た被害者の関係別の構成比を見たものである。殺人は、親族関係にある被害者が 41.6%、知人・友人・職場関係者が 31.9%を占め、いわゆる通り魔のような面識なしの事件 15.7%。また、強盗は、面識なしが 90.0%を占め、面識ありの中では友人が多く親族は極めて少ない（平成 15 年版犯罪白書から引用）。



## 2 一見恵まれているように見えても、先行きの見えなさと生きる不安

コロナ禍まただ中（緊急事態宣言が発せられ、小中学校が休校となった令和 2 年春等）に比較すると、新型コロナウイルス感染症が 5 類になるという動きとともに、社会の中での制限はかなり緩くなり、マスクの装着を含め自由度が高くなったように思われます。

全校休校や様々な制限のある学生生活が彼らにとってはこれまで体験したことのないストレスになっていたことは想像に難くありませんし、オンライン授業に馴染めない子ども、「ステイホーム」などほど遠い家庭環境の子どももいたと思います。

そして、コロナ禍が少しずつ収束し、大学もオンライン授業から通常の教室形式に切り替わっていくなかで、今度は全ての学生がそれにすんなりと適応できるのかという点では、学生時代などはるか昔の私自身でも、これからどのようにリアルな人間関係を築いていくのか、そうした仲間集団の中でどのようなふるまいをするのかということに戸惑う学生が一定数出るであろうことは想像に難くありません。

そしてまたコロナ禍は、エッセンシャルワーカーへの称賛や助け合いなどが行われるという「美德」の裏側で、それが先行きが見えない災厄であるだけに、差別や分断も発生しました。そしてそれはコロナ禍特有の特殊な現象ではなく、社会というものがコロナをきっかけに見せた暗部であったとも考えられます。

そうした中で発生したのは、特殊詐欺の中での新しい類型ともいえる給付金詐欺などでした。非常に緻密な犯罪集団で構成され、高額のアルバイトを提示され、そして個人情報握られて逃げ場もない「受け子」などのリスクの高い役割。報酬をまともに得られるがないこともあります。

そしてここで登場する「大人」は、若い未熟な自分たちを、犯罪の手段、使い捨ての駒として使い捨てるような存在です。社会の多くの人々が地道に善良に生きていたとしても、そうした大人の存在が大きく報道されたり、指導の一環で行われる注意が「恐怖に訴えるような指導」（スケアードスケアート：スタントマンを使って、事故の場面を再現し、安全運転を促すようなもの）に見えるとき、それは背景に「大人」「社会」への不安があるといっても過言ではないと私は考えています。

### 3 では、どうするのか

リアルな社会での傷つき、あるいはリアルな社会での傷つきに対するおそれなどを少しでも癒やしていくのは、様々な意見があるところとは思いますが、やはりリアルな社会における関係性だと私は考えています。

そしてそれは必ずしも、家族や親友、パートナーといった親密な関係だけではなく、日常生活圏（御近所の方々）とのちょっとした挨拶などでもよいのかと私は考えています。

「声のかけあい」が「気のかけあい」となり、例えば具合が悪くなった人が早期に発見され事なきを得るといったこともあります。なによりも、声をかけあう身近な関係があつてこそ、人は孤独ではないということが実感できるのだと考えています。

孤独でいたくない＝親密なパートナーや親友を探す、という考え方を想起する向きもありますが、実は、生活の場面で、できる限り多くの人と、パートナーや親友ほどではなくても、「薄くそして数多く」繋がっておくことが必要なのだと私は考えます。

昨今増加傾向にある子ども食堂を例にとっても、実際に地域のニーズを汲み上げ地域住民を巻き込みながら、持続的な活動を展開しているところは、子ども食堂をただ開設するだけではなく、子ども食堂などにつなげるべきニーズのある子どもの情報を持っている学校や自治体との連携を密にし、支援にアクセスしづらい家庭に、学校の担任の先生などから案内がなされるという仕組みが構築されています。

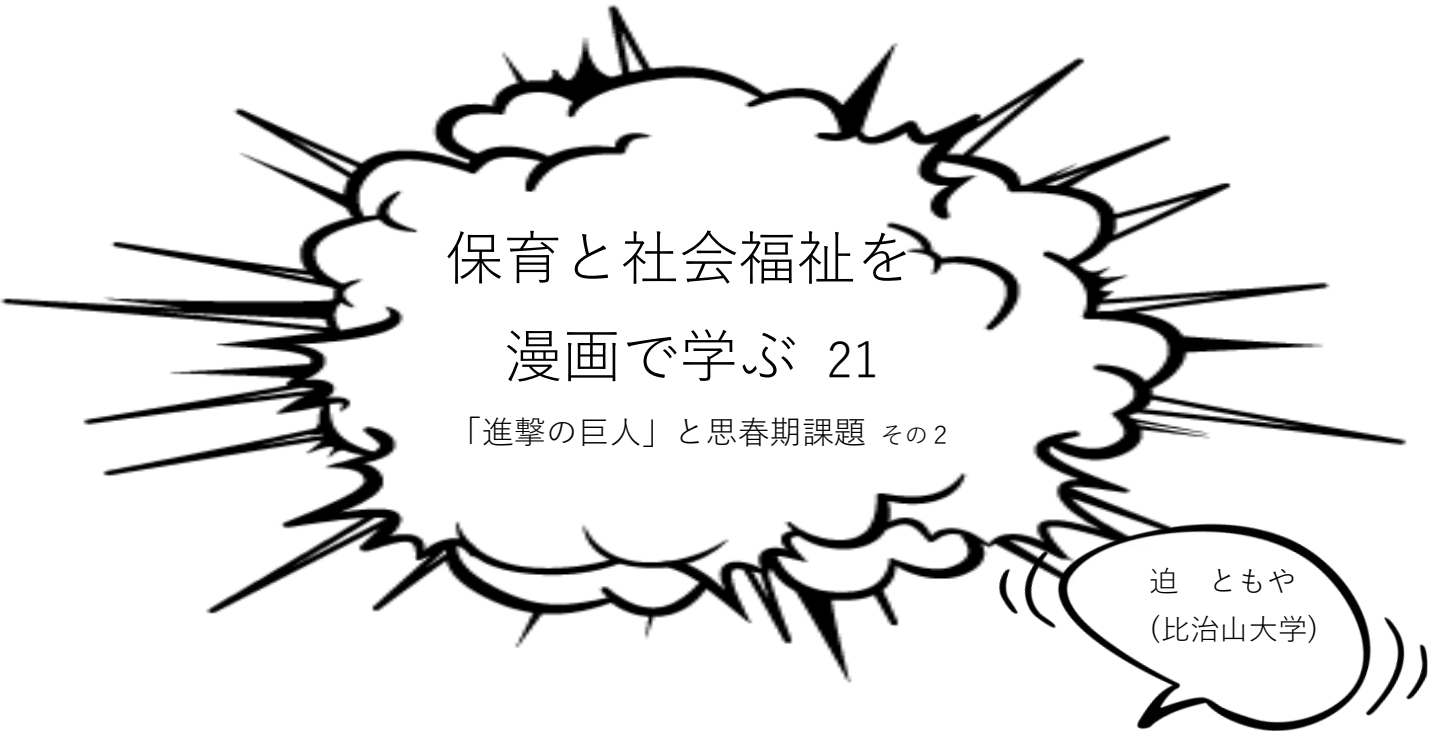
また、子ども食堂という場に出てくることすら辛いという御家庭は、孤立している危険性が一層高いとして、食材や日用品を配布しながらの声掛けなども行われていました。私自身も、こうした活動の支援の端につながることで、多くの学びを得ています。

若い世代の様々な困り事（孤立、貧困、ヤングケアラーなど）に対して「支援」を行うシステムも構築されてきました。ただ、彼らにとっての本当の回復は、支援をする人と受ける人という関係性の枠にはまるだけではなく、そこで信頼できる大人との出会いを得ることや、それを通して（中には信用できない大人もいるかもしれないけれど）多くの大人が自分たちのことを考え、そしてそのための社会づくりに汗を流しているということを感じてもらいたいと考えています。

若者の今の悩みや困り事を、今の社会に共に生きるものとして共有できるかどうか、そして自分の大人としての姿が、彼らにとって信頼や信頼回復に値するものであるか、我々大人も姿勢もまた問われているものだと考えています。

#### 引用文献

犯罪白書（平成 15 年版及び令和 4 年版） 法務総合研究所



# 保育と社会福祉を 漫画で学ぶ 21

「進撃の巨人」と思春期課題 その2

迫 ともや  
(比治山大学)

神話めいた多義的な漫画作品「進撃の巨人」には、思春期の課題が描かれているのではないかと考えて書いてきた書評エッセイ。前編では摂食障害や引きこもり、大人への忌避感が描かれているのでは、と検討してきました。今回は後編をお届けします。

--

意思を奪われたように、無表情で人類を喰う巨人たち。かれら「無垢の巨人」の他に、人類と会話できる巨人がいた。全身が毛で覆われた「獣の巨人」は人類に話しかけ、他の巨人を操る能力を持つ。特別な能力を持つ九人の「知性巨人」がいることが分かり、巨人化できる能力を持った少年エレンはその一人だと明らかになった。「知性巨人」の能力を得るためには、エレンらエルディア人が「無垢の巨人」の脊椎液の注射を受けて巨人化し、「知性巨人」化できる者を喰えばよい。エレンはそのことを知る父から注射を受け、巨人化して父を喰ったのだ。父は「進撃の巨人」と「始祖の巨人」の能力を得ており、それをエレンに引き継がせた。しかし父を喰ったことは、エレンの記憶から失われていた。(第9巻～第21巻)

--

赤ん坊は自分を世話してくれる母親を、自分の延長のように捉えます。「親を喰い殺して巨人化の能力を得る」という設定には、精神分析などで語られる、乳児が母親を取り込んで成長しようとする願望が表れているようにも読めます。しかし、この物語では喰われたのは父親でした。喰ったり喰われたりする一方で、巨人化の能力が受け継がれたり奪われたりする様子は、現実社会の権力闘争のようでもあります。

--

エレンらエルディア人はかつて巨人化の能力を持つことで世界を征服したが、政治的な駆け引きと戦争の結果、覇権を失った。そしてエルディア人は、あの壁の中で生きる人々と、壁の外のマーレ国において、差別的な扱いを受けて生きる人々に分かれた。壁の中のエルディア人は王による洗脳を受けて、巨人を恐怖の対象として生きることになった。また壁の外のエルディア人はマーレ国の教育を受けて、差別的待遇に甘んじた。マーレ国は七つの巨人を従えており、壁の外からきた「知性巨人」らの目的は、エレンがもつ「始祖の巨人」の力を奪うことだった。(第21巻～第25巻)

--

社会が共有する「大きな物語」は、多くの人々が正しいと考えるから「正しい」と思えるものです。歴史や宗教はそのような価値観の土台を私たちに与えてくれます。ですが、それは対立する立場から見れば、全く逆転した見え方ができるものになります。例えばユダヤ人を忌み嫌い、かれらの絶滅を企てたヒトラーが、実はユダヤ人だったとしたら、そのことに気づいたとき、彼はそれまでの自分の信念や言動をどのように感じるでしょうか。アイデンティティが混乱し、これまでの言動に正反対の評価を下さずにはいられないのではないのでしょうか。

「進撃の巨人」の後半では、歴史と記憶の不安定さ、そして民族や戦争といった問題が盛り込まれます。様々な立場の登場人物が、それぞれの経緯と必然性を持って巨人や祖国を巡る戦いに加わります。登場人物それぞれの事情を知ると、敵が味方のように見え、味方が敵のように見える場面が頻発します。人間の数だけ正義があり、視点が変わるとその正義は正義で無くなります。

「進撃の巨人」では集団の歴史や個人の記憶については、前提が変わればどうとでも解釈できる、真実性が不確かなものとして描かれているようです。

その反面、民族や血統、そして身体的な衝動は確かなものとして描かれていないのでしょうか。巨人化する能力は親から子へ血統で引き継がれていますし、エレンの行動原理にあるものは身体的な衝動のようです。

身体的な衝動や親子の血のつながりは、はたして集団の歴史や個人の記憶よりも確かなものなのでしょうか。実際にはそうではありません。血統は記録や記憶の改ざんがあり得ますし、身体的な衝動や反応をどのように意味づけるのかは、人により、場合によって変化します。

ですが、思春期のただ中にいる人にとっては、まさに身体的な衝動こそが確かなものだと感じられるでしょう。大人たちに反抗するとき、大人が信じている社会規範や価値観に対する意味づけは変化します。幼少期には大人の言うことを素直に信じていたはずなのに、今度は大人や社会の何もかもがおかしいと感じるようになります。思春期の人には、「自分は大人から洗脳されていた」と考えるかもしれません。そこで頼りになるのは、身体に漲るマグマのような衝動だけなのです。

--

物語の終盤では、「獣の巨人」ジークが、エレンの異母兄弟であったことが明かされる。ジークはエルディア人の「安楽死計画」を企てていた。巨人化できるエルディア人がいる限り、その能力を求める戦いが起こる。エレンの身に宿る「始祖の巨人」の力を使ってエルディア人が子孫を残せないようにすれば、やがて世界から「巨人」はいなくなる。ジークは、「エレンは父から洗脳されてマーレ国を敵視している」と考え、エレンを説得して「安楽死計画」を進めようとする。エレンとジークは接触し、二人は「始祖」の少女ユミルが閉じこもる異次元空間、「座標」に移動する。

「始祖」ユミルは、かつてエルディア人の奴隷だったが、偶然に巨人化の能力を手に入れた。少女だったユミルは奴隷のまま王と結婚させられ、エルディア繁栄のために「座標」で2000年に渡って「巨人」を作り続けることとなった。「始祖」ユミルに命令を下せるのは「始祖の巨人」の力をもつエレンだけ。

しかしエレンは、ジークの説得を聞かず、ユミルに「誰にも従わなくていい。お前が決める」と告げる。ユミルはかつて人類を守る壁を形成していた「超大型巨人」たちを解き放ち、全世界を踏み潰す「地ならし」を起こさせる。(第28巻～第31巻)

--

「進撃の巨人」の冒頭では、人類が壁の中に閉じこもっているという設定でしたが、終盤では巨人を生み出した「始祖」の少女ユミルが「座標」に閉じこもっていたことが明らかになります（なお、始祖ユミルは、物語の前半で巨人化した皮肉屋のユミルとは別人です）。始祖ユミルはかつての王に命じられたまま、閉じられた世界で生きており、目に光がありません。冒頭で壁の中に生きる人類と、終盤で「座標」に閉じこもるユミル、冒頭で外の世界から現れた巨人と、終盤で「座標」に到達したエレンの姿は重ならないでしょうか。筆者には、思春期の不安や恐怖心から閉じこもり、幼少期に信じた大人の教えを守り続ける子ども（人類/ユミル）と、閉じこもる子どもに接触しようと試みる援助者（巨人/エレン）のように見えます。

さてジークの「安楽死計画」はエルディア人の絶滅計画、エレンと「始祖」ユミルが起こした「地ならし」は全人類の絶滅計画です。ともに極端な危険思想であり、現実世界で実行すればテロリストにならざるを得ません。物語の終盤では、人類絶滅を目指して姿を変えた「進撃の巨人」エレンが、「地ならし」を止めようとするエルディア軍・マーレ軍・義勇兵や「知性巨人」達と戦います。攻撃的な衝動をフルオープンにしたエレンですが、表情はうつろです。

エレンは自らを「全人類の敵」と位置づけたようです。実は「全人類を救いたい」という思考と「全人類の敵になりたい」という思考は、ともに誇大な自己像をコントロールできていない点が共通しています。自己評価は高すぎても低すぎても危険です。それは他者との関係のアンバランスさを示すものだからです。私たちの大多数は、「全人類の敵」にも「救世主」にもなれません。ですが、思春期のプロセスに苦しむ人は、「世界を破壊しつくしたい」といった幻想を持ってもおかしくありません。現実には、実際に周囲の人や物を攻撃すれば、周りから危険人物扱いされて自分の居場所を失ってしまいます。破壊や攻撃が満足につながるのは、衝動性が高まったひと時だけなのです。

幼兒的な万能感の世界には、自分と対等な他者はいません。自分の延長である家来か、邪魔をする敵しかいません。その状態から離れて、対等な他者との関係をもつ地平に立つために必要なことを、ふたたび精神分析をヒントに考えると、それは他者から万能感の根源を「去勢」されることと言えるでしょう。「去勢」とは「あなたは万能ではない」ということを突き付けられ、それを受け入れるということ。それができなければ、他者との対等な関係をもつことはできません。「去勢」に失敗したら、万能感を引きずって生きることになります。

万能感を持ったままで大人になることは、一見すると自分中心で楽しいように思えるかもしれませんが、実はそうでもありません。家来はいつ裏切るかわからないので、本当は敵だらけなのです。万能感と疑心暗鬼の不安感はコインの両面であって、冷静な判断を危うくします。

「去勢」に失敗した場合に起こりうる、危険な結末のひとつは、現実世界での居場所を失ってしまうことです。「進撃の巨人」の終盤では、こうした「去勢」をめぐるスリリングなやりとりが描かれているように思われます。

乳児は母親を取り込もうとする欲望をもつといいました。一方で「去勢」は、父親がはじめての他者となって行う象徴的な行為です。「進撃の巨人」では少年エレンが喰い殺したのが父親でした。兄ジークもエレンの説得に失敗します。彼を「去勢」できるのは誰なのでしょう。

思春期の爆発的な衝動は、多くの人にとって10代後半には収まり、大人社会への適応が進んでいきます。ところが、たまに収まらない人たちがいます。かれらは創造性豊かにアーティスト活動をしたり、ビジネスの世界で起業をしたりします。

自己愛と攻撃性が強く、自分と周囲の人との境界線が充分につかめず、他者の人生に過剰な介入をしたり、あるいはそうした介入をさせるために他者を誘惑したり、理解を求めるような姿勢を示したかと思えば、突然手のひらを反すように関係を断絶したりします。バランスが悪いのに、突出した才能を見せたりすると、注目とともに羨望や反感を集めて攻撃対象になってしまうことも少なくありません。

母親の取り込みと父親からの「去勢」は乳幼児期の課題ですが、その時期だけでは片付かない課題は、先送りされて思春期に清算を求められます。衝動のままに非行に走るなどの逸脱行動をすると、警察官や教師などが父親にかわって「去勢」することになります。変な言い方ですが、ここで「去勢」をしてくれる他者に会うことで、人は社会化されて「丸くなっていく」のです。

一方でパーソナリティに課題がある、あるいはパーソナリティ障害をもつ人たちの多くは、思春期頃からその特徴を示し始めます。かれらは周りが「去勢」に失敗したのか、あるいは本人がその機会をうまく切り抜けてしまったということではないでしょうか。そうした人たちがアートやビジネスのような活躍の場が得られない場合には、犯罪者になったり、精神病を患ったりすることがあります。いわゆる「先生業」の人たちの中には、周りが「去勢」に失敗したのに本人の能力が高いために、現実の居場所を得てしまった人たちが、一定程度います。専門分野では高い成果を上げられるのに、実生活ではハラスメントや馬鹿げた反社会的な行動によって人生を台無しにしてしまうことがあります。

「進撃の巨人」の世界が、そのままパーソナリティ障害の世界だと言いたいわけではありません。ましてや作者について断定的なことを書く意図は全くありません。ただ筆者の視点から捉えた「進撃の巨人」の世界には、思春期の人たちの心持が鮮やかに描かれているように思われること、そしてその特徴の延長上には、パーソナリティの課題や障害を持つ人の特徴があると考えているにすぎません。多義的な作品は様々な解釈が可能です。あなたはエレンたちの物語をどう読まれるでしょうか？

紹介作品：

諫山創（2010-2021）『進撃の巨人 1～34 巻』講談社

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

※ご感想・ご意見などは筆者のメールアドレスまでお寄せください。⇒ [sakotomoya@gmail.com](mailto:sakotomoya@gmail.com)



# 『余地』

～相談業務を楽しむ方法 23～

## ＜その道のプロ＞

杉江 太朗

### ～プロ〇〇～

プロと呼ばれ、その仕事を生業として生活をする人たちがいる。例えば、

「プロ野球選手」＝「野球」

「プロゴルファー」＝「ゴルフ」

「バスプロ」＝「バス釣り」

「パチプロ」＝「パチンコ」

などである。

私の職業は、児童福祉司と呼ばれる児童家庭福祉領域における対人援助を生業とするものである。プロ野球選手のように、プロ福祉司と呼ばれることはない。そもそも、児童福祉司に限らず、警察官や教師などもプロ〇〇と呼ばれることはないはずである。プロの家庭教師は、聞いたことがあるかもしれないが、プロの教師は聞いたことがない。ではいったい、プロとは何なのか。プロ福祉司とはいわないのか、そんなことを考えつつ、今回の原稿を書いていきたい。

### ～これはプロの仕事だと感じる場面はたくさんある～

#### \*洗濯機の修理屋さんの場合

昔、洗濯機の調子が悪くなり、修理を依

頼した。電話で依頼をするときに、ある程度の状況を伝えたところ、「それなら大丈夫です」と言い当日を迎えた。その修理屋さんは、洗濯機のホースを外してその先をタオルでくるみ、洗濯機を横にするとところから始め、その後、本体の大きな部品を取り外し、修理の必要な部品を見極め、その部品を車の中に探しにいき、その部品を交換し、元に戻して、試運転をしていとも簡単に作業を終えた。

#### \*引っ越し業者さんの場合

引っ越し業者に引っ越しをお願いしときである。安い本棚を買ったせいで分解することが出来ず、階段を使って運ぶことが出来ず、新しい家に搬入出来ないということがあった。これは処分するしかないなと思っていたら、担当の方がすぐにスタッフの増員を要請し、別の現場にいたと思われるスタッフを増員し、ロープで吊るして2階の窓から搬入してくれた。増員の要請の決断の速さだけでなく、要請に即座に応じるスタッフの方、さらには、窓からだて入れられるという判断の的確さなどに驚いたとともに、スタッ

フの増員要請が現場レベルで行われていることにまさにプロの仕事だと思った。

(追加の料金もなかった)さらに、その増員されたスタッフの中に、転居してきた住居に前に住んでいた人の引っ越しを担当したという人がいた。その人いわく、搬出するときも苦労したから・・・とのことであった。

#### \*クーラーの清掃業者さんの場合

クーラーの清掃を業者をお願いしたとき、その方は、手際よくクーラーを分解しはじめ、ネジを外した順に所定の場所に置きながら、ふと手を止めた。その後、しばらく試行錯誤し、クーラーの設置箇所、クーラーの形態などを総合判断した結果、清掃に使用するための道具が、クーラーの設置場所の関係で、隙間に入らないとの理由で、清掃が出来ないと言った。実際に使うであろう道具を見せながら説明をしてくれたことに加えて、そのクーラーの実際の設置条件と照らし合わせて説明をしてくれたため、こちらもそれ以上文句を言えるはずもなく、納得した上で、掃除を断念した。その後、その方は、外した順にパーツを元に戻していき、その都度、汚れている部分を拭きながら、元通りにしていった。多少の埃を除去してもらった以上、いくらかの請求を想定していたが、無料で良いとのことであった。

#### \*SNSにおける食品会社社員の場合

元 Twitter の投稿で「油をひかずに羽根つき餃子が作れるという冷凍餃子」を焼いたところ、見事にフライパンにくっ付いてしまい、餃子の皮がめくれてしまったという話が話題になった。その投稿を、実際に冷凍餃子を作っている会社の社員が見たようで、今後の商品開発の参考にするために、その焦げ付いたフライパンを送って欲しいと依頼したとの返答が続く。そこで話は終わらず、実際にそのフライパンを受け取った社員は、その焦げ付くフライパンを使い、自社製品の冷凍餃子を様々な条件で焼いて、その結果を分析してSNSで発信していた。

#### ～共通するもの～

今回、ここに書いたのは、私自身が、「この人、プロだなあ」と思ったエピソードである。正直、こういった話は、身の回りに溢れているのではないだろうか。対人援助職として、様々な人や家族、援助職者に関わる中でそう感じる場面もたくさんあるが、敢えて今回はそのような場面以外で、例を挙げてみた。

それ以外の場面も含めて、「プロだなあ」と感じる場面で共通しているのは、

- ① あらかじめ、何が起きているのか想定しており、さらに作業の手際が良い。
- ② 出来る、出来ないの判断が早く、出来ない場合の代替案がすぐに思い

つく。

- ③ 全体を把握しており、どうすれば目的を達成できるのか調整することが出来る。
  - ④ 出来ないと判断するときの根拠が明確であり、人が納得の出来る説明をする。
  - ⑤ 失敗したという事実を受け止め、次に失敗しないようにするために能動的に行動が出来る。
- ・・・といったあたりであろうか。

洗濯機を修理した方の手際はとてつもなく早かった。引っ越し業者のお兄さんは、出来ないことの判断の早さもさることながら、どうすれば出来るかの判断もそれ以上に早かった。またその判断に伴い、人員の増員要請も的確で、結果的に目的を達成することが出来た。クーラーの清掃に来られた方は、出来ない理由を明確に当事者に説明している。また餃子を作られている職員会社の方も、売りであるはずの「ひっつかない餃子」がひっついてしまったという現実（失敗）から目を背けず、実際に、どうすれば、ひっつかないのか（成功）を検証するべく対応に当たっている。

#### ～良くわからない分野だからこそ～

正直、上記のエピソードの中で、「これはどうしようもないですね」「出来ません」

と言われたとしても、こちらはその制度や仕組みを知らない以上、そんなものなのか」と思い、意見が言えなくなってしまう可能性もある。しかし、それで納得が出来ているのかと言われるとそうではないだろう。

対人援助に置き換えた場合、特に、児童相談所などは、他の家庭児童の業界と比べて、権限を有しているため、「一時保護が出来ないのか」「この家庭に介入を」などと権限を行使した関わりを求められることが多い。

実際には、そうした権限を行使できない場合もあり、その都度出来ないことを説明するが、納得を得ることが出来ず、そういった場面で衝突してしまうことも多々ある。

ただ、クーラーの清掃業者の方のように、出来ないことを説明する際、代替案を示したり、出来ない理由を根拠と共に説明したり出来ていただろうかと自問自答したときに、こちらの説明の仕方にもっと工夫の余地があったのではないかと今更ながらに感じている。

全体を把握し、次の一手に対する判断が早く、作業も効率的、判断を間違ったとしても、その事実から目を背けることなく、なぜ判断が間違っていたのかを検証しつつも、前に進むための方策を練り続ける・・・

プロ福祉司への道はまだまだ遠い。



# 統合失調症を患う母とともに生きる子ども

## ～ゆりの日常～

お姫さま —16歳—(前編)



### 松岡園子

回っている扇風機の羽に向けて、あーと言ってみる。こんなことをして、子どもっぽいかな。まだ祖父と祖母がいた頃に戻ったような気がする。宇宙人みたいな声が、明るくも寂しくも聞こえる。変わってないな。いや、変わりすぎたのかな。

夏子の部屋では祖父と祖母のタンスが仲良く陣取り、中の物も、亡くなった時のままだ。ゆりは、椅子の上に立ち上がって天袋の引き戸を開けた。部屋の天井付近にこもった熱気が、肌にとわりつく。さっき、廊下の電気が点かなくて電球をはめ直したりしていたからか、頭からこめかみまで何筋も汗が流れてきたのを感じる。

「わ、電球の箱が奥に行っちゃってるわ」

孫の手があったら、それを引き寄せられる。

「お母ちゃん、孫の手、取ってくれへん？」

椅子の上から頼む。受け取った孫の手で電球の箱を引き寄せながら、お母ちゃんも変わったなと嬉しさが湧いてくる。以前の夏子はそこにいても「そこにいなかった」。

ゆりが夏子の変化に気づいたのは、中学生になる前の春休み頃のことだった。一緒に住んでいた祖父が亡くなり、祖母が入院して 2 人暮らしになったはずなのに、誰もいない台所でひとり話す夏子に恐怖を感じた。夏子は身のまわりのことができなくなっていき、ゆりが話しかけても独り言に夢中だった。でもそれが病気なのか何なのか、わからない。心配した親戚は、ゆりを児童養護施設に入所させたが、ゆりは説明のないまま施設へ入所させられたことに納得がいかず、話し合いの末、夏子と元の家へ戻ってきた。独り言を話し、意思の疎通がとれず、家事もできなくなってしまった夏子と中学 1 年生のゆりの生活は大変なことも多かったが、周りの人達の支えもあり、中学 3 年間でどうにか乗り切ることができた。中学を卒業後は、給食会社で調理補助として働きながら定時制高校へ通う進路を選択し、仕事と勉強の両立にもようやく慣れてきた。ここ 1 年ほどで夏子は病院や福祉作業所に通うようになり、独り言は徐々に減り、会話のやり取りも違和感なくできるようになってきた。自

分で薬の管理をしたり、ゆりに晩御飯のおかずを用意してくれることも増えてきた。

「……もう捨てたらいいんと違う？ これとか」

ゆりは、椅子の上から紙の束を片手でつかめるだけつかんで、その多さを強調したかったが、夏子からは、はっきりと聞こえるような返事が返ってこない。頬を伝ってきた汗が、勢いよく床に向かって落ちたのを感じる。

「こんなにいる？」

返事はない。

「紙だらけやん」

夏子は自分の身のまわりの片づけはできるようになった。ごみの捨て方など、几帳面すぎると感じるほどだ。しかし、祖父と祖母の遺した物には手を付けないままだ。折り目や破れがあっても、使いきるという意志の感じられるデパートの包装紙も、特大から手のひらサイズまで揃えられた紙袋も、天袋の半分以上使って、ひしめき合っている。夏子は見ないふりをしているように感じる。片付けたくないのかもしれない。片付けると、何かが壊れてしまうように感じているのだろうか。

「あー、なんでこんなに奥に入ってしまったんやろう」

孫の手を持った手を伸ばしても、あと 10 センチは奥行きがある天袋。奥の方には、1 度も開けたのを見たことがない箱が 4 つ積んである。

孫の手で電球が入った箱の右側を引っかく。うまくしないと、箱はさらに奥へ行ってしまうようになる。さっきよりも孫の手と箱の動きをよく見ながらゆっくりと動かす。また汗がじわりと背中に浮いてくる。椅子の上で背伸びをして、左手は天袋の棧にしがみつ、右手で孫の手を奥に突っ込んでいる姿勢がきつい。あごを上げた格好でいると、首の後ろ側がつりそうになる。

「……清掃員が……」

「……えー？」

なんか、清掃員がどうのって聞こえた。大事なこと？ 今、大変な時やのに。夏子は相手の状況など気にしないように思う。思ったことを、思った時に口にして。そんなことを考えていると、頭の奥が熱くなる。気を遣うことが苦手なんだろうか。また汗が一滴、こめかみから落ちたのを感じる。今、大変やから、後にして、ってわざわざ言わないといけないの？ いま、大変な状態やんって、見たらわかるやんって言いたくなる。

「あっ」

孫の手がうまく箱の右の脇に引っかかった。そこから、するすると箱がゆりの手元に近づいてきた。

「はあー……」

椅子の上で箱を抱えたゆりは、宇宙飛行から帰ってきたパイロットのような誇らしい気持ちで床に降り立った。頭の重さが一気に肩にのしかかる。

「近くのビルで、清掃員が募集されてたのよ」

眼鏡の奥の瞳がまっすぐにゆりを見ている。

「それで？」

「やってみようと思って」

大丈夫？ やめといたら……という言葉は、お姫さまのような目に吸い取られた。

「そうなんや」

ゆりが知っている夏子の仕事姿は、自宅の一室で近所のお兄さんやお姉さんに英語を教えている姿だけだ。ゆりは自分の仕事場のことを思い浮かべた。様々な年代。性格の人、家の状況も全く違う人と協力して働いている。夏子よりもずっと年上のおばちゃんやおじちゃんにきついことを言われることもある。自分で気をまわして、次々と仕事を段取りしていかないと、迷惑をかけてしまうことだってある。ずっと家で英語塾の先生をしていた夏子が、ビルの掃除の仕事をこなしている姿がどうしても思い浮かばない。考えながら天袋の戸を閉めようと顔を上げると、時計の針が見えた。

「お薬飲んだ？ もう 11 時やし、寝たら」

「明日、面接に行ってみるわね」

相談というよりも、もう決まっているようだった。



「今日は漬けもんとバランもって、次から。8 時で抜けるさかい」

松田さんが両手を忙しく動かしながら体を左に寄せて、ゆりの入るスペースを作った。ゆりは前に置かれた番重から左手でバラン、右手で漬物をつかむ。視線をコンベアーで流れてくる弁当箱に落とし、松田さんが入れていたバランと漬物の場所を見る。漬物の汁気が多くて、手袋の中までしみ込んできそうな気がする。松田さんがコンベアーから抜けるタイミングに合わせてうまくしないと、いったんコンベアーを止めてもらわないといけなくなる。

「おはよう、ゆり」

少し流れに乗ってきたところで、ゆりの左で声がした。手元しか見えていないけれど、左でオムレットと肉団子を入れていたのは栄養士の加奈子さんだとわかった。白衣を着てマスクをし、髪の毛まで隠れるネット付きの帽子をかぶっていると、茶髪でパーマのかかったふんわりヘアも、真っ赤な口紅も見えなくて誰だかわからない。

「おはようございます」

いつもは事務所で献立を考えている加奈子さんがコンベアーの手伝いに入らないといけないということは、今日は人手がたりないようだった。

「うちのお母さん、清掃員の仕事するとか言って、今日面接に行ってくるって」

おかずを弁当箱に盛り付けながら、なんとなく加奈子さんに聞いてもらいたくなった。

「お母さん、今年いくつやったっけ？」

ゆりより 10 歳ほど年上の加奈子さんなら、違う答えを持っているかもしれない。

「48 歳」

「それはまだ働きたいんと違うかな」

「でも、病気やし、できるんかな……」

英語を教えるのとは違う。独り言もなくなりコミュニケーションをとることができるようになって、人に気を遣うことが全くないように思う。

「自分のことだけでも大変そうやのに、人のことまでできるんかな」

「仕事になると、また違うかもよ」

「人の思いとか心は見えてないのに。周りの人が気を遣って、動いてくれてるのに、なんにも気にしてないし」

「お母さん、昔、アメリカに留学してたんやんね？」

「そうきいてる」

「日本と全然違うやん。アメリカでは、してほしいこともハッキリ言うし。日本人の『察して』っていうのがお母さんには合わんのとちゃう？」

「そうなんかな」

日本では、気を遣えない人を空気の読めない人とか言って、非難されることがある。周りが習慣で気を遣ってしまっ、その結果、気を遣わずにいる人が面倒なことから免れたり、要望が通ったりする。

「そんなん、お姫さまみたいや……」

ゆりは、仕事の話をしてきた時の夏子の瞳を思い浮かべた。きらきらとして、別の世界にいるような。周りが気を遣ってくれていても、そんなこと気にしないような瞳。

「それで通る社会だってあるねんって」

目の前に流れてくる弁当箱を見る視界の端に、加奈子さんの手が動いているのが見える。お姫さまばかりいる社会って、ケンカにならないのかな。羨ましいような気もするけれど、気を遣い合って生活している方が、なんだか落ち着く気がする。

「お母さん、せっかく働く気になってるねんから、応援してあげたら？」

加奈子さんの両手が、弁当箱に向かって優しく動くのが見えた。

ゆりが仕事と学校を終えて帰ると、夏子が待ち構えていたような様子で、「明日から仕事」と話した。

「今日面接で？ もう？ 早くない？」

「人が足りないみたいで、すぐ決まったのよ」

夏子の声が、いつもより高い音程に感じる。

「誰か、教えてくれるん？ 仕事のやり方」

「明日は1日、教えてくれるって言ってたよ」

夏子は新しい仕事の時、メモを取るとか教わってないよなあと思ふ。ゆりは、仕事に入りたての頃、覚えることが多すぎて「メモを取りなさい」と先輩に教えてもらったことを思い出した。

「じゃあ、もうお薬飲んだから、寝るわね」

夏子が電気を消そうと、照明の紐に手を伸ばした。明日、王子さまと逢えるとでも言いた

そんな夏子の背中を見つめる。



今日はいつもより10分ほど早く家を出た。夏子も早起きしていたようだった。ゆりが家を出る7時ごろには、夏子が仕事に持っていくと思われるカバンが玄関に準備してあった。今日は駅まで、いつもと違う道を通って行こうと、家を出て逆方向に足を進める。ゆりが駅に向かう途中で、左手の方に黄色いひまわりが目に飛び込んできた。

「おはようさん」

声の方に顔を向けると、ブロック塀の向こうで中野さんの麦わら帽子が揺れるのが見えた。

「おばちゃん、おはようございます」

「ちょうど、あんたのところに持って行こう思ってたんよ。これな、高知の親戚が送ってきたんよ。あんたのおばあちゃんが好きやったやろ。帰ったら、供えたって」

中野さんが玄関の方にまわり、段ボール箱から何か取り出して紙袋に入れた。ゆりが受け取ったその袋をのぞくと、透明のパッケージに「いもけんぴ」と書かれたシールが貼ってある。

「ありがとう、うん。好きやった。固くて歯が欠けへんか心配やったわ」

中野さんは、ははっと笑った。笑うと目の横のしわが一層くっきりと見える。

「おばちゃんな、俳句で賞もらってん。今から仕事か？ 電車、大丈夫か？」

「あと2,3分やったら大丈夫やけど」

「ちょっと待とって」

おばちゃんは、脱いだサンダルが裏返っているのも直さずに、中に入っていった。

「これこれ、これもおばあちゃんに見せたって。返さんでいいから」

頬を伝う汗もそのまま、中野さんがコピー用紙を差し出した。そこには、10句ほどの俳句が並んでいる。

「おばちゃんの俳号は『中野鈴花』や。夏の風情を詠んだんや。あとで電車で見て」

佳作と書かれた見出しの下に鈴花の俳句があった。

「この賞、もらうまでに、こんなに作とったんやで」

中野さんは、表紙に『俳句帳』と書かれたノートのページをめくって見せた。50ページほどありそうなノートいっぱい、文字が並んでいるのが見えた。

「そんないっぱい作ってたんやね」

「これは、あんたのお母さんを詠んだ」

おばちゃんがページをめくり、左の方を指さした。俳句って、人のことも詠めるのか。今までに習った俳句は、季節とか風景のことばかり詠んでいたものだった気がする。

「へえー、すごいね」

夏子を詠んだという一行に目を落としていたゆりの耳に、小さく踏切の音が聞こえた。

「あっ、もう行くわ、おばちゃん」



ゆりはもらった袋とコピー用紙をつかんだまま、駅までの坂を駆け下りた。走りながら、鈴花のノートにあった夏子を詠んだ俳句の『孤高の人』という言葉を考えていた。夏子が孤高の人？ 孤独の『孤』と『高』いという漢字。“ここう”で合ってるのかな、わからない。意味は？ ゆりは電車に乗り込むと手帳を取り出し、後ろの方にあるメモのページに『孤高』と書いた。



夜 10 時ごろゆりが家に帰ると、夏子の部屋の電気は消えていた。今日、ちゃんと仕事を教わって来られたのだろうか。聞いたかったけれど、疲れているのもわかる。ゆりは、自分が給食会社に入社したころ、しばらくは体も心も疲れていて、学校で居眠りばかりしていたことを思い出した。

朝、起きるとゆっくり話そうと思っていたけれど、ゆりが起きたのが遅かった。目が覚めて時計を見ると、仕事に出発するまで 30 分しかなかった。慌てて起き、昨日のことを早口で訊いた。夏子は、担当のビルで掃除方法を詳しく教わってきたようだった。今日はお昼から仕事で、昨日教わったことをひとりでするのだと言っていた。ゆりは、今日は土曜日やから仕事も昼まで、とだけ伝えて急いで家を出た。



「ただいまあ」

玄関のドアを開けても、いつもの場所に夏子の靴がなかった。

「あ、そっか、仕事か」

今日はすぐ帰るんなら傷まんし、持って帰りと言われて貰ってきた給食のおかずの余分を夏子と一緒に食べるつもりだった。おかずの入った弁当箱を 2 つ、テーブルに置こうと台所の戸を開けると、留守番電話のボタンが点滅しているのが目に入った。ゆりは鼻歌を歌いながら、ボタンを押した。

「吉田さんですか？ お母さんのことで。聞かれたらすぐに、今から言う番号にお電話もらえますか……」

男の人の声が、静かな台所に響いた。喉の奥が狭くなったみたいに、吐く息が出てこない。ゆりはすぐに受話器を取り、電話をかけた。

「実は……今日、仕事に来てくれていたんですけど、伝えてあった鍵の場所がわからなくなっただけで、仕事ができなかったようなんです」

鍵の場所がわからない？ どうして？

「それで、母は今、どうしていますか？」

「仕事にならないので、今日は帰ってもらいます。これではこの仕事、続けてもらうのは難しいです」

それはそうだと思う。受話器を置いたゆりは、玄関で夏子が帰ってくるのを待った。帰ってきた夏子は、そのまま自分の部屋に向かい、ベッドに腰かけた。

「どうしたん？ 会社の人から、電話あったよ」

顔色がよくないし、視線が下に行ったきりだ。

「しんどくて、頭がぼーっとして。声が聞こえてくるのよ」

声が聞こえるという言葉で、なんとなく何が起きたのかがわかるような気がした。また、あの時みたいになってしまったの？ どうして？

「鍵の場所もわからなかったって」

「ううん、違う」

視線が合わない。その返事は、ゆりに向かって発せられたものではない気がした。背中から首の裏側にかけて、さざ波のような震えが伝わってきたのを感じた。

「……病院いく？ 今日土曜日か」

もう閉まっている。月曜日まで、家で様子を見るしかない。

……せっかく、お姫さまやったのに。

(後編につづく)

※この物語は実際の体験と、それを探求する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。



## 原田牧場 Note

page 14

密かなる昇級試験がありました。牧場長も両親も出かける用事があり、私ひとりが留守番でした。もうすぐ産みそうな雰囲気の中産牛が1頭いるよ、見ててねーすぐ帰るから。と言われていたので、2時間おきに牛舎を見回って様子を見ていました。寝たり起きたりソワソワしだしたのですが、ちょこっと水風船みたいなもの（子牛が包まれている羊膜）が出てくるくらいなのでまだ大丈夫、難産（逆子や子宮捻転）でない限りは無理に引っ張ったりはしないこと、勉強会で学んだ言葉が浮かびます。A「でも、初産牛だよ、早めの介助がいるんじゃない？」O「いや、そのうち誰か帰ってくるよ、それまで見守ればいいんじゃない？」知識を中心にAとOがそれぞれの見解を話し出します。（私の母がA型、父がO型だったので、それぞれの特性を持つふたり）横たわり息も荒くウンウンいって30分以上待ちましたが自力で出てくる感じなし。初産なので出口が狭く詰まってる感じもします。破水したら、その後は時間かけちゃダメって牧場の母さんが言ってたよなあ。A「ひとりでやるんだから破れてから準備しても遅いよ、もうやろう」O「やる前に用具を揃えてもうちょっと待とう」牛に、もくし（牛を引く際の手綱）をつけて、生まれた子牛を運ぶ二輪車を持ってきました。前足二本の爪先とだらんと出した舌が膜ごしに透けて見えます。子牛の向きは正常、水風船がしぼんだようになったので、ぬるぬるの爪先になんとかロープを巻いて、舌は巻き込まないように気をつけながら、牛がいきむのに合わせてゆっくり引っ張りまします。A「ロープゆるめじゃない？すっぽ抜けるよ」O「大丈夫だよ、ゆるめの方が子牛に負担がかからないよ」結構キツイな、誰か居れば出口を開いて子牛の顔が出やすくしてもらえるんだけど。子牛が大きい可能性があるなあ。

軽い力で引っ張れる滑車のついたロープがあるけど、みんな不在でどこにしまっているのか？探す時間もなく、自力で、気温30℃の中、格闘すること1時間、牛も私も息絶え絶えになりながら、子牛も頑張ってくれ、引っ張り出しに成功しました。子牛がつかえたまま放っていたら、親もだめにするところでした。子牛はちょっと水を飲んでいたので、下向きにし、顔の膜やヌメヌメを拭いて、目に力があるかチェック。古典的なやり方としては藁を鼻に入れて刺激し、くしゃみをさせて呼吸を促すなんて方法もあります。本当は親牛に子牛の身体を舐めさせるリッキングをすると、子牛へのリラックス効果や生まれたての体の機能が目覚めるのですが、親牛ぐったり…。暑さで私も熱中症になりそうだったので、先へ急ぎます。子牛が立ち上がる前に運搬二輪車に乗せます。ぬるぬるのだらんとした50キロ以上もある子牛をひとりで乗せるのも力がいらしますが、炎天下、それを押して500m先の子牛ハウスへ連れて行くのに息が切れ…。休憩がてら途中の水場で子牛をキレイに洗ってクールダウンしようとしても心臓のバクバクが止まらず、どうしようかなあ。座り込んで途方に暮れるとはまさにこのこと。なんて考えていると、AとO共に「子牛はここに置いて一旦家で涼もうよ、水分取らないとやばいよ」でもなあ、無抵抗な子牛はカラスやキツネに傷つけられることがあるからなあ、ほって置けないし。もうすぐ立ち上がりそうだしなあ。くりくり目の子牛の顔を見てたら、力をふりしぼって今やるしかない！二輪車は心臓に悪いから諦めてショベルにしよう。ショベル端がカッターのように切れるから子牛になんかあったら、と思うとイヤだったんだけど。さっきより動きが良くなってきてる子牛をなだめながらよっこいよっこいとショベルつきトラクターに乗せかえ、ハウスまで無事運びました。牛を引っ張った際に尻餅ついてべちゃべちゃだし、汗ダラダラで最悪の状況だけど、目の前の命を守る使命だけに突き動かされて、最高の仕事をしたんじゃないだろうか。誰も頼る人がいなかったけど、これまで得た知識と自分の中での考察=AとOのあれこれの調整がうまくいった。

今日の一連の作業すべて、私がやるのは初めてでした。普段牧場には私より経験のある誰かがいて、作業をするのは見てはいたけど、それを思い出してひとりでここまでやれたのは驚きでした。ここら辺で自分の実力試してみなよ！って牛が体を張って私に昇級試験をさせてくれたんだなと思います。

夕方近くになって牧場の両親が帰ってきました。そんな大変なことになったとはつゆ知らず。誰にも知られず、褒められずでも、母子ともに元気な様子を見ていたら、それだけで良かった！酪農家としてワンランク昇格。自信をつけさせてくれてありがとうね、牛さん。

牧場長（夫）は帯広の展示会へ遊びにいったら、仕事もせず夜遅く帰ってきたのだし、もう少し私の働きを褒めてくれても良かった気がします。

子牛はオスで我が家に残ることはできず、キロ売りの市場に出たのですが、

私「生ませるのに苦労したし、大きかったでしょ。何キロだったの？」

夫「普通のサイズだったよ」…と一番面白くない返しをして

私にため息をつかれました。

A「本当のことしか言わない（嘘をつかない）ところが

彼のいいところじゃない」

O「希ちゃんが無事生ませた分、いい値段つけてくれたよ！って言えば

もっと仕事はりきるのにね！嘘じゃない言い方でさ」

AとOにはホント助けられます。彼の昇級試験はまだまだ続きそうです。

筆者 原田 希

1973年 大阪府吹田市生まれ

2006年 酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ

2017年 北海道農業士に認定

北海道指導農業士の夫とともに新規就農者の支援や女性農業者向けの勉強会のお世話係を担当

<連載>

# ザイコロジー

②

そだちと臨床研究会

川畑 隆

## “断捨離”もよく考えて

サンヨーとカシオのワープロ専用機でむかし作ったフロッピーディスク内の文書をどのようにして読み出そうか…。他社文書変換機能のあるカシオのワープロをもっていたのですが、2年前に“断捨離”として廃棄してしまいました。“ものもちのいい”私としては自己革新のつもりで捨てたのですが、なんと無茶なことをしたのか!! それで捨てたものと同様の中古のカシオのワープロを手に入れたのですが、フロッピーディスクを読み込みません。あり得ることでしたが、その落胆たるや…。そして、ワープロ専用機で作成した文書をテキストやワードに変換してくれるソフト「コンバートスターセレクト16」を持っていてそれに期待をかけたのですが、やっぱりWindows10では動いてくれませんが、結局WindowsXPの入った中古パソコンを手に入れて…やっとうむかしの諸文書を目にすることができました。そこに至るまでには他にもうまくいかなかったことがいろいろあったのですが、まあそれはいいでしょう。

## 自分を見直した

雑誌の編集などもやっていたので、ディスク内の文書数はかなりです。タイトルに目を通していくと、「ああ、そんなことがあったなあ」「こういうのを書いたなあ」と一気にむかしに引き込まれます。開けて読むと、その時のことが甦ってきます。そして「ちゃんと仕事をしたんやなあ、俺」という思いが突き上げてきた…というのが、ここで一番書きたいことです。

いま68歳で、これまでをふりかえって、まあいろんなことはやってきましたが、とくに何かを熱心に突き詰めたとかいうものがつかめません。いろんなことを思い、書き、発言もしていますが、それらの根拠もあいまいで、いい加減な部分もたくさんあったように思っています。

でも、フロッピーディスクの中に「ちゃんと仕事をしていた、俺」をいくつも見つけました。たしかにそこには、具体的なことに細かい思考と分析と決断と実行を行った跡がいくつも残っていました。その時々でちゃんとやってた“証拠”を見て、「へえー」と感心しました。…ということは、それらのことは忘れていたけれど、その細部も含めた経験は脳に襲いにひとつずつ刻み込まれていて、いまに届いていることがあるのかもしれないということですね。まさに忘れていましたが“在庫”がこんなにもあって、自分を見直しました。

## ♪あれから2年たったんだ♪の彼女です

前置きが長くなりました。「京都児相マンスリー」と書いたフロッピーディスクの中に、“心を惹かれた女の子”が現れました。「京都児相マンスリー」の説明をここで始めると、いま中学・高校時のことを書いているので話が行き来しすぎます。またそのうちに書くことにして、「ザイコロジー①」の『あれから2年たったんだ』に登場したその女の子を紹介することにし

ます。彼女も今ではきっと 68 歳です。小倉にいるんでしょうか。

### バレンタインデー

男の子たちはかわいそうである。女の子たちはチョコレートあげるあげないを選ぶことができる。しかし男の子たちは貰う貰わないを自分では選択できないのである。そのうえ貰えなかった男の子たちは、貰えなかったという事実について何らかの合理化をおこなわなければならない負担まで負わされるのである。そしてその合理化の内か、または自分を安定させられる合理化がなかなか見つからないとき、自分でチョコレートを買うという行動に走る可能性も大になる。その男の子たちの「これください」と店員に告げている姿を思い浮かべるとき、私は慟哭を禁じ得ないのである。

ご期待を裏切るかもしれないが、私が貰えなくて自分で買ったというお話ではない。

\* \* \*

あれは中学3年の夏だった。私はバレーボール部に属していて、他の中学校に試合に行っていた。バレー部はわりと女の子たちに人気があって、その日も何人かが応援に来てくれていたのだが、私はいつにない特別な目を意識したのだ。木の幹が地上1メートル少しのところから70度ほどの角度でふたつに分かれているその間から、私たちがプレーをするコートの方をじっと見つめるその目。私であってほしい、きっと私だ、他の中学まで応援にかけつけさせるのはバレーの魅力なんかじゃなくて、好きな男への惹かれる思い…そんなふうには中3の子どもは考えなかっただろうが…、いや私はとっても慎重だったから自分じゃないかもしれないと言いつつも聞きながら、でも期待は私の呼吸を乱していた。

その人の名を〇〇〇〇子さんといった。実はその夏の日以前から、私は彼女のことが気になっていたのだと思う。“もち肌”であった。髪の毛が長かった。美術部であり、放送部でもあった。そして隣のクラスであった。夏の日以来、廊下で顔を合わすとお互いにニコッとするようになり、私の彼女への想いはつのっていった。いつだったろう、年末か年始だったと思う、自分の気持ちを伝えようとしてその行動の決心とチャンスを見つけるのに苦労したのは、授業の合間の休み時間に廊下に呼び出して、こういうふうにして、と計画を立てて休み時間ごとに実行に移そうとするのだが、焦りが増してくるだけで、タイミングがどうも私に味方してこない。それでもやっとのことで5時限が終わったあと、廊下の片隅で、彼女の顔を間近に見ることができたのである。何て言ったろう。「つきあってください」なんて言わなかった。そんなこと言えるもんか。「友だちでいてください」って言ったんじゃないかと思う。何て純情なんだ。きょうび女の子から「お友だちでいましょね」なんて言われたらバカにされたように思うそのことばも、当時の私のことばとして聞けば、気恥ずかしくなるような生真面目な苦心のあとが見られるのである。ともかくも言ったんだ。5秒ぐらいだったと思う。そして彼女が「はい」と1秒答えて終わり。

そんなことがあっても生活に変化はなかった。ただ廊下ですれちがったときに、ああいうふうには打ち明けた僕だよ、そして打ち明けられた君だよ、という確認のニコッを交わすぐらいであった。

2月14日。キャンディとチョコレートの入った可愛い包みを彼女から貰った。その頃はちょうどバレンタインデーが流行りかけの頃で、カバンに入りきれない大きさのその包みが照れくさかった。彼女からそういう意思表示を受けたのはそれが初めてで、ミットにスパッと直球

のストレートを受けたようで、ときめきがあった。その頃はまだホワイトデーというようなものはなく、そしてチョコレートを買ったからといって、つきあいが進展したわけではまったくなかった。彼女からのアプローチの次はなく、私も焦りはありつつも何をどうするというのもなく、とうとう卒業式を迎えた。式のと美術部の部室を訪ねた私は、「喫茶店に行こう」と彼女を初めて誘った。しかし答えは、「美術部のことがあるから行けません」であった。

これで終わりと線を引いたわけでもなく、かといって次のアプローチを具体的に計画したのでもなかったと思う。彼女のつれなさに気後れをしていたのか、卒業で別れてしまうという流れに抗するほどの根拠と勇気が持てなかった。

それから2、3日後、彼女から手紙を買った。ときめいた。しかしそれはすぐ失意に変わった。青いインクだったと思う。「なぜ川畑君にチョコレートをあげたのか今になってみるとわからない」「あなたとはつきあえない。理由はきかないで…」そんな文字がならんで、「悪い女だ」と思うでしょうね」と、その部分のインクが水分でにじんでいたのである。涙だと思えたのが少しの救いであった(お茶を飲んでいてちよつとこぼれたのだとは、決して思いたくなかった)。

よくわからなかった。彼女とまともに話をしたこともなかった。彼女のことは何も知らなかった。明確に二人の間にあったことは、私が「友だちでいてください」と言ったことと、彼女がチョコレートをくれたことだけであった。

高校に入ってから、友人を介して彼女に素焼きの置き物に文章を入れて贈った。何と書いたかは忘れた。彼女からの返信は届かなかった。

その後、友人から、彼女の両親が離婚したこと、進学した高校には一学期間通っただけで退学し、今はスナックで働いていることを聞いた。

(「京都児相・川畑隆の『ほとんどマンスリー』(『京都児相マンスリー』改題)」

第8号 昭和63年2月。一部に現在では不適切な表現が含まれているかもしれませんが、そのまま載せました。)

### ソレふうの歌

「ザイコロジー①」に吉田拓郎の『どうしてこんなに悲しいんだろう』のことを書きましたが、きっと「ソレふう」の歌を作りたいかっただってというのが、もう1つ出てきました。次の歌詞です。

#### なげだされて

うしろを振り返ったとき  
すでに人はいなかった  
別れを告げたのだが  
もう一度と期待した  
でも過ぎ去ったそこには  
閉ざされた家並みだけ

こういうものかと  
人のさだめを感じて  
気を取り直してみようとする  
でもやるせなく  
心の中に行きどまる  
それはそれは何

今の今の自分の頼りは何だろうか  
急に投げ出された  
見知らぬ世界に途方に暮れる  
突然にやってきた自由らしいものに  
迫ってくるのはただ虚しさ

今の自分を哀れに考えすぎるから  
そんなに虚しいんだと  
人に甘えたそんな気持ちは



今だけのものだと  
心の底ではわかっているつもりでも  
今はただ涙が流れるだけ

次の歌詞も「ソレふう」です。泉谷しげるに『帰り道』という曲がありましたが、「3年我慢して働けばラクになると言われたから僕は頑張ってたのにラクにならなかった…」ことを、♪3年、3年たったのに…♪と絶叫して歌い上げるもので、あの哀れさに私はハマりました。同じような気分で歌いたくて作り、自分で気に入って“けだるく暗〜い”感じでよく歌ってました。

#### もうここには

肩をたたきあい 僕と彼は歩いてた  
青空の下で 流れる汗を拭きながら  
僕の目は大きく輝いてた そして彼も  
ふたりの求める喜びが 望みが  
合わさり強め合って  
新しい世界を夢見て いま行くんだと  
ああ でもそれは夢だったのか  
泣くことに疲れて 夢を見たのか  
本当は彼は そこにいたはずなのに  
そうなんだ 僕から離れていった  
ふたりの心はひとつだと  
意気込んでいたのに  
あの あの彼が去っていった  
彼でさえ 僕からは遠い人間だったのか  
いない いない ひとり  
もうここには僕だけひとり  
ひとりで どうしろというのか  
期待した暮らしは 遠いのか

他にも、♪愛は愛とて何になる♪の『赤色エレジー』や、♪だから踊ろう 僕と一緒に 君は幸せに眠くなれ♪の『清怨夜曲』など、独特の歌を唄ったあがた森魚を真似したのでしょうか、『村を出る』という歌詞もありますが、ここに載せるのはちょっと…。

#### 恥ずかしくなるくらい明るい

同じようなテーマの歌詞がふたつ並びましたが、次のは恥ずかしくなるくらい明るくて、単純な二極化が頭の中で起きていたようです。

#### 花をあげよう

君に花をあげよう  
田んぼのあぜに揺れてる小さな花でも  
それが美しいと思ったら  
すぐに摘んで君にあげよう  
そしたらもうそこには  
花はなくなってしまいうけど  
淋しい気がするけど  
じきに新しいのが顔を見せるさ  
一輪摘んで君にあげよう  
  
その花を手にして君が  
やさしく口づけて  
高くかかげて心から  
笑顔を見せたとしたら  
僕はその時に  
野原を駆け回りたような  
喜びを感じられそうなさ  
だから君に花をあげよう  
  
そのやさしさに あの青空に  
微笑みが浮かんだら君もきっと  
誰かに花をあげるだろう  
君に花をあげよう

どんなにちっぽけなものでも  
僕の心が求めたら  
すぐに摘んで君にあげよう

### 笑顔だけじゃなくて…

そんなやたらに花を摘んじゃいけないと思  
いますが、次のはちょっといいんじゃないでしょ  
うか、今でも時々歌ってます。

### 君がいる

悪かったのは僕だから  
うんと喋らせておくれ  
しばらくの沈黙の間に  
つもりつもってた求める気持ち  
信じて楽しく過ごしてたのに  
ふいに訪れた話の途切れ  
僕には君が遠くに見えた  
だから妙に避けてしまった  
僕が懸命に喋るのを見て  
きっとわかってくれるだろう  
いま取り戻した僕の君  
寂しさから抜け出した

さまよっていた僕だから  
この手をつかまえておくれ  
君をはなしたくない僕だから  
この目をじっとじっと見て  
しばらくの沈黙がこの僕に  
君の大切さを教えてくれた  
僕は求める優しさを  
君の中に見つけた  
僕のこの目に君が映り  
うるんでいるのがわかるかい  
もう大丈夫 これからは  
僕のそばには君がいる

### ホントのことに目が向き始めた?

次の「君」はきっと「僕」のことです。つま  
り「君」への「僕」の投影です。そして、「ホ  
ント」に目を向け始めた自分を感じます。

### 君について思い出して

君について思い出して  
大勢の前であの時  
君は自分が指名されたから  
何かを言わなくちゃと思ってたから  
考えはまとまらなかったけど  
言い出して それから  
途中で自分が何を言ってるのか  
わからなくなってしまって  
突然 絶句してしまって  
天井を見上げたり うつむいたりして  
可哀そうなくらい困り果て  
真っ赤に上気してしまったんだね

君について思い出して  
バスを降りてあの時  
知ってる女の子と一緒にだったから  
一緒に帰ろうと話しかけた  
久しぶりだね  
もう何か月会ってないかななんてね  
そう話題は浮かんでこない  
黙ってしまい たまらなくなって  
話すことないねなんて言い出して  
あと三十メートルで道が分かれる  
はやくその時間がたたないかと  
一步一步ふみしめて できるだけ明るく  
サヨナラと言ったんだね

高校生の頃の在庫はひとまずこれぐらいです。

2023. 08

# 応援、母ちゃん！

## —子育てしながら働く母親たち—

### 初めての推しは我が子、推し活について考える

14

たまむら ふみ

玉村 文



## はじめにー好きになる力ー

集中力が続かず好きなものがコロコロ変わる、飽きっぽい性格の子どもでした。スイミングなど習い事は長く続けていましたが、好きで続けていたというよりは習慣で続けていて、思春期になり1回休んだことでその習慣が終わり辞めてしまったという経験の持ち主です。その頃になると、周りの女友達はジャニーズに夢中で、いわゆる「推し活」をして握手会に行く、グッズを買う、テレビ番組への出演などが話題になっていました。私はというと、ドラマが好き、漫画が好きなどコンテンツには惹かれていましたが、特定の誰かを対象に推し活をするということにはなかったと記憶しています。その頃から20代まで、誰か特定の人に対して「推し」のように強く思い入れることはありませんでした。人を好きになることは、才能でもあり能力でもあると思っていたので、夢中になれる他者がいる人のことを羨ましくも感じていましたし、そんな周囲と比較してわたしは好きになる力が弱いのではないかと残念に感じたこともありました。

### 1. 初めての推しは我が子

そんなわたしが、子どもがほしいと願い、妊娠、出産を経験し、我が子との出会いが強烈な感情体験となります。初めての推しは我が子でした、と言えるほど。誰がどのように評価しようと、我が子がかわいいという感情は揺るがないという強い確信を抱きました。広告に使われるようなビジュアルの子どもでなくても、お世話が大変で疲れが溜まって自分のしんどさに目が向くことが

あっても、成長して口が達者になった子どもに言い返されてムツとすることがあっても、それでも心の奥深くの我が子への愛情は揺るがないという確信があります。心の底から、応援し続ける存在が我が子であると感じています。推しがいる人の気持ちってこんな感じなのかなと想像できるようになったと思います。

### 2. 我が子以外に推す存在

下の子を出産したのがコロナ禍で、緊急事態宣言が出る時期もあり、なかなか外に出て交流する機会がもてない時期のことでした。必然的に家にいる時間が長くなりました。とはいえ、上のきょうだいもいるので保育園の送迎や在宅勤務をしていた夫への食事づくり、家事があり、赤ちゃんと密室で孤独な時間を過ごしていたわけではありませんでした。家族と長い時間を過ごすことができた期間ではありましたが、家族以外との交流も望んでいました。そんななか、オンラインでつながったママ友グループとのプロジェクトに参加していました。もう一つこの期間に夢中になったものがあります。それは、youtubeにあがっていたボーイズグループのオーディション番組、「the first」でした。オーディションって偉い人が若い子たちを一方向的に評価して、競わせて、蹴落として、それを消費するイメージが過去のテレビ番組の影響でありましたが、そうではありませんでした。主催者が順位をつけ、選ぶという行為はあるのですが、相互にリスペクトできる環境を作り、自分のスキルや能力を伸ばすことに集中できる、参加者を大事にしたものでした。わたしが見たく

ない誰かを蹴落とししたり、無理に競わせて疲弊させるという過去のオーディションとは違う、それどころか良い環境を作ると参加者たちが見違えるほど伸びていく、成長していく、蛹から蝶に変態していく様子を見て、感動してしまいました。それ以来、そのオーディションに参加されていたダンスボーカルを志す若者たち、デビューしグループ活動をしているもっと大人の方々を含めて夢中になっていきました。深く知っていくと、クリエイティブにかかわっているメンバーもいて楽曲制作でメッセージを発信したり、高いクオリティを突き詰めたり、グループメンバーに序列がなく全員が主役になれるような構成や歴史をもっていること、それらの要素すべてがわたしにとって心惹かれるものでした。

気づけば、無料のコンテンツを消費するだけではなく、課金したり、グッズを買って応援したいという、いわゆるファンになっていきました。

仕事に復帰し、子育てとの両立で自分の時間があまり取れなくても、寝かしつけが終わった夜中に少しだけ動画を見たり、通勤時間を使って情報収集したり、時間に制限があるからこそそのなかで集中して推し活をするのです。今年は、夫に子ども達を預けてコンサートに出かけることもできました。時間的に制限のある方が、より推せるような気もしています。

### 3. 子どもへの影響は

推し活が子どもの遊びにもつながっていくということも体験しています。わたしが

好きな曲を聞かせていたところ、今度は子ども達から「ダンスしたいから曲流して」と要望されたり、歌詞の一部を覚えて「○○(歌詞)ってかっこいいよね」などと話してくれることもあります。子どもの吸収力の高さに驚くとともに、親の好きなものを一緒に楽しんでくれる姿勢に感謝の気持ちも芽生えました。最近では、寝る前には子どものダンスタイム。わたしの好きな音楽を流して、子ども達と一緒に楽しんでいます。

この間での発見は、子育てと仕事との両立で時間的な制限がある方が、より感情は研ぎ澄ませられる、制限がある方が推せるタイプなのだという点にも気づきました。好きなことに費やす時間はとても充実していること、そして自分の好きな思いが誰かの応援にもつながっていくことを期待しています。子どもたちにも、そんな自分の好きを大事に育ててほしいなど心から思っています。

### おわりに～推し活は応援活動～

子ども達には幸せに育ててほしい、それぞれの願いがかなってほしいというのは母親であるわたしの願いです。その感情は、推しには幸せになってほしい、推しの願いを叶えたいという気持ちとよく似ています。感情の強さや関与できる度合いには違いがありますが、気持ちとしては同じかもしれません。この気持ちはこのマガジンのテーマでもある「応援」と等しく同じ感情なのではないかと思います。ということは、応援とは一方的な活動ではなく、相互に願いや祈りが込められた活動なのです。



## みちくさ言語療法—ことばの発達と障害の臨床より—

### (9) ローカルな文化への参加と意味づくり：語用論的アプローチ（後半）

工藤芳幸

#### 言語心理学的技法

前半の最後に、語用論は人と人のあいだの言語学なのだから、個体能力論的なモデルだけ語ることはできないと書いた。さまざまな「技法」の習得やそれを使っているというある種の（専門職側の）安心感ではなく、まず状況や文脈があって、その中でそっと使われるある種の「技法」が人と人のあいだをつなぐものになり得るのか、「技法」が目的化して一人歩きしていないかどうかということは常に問われなくてはならないと思う。

引き続き、インリアルアプローチについて紹介する。インリアルには子どものことばやコミュニケーションを促すための具体的な反応の仕方を整理した「言語心理学的技法」がある。

- ・ ミラリング：子どもの行動をまねる。
- ・ モニタリング：声やことばをまねて返す。
- ・ パラレルトーク：子どもの気持ちを言語化する。
- ・ セルフトーク：自分の行動や気持ちを言語化する。
- ・ リフレクティング：子どもの言い誤りを正しく言い直して返す。

・ エキспанション：子どものことばを意味的・文法的に広げて返す。

・ モデリング：子どもが言うべきことや行動のモデルを示す。

後になってインリアル研究会で追加されているのが、会話期以降の子どもに対応した以下の2つの技法である。

・ 質問：質問をすることで、子どもに話すチャンスを与えたり、話題を展開したりする。

・ 提案：提案することで子どもの文脈に沿って、遊びや話題を進める。

これらの技法は Bruner, J.S. などの初期母子相互作用研究が元になっているという。そもそも親が子に向けて発していた行動やことばかけ（CDS: Child Directed Speech）に言語心理学的技法という名づけを行い、習得する内容を技術単位で整理したものといえる。敢えて、このような整理をして学ぶことをしなくても、子どもと関わるのが上手な人は自然にこうしたことを行っている。こうした関わり方は日常的に子どもと豊かなコミュニケーションをとっている人には当たり前のことなのかも知れない。ただ、当たり前のことほど伝えるこ

とは難しい。こうして整理して言語化して  
みることで、関わり手が一体何をどうやっ  
て子どもとコミュニケーションを取っている  
のか、可視化し伝達することができる。

ただし、この技法を使う「だけ」では豊  
かなコミュニケーションにはならないだろ  
う。親子の相互作用場面は、技法の習得→  
実践というプロセスではなく、その時の手  
持ちの力で表現したことに応じ、欲求を想  
像して試行錯誤しながら行為を返したり、  
子どもの心の状態をことばにしてみたりの  
繰り返しである。その時に相手が何を伝え  
ようとしているか推論しながらコミュニケ  
ーションは展開する。子どもとのコミュニ  
ケーションには、インリアルのことばでい  
えば「伝達意図」を捉えることと、それに  
沿った応じ方についての省察的実践が必要  
である。前半で述べた SOUL が関わり手  
の基本姿勢として、技法以前にあることの  
意味はここにあると思う。

### マクロ分析・ミクロ分析

インリアルは VTR 分析という方法を用  
いて、子どもだけではなく関わり手である  
大人の分析を行う。インリアルを日本に紹  
介した竹田契一先生は、子どもに関わるの  
が上手ではない人を減らすことができると  
考えたそうだ。インリアルアプローチは、  
関わり手との相互作用においてコミュニケ  
ーションの成否を捉えている点で、当時の  
「ことばの指導」においては大きな影響を  
与えたといえる。それまでの「ことばの指  
導」は、子どもの能力にばかり注意が向  
き、子どもにいかに関わり手を教えるのか、と  
いう視点に偏っていたからである。

さてまずはマクロ分析である。子どもと  
大人のやりとりの場面全体の分析である。  
子どもとのコミュニケーションについて、  
実際に子どもと遊んだ印象や、やりとりが  
成立したかどうか、楽しさや遊びを共有で  
きたかどうかをみていく。また、インリアル  
の視点に基づいて大人の側の関わり方につ  
いて、基本的な姿勢、遊び、ことばかけ、  
ことばの周辺要素（声の調子など）を  
確かめる。同時に子どもの認知や言語の発  
達状態も観察を通して捉えていく。

次にミクロ分析。子どもの発話や行動の  
意図などを詳細に分析したい箇所を選び、  
トランスクリプト（子どもと大人のやりと  
りを時系列で書き起こしたもの）を作成し  
て、1つ1つの発話がコミュニケーション  
において果たしている機能や意図、その発  
話を受けた大人の反応、それを受けた子  
どもの反応・・・というふうに、一連のやり  
とり（ターンテーク）を丁寧に見てい  
く。こうした分析は、大人の援助か適正あ  
ったか、子どもは相互交渉の過程で何に  
気づき何が困難であったのか、問題解決  
のためにどのような工夫を試みていたのか  
等を明らかにしうる有効なツールとなり  
うる（大井,2004）。この VTR 分析がある  
ことで、見逃してしまいがちな子どもの  
伝達意図を推察し、大人からの反応が  
子どもとコミュニケーションを可能  
しているものかどうかを丁寧に確認  
することができる。

### 2年間の録画より

私自身が初めて VTR 分析に取り組んだ  
のは大学生の頃。特に特別支援教育やリ  
ハビリテーションなどの専門的なことを学ん

でいたわけではない学生だった私は、学童保育でVTR分析を実践してみることにした。相手の意図に沿った応答ができているのか、やりとりの連鎖が続いているのかということをトランスクリプトを使って分析してみようと思い、当時担当していた自閉症がある中学生の子（Sくん）とのやりとりの場面を録画してみることにした。自分の関わり方が適切なものなのだろうか？ということが当時の私の関心事だったと思う。当時の所長や先輩職員にお願いし、録画したVTRを一緒に見てもらうことにした。最終的にこの分析が卒論になったこともあり、録画は2年間続いた。私がここで得たものは、自分の実践を分析し、他者からコメントを得ることによって客観的に自分の実践を振り返る時間を持てたことである。また、自分の実践の適切性という視点に加えて、相互作用そのものを見ることを学んだように思える。2つばかり、エピソードを紹介する。

#### <①声の交換>

ある日の休憩時間。Sくんはのんびりとソファに寝転んでいる。機嫌の良い時に「や・や・や」と声を出すことがあった。私はそれに「や・や・や」と返すと、Sくんも「や・や・や」と応じてくれる。これが何回も続いて、「や」だけで様々なバリエーションの「声の交換」があった。

ちなみにSくんは音声言語を用いてやりとりできる子である。ただ、このシーンでは何かを説明する言葉ではなく、「声」による交流が面白かったのだろう。「や」そのものに明確な意味があるわけではなく、声の遊びである。

#### <②お友達の声がうるさいね>

Sくんは日常的に「○○する！」という表現が多かった。要求の表現である。「○○したいね」「するのね」と返してみたり、Sくんが注目しているように思えたものに「○○だね」などとことばかけを続けてみたりしていたが、Sくん自身が何かの対象を見て、私に「○○ね」と共感や共有を求めるような表現をしてくることはなかった。ある時、隣の部屋から子どもの大きな声が聞こえてきた。聴覚過敏があるSくんはパツと耳を塞ぐ。以前だとここでパニックになることもあったのだが、この日のこのシーンでは私の前までやってきて、「お友達の声がうるさいね」と伝えてくれた。おそらく「なんとかして！」ということだったので共有というよりは要求の意図だったと思うが、そのシーンでは皆で「そうだね、うるさいね」と言いながら、私と一緒に隣の部屋に行って声を小さく・・・とお願いに行ったシーンがあった。

振り返ってみると、ここでもインリアル的な技法が使われているが、当時、必ずしも意識的に使ったわけではない。その場の文脈でSくんに応じたり、共有している場について伝えたり、ということをしているシーンである。「や・や・や」などは「や」しか使っていないが、コミュニケーションとしては十分に成立している。学童保育という学校でも家庭でもない第3の場の休憩時間だったからこそ、「や」で遊ぶことができたのかも知れない。「かくあるべし」という規範が強い環境では遊び切れないだろう。

「お友達の声がうるさいね」ということ



を言いにくるようになった時期から、Sくんはパニックになることが減ったように思える。ただただ「〇〇する」と要求を言い続けるのではなく、その時の気分や感情を言語化して他者に伝えることで、ワンクッションおけるようになったのかも知れない。学童保育の生活文脈、そこでのローカルな文化に互いに参加する過程で、徐々に意味があるものになっていったことばなのだと思う。

### 生活文脈の中にあることば

Sくんの話から20年以上経過した最近の臨床場面で、野菜や果物などの語を当ててもらった3ヒントクイズのようなものを年長の女の子としていた時のこと。私が関わっている現場では大体保護者が横にすることが多いのだが、「ネギ」がなかなか出てこなかった。そのお母さんはずいぶんヒントを出さずにはいられないお母さんなので、この時もいくつか矢継ぎ早に追加ヒントを出していた。

母「ほら、こないだあなたが振り回して怒られていた あの・・・」

子「ああ、ネギ！」

私（ネギを振り回していたのか・・・）

最後のエピソードは語用論的アプローチの「技法」の話から若干ずれるかもしれないが、人と人のあいだにあることばの意味ということをよく表してくれていると思う。野菜や果物は「食べる」ということを一般的に想像するものであるが（もちろんそれは間違いではないが）、その家族では全

く異なる文脈で使われていて、素直に面白かったし、私の想像力の貧困を思った。それぞれが生活する文脈で、何かの対象についてさまざまな意味づけがなされている。

語用論的なアプローチの中に、「伝達場面設定型指導」というものがある。長崎ら（1993）によると、伝達する行動を起こしやすい場面や状況を生活文脈から取り出して構造化した相互交渉型の指導である。「いないいないばあ遊び」のように儀式化・習慣化された行動の型であるフォーマット、それが展開した順序性や因果性を含む定式化された行為の連鎖であるルーティン、ルーティンが知識として内的な構造になったスクリプトなどを活用し、共同行為の中で言語指導を行うものである。「ネギ」のエピソードもSくんの「や・や・や」でも言えることだが、こうした技法が生きるためには、その生活文脈（ローカルな文化）を捉えることが必要で、とりわけ人と人のあいだの言語学である語用論的アプローチでは、それが求められるのではないかと考えている。

<参考文献>

- ・竹田契一・里見恵子（1994）『インリアルアプローチ』日本文化科学社。
- ・大井学（2006）「高機能広汎性発達障害にともなう語用障害：特徴、背景、支援」コミュニケーション障害学 23, pp87-104.
- ・長崎 勤, 片山 ひろ子, 森本 俊子：共同行為ルーティンによる前言語的コミュニケーションの指導：「サーキット・おやつ」スクリプトを用いたダウン症幼児への指導特殊教育学研究 31 巻 2 号 p. 23-33, 1993.

### 篠原ユキオ

1948年 東大阪市生まれ  
京都教育大美術科卒  
京都精華大学名誉教授  
(公社)日本漫画家協会参与  
FECO JAPAN 会長



十徳弁慶

十徳ナイフを持ち歩いていると凶器携帯ということで逮捕されるらしい。『正当な理由なくして刃物鉄棒その他人の生命を害し、又は人の身体に重大な害を加えるのに使用されるような器具を隠して携帯していた者』は軽犯罪法にあたるというのである。

そんなアホな！と思うが実際にそれで検挙された件数は年間三百人以上あるらしい。先日それを不服として控訴した人が高裁で有罪判決が出ている。

十徳ナイフは昔から便利な道具として男の子には人気のグッズだった。

法律の文言で当てはめると、カッターナイフもカナツチもノコギリも当然アウトだ。ハサミもドライバーも凶器となる。もしもの時のために、という自分なりの理由も裁判官の胸先三寸ということになる。

ヤレヤレ何とも悩ましい時代である。



## 介錯ツイート

死に直面した時、何を言うかは  
誰もが一度は考えたことがある  
だろう。

石川五右衛門や浅野内匠頭の辞  
世の句は子供の頃から聞かされ  
て知っていたが、多くの偉人た  
ちが死ぬ間際に言った言葉など、  
その時のアドリブなのかずっと  
前からこれを言おうと準備して  
いたものか、それとも後付けで  
伝えられてきたものかいろいろ  
想像するのだが、病気でもうろ  
うとした中では準備していた言  
葉など出るはずもなく、それな  
りの人たちはこれという時には  
決め言葉がちゃんと浮かんでく  
るのはすごいなあと思う。  
そんな多くの人たちの言葉の中  
で、立川談志さんが死ぬ前に弟  
子との筆談で書いた最期の言葉  
が『お××こ』だったという話  
はとても衝撃的だった。



## 勝負あり！

昨今の新聞各社の凋落は時代の変化を如実に表しているが、その際たるものが新聞広告の質の低下である。多くが高齢者向けの健康食品や介護用品のもので占められていて、いかに若者が新聞を読んでいるかが伺える。おまけに昔なら駅売りの夕刊紙ぐらいにしか載らなかった精力剤の広告がやたら多い。そしてそこに使われるコピーの低下な表現にはうんざりする。それは多くのネット上の広告にも共通していて、世の中の高齢男性はみんな自分の性機能の低下に深刻な悩みを持っているという前提が腹立たしい。これは当然、人それぞれ個人差のある事だし、無理に薬を使つてという事には興味が無い。自然体でその年齢なりの生き方をすれば良いのだし、女性に対しても失礼な話だと思う。まあ、無理してるのはすぐに分かりますけどね。

## 目薬をさす

いつの頃からだろうか選挙事務所に置かれたダルマに当選者がにこやかに目を描き入れるセレモニーが控えられるようになったのは…。障がい者への配慮という事からだと、いうが達磨自身が手も足も無い障害者なのでそれを商品として販売する事自体問題になりそうなのだが、これは反対に縁起物として特に問題は無いようだ。選挙事務所からダルマが消える事には何の感傷も無いし、代わりはくす玉でもクラッカーでも良いと思うが、触らぬ神にタタリ無しという気分です。物事を深く考えないまま次々と排除してゆく風潮には違和感を感じる。目薬さしてちゃんと物事の本質を見つめ直したいものである。



# しおりちゃん



本を買った時に書店がつけてくれるしおりはよく落とす。仕方なく自分の名刺や近くにあった紙片を挟み込んだりするがなんとも味気ない。しおり紐がついているのが有り難いが何も無い時は表紙カバーの紙をそのページに差し込む事になっている。子は鏡（かすがい）とは良く言われるが葉（しおり）ということも使えそう。この字には道しるべという意味もあるのである。

# マフラー

昭和の暴走族を『カミナリ族』と呼んだ。当時のサザエさんやフクちゃんなどの新聞の4コマ漫画にも度々登場している。爆音を響かせながら大通りを駆け抜けてゆくオートバイの若者たちの迷惑行為は今も昔も変わらないが、当時のテレビのヒーロー、月光仮面や少年ジェットが比較にならない程の少ない排気量のバイクにまたがって疾走するシーンを心踊らせながら眺めていたものだ。



マフラーを取り外したり改造して自己アピールをする連中の真理は分からないでもないが、どうせやるなら心に響く心地良いものにしたら良いのと思う。右翼の街宣車の流す軍歌は迷惑なものだが、たまにちょっと心が高揚することもある。子供の頃、時折りやってきた口バのパン屋のテーマソングも子供心を引きつけるものがあった。

虚無僧は禅宗の一派の普化宗の僧。子供の頃は見かけたこともあったが最近では会う事はなくなった。昔の東映時代劇には謎の人物として扱われる事も多かった。罪を犯した武士は普化宗の僧となれば、刑をまぬがれ保護されたというから問題な人間も多かったようだ。暴走族の青少年も虚無僧となって修行させるのもアリかもしれない。

フランスのソーシャルワーク第8回

フランスの子どもの育ちと家族

安發明子

10年来の活動が1冊の本になり、8月11日に発売された。自身の妊娠出産と子育ての経験から、日本の福祉事務所でソーシャルワーカーをしていた視点から、そして研究者としての視点からと、3つの視点が織り込まれている。巻頭ページにはライフステージごとに妊娠前から出産、乳幼児期、義務教育、そして若者支援とそれぞれサービス、費用、環境面の特徴を表にしている。フリーランスで生きてきた筆者にとって、無料で出産でき、子どもが大学院に行こうと医学部を志望しようと学費や生活費の心配がいないフランスは子育てするにあたって日本より安心だと思う。しかし、それは「国」が先見の明があり人間的だからではなく、人々が生きやすい社会になるよう奮闘してきた結果可能になったことだ。筆者は

## 一人ひとりに届ける福祉が支える フランスの子どもの 育ちと家族

安發明子 著  
Awa Akiko



*mieux que rien c'est pas assez*



数々のフランス人のたたか  
いのおかげで無料の不妊治  
療で子どもを授かり、年間  
3万円の学費で大学院に通  
い現在の幸せや活動がある。

フランスの現場のワーカ  
ーたちは自らをミリタンと  
いう。「信念を貫きたたかう」  
という意味である。制度や  
国の指針は日仏だいたい同  
じ、それなのに人々の暮ら  
しは大きく違う。それは、  
社会をより生きやすくする  
ための人々のたたかひの違  
いである。

筆者はフランスの福祉現  
場で働く人たちの情熱に魅  
了され現場に通い続けてい  
る。困難や不足があっても  
目を逸らせたり諦めること  
はない。「人が変えていける」  
という希望を日本に届けた  
い。

もくじ

1 市民を育てる

生まれたときから意思あるひとりの人間として尊重する

2 子どもの権利

NO と言えるようになって初めて、YES が選べる

3 生活保障

出産は無料、子どもには望む教育を受けさせることができる

4 親という実践を支える

親をすることは簡単ではないから

5 家族まるごと支える福祉

家庭にワーカーが通い、家族のふだんの生活をまるごと支える

6 ジェンダー、性と子どもの育ち

基礎能力は読み書き計算、他者の尊重

ポイント：

- ・個人が社会に合わせるのではない。すべての人に居場所があるよう社会変革するのがソーシャルワーク
- ・支援者がクリエイティブでいられること
- ・人は常に最善の選択をしている、その背景を想像し、相手の望む生き方を支える
- ・担当する子どもたち・親たちを愛し続けることが、いちばん大事な役割
- ・子どもは守るべき花ではない。点火すべき火。自分のために行動する力を支える
- ・家族まるごとの支援は、子どもの保護に比べ、1/9000 のコストで済む
- ・人の悩みや抱える困難は個人的なものではなく、社会的政治的なもの  
人々が舞台ですばらしいパフォーマンスができるよう支えるのが、政治

Akikoawa.com



# 川下の風景⑪

## ～人生は川の流れるように～

米津 達也

### 【知る】

なってみないと分からないことは沢山ある。それが苦痛を伴うものであれば尚更ならない方が良いが、生物である以上、加齢と共に様々な変化に対応しなければならない。

コロナ禍 3 年目にして初めて“感染者”となった。40℃に迫る高熱が 3 日ほど続き、解熱剤を飲んで寝るの繰り返し。熱が落ち着く頃には猛烈な喉の痛みに襲われ、水を飲むこともままならない。何とか仕事に復帰しても、一か月咳き込む状況が続いた。病気のきっかけとは面白いもので、弱った身体はあちこちに不具合をもたらす。歯の痛みに襲われ、眼の不調に苛まれ、拳句に尿路結石症で人生初の救急搬送される身になった。仕事柄、救急車を呼んで送り出すことは多々あったが、自身が救急患者となってストレッチャーに乗り込むという経験は今まで無かった。屈強な救急隊 3 名に担がれ車内で真っ白な天井を見上げると、何となく死の覚悟と生への執着を思った。尿路結石ぐらいで大袈裟な、と思われるだろうが、こういうことはなってみないと分からない。

当事者になるということは、その事実を“知っている”という視方だろう。大いに売れたという『バカの壁』で養老孟司さんが“知るということ”で語っていたが、その通りだと思った。しかし、知っていることが増えるのは視点の多様性に繋がるが、そこには喜びだけでなく苦悩も含まれる。まさか、と思うことが世の中の常なのだ。

### 【まさかの人生】

古くなった愛犬の写真をじっと眺めながら、妻は電池が切れたように静止して動かない。愛犬を飼っていたのは、20 年も前になる。今の彼女は、あれほど可愛がった愛犬の姿を認知しているのかどうかすらわからない。しかし、言葉に出来ないだけで、じっと写真に向き合いながら記憶との辻褄を合わせているようにも思える。本当にどこかでその写真を取り上げなければ、2 時間でも 3 時間でもそのままの状態ですてしまう。

認知症症状が現れたのは 4 年程前だった。そういう歳でもあるから、知人が病気になったとか、テレビでそういう話題が取り上げられると他人事でなくなっていた。昔から陽気で、よく笑って、本当に太陽のような彼女も、「私が認知症になったら、子どもたちにも負担になるから

施設に預けてね」と半ば本気で話していた。実際はそう簡単に決められるものではない。物忘れ、被害妄想、やがて夫である私の存在を忘れ、あれほど得意だった料理を作ることも、お茶一杯を淹れることすらできなくなった。

まさか、こんなことになるとは思わなかった。認知症患者 700 万人時代とテレビで言っていたが、まさか妻がそうなるとは思わなかったし、家事もしたことのない私が妻の介護をすることになるとは。こうやって妻の横顔を見てみると、夢だろうと思いたい衝動に駆られる。もしくは、奇跡が起こって妻が劇的に回復するんじゃないか、と淡い期待を抱いている。それがあり得ないことだということは、私がよくわかっている。やがて妻はウトウトと居眠りを始める。ここで寝てしまったら夜に眠れなくなって部屋を滅茶苦茶にしてしまう。起きろよ、さあ、



今日は暑いから部屋の中を散歩しよう。そして、二人が好きな紅茶を淹れよう。昨日、君が好きなクッキーを焼いたからそれを食べよう。頼むから眠らないで。

### 【人生の再構成】

妻にはずっと迷惑を掛けてきたと思ってるんです。私は仕事、仕事で、家のことは妻に任せっきり。子育てや、学校や地域行事、家事一切にかかるまで。そういう世代だった、と言えばそれまででしょうが、二人でろくに旅行にも行けなかったんです。あそこに古い犬の写真があるでしょう。20年ぐらい前かな、犬を飼っていたのは。子どもの頃からの夢だったらしいです、犬を飼うのがね。だから、一番よく懐いてましたよ。ほとんど家にいなかった私には全然でしたけど。

老後はね、大いに恩返ししてやろうと思ってたんです。旅行にも連れて行ってやろう。掃除、洗濯、たまには料理も作ってあげよう。何様だと言われるかも知れませんが、私に出来ることはそれぐらいしか思い付かないんです。そう思っていた矢先に認知症になってしまって、今では私のことも覚えてはいないでしょう。どうぞ、もしよかったらそのお菓子食べてみて下さい。クッキーはね、昔から妻の得意分野なんです。パウンドケーキなんかもよく作ってたけど、このクッキーが一番おいしかったなあ。お口に合いますか。それは良かった。妻が作ってくれたお菓子の見様見真似ですよ。1年ぐらい前から始めたんです。妻の介護を始めたころはそんな余裕もなかったですからね。食器棚の中をのぞくと、たくさんお菓子作りの道具が出てきましてね、それを引っ張り出して始めてみたんですよ。最初は食べられたもんじゃなかったなあ。なあ、そうだろ。固くって、甘さも足りなくて、

まるで煎餅みたいでね。それから試行錯誤で練習して、今はこれぐらいは作れるようになりました。

クッキーはね、妻の前で作るんです。生地から作って、型を取って、オーブンで焼く。たったこれだけなんですけど、ひょっとしたら、妻が「それは違うよ」と言ってくれるかも知れない。クッキーが焼きあがったら「お茶を淹れようか」と台所に立ってくれるかも知れない。そう思うんです。奇跡かも知れないけれど、何かの拍子にそういうことがあるかも知れない。

いつまで私に妻の介護ができるんだろう、と最近は思います。4年は長いですね。短いような、長いような。こういう老後が来るとは思わなかったなあ。孫はまだ小さいんで、もっと孫と遊んでやる、そんな人生を思い描いてたかなあ。妻もそう思ってるんじゃないでしょうか。

お父さんが倒れたら、お母さんの面倒を見る人がいないからって、子どもは残酷なもんです。でも、私が子どもの立場なら、やはり同じように親に言うかな。私だってそうやって生きてきましたからね。

こう言うのはなんですけど、赤の他人にこうやっていろいろお話するのは初めてです。子どもたちには言えませんしね。4年間、妻に恩返しする意味でも、少しでも良くなって欲しいという気持ちも込めて、一生懸命やってきました。好きだった山歩きや、昔の同僚と飲みに行くこともなくなりました。もっとこうしておけばよかった、という後悔は数えればきりが無い。なんていうか、少し疲れたんです。夜、眠れないことも、返事のない妻に話しかけることも、ずっとクッキーを焼き続けることも。だから、介護サービスにお願いしようと思います。

2023.8.25 米津達也

## 父が自分の身を呈して教えてくれたこと

高名 祐美

私の父は、2023年5月23日、90歳を目前にして89歳の人生を閉じた。その日は、私の孫（次女の長男）が3歳となった誕生日だった。3月に家でころび、動けなくなり入院。入院生活1ヶ月で在宅療養に切り替え、1ヶ月を自宅で過ごし、父が愛してきた家族に看取られ最期の息をついた。

次女である妹夫婦、孫と暮らしていた父に突然訪れた要介護状態。一日にして寝たきりになってしまった父。思うように動けなくなり、治療もできない状態となった父から発せられる言葉や行動から、いくつものことを教えられた。父との生活を振り返り、父が自分の身を呈して教えてくれたことを書いてみようと思う。

### I 家に連れて帰ろうと決めた日

#### 【父の病気】

父は、長年の喫煙からくる「肺気腫」「慢性閉塞性肺疾患」で通院治療を受けていた。2021年6月に早期胃癌が見つかり、内視鏡手術を受けたことをきっかけに、在宅酸素療法をうけることになった。数年前から医師からすすめられていたが、父は拒否していたらしい。手術・入院をきっかけにようやく自分の体に必要なものを受け入れた。医師から「常時、マラソンをしているような、そんな肺の状態ですよ。酸素すると楽になります。手術も呼吸の状態によっては途中で中止することになるかもしれません。」と説明を受け、ようやく納得した。そして酸素を常時吸入するようになり、父は「楽だなあ。」と。一方で「これ（酸素）はいつまで続けるんだ？いつになったらやめられる？」と何度も私や妹にたずねていた。在宅酸素療法生活が始まり、週1回の訪問看護を受けるようになった。

#### 【長女としての役割】

父が通院していたのは、私が38年間医療ソーシャルワーカーとして勤務した病院だった。運転免許を返納し車も手放した父には、通院の付き添いが必要だった。同居の次女がその役割を担っていたが、私が定年退職したことで、通院の付き添いは長女の私に交代した。携帯用濃縮酸素器をひっぱりながらの外出は、父にとっては大仕事だった。

定期診察日に実家へ父を迎えに行くと、父は酸素器を引っ張りながら、「ありがたいな。こんなもんあるから簡単に歩けない。」と必ず口にしていた。受診をすませ、病院の帰りにコンビニでお菓子を買ったり、補聴器の電池交換に行くこともあった。自分の生活にゆとりがなく、父のことを気にしながらもあまり足を運べなかった実家。「通院の付き添い」「外出の支援」「訪問看護の同席」という明確な目的ができたことで定期的に実家に行くようになった。父と二人で過ごす時間ができた。娘として恩返しができるような、そんな気持ちだった。

2つ違いの妹が定年退職し、父の通院付き添いは再び次女の役割となった。定期的に実家へ足を運ぶことがなくなり、妹からの相談に応じること、ひ孫を連れて不定期に会いに行くことが私の役割になっていた。

#### 【父が要介護状態になった】

そんな日々。2023年3月20日の朝、妹から電話があった。「父が動けなくなっている。トイレに行こうとしてころんだらしい、腰を痛がっている、どうしたらいいか。」と。訪問看護師に電話をするように伝え、すぐに父の元へ向かった。訪問看護師からの指示は、「整形外科に受診が必要。病院に連れてきてください」と。それで病院に連れて行こうとするが、痛みで立ち上がることもできない。そんな父をおぶって車にのせたのは、当時引きこもりの生活をしてきた33歳の孫息子だった。このとき、救急車を要請していたら、訪問看護師が緊急訪問してくれていたら、父を長時間つらい思いをさせずにすんだのかもしれないと今になって思い、後悔が残る。しかし、孫がこのとき動いてくれたことは、嬉しい変化だった。

私は病院に直行し、妹と合流。車椅子に座って診察待ちをしている父はとてもつらそうにしていた。診察待ち患者が多く、なかなか順番が回ってこない。父を寝かせてやることもできず、時間だけがたつ。そして待つこと2時間半。診察室で受けた診断は腰椎圧迫骨折だった。痛みが強く動けないため、そのまま整形外科入院となる。

その後のMRI検査で、腫瘍による病的骨折と判明。主治医からは、今後の治療を考えるためには、原発がんの確定診断が必要と説明をうける。現時点でもっとも疑われるのは前立腺がんということで、泌尿器科の検査・病理生検をすすめられた。父にその旨説明をしてほしいと医師に伝え、泌尿器科医師から父に必要な検査について説明をもらった。その場に私と妹も同席した。

Dr：三輪さん。泌尿器科の〇〇です。

父：泌尿器科？ですか。

Dr：はい。三輪さんは骨折で入院したんですけど。骨に癌があるんですよ。

父：（表情がくもる）癌？ですか・・・

Dr：（父の表情をみて）癌のようなものがあるんですよ、それで骨折したんです。その癌のようなものが、どこからきているのか検査したいんです。前立腺からきているものかもしれないので、生検といって、針を6箇所さして細胞をとってきます。それではっきりわかったら、治療をします。そんな検査を受けてもらいたいんですけど、どうですかね。

父：前立腺・・・

私：その検査ではっきりわかったら、痛いのも治療できるのだから。

父：・・・ わかった。

Dr：検査、してもいいですか。

父：はい、お願いします。

泌尿器科の若い医師が父に最初に伝えた言葉には驚いた。しかし、父は納得したようで検査を承諾した。

3月30日、検査当日。入院して10日目。午後から検査で、病室で待機するように言われ、私と妹は病室で検査が終わるまで待っていた。

その時に妹と交わした会話。

妹：結果はどうなんやろうな～ 前立腺がんだったら、治療できるって言ってたよね。

私：うん。前立腺がんの骨転移、けっこうあるからね。ホルモン療法とかするのかな。

妹：最悪、動けなくても痛いだけ落ち着いたらいいな。

私：そうだね。骨にできた癌はどうにもならないし。前立腺がんならその痛みも治療で軽減できるって先生話していたよね。そうだったらいいなあ。歩けなくても車椅子に座って過ごせるようになって、退院できたらいいね。

妹：うん。もしも、前立腺がんではなかったとして、もう治療もできないようなら、私はうちへ連れて帰ってみてやりたい。寝たきりでもかまわない。

私：そうか。そうしようという気持ちなんだね。私もそれがいいと思う。介護は大変かもしれないけれど、何でも利用できるものは活用しよう。そこらへんは私にまかせておいて。

妹：うん。頼むわ。金にいとめはつけないよ、私も頑張る。

私：わかった。そうしようか。

そんなやり取りを姉妹でし、お互いの気持ちを確かめあった。

検査の翌日から父は発熱し、痰の量も増え、大好きな飴も水分もとめられて

しまった。3月31日、主治医から呼ばれ、現状について説明をうける。  
Dr:入院してから段々と全身状態が悪くなっています。整形外科でできることは腰や足の痛みへの対処しかないんです。前立腺がんでなければ、肺がんの可能性が高い。しかし、呼吸器内科の先生は週1回の非常勤、当院には専門医がいません。病院をかわるか、内科に転科するか、ホスピスのようなところに行くか。どうしますかね・・・ 肺の状態が悪いので、急変の可能性もあります。そのとき、延命治療は希望されますか。

私:(これぞDNRの確認か・・・) 延命治療は希望しません。私が長年働いてきた病院です。スタッフも信頼しています。父もずっとここに通院してきました。病院をかわることは考えていません。内科への転科も希望しません。このまま先生に主治医でいてもらいたいです。肺が気になるので、これまで週1回みてもらっていた呼吸器の先生から現状の説明を受けたいです。

Dr:わかりました。腫瘍が神経を圧迫してきているので、足がしびれてきてこのまま動かなくなると予測されます。肺については、常勤の内科の先生と相談させてください。呼吸器の先生からは説明をきいてください。

私:先生、父に足のしびれと動かなくなるかもしれないことを先生から説明してやってください。父はなぜ自分がこんな状況になっているのか、わからないし、不安な気持ちでいます。よろしく願いいたします。

Dr:わかりました。伝えます。

#### 【家に連れて帰ろうと決めた日】

そして生検の結果、前立腺がんは否定された。

4月10日、呼吸器の医師より外来の診察室で説明を受ける。

Dr:(CTの画像をみせながら) 肺がんの可能性は低いです。確定診断するにはPET検査や気管支ファイバーの検査が必要です。しかしこの病院ではできない。退院した後、外来で受けてもらうことになります。

私:退院して外来で他の病院に受診なんて、今の状態ではできません。前立腺がんは100%ないと泌尿器科医から説明受けました。

Dr:いや、そうは言い切れませんね。血液検査のデータからは前立腺がんも否定できないと思います。ここに少しみられるのが肺がんかもしれませんが、肺炎の治療をしたら縮小しています。なので、肺がんではないと思います。

私:確定診断されたとしても、今の父の状態では治療ができるとは思えません。私達が望むのは、痛みや苦痛を少しでも緩和してほしいということです。

Dr:それは、在宅療養を考えているということですか。

私:(妹と顔を見合わせてから) はい。そう考えています。

妹：（私の言葉にうなづく）吸痰が怖くて・・・あとは、なんでも私が介護します。そして痛いのはとってやってほしい。

Dr：わかりました。在宅をとということであれば、病院と相談してすすめてください。痛みは医療用麻薬を使っていきましょう。痰を減らすことはむずかしいです、肺の中にある痰はとれませんから。

私：これから病棟の方と相談して、家に連れて帰る準備をしていきます。痛みの軽減をお願いします。

こうして、父自身の言葉を聴く前に、思いを把握する前に、娘たち二人で在宅療養を選択することを決めていた。2023年4月10日、入院して21日目のことだった。

（次回につづきます）

## 幾度となく会い、語り合うことの意味

### ～チーム医療とナラティブその2～

#### 本間 毅

##### はじめに

前回は、本年3月に遠見書房が主催した『第11回ナラティブ・コロキウム』において、「チーム医療とナラティブ」というテーマで私が講演した内容から、主に病状説明とカンファレンスについて述べた。今回は、まずナラティブを尊重した退院支援全般と全体に対する考察を行い、講演後に行った架空の事例に関する参加者との対話の様子をお伝えする。

##### 参加者

###### ✦ 主催者（遠見書房）

司会 A 介さん

アシスタント B 介さん

アシスタント C 介さん

###### ✦ 発言者

K 原さん（心理職）

K 野さん

M 田さん

M さん（事務職・SW）

I 井さん（心理職・教員）

非病院勤務さん

###### ✦ 他の参加者の皆さん

###### ✦ プレゼンテーションと対話

本間たけし（医師・退院支援研究会）

##### 退院支援

ナラティブを尊重した退院支援について

考えてみます。診療報酬や介護報酬を前提にした実務的なご意見もあろうかと思いますが、まず「退院調整」と「退院支援」の概念を考えてみます。

例えば、大腿骨近位部骨折の高齢者が急性期病棟に入院したとします。「大腿骨近位部骨折用クリニカルパス（ある疾病に対し、入院中に実施する検査や治療の標準的な計画書）」により急性期病棟に入院する期間もおのずから決まります。なので、入院当日から医療チームは退院想定日に向けて職種ごとの準備に着手します。しかし、例えば入院時に患者さんが持参した内服薬のうち、糖尿病治療薬の飲み忘れによる残薬が多かったとしたら、これは骨折に匹敵する一大事です。このような場合、医療チームの一員である薬剤師は、医師や看護師と連携して処方薬の数と内服方法を見直し、飲み忘れを減らすよう対処します。この取組みで骨折治療の精度と安全性も向上し、病床稼働に影響する在院日数や在宅復帰率は改善されます。コロナ禍で改めて見直されましたが、緊急時に運用可能な病床は大切な社会的資源のひとつです。これを適正数確保しておくことは社会全体で取り組むべき課題で、その意味でも「退院調整」は必要欠くべからざる重要なプロセスと言えます。ちなみに、社会福祉士の小島さんという方は、さらに限られた社会的資

源である「最重症例の治療を担当する高度救命センター」で社会福祉士が支援に携わるべき「社会的リスク者」の統計学的解析結果<sup>1)</sup>について報告しています。

次に「退院支援」について述べます。疾病により仕事や学業の中断を余儀なくされると、その方のアイデンティティは脅かされ、家族の絆や社会における役割など、健康な時は当たり前にあるものを喪失するのではないかという根源的な不安をクライアントに引き起こします。F.カフカは、小説『変身』で、目が覚めたら虫になっていた青年が家族に疎んじられ虐げられながら死を迎え、家族は彼の死を悲しむこともなくそれぞれの人生に新たな希望を見出すという不条理を描きました。病気になるということは、何ものかに不条理な変身を遂げることと考えられないでしょうか。今まで身にまもっていたアイデンティティが発病や入院を機に消失してしまうトラウマ。このような心理変化に対して何をどれだけ手を差し伸べるべきか知ろうとする姿勢・態度を我々が持っていることをクライアントに伝わるように努める。それが、ナラティブを尊重した退院支援だと思います。友達が結婚する際にお祝いを用意する場面を考えてみましょう。学生や新社会人が工面して用意したご祝儀と、親戚の叔父さんが職場の必要経費として処理したご祝儀に違いはあるのでしょうか。金額や準備の方法によらず、そこに込められる「お祝いの思い」には違いはなく、将来への不安はあるけれど、新郎新婦は、いただいたお祝いから希望を感じとるはずで、つまり、支援についてまわる「何か」には、意味や価値があり<sup>2)</sup>、そしてお祝いへのお礼や覚悟という

形で、その「何か」はさらに世の中を循環する<sup>3)</sup>のだと思います。

次に、ナラティブのさらに深層にあるものを読み取ることについてお話します。ナラティブは、問診や対話の途中で漫画の吹き出しのように、「これがナラティブです」と現れるものではありません。クライアントの言葉だけではなく、表情やその場の雰囲気など、いろいろな情報が複雑に絡み合い、ひとつのナラティブが成立すると考えられないでしょうか。即ち、非言語的な情報をももらさず感じ取り、それを読み説く力を磨くことが、ナラティブを尊重したチーム医療を遂行する鍵になるのです。

退院前に行う多職種カンファレンスは、単なる介護サービスの調整会議ではありません。生活期スタッフには病棟スタッフ側の情報を収集することに気をとられ過ぎず、普段のクライアントの生活世界について遠慮せずに語り、退院を迎える直前の軌道修正を手伝ってもらいたいと、私は普段から思っています。

私は、かねてからクライアントにとって大切なペットはジェノグラムの中に入れたほうが良いと考えていました。生活期スタッフから、家にはクライアントが長年大切にしてきた年老いた猫がいるという情報もたらされたら、予定していた自宅退院前のロング・ショートステイや老人保健施設の利用を見合わせることもあって良いと思います。ソームズ夫妻の『神経精神分析入門』の記者あとがき<sup>4)</sup>の中で岸本寛容史先生が「雷と雷光と雷鳴」について興味深い話を述べられています。雷は、地上から上昇した水蒸気と雲の中にある微粒子や水分との摩擦で発生すると私は小学校で習いま



した。普通の条件では、我々は雷の本態を地上から目にすることが出来ません。でも、湿度や温度の微妙な変化を感じ、視覚的に雷光を見、聴覚的に雷鳴を聞き、それを間接的に知ることは出来る。仮に雷光がエビデンスで、雷鳴がナラティブだとし、そのどちらかから雷の本態までを知ることは難しいですね。見えたり聞こえたりする情報は勿論、漂う雰囲気にも注意を払い、その奥で生じているものを思い込みではなく想像する。クライアントをよりよく知る上で大切なのは、このようにナラティブの深層を「想像する力」なのかも知れません。

さて、病気の治療は一段落したがそのまま自宅で退院するのは不安がある。そのような場合、患者さんのご家族が急性期病棟から、しばらくリハビリテーションを行う回復期関連病棟への転床を希望された。タイミングよく受け入れ側の病床が空いていれば転床自体は可能ですが、そこにはご家族が転床を希望するさまざまな「その訳」<sup>5)</sup>があります。例えば、ご家族が他県在住でコロナ禍でもあり頻繁に行き来が出来ない、だから患者さんには自宅で一人暮らしができるようになって欲しい。また、患者さんは昔から頑張り屋さんなので、「ダメもと」で構わないので、本人には納得がゆくまでリハビリテーションを頑張ってもらいたい。あるいは、家で高齢の配偶者と猫が首を長くして待っているから。いや、患者さん自身は、早く家に帰りたくてリハビリテーション目的の転院は端から希望していなかった。このような場合は、「訪問リハビリテーション」という手もあるわけですから、患者さんが望む急性期病棟から自宅への退院は非現

実的な話ではありません。「その訳」を、クライアントを含むチームで共有して目的に叶ったゴールを目指せば、結果によらずクライアントから一定の理解を得られる可能性はあります。その確認作業を怠った思い込みによる退院調整や退院支援は、「退院強制」になりかねません。

退院支援は、かつて「入院中のケアや医療管理を退院後も継続できるよう患者と家族を支援する取り組み」<sup>6)</sup>と定義されていました。これは入院生活がクライアントにとって最善とする考えに依拠しますが、他に理由がなければ、入院に心躍る人は少ないでしょう。入院生活は制約が多く、誰にとっても理想的な環境ではなく、M.フーコーのように入院生活を「監獄のようだ」と表現するクライアントもいます。

内閣府の調査によれば、わが国の「家に帰りたい人（もと居た環境を変えたくない人）」の比率は加齢に伴い増加し、80歳以上の方の96%が在宅復帰を願っている<sup>7)</sup>そうです。現実にはさまざまな困難が予測されますが、病気や障害が重篤でも、年をとるほど家に帰りたい人の割合が多くなると医療チームが承知しておくことは大切です。心理学者のL.コールバーグは「ある男性が病気になった妻のために、薬局から薬を盗むことの妥当性」を、男児と女児を比較し、成長に伴う道徳的考察過程を調査し男児の優位性を示しました。一方、コールバーグの門下生であるキャロル・ギリガンは、師の理論は男性中心のイメージに囚われていると考え、弱い立場にある人達に向けられるケアや配慮は、強く正しい（専門的な能力や知識がある）ものが、弱く愚かなもの（クライアント）に対し、何が正し

いのか教え導くのではなく、どう対応してゆくべきか、ともに考える<sup>8)</sup>方が現実的であると述べました。前号の終りに、ICF運用における過剰還元主義の危険性に言及しましたが、「最新の医学的エビデンスによれば」とか、「詳細なADL評価に基づけば」という、その時点では正解と思われる（医療では10年前の常識は今や非常識ということは珍しくありません）ある側面からの提案より、互いに納得できる妥協点を見出す方が良いと考えるのが現実的でしょう。超高齢者の場合、服薬管理の精度や歩行能力の向上を優先して退院を先延ばしにすることには慎重であるべきです。むしろ第三者によるシステム化された継続的リスク管理を優先するべきでしょう。

話しは変わりますが、私はカンファレンス用のレジュメは、専門用語や略語の使用を極力避け、図表などを駆使して分かりやすく作成するよう心がけています。そして、出来上がったレジュメにじっくり目を通してもらいたいのが、社会福祉士、介護福祉士、それから退院前カンファレンスなどで協働する精神保健福祉士、いわゆる「三福祉士」と呼ばれる方たちです。

介護福祉士が仲間から「身体ケアの専門家」と捉えられるのは、ある意味「誇り」かもしれませんが、本来の業務内容を考えればその評価は一面的に過ぎます。入院前からのクライアントの生活スタイルを吟味し、退院に向けた適切なアドバイスができる介護福祉士を目指し、安心して卒後教育に取り組める職場環境を周囲で提供する必要があります。社会福祉士は、学生時代から持ち続けている社会福祉への思いが、組織の方針や企業理念に振り回されてしま

い、それでも業務を完璧にこなそうと思うと仕事はエンドレスになり、バーンアウトしかねないのは、「ケースワークの7原則」で知られるバイスティックの時代<sup>9)</sup>と何ら変わりありません。近年、精神保健福祉士の活動の場は、入院から地域社会に拡大し、クライアントを患者・精神障害者として考えるのではなく、生活者に対する支援にシフトすることを国は求めています。これは時間のみならず、心理・社会的にも限りなく広がるフィールドを設定されているわけで、門外漢の私からみてもどれだけ大変なことか想像に難くありません。困難事例ほど、医療系職種と福祉系「三福祉士」の間で、問題解決に優先度や支援の緩急のつけ方の差を生じることがありますが、私はこの差こそが支援に深みをもたらすので大切にすべきだと考えています。

### 総合考察

私は、2022年秋に『対人援助学会第14回大会』を新潟において、オンラインで開催しました。大会の主題は「新潟水俣病とわたくしたち」です。その開会の挨拶で、社会学の名著『新潟水俣病問題』の共同著者船橋晴俊氏への、被害者たちを支援し共闘されてきたTさんからの私信<sup>10)</sup>を紹介しました。私なりに要約しますと、「現実の社会では生き（延び）ることと、正義を貫くことのどちらかを選択しなければならない極限的な状況がある。新潟水俣病では、事件発生当時の国策である高度経済成長政策を優先するあまり、舞台となった阿賀野川流域の環境はもとより、住民たちの健康・文化・共同体が破壊された。当時、我が国が正しい国造りや被害者への救済を

行うことは、国が生き延びることと対立するものではなく、その一部として内包させることができたのではないか」(本間改)。退院支援などのチーム医療では、理想と企業経営という現実、あるいはナラティブとエビデンスは対立するものではなく、状況に応じ相互補完的に機能したり、他方を包摂したり、また裏と表から問題の本質を明らかにするべきであるという点で、Tさんの指摘は正鵠を射ていると私は考えました。

次に、私がこの講演の中でも繰り返し言及している「退院支援」を研究してみようと思った理由について述べます。それは「物象化」<sup>11)</sup>という問題です。簡単にいうと、名前や人格、生活歴がある個人を単なる哺乳動物ヒトどころか、モノのように扱うことと考えて下さい。自分が髪を切られ、お仕着せの服に番号札でも掲げられてモノとして扱われたらどう思うでしょうか。私が医師になった40年ほど前は、患者さんたちは、まだクランケと呼ばれることが多く、看護師から「○号室の▽番ベッド、下痢が止まりません」などと報告をされることがありました。私が「物象化」という概念や言葉を知る二十年以上前の話ですが、その「いや～な感じ」に怒りを憶えることもありました。ごく普通に、「○号室の本間たけしさんの下痢が止まりません」と報告されれば、医師は患者さんや同僚への敬意を忘れずに、適切な対応をすることが出来ます。

ユダヤ人である哲学者のH.アレントは、自身の戦中体験を踏まえ、「歴史上、『物象化』は人間にとって悲惨な出来事を引き起こしてきたが、それは私たちが行っ

た行為であることを忘れてはならない」<sup>12)</sup>と述べています。また夏目漱石は、小説『三四郎』の中で、主人公の先輩が「現代人は事実を好むが、事実に伴う情操は切り捨てる習慣である。強盗事件すら犯人の年齢と被害の内容には言及しているが、事件が起こった背景は不明なままだ。(情操を)切り捨てなければならない程、世間が切迫しているのだから仕方がない」<sup>13)</sup>(本間改)と論じ、当時の世情を批判しています。

コロナ禍の報道の裏には、感染者とその家族の苦悩や、エッセンシャルワーカーへの激励と感謝へのナラティブがあり、その多くがSNSを通じて発信されました。一方、昨今話題の「闇バイト」に関連する事件では、SNSでやりとりされる誘い文句の行間に潜む「暗黒のナラティブ」が普通の若者を犯罪に駆り立てたことが明らかになりました。彼らの陳述(statement)の裏付けになる証拠(evidence)が積み重なり、このようなことが繰り返されなくなる時が来るよう願わずにはられません。

以上で私の講演を終えますが、屋上に屋を架すことを承知で、ナラティブを聞きその深層を想像する力、「物語能力」を磨くことについて私見を追加させてもらいます。

フランスの社会学者であるE.デュルケムは、『自殺論』(十九世紀のヨーロッパ社会を中心に、自殺は個人の資質による結果なのか、それとも何かしらの社会的な誘発要因があるのかというテーマを、膨大な統計データをもとに検証した)の中で、「人間同士の繋がり」の濃淡は自殺率に反比例す

る」という大原則が明らかにしました。完遂された自殺の理由を本人に確認することはできませんし、多くの検視の資料は統計学的な検証の対象として、あてにならないものであることは皆様のご想像通りです。同書に「人は物理的な理由ではなく精神的・社会的なものに拘束される」<sup>14)</sup>という一節があります。私の身近な例を挙げますと、昨年の暮れに新潟では大雪が降りました。私が通勤に利用している高速道路やバイパス、県道や市道も大渋滞に陥ってしまい、帰宅するのに普段の5倍以上の時間がかかりました。同僚の多くは、職場の近所に住んでいますので、患者さんたちの容体が落ち着いていれば、一日くらい休暇をとっても大きな問題はないはずです。翌朝、職場から悪天候なので欠勤扱いにしない旨の通達があっても、遠距離通勤の職員は「行かねばならぬ」と思い、必死に出勤してきます。我々は、大雪や通行止めという「物理的な理由」より、「医療者ともあるものが天候などに仕事を左右されてはいけない」という精神的・社会的な気持ちに拘束されていたわけです。

次に、日本の物語文学の最高傑作の『遠野物語』から物語(ナラティブ)にどう対峙するべきかについて。その書き出しには、「この話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり。(中略)鏡石君は話し上手にはあらざれども誠実なる人なり。自分もまた一字一句をも加減せず感じたまま(聞きたるままではなく)を書きたり」<sup>15)</sup>とあります。この話を聞き、温暖で平坦な地域に住む人は戦慄せよ(遠野の人々に敬意を払え、その物語を尊重せよ)という柳田国男の言葉は、ナラティブに接するものへの

の箴言でしょう。

皆さんは、小津安二郎監督の『東京物語』(1953年 松竹配給)という名画をご覧になったことはありますでしょうか。小津監督の映画の特徴として、複数の俳優が同じ方向を見ながら同じようなセリフを繰り返し語る場面が多く見られます。乳飲み子を自分と同じ方を向かせるように抱っこをした母親が「ほら、蝶々だよ、お花も綺麗だね」と何度か言って聞かせる情景を思い浮かべて下さい。散りゆく桜や大輪の花火を愛でるときもそうですが、移ろいやすく儂いものを表現する場面で、我々は単純なフレーズを繰り返すことを好みます。そのシーンを独特のロー・ポジション・アングルで撮影するので、映画の観客は登場人物と向き合い、対話をしているように感じます。専門家による「上から目線」の反対ですね。やまだようこ氏は、その同じセリフの繰り返しを「かさねの語り」<sup>16)</sup>と表現していますが、突如として病にみまわれたクライアントのナラティブは、繰り返しになりがちです。同じ方を見て、同じ言葉で心を揃え、その転換点や変化を見落とさないことが、ナラティブと対峙する際には肝要です。

#### まとめ

- ✚ ナラティブは、虚心坦懐(註 心に何のわだかまりもなく)に語られています。まずは素直に耳を傾けましょう。
- ✚ クライアントの偽らざる心境が、我々チーム側に「軌道修正」という福音をもたらすことがあります。「同意できない」という返答も大切

にしましょう。

- ✚ ナラティブを、「科学的・客観的ではない」と軽視しない姿勢はチーム医療を熟成し、治療成績や満足度の向上をもたらします。科学的な側面が頭打ちでも、クライアントがより満足してくれば治療成績も改善されるということです。
- ✚ クライアントは、ナラティブを共有するチーム医療の大切な仲間であることを忘れないようにしましょう。
- ✚ この講演では詳細に言及していませんが、ACPの確認は大切なプロセスです。出来合いの用紙の項目を埋めて完成させる「契約」ではなく、ナラティブに耳を傾けながら手順を踏んだ「合意形成」であり、その時の結論もオルタナティブな（修正可能な）ものであるはずです。

## 参加者との対話

司会 A 介さん

それでは、架空の事例 C さんを通して演習を行いましょ。埼玉から新潟に単身赴任中の C さんは、便の色が濃くなり体調もすぐれないため、思い切って某病院の消化器内科を受診しました。

C さん

「最近、便の色が濃くなったので心配になり受診しました」（それに対し A 医師は）

A 医師

「いつから？痛みはあるの？」（もう一

人の B 医師は）

B 医師

「それは驚かれたでしょう」

C さん

「実は昨年、埼玉から新潟に単身赴任をしまして…」

A 医師

「お腹のことを聞いているのですよ」

B 医師

「食事はきちんと食べていますか？」

C さん

「ちょっと前から動悸もあるし、よく寝られない日が多くて困っています」

A 医師

「聞いていることに答えて下さい！」

B 医師

「心配事や過労もあるのでしょうか？」

さて、皆さんなら A 医師と B 医師、どちらに担当医になって欲しいと思いますか。医師同士の間ではしばしば、「A 医師は切れ者だ」と高い評価を受けます。念のために申し上げますが、「切れやすい」という意味ではありません。一方で B 先生タイプは「あいつはグズグズしていてダメだ」などと言われていたりする。クライアントと医療者側の評価が完全に乖離しているわけです。同じ検査を受けて同じ診断に至っても、C さんと担当医の信頼関係や他の診療

科（例；消化器外科、心療内科）へ紹介される際の安心感や満足度は異なります。

結局、担当医は A 医師に決まり、A 医師と担当の看護師、相談員で C さん夫妻に病状説明がなされました。

A 医師

事前に用意してある説明用紙を用い、型どおりに説明。

「現段階の診断は極めて早期の胃がんが粘膜内にとどまっていて、リンパ節や他臓器への転移は有りません。C さん、よかったですね」

C さん

ご自分の内視鏡の動画を見せられ、

「なんかグロイ画像だな。説明も専門用語は分かり難いです」

看護師

にこやかにアイコンタクトをとりながら、「患者向けクリニカルパス」に沿って入院から退院までの計画をよどみなく説明。

C さん

「早口で説明に使った用紙のフォントが小さく、沢山の情報を消化できません」

「私に用紙を作成させてくれたら、もう少し分かりやすくできますが」

相談員

「何かお困りのことや、不明な点はありませんか？」と何食わぬ顔で締めくくる。

C さん

「相談員さん、今日が初対面ではありませんよね、私のこと憶えていますか？」

C さんの困惑は健常な反応だと思います。

C さんは初診日に病院の「地域連携室」を訪れ、「本格的な治療が（内視鏡下の手術を『本格的な治療』と考える否か、患者さんご家族と医療者の意見は分かれる可能性があります）必要なら地元の埼玉の病院へ紹介して下さい」と相談員に伝えていました。相談員は「患者 C さんは、パート勤務の配偶者、受験生の娘さん、物忘れが始まったお母さんと 4 人暮らし。地元の病院へ転院希望あり」と電子カルテに記載し、「重要」と見出しを付けていました。

看護師記録には「患者 C さんは理解力が低いような印象を受けました」と記録されていました。A 医師は、C さんを安心させようと思い、説明の最後に自分もがん患者であることを伝え、「あなたのがんは大したことではない」と付け加えていました。でも、「重要」を見落としていたので、説明が終わってから相談員に C さんの希望を聞いて、みるみるうちに不機嫌になりました。

最後に C さんの奥さんの「こころの声」を聞いてください。

C さんの奥さん

「夫は埼玉の病院へ転院を希望すると伝えただけなのに。相談員さん、フォローをお願いします。A 先生も怒らないでください。最悪、誰か助けて～」

人は、自分が置かれた社会的な役割によって言動が影響を受けます。

あなたが、

1. A 医師と一緒に働く医療スタッフ
2. C さん本人
3. C さんのご家族

だとしたら、この顛末をどのように考えますか？参加者のグループディスカッションを参考に、読者も“Please put yourself in someone’s shoes”

✚ (ご家族) A 介さん

「埼玉で治療を受けさせたいのは、やまやまですが、転院先を家族で探すようになって言われると、また更に困りますね」

✚ (家族) B 介さん

「A 先生みたいな口調で説明されると、私なら、まず不信感が芽生えますね」

✚ (家族) A 介さん

「さばさばした話しぶりなので、C さん自身は自分の病気はさほど重くないのかな、と安心するかも知れません。変に重々しい口調で話されると、重い病気のかなと疑ってしまうこともありそうです。でもスタッフに自分たちが病気のことをよく理解できていないと思われているとしたら（原因がどちらにあるにしろ）、これはまたつらい話です。仕事のこととか、家族（受験生の娘さんや認知症のお母さん）のことが病気以上に気になるので、あれこれ悪いことを想像してしまいそうです。A 先生が厳しめなのはなぜだか分かりませんが、家族を人質にとられているような状況では、一から病院を探して、検査もやり直してもらって

いるうちにがんが進行しないかと心配にもなります。家族を人質にとられているという感覚は、家族はわりに多く持っていると思います。」

✚ (家族) C 介さん

「私は入社したばかりで、出版や編集のこと以外もいろいろ勉強中です。こういうディスカッションは面白いです。大学では社会学を専攻していたので、M.フーコーの『監獄の誕生』や「専門家暴力」の話は興味を憶えました。」

✚ 本間

「社会学のテキストで取り扱われる話として、新幹線を作る際の日本とフランスの違い<sup>17)</sup>が説明されていますね。日本はまず新幹線の開通ありきで、騒音や振動への対策として、効果が疑問視されるような工事が追加されます。それに対しフランスでは、工事を始める前に沿線となる地域の住民の意識調査を入念に行って、対策への合意形成をしてから実際の工事に入る。どちらが良い悪いという問題ではなく、「お国柄」なのでしょう。新幹線の名前に東海道とつくところなど、なかなかなものですね。中山道新幹線など開通すれば面白いですよ。」

✚ (家族) B 介さん

「さっきの医師の比較でみると、A 先生は説明の時間が短いですね。B 先生は結構、時間がかかってしまうような気がしました。私の家族が入院した

時に、病状説明で約束した時間から3時間以上ずれ込んでしまい、母は怒りし病院が閉まってしまいそうな時間まで待ちました。説明自体は非常に丁寧にして下さる先生で、とても有難かったのですが、待っている間は母がカンカンに怒ってしまって、正直困りました。」

✚ 本問

「A先生よりB先生の方が、時間がかかるかということ、実はB先生はてきぱきとやっているところを見せないで、細かいところまできちんと情報をやり取りしていることがあります。医局のカンファレンスで上級医から、まず結論から述べよ、みたいなことばかり言われるトレーニングを繰り返し受けていると、A先生のような医師が出来上がってしまうのはある意味、必然でしょう。A先生のような医師に限って『自分ほど患者さんに対して親身になっている医師はいない』と信じ込んでいることも珍しくありません。」

✚ (医療スタッフ) K原さん (心理職)

「私、茫然としていました。突っ込みどころが満載で、でもこういうことはありがちだよねという意見が多かったです。」

✚ (Cさん) K野さん

「Cさんの目線から考えてみました。誰にも相談できない閉塞感を感じました。自分だったら、最初に転院希望と伝えていたのに、どういうことなのだと

と怒ってしまって、こちらから転院しますと言ってやりたい気持ちになりました。やりきれない気分で、奥さんに電話で愚痴を言うとか、そんなことしかできないのかも知れません。」

✚ (Cさんの家族) M田さん

「家族目線ということですが、最初にフォーカスが当たったのが奥さんでした。奥さんとして、Cさんが新潟の病院へ入院してしまったら面会にも距離感がありますし、相当に困惑してしまうだろうと思われます。奥さんの方が、負担が大きくなることで、ご主人に対する不信感、要は家族の中でも話し合っていたのにちゃんと転院させてもらうようお願いしたの、と夫婦間での不協和音が発生する可能性が高いと考えました。あと、受験生の娘さんがいる、物忘れが始まったお母さんがいる、そういう状況の中で病気をきっかけに家庭内で起こる不安や負担、先の見えない不確実さに耐えきれなくなり、それぞれがバラバラになってしまう。そのような話が出ました。」

✚ 本問

「昨日のK原先生(心理職 メディカルスタッフのためのナラティブ入門を担当)が初心者に対しても様々な素晴らしいご提案をされていらっしゃいました。それに比べて私の講演は、昔から三大脅迫産業(「医者・教師・宗教家」など諸説あり)と揶揄される臨床経験40年の医師の特性がよく出ていまして、パワーポイントのテキスト自



体が脅迫状のようになっていました。例えば A 先生みたいな人でも、実は患者さん家族のことをすごく考えているのですが、表現がうまくない。R. シャロンとか齋藤清二先生が強調されていた『物語能力』<sup>18)</sup> ですね、クライアントやスタッフの物語を聞き取るだけでなく、それを自分なりの言葉で理解・解釈して相手に、「私はこのように思いましたが、これでよろしいでしょうか？ よければゴーサインを出してください」と返すことが自然に出来ると良いですね。私と同年代で初対面の医師に、例えば電話でご多忙中に申し訳ありませんがとご挨拶をしても、「オウ」なんて言われて戸惑っている私としましては、最近の 20 代、30 代の医師はその点で素晴らしく良くなっているという印象を受けており、『物語能力』を自然に身につけ始めていると感じております。K 原さんは、そのあたりをどうお感じでしょうか。」

✚ K 原さん（心理職）

「普段、一緒に仕事をしている人の中で、ものすごく思いはあるのに表現が誤解されやすくて損をしている方が少なくないと思っています。そういう方たちには、周りの看護スタッフなどがフォローするよう心がけているようです。」

✚ 本間

「フォローをして下さる方がいると、医師が父権的にものを言っても、お母さんのようにフォローをして、話を聞

いてくれて物事はうまくゆくような気がします。でも、看護師や相談員が医師と同じようなことを始めてしまうと、うまくゆかなくなることが多くなるような気がいたします。」

✚ 司会 A 介さん

「私の父親が先月の初めに独り暮らしをしている自宅の階段で転倒して、膝の上にある靭帯（大腿四頭筋腱は歩行や立位保持に欠かせない重要な靭帯です）が断裂して、実は本間先生にも相談してみようかなと思いました。それで入院して手術を受け、今はリハビリテーションを受けている最中ですが、私の家が東京にあって、父は千葉に住んでいる、電車で 1 時間半くらいの距離感にいます。」

自分では退院支援の本を作ったり、ナラティブの話を讀んだりして、みんなが幸せになってくれると良いなど考えたりするのですが、自分の父親になるとこれは少し話が違ってくる。父はどうやって生きてきたのか分かりませんが、今のお医者さんが散々、脅すのです。（脅迫産業）いろいろと可能性は話してくれても、最悪の事態をすぐに口にします。歩いて独り暮らしをしていた父が「車いす」ですと言われてしまうのはつらいことです。『父や私の家は車いす向きの家ではないのでどうしたらよいのでしょうか』と聞くと、車いす生活がしやすい施設などを利用してはどうでしょうかと言われてしまい、独り暮らしは難しいとも言われてしまうわけです。そんな時に、

この会を主催し、本間先生の講演を聞きながら父親のことを考えていました。父親は、頭の方はしっかりしていますが、入院生活が始まって看護師さんたちとも話をして（気持ちの面で）、私からみてもはきはきして元気になってきたのかなと感じています。でもゴールを、家族としては決め難いところがあって、そこを医師が明確に示してくれると良いのですが、車いす生活を指すように言われてもどうしてよいのか困りますし、どこまで回復するのかは互いにわからないでしょう。そしてコロナ禍では気軽に病院に行けないので、誰にどう相談して良いのか分からないというのが正直なところです。本間先生のような(?)先生が各病院にひとりずついれば良いなと思いました。」

✚ 本間

「私はいわゆる“bush doctor”つまり『藪医者』ですね。(参加者爆笑) A介さんの“auto-ethnography”の通りで、医療機関には少なくとも一人は藪医者を配置すべきだと思います。患者さんの予後などに関しては医師の頭の中では、まとまらないというのが正直なところだと思います。それが現実なので、治療のゴールに関しても、関係者全員の「意見のすり合わせ」をすることが大切だと思います。コロナ禍で制限があるのは確かですが、インフォームドコンセントのタイミングや回数が診療報酬算定の要件に左右されているところもあります。「無料の説明は

無用」みたいな感じですね。クライアントがいろいろと困惑していることを察した場合は、必要な病状説明や面談は必要なだけ設定すべきだと思いますし、クライアント側の要請には応えるべきでしょう。ご自身や家族の病の体験を通して、A介さんの場合なら編集や出版などの仕事に深みが出てくるとしたら、それをテキストにナラティブ分野の研究者の中から実力のある方が出てくれば、とても良いことだと思います。そういう意味でも、「元型 archetype」という（我々、個々のところに一定の方向性を持つようにはたらしかける共通のもの）考え方は大切だと思いますね。詳しく述べる時間はありませんが、G.クレイグやH.ナウエン<sup>19)</sup>の『傷ついた癒し人』という概念が参考になると思います。例えば整形外科的な疾患を治療する医師以外の方たちに、接骨院や鍼灸院、いわゆる医療類似行為とくくられてしまうのですが、実に多くの患者さんたちが受診している実態があります。その内容は一様ではありませんが、医師に比べても長い時間をかけて話を聞き、さまざまな保存治療を行う方たちです。治療禁忌疾患を守り、医師にバトンタッチするタイミングに問題が無ければ、私はそのような方たちを目の敵にするのではなく、よい意味でクライアントの意向を大切にしたい住みわけの可能性を残してもよいのではないかと考えています。

✚ 司会 A介さん

「本間先生がナラティブに目覚めたきっかけは何だったのでしょうか？その訳というかストーリーを聞かせてくれませんか。」

✚ 本間

「自分でもその訳はよく分かりません。まあ、医学部に入るまでは受験浪人はしていますが、勉強して一定の結果を出してゆけばどうにかなると思いました。医学部の6年間は忙しいようで時間はありますから、私の場合は（適切な運動と栄養摂取が重要な）ベンチプレスをしたり料理を作ったりしているうちに整形外科を専攻しようと思うようになりました。でも、いざ医師になってみると、『手術は大変にうまくいった』と上級医の先生方が言っているのに、患者さんや家族が面白くない顔をしているかと思えば、その逆の場合もありました。それがこのころの中に引っかかっていた。

幾つになっても非常に高度な（危険も伴う）スキーをされるご高齢の男性がいますが、あの男性こそ整形外科医やリハビリテーション科医師が目指す理想の姿だととらえている同業者は少なくありませんでした。その一方で、ご自身は脳卒中になって片麻痺などの障害が残ったけれど、人目を避けて家に閉じこもらず、同じような境遇の方たちを励ますように声をかけ続けた歌手のSさんのような方がいます。あるいは、ご自分の進行期のがんを抱えながら、自分らしい仕事を続けていった落語家のU師匠や、女優のKさんが

います。「右肩上がり」のスキーヤーモデル以外に、リハビリテーションや整形外科にSさんモデル、U師匠とKさんモデルもあってよいのではないのかと、私は思っております。最後まで「右肩上がり」ということは現実にはあり得ないのに、いつまでもそれをたきつけるような空気に関しては、慎重に考えるべきだと思います。「老化は病気なので治しましょう」という、偏った（物事の大切な側面を無視した）意見には全面的には同意できません。

以上のようなことが気になる性格なので、ナラティブの方に興味がわいてきたのかも知れません。私が面白いなと思うことは、アイドルと同じような感覚で「押しの研究、押しの文献」みたいになると、いくら本を読んでも苦痛ではなくなることがあります。最近、整形外科やリハビリテーション科の文献は読まないのではなく、読みたいと思わなくなって、心理やナラティブの文献は時間を忘れて没頭していることが少なくありません。

✚ 司会 A さん

「本間先生は心理学や精神分析の書籍をよく読まれています。私はその分野の大事な書籍でも最後まで読み通せないことがあって反省しております。」

✚ 本間

「時間関係が相前後してしましますが、A.クライマンの『病いの語り』<sup>20)</sup>（1988年刊行）は、医学部の学生

時代（私は1984年医師国家試験合格）に読むべき書籍だと明言できません。ちなみに私が所有している2013年版では、第16章 医学教育と医療実践のための、意味を中心としたモデルのチャレンジの書き出しから、『今の時代に支配的な、(中略) 医者-患者関係は、サービスの供給者と顧客のあいだの営利的関係に他ならず、(中略) 医療は、経済問題に関連しているが、それに還元されてはならない。』（同書pp334-342に詳しい）と述べられています。私自身の経験でも、医学生の間から時間と効率を優先するよう指導されていて、クライアントを取り巻く人たちの物語に真摯に耳を傾ける余裕はありませんでした。あの頃、A.クラインマンは、すでに現在の医療界の矛盾を正確に予見していました。それでも、この対話の中でもお話ししましたが、現代の若い医療者が、良い物語の聞き手になりつつあるのは、とても喜ばしいことだと私は考えています。」

✚ 司会 A 介さん

「私は、年を取るほど人の話を聞かなくなっていると自覚していますが、本間先生はチームの中で権力が集中してくる、今までの時代は年を取った男性の宿命というか社会的な文脈のようなものがあったと思うのですが、それを抑制するために気を付けていることはありますかでしょうか？」

✚ 本間

「私は、結構顔が怖いでしょう。若い

ころは自分が気になる女の子ほど敬遠される傾向が強かったのです。これは、ある意味勘違いかも知れませんが、女性にもてるようになったのは60歳を過ぎてからです。S介さんが言われる敬遠されがちな傾向を自覚して、そんな感じを醸し出さないように気を付け、日々のトレーニングを積んでいるつもりです。JRの駅で女子学生さんに突然、話しかけられてびっくりすることがありますが、昔ならそんなことはあり得ないし、あったとしてもカッと赤面して表情は険しくなっていて、変質者みたいに思われたでしょうね。今はにこやかに、どうしたのなどと応えています。これまでのトレーニングの成果が表れているのでしょうか。テクニク的なものではなく、態度 attitude に込められたものだと思います。『このようなプロセスを踏むと相手にこころを開いてもらうスキルが身につきます』、というのとは違うと思います。K原さん、如何でしょうか。」

✚ K原さん（心理職）

「そういえば、A.クラインマン先生が昨年、『緩和医療』関連の学会で来日され、講演をして下さいました。その時に、10年間にわたり認知症がある奥様のケアをされてきたと聞き、たぶんその経験があっただと思いますが、その前は非常に厳しい方だったという印象が、大きく変わっていたことに驚きました。やはり経験が重なることによって、雰囲気が変わってゆくという

のは分かりました。

✚ 本間

「今の K 原さんのお話を聞くと、A. クラインマン先生は、おそれ多い話ですが、H. ナウエンに代表される現代のキリスト教的な概念、あるいはキリスト教以前にも同様の言説（ギルガメッシュ王における瓜二つの友エンキドゥの死）があるようですが、『傷ついた癒し人』という方向から、自己実現の頂点に向かわれているのではないのでしょうか。

私、この演習の最初からとても気になっていた方がいて、M 田さん、何かご発言ください。

✚ M 田さん（事務職・SW）

「今日の話の中で、自分のことは自分が一番わかっているという言葉は、医療以外の分野でも同じだと身につまされました。私が勤務する大学でも、教員と学生の間で圧倒的な情報量の差があって、「分かっている教員から、ほとんど何も知らない学生に対して一方的にものを言い」力の行使が行われる場面が起きてしまうことが多いと思っています。我々、大学関係者が慣れている履修登録の手続きでも、その学生のこと（ナラティブも含み）学生自身が一番分かっているという譲歩や尊重する姿勢が必要なのだと、分野は違いますが改めて理解しました。新学期を迎える時期（3月中旬）に参考になるお話を聞くことが出来て感謝しております。」

✚ 本間

「私は野坂昭如という小説家が好きなのですが、本日参加して下さった I 井さんの面差しが野坂さんに似ていて、何かコメントをいただくと有難いです。」

✚ I 井さん（心理職・教員）

「それは光栄なことで、こちらこそ有難うございます。『火垂るの墓』とか、野坂さんはいろいろと書かれていますね。『元型 archetype』についても改めて考えましたが、今日の講演の中で、援助者としての自分自身の体験と、クライアントの語りを聞きながら、私は社会福祉士で心理士でもあるわけですが、自分自身の経験とも絡めながら返答している場面があります。私は自分のことを比較的、オープンにする方なのですが、昔から『カウンセラーは自分のことを話してはいけない』、という原則のようなものがあって、昨日の K 原さんと今日の本間さんの話を聞くと、自分をおある程度開放してもよいのかなと思うようになりました。でも開放する度合いをどのように決めていったらよいのか、ちょっと悩ましいところですね。その点は、どう考えたらよいのでしょうか。」

✚ 本間

「ご指摘の通り、医療者に限らず社会福祉士や心理分野の方でも、自己開示はしてはいけないという時代ではないように私は考えています。ただ、気を

付けなければならないのは、相談をうける側の自己開示の分量がクライアントより多くなったり、優位さを強調したりすることは決してしないように心がけるべきだと思います。基本は、『あなたも大変、私も大変、(今日会わない人も)みんな大変』だから、その大変さって何だろうって一緒に考えてみましょう、という姿勢だと思います。ユングの『元型 archetype』だって集合的な無意識ですからね。

✚ I井さん (心理職・社会福祉士)  
「有難うございます。ちょうど昨日、クライアントとそんな話をしていたところで、私が車で後ろから衝突されたという話をしたら、クライアントのご主人が同じようなけがをしたと聞いて、『ああ、一緒だね』みたいな感じになって、お互いの大変さが分かりあえました。そんなことでしょうか。」

✚ 本間  
「その時に、あなたは怪我をしたかもしれないけれど、私は(そのような外傷はヤマほど診ている)専門家だから、みたいな態度をとるのはだめですね。クライアント側もそのとたんにシャッターを下ろしてしまい、良好な関係性などできるわけがありません。関係性以前に嫌われますよ、本当に。」

✚ I井さん (心理職・社会福祉士)  
「そういうやり取りの中で語りあいながら面談を終えたわけです。また、機会があったらお願いします。」

✚ 司会 A 介さん  
「病院に勤務されていない方から、質問をひとついただきました。本間先生は、ACP advance care plan をどのように導入されていますか、誰が参加するものなのでしょうか？」

✚ 本間  
「例えば、高齢者に多い大腿骨骨折や脊椎骨折の患者さんの場合、咀嚼や嚥下に関係ないはずなのに食事がとれなくなったり、ムセを繰り返したりして肺炎になってしまう方がいます。そのような時、まず点滴で対応しますが、改善しない時は経管栄養を始めるか否か相談させてもらいます。患者さんは点滴以上に経鼻経管栄養のチューブを嫌がるので、患者さんなら希望されるかどうか、ご家族の意見を聞かせてください。これがスタートラインになることが多いです。また、既往や基礎疾患が多い90代の患者さんが多くなっていますので、看護師が検温に行ったときに、眠るように心肺停止の状態になっていたら積極的蘇生を希望されますか、ということを確認しています。少し前までは、そのような確認をせず、ご家族が到着するまで心臓マッサージを行い、『このように心臓マッサージを止めると心電図が平らになりますので、これから先はどうしましょうか?』というようなことを聞いていました。意識が無くても肋骨が骨折するほどのことを続けることをご理解いただき(さらに続けさせて欲しい、とい

うのではなく、続けるか否かの希望を確認する)、何段階に分けて確認するように心がけています。準備として沢山の選択肢を提示して、あらかじめチェックリストを作成しておくようなプロセスは望ましくないと思います。」

✚ 司会 A 介さん

「ちょうど 120 分になりましたので、これで今日の本間先生の講演は終了いたします。」

講演後、参加者から寄せられた感想の一部を紹介します。

- A) 医療以外の分野でも活かせるお話で大変、興味深かった。普段のカンファレンスでスタッフと話していると、一体なぜこの話をしているのか分からなくなることがある。「この対話の内容は、クライアントの利益を優先しているのか」ということを、いつも心にとめておかなければならないと思いました。
- B) 医療でのチーム体制は、やはり医師のかかわり方によって大きく左右されますが、そのチームの一人ひとりがナラティブを尊重し具現化しようとするのが大事だと思います。それは、どの分野の支援者チームでも言えることだと思います。
- C) 多岐にわたる文献を引用されたお話を聞くことが出来、読んでみたい本がまた増えました。自分自身も「物

語能力」を磨くために、様々な物語に触れる経験を積みたいです。

- D) 生きる（生き残る）こと、正しくあることについて考えさせられました。これは、医療チームだけのことではないと思いながら聞かせてもらいました。診療報酬の問題など、経営の部分も考えなくてはならないことがあります。自分たちは「生命」を取り扱っていることを考えれば、それだけではいけないと感じながら聞いておりました。
- E) 私は急性期病院に勤務しています。そんな私は、場面によっては医療者も自己開示をする必要があると考えていたので、先生の講演を聞いて背中を押してもらい、これでよいのだと考えを新たにしました。患者さんにこころを開いてもらうためには、まずは医療者自身も心を開く必要があるべきだと思いました。
- F) ACP についてです。生命の終焉が理解され腑に落ちるには、時間と第三者の協力が必要であること。それと、生きることと正しくあることは対立するのではなく、正義は生きることの一部に内包されると捉える。この 2 点は、終末期にある人とかかわる機会がある私が、いつもこころにとめていることを言語化してもらったように思いました。分かりやすいお話をさせていただいて感謝いたします。

G) 本間より

参加者や司会者のナラティブに感銘を受けました。皆さんの反応を聞いて、改めて援助者の自己開示の必要

性を痛感しました。でも、その際には、いろいろな意味で「良識」が求められますね。



#### 参考文献ほか（適宜ページも記載）

1. 小島好子：救急医療においてMSWの介入に影響を与える因子の検証.日臨救急医学会誌,vol27,2018.
2. 本間毅：退院支援チームのためのナラティブを活用した気づきと成長の支援.vol13,3.日総研出版.2021.
3. M.モース著.森山工訳：「贈与論」.岩波文庫.pp53-79.2017.
4. M.&K,K.ソームズ著.岸本寛史訳：「神経精神分析入門 深層神経心理学への招待」.青土社.訳者あとがき.pp386-387.2022.
5. 木村敏：「生命と現実」.河出書房新社.pp122-130.2017.
6. 手島睦久：「退院計画」.中央法規.1997.
7. 高齢社会白書：家族と世帯.内閣府.2019.
8. F.ブルジュール著.原山哲・山下りえ子訳：「ケアの倫理 ネオリベラリズムへの反論」.白水者.pp28-31.2020.
9. F.P.バイスティック著.尾崎新・福田愛子・原田和幸訳：「ケースワークの原則」.誠信書房.2017.
10. 飯島伸子・船橋晴俊編著：「新潟水俣病問題」.東信堂.2006.
11. 初見基：「ルカーチ 物象化」.講談社.pp62-64.1988.
12. 牧野雅彦：「精読 アレント『全体主義の起源』」.講談社選書メチエ.2015.
13. 夏目漱石：「三四郎」.新潮文庫.p266.2021.
14. E.デュルケーム 宮島喬訳：「自殺論」.中公文庫.pp415-416. 2018.
15. 柳田国男著：「遠野物語 山の人生」.岩波文庫.p7.2018.
16. 北山修編集.やまだようこ著：「共視論 母子像の心理学」.講談社選書メチエ pp74-90.2005.
17. 船橋晴俊著：「社会学をいかに学ぶか」.弘文堂.pp34-48.2020.
18. 齋藤清二講演：「医療における多職種協働と物語能力」.退院支援研究会年次大会.2018.新潟
19. H.ナウエン著.渡辺順子訳.酒井陽介解説：「傷ついた癒し人」.日本基督教団出版局.2022.
20. A.クライマン著.江口重幸・五木田伸・上野豪志訳：「病いの語り」.誠信書房.2013.



*miho Hatanaka,*

所属している教育委員会のスクールカウンセラー会では、子どもたちに対して行うメンタルヘルス授業以外に教職員に対する心理教育も課されている。同じ中学校区に配置されているペアのカウンセラーと内容を分担して、夏休みの期間中に研修を行った。今回は、私が担当したメンタルヘルスに関する講話の内容を、スライドと、逐語風に。



【第11話 スクールカウンセラーのしごと；教職員研修の話 その1】

令和5年度  
〇〇中学校区 職員研修会

生涯にわたる  
メンタルヘルスの基礎

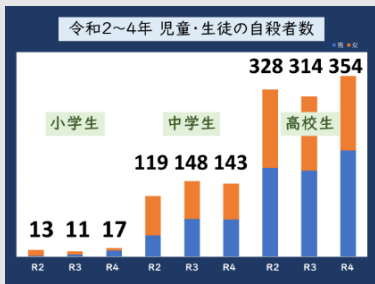
— 自殺予防教育の観点から —

こんにちは。今日は自殺予防教育の観点から、『生涯にわたるメンタルヘルスの基礎』というタイトルで話をいたします。内容は、前半に子どものメンタルヘルスに関する話として、子どもの自殺に関する統計、原因と動機、そして子どもの自殺の特徴について話をします。その後、後半は大人のメンタルヘルスということで先生方に一緒にワークをしていただこうと思っています。よろしくお願いします。

今日の内容

- 子どものメンタルヘルス *input*  
子どもの自殺の周辺  
統計、原因・動機、特徴
- 大人のメンタルヘルス *output*  
\* ワークをします

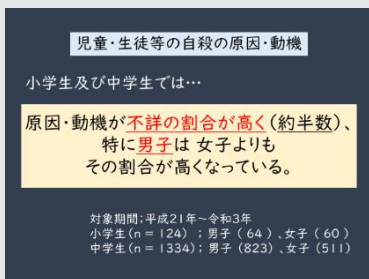
さて今日はどのような話をしようかなといろいろと考えまして、まずここに、花を用意してきました。17本あります。きれいですよね。1本1本がそれぞれ違います。実はこの17という数、令和4年の一年間に日本



で自殺をした小学生の子どもの人数と同じ数です。

こちらの図は、令和2年から令和4年の『児童・生徒の自殺者数』を表したグラフです。左から小学生、中学生、高校生となっており、それぞれ令和2年、3年、4年に亡くなった子どもの人数を記しています。赤い部分が女子、青い部分が男子を表しています。先ほどの17という数字もこちらに書かれています。

この図を、先生方はどのようにご覧になりますでしょうか？ 多いな、少ないな。増えている、減っている。そんなふうな読みかたもあるかもしれません。ただ、例えばこの17という数字、まあこれは、1+1+1+1…をずっと足していくと17という数字になるのですが、この“1”は、つまり“ひとり”ということですよ。ほかの数字についても“1”という数字を積み上げていったのは“ひとり”の子どもの死ということになります。この中のどの数字をとってもそうなのですから、ある子どもが、結果としてこの数字の中の一人として加わってしまうことになった、そこに何があったのだろうと考えてしまいます。仮に、そのひとりが先生方のクラスの子どもだとしたら？ あるいは担当する部活動に所属する生徒だと考えるとどうでしょうか？ またもしかしたらその子にも、家族で誕生日を祝ってもらって、ケーキを食べて「おいしいなあ」、「うれしいなあ」と思った日があったかもしれない。学校で友だちと一緒に遊んで、「楽しいね」と笑いあったこともあったかもしれない。そのように思うといたたまれない思いがします。とてもやはり、私たちが心に留めなくてはいけない、大きな意味をもつ、重い数字だなと思うのです。



こちらは『児童生徒等の自殺の原因・動機』です。子どもに一体、何があったのだろう。なぜこの数のうちの一人になってしまったのか。その理由なのですが、小学生と中学生では「原因・動機がわからない」、不詳の割合が約半数にも上ります。特に男子は女子よりも割合が高いということです。

ではいじめによる自殺はどうか。実は統計上に表れる割合としてはそれほど多くはないんですね。意外にも感じる部分です。ただそれは、実際にはどうかかわからないということです。実はもしかしたら、この“原因は不詳”の部分に含まれている可能性もある。そのようにみると納得できる面もありそうです。ただ今となってはわかりません。いじめられて、苦しくてたまらなくても、そんなことを人には知られたくない、恥ずかしい。そのように思ったとしてもおかしいことではないと思います。ですからいじめは、やっぱり何としてもなくしたい。そこから子どもたちを守らないといけないということを改めて思うのです。

#### 子どもの自殺の特徴

- ・死に近いところにいる子どもたち
- ・純粋さ、敏感さ、傷つきやすさ
- ・影響の受けやすさ
- ・大人から見ると些細に見える動機
- ・衝動性の高さ
- ・大人とは異なる死生観

次に『子どもの自殺の特徴』です。大人の場合とは異なる特徴についてみていきます。

まず、子どもたちは“死に近いところにいる”ということ。「大人の予想に反して」と付け加えてもいいかもしれません。「死にたいと思ったことがある」という子どもは、小学生の高学年から増え始め、低く見ても中・高校生では2～3割にも達するという報告があり

ます。例えば「子どもは死についてなんて考えない」という思い込みがあるとすれば、そのような見方が問題を閉じ込めてしまい、子どもの苦しい気持ちを見誤ってしまうことになるかもしれません。加えて、身近にはテレビのドラマなどで人が自殺をするシーンを目にすることや、ネットでは自殺関連のサイトに簡単にアクセスできる状況です。

次に、子どもの“純粋さや敏感さ”、そして“傷つきやすさ”。思春期・青年期の子どもたちは真剣に生きることについて考えはじめるからこそ、その裏返しとして死が頭をよぎり、死にたいと思う気持ちも高まる。また“影響も受けやす”く、自殺の連鎖、群発自殺と言いますが、例えばアイドルが自殺をして亡くなったというようなことがあると、後を追うという現象が起こることがあります。

また、“大人から見ると些細に見える動機”。例えば過去には、「学校の統廃合に反対して自殺をします」という遺書を残して亡くなった小学生がいます。もしかしたらそのことだけが原因ではないかもしれませんが、子どもの場合はこういったことも動機の一つとなり得るということです。

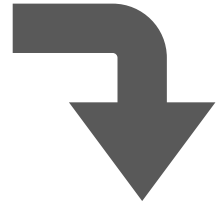
それから子どもの“衝動性の高さ”。自殺衝動というのはそれ自体はそれほど長く続くわけではないのですが、子どもの場合は「自殺をしよう」という衝動が高まってから行動化、つまり実際に自殺をするという行動に移るまでの間隔がとても短い。こういったことも、死への準備と言いますか、遺書や手紙、メモといったものが遺っていないことが大人に比べて遥かに多い理由の一つとして関連しているかもしれません。

そして“死生観”が大人とは異なる、ということ。「死を免れることはできない」、「人はいつか必ず死ぬ」という死の不可避性については98%の子どもは避けられないことだとわかっているようです。ところが死の不可逆性、つまり「死んだ人は生き返るか？」については揺らぎがあるという調査結果があります。「人は死んでも生き返る」。そのように思っている子どもがいる。ごく若い子どもに限った話ではなく中・高校生にもみられます。子どもの死生観について、もう少しみていってみましょう。

… to be continued …

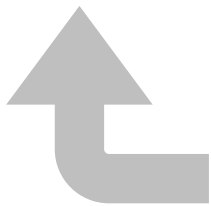
#### <参考・引用 資料>

- ・解説編「だれにでも、こころが苦しいときがあるから…」:福岡県臨床心理士会SC北九州市部会他,2023
- ・『令和2～4年 児童・生徒の自殺者数』:警察庁「自殺の状況」
- ・『児童・生徒等の自殺の原因・動機』:令和4年版自殺対策白書 厚生労働省
- ・『子どもの自殺の特徴』および『子どもの死生観』:新井肇「学校における自殺予防の現状と課題」,2021
- ・『自殺の時間帯』:警察庁自殺統計原票データより「いのちを支える自殺対策推進センター」,2023



第18回：第3章-その3-

## 私にとっての“対人援助”をリポートする「映画」



著：長谷川福子

企画：渡辺修宏

小幡知史

二階堂哲

2023年5月。渡辺先生から、「対人援助をリポートする一本」というテーマで対人援助学マガジンに投稿しないかと、声をかけていただいた。2021年度の対人援助学会で話した内容である。こんな私に声をかけていただけることに喜びを感じ、意気揚々と「ぜひ！やらせてください」と返事をした。もちろん、締め切りスケジュールを確認した！…が、この原稿を執筆しているのは、例によって締め切り4日前である…。

さて、振り返って考えると、私の対人援助に関わる行動をリポートする「映画」は何だったのだろうか。そもそも対人援助とは何なのだろうか。それと映画の関係性を、どう見出すことができるのか。人並みに色々と映画を鑑賞してきたつもりだけど、ちゃんと覚えているのか。と、執筆早々、様々に頭を悩ませている。

以下、それぞれの悩みについてどのように考えたのかを簡単にまとめながら、私の対人援助に関わる行動をリポートする映画について、ご紹介したい。

### 対人援助とは？

まず、「対人援助」とは何かについて、頭を悩ませた。可能なかぎり行動単位で考えたいので、ひとまず「対人援助」とは、対人援助に関わる行動としよう。ここで、「対人援助」的機能を果たす行動とはどのような随伴性で生じる行動なのか、その定義も必要となるだろう。本稿では、対人援助に関わる行動として、カウンセラーや相談員としての職に携わってきた経験から、それらの仕事に関わっている行動としよう。さらに、ワークショップ当時の私は、3人の未就学児(6歳、3歳、2歳)の母でもあった。子どもたちを育児する行動も、機能的には対人援助の行動と考えてよいだろうと考える。

ほんの少しだけ具体的な行動を考えると、悩みごとや困っていることを抱えている人の

お話を聞き、その主訴を明確にさせる。可能ならば、悩みごとなどを改善するための対処法をともに考えたり、行政や医療機関などの適切な支援機関を紹介したりする。もちろん、その方との雑談も楽しみ、場面に応じて自己開示も時々する。また、幼児や児童と関わる仕事では、子どもたちと一緒に様々な活動を楽しみながら、その子の行動を観察し、声掛けや関わり方を工夫していく。子育てに関しては、子どもたちが健康的に生きられるよう、生活に関わる全てをサポートする。

これらの行動は、もちろん仕事であればルール支配行動とも捉えられるが、その仕事を辞めるも続けるも自分の匙加減で決められる。このように考えると、やはり、仕事を続ける、すなわち仕事に関わる全ての行動を維持するのは、自然な強化随伴性だったのだろう。また、育児も同様である。

これらの行動が自然な強化随伴性にさらされることで維持されてきたが、時にはその強化随伴性に対する感受性を無くしてしまう時もある。例えば、疲弊していないときは子どもたちの同時多発的に起こる要求のハリケーンも、仕事で対応しているケースが順調に進まないときも、それらがチャレンジングなので「やってやろう！」と私の行動頻度は増加する。また時には新たな行動が出現したりもする（リサージェンス?）。しかし、疲労困憊のときは、子どもたちの要求を嫌悪的に感じたり、うまくいかない仕事のケースについて悲しみを感じ、回避行動をとろうとしてしまう。今、これをやっていて良いのだろうか。私がさらされるべき随伴性は育児だけの随伴性なのか、仕事だけの随伴性なのか。少しでも強化率の高い方だけに反応を振ろうと随伴性選択に迷い、過大対応的行動をとろうとしてしまう。複数の強化随伴性のある社会環境では、過大対応的選択行動は非常に排他的となるため望ましくないだろう。ここで、強化随伴性に対する感受性を回復させることがとても重要となってくる。それは疲労回復や、他者がさらされる随伴性を観察することでもたらされるだろう。ここで、そのツールとして、「映画」が出てくるのである。

### どんな映画を見てきたのか？

「映画」といっても、私がこれまでどんな映画を見てきたのかをまず簡単に思い起こしてみよう。私は小学生の頃から、スターウォーズやスタートレックなど、SF系の作品がとても好きだった。単純に、自分が置かれた環境と全く異なる環境を覗き見ることによって自分の好奇心が満たされたし、その異質な環境下で繰り広げられる、ロボットやAI、異星人や生物たちが描き出す人間ドラマが非常に興味深かった（人間じゃないのに人間が描き出すことで人間らしくなる人間以外の生物の話…）。

それと同時に、中学生以降は恋愛ドラマの映画も好きだったのは言わずもがな。自分が経験できない素敵なラブストーリーを見て、気持ちを充足させていた。大人になってからも何度も鑑賞するのは「君に読む物語」である。存在するのかもしれないのか見当もつかないが、「愛」や「絆」が私たちの行動を突き動かし、人との関係を継続させていく。夢見る乙女（も

う乙女な年齢ではないが自称させていただきたい)と言われても良い。私はこのストーリーに美しさを感じている。

大学生になってからは、社会問題を取り扱った映画も色々と鑑賞した。「第9地区」や「存在のない子どもたち」,「パラサイト 半地下の家族」など。どの作品も、社会問題を考えずに見るのももちろん興味深い。しかし、その作品に練りこまれた社会問題を考えながら鑑賞することで、私たちが解決すべき様々な問題を、映像や音楽、音声、行間、沈黙でこのように多くの人に印象深く訴えかけることができるのか、と驚嘆する。同時に、その社会問題を深く知らなかった私に対して、何かアクションを起こさなければという気持ちさえ生じさせる。

学生の時気になる映画があれば一人で映画館へ行き、映画を鑑賞したり、映画のジャンルを縛って夜中に「〇〇ナイト」と称して友人を交えて映画を鑑賞した。結婚後は、どれほど仕事や、やるべき事が溜まっていて忙しくても、「金曜夜はDVDを見ナイト」と称して様々なジャンルの映画を夫とともに毎週鑑賞してきた。それぞれのエピソードも何か折があれば話したいが、ひとまずこれまで鑑賞してきた映画の中から私の“対人援助”をレポートする映画は何なのか考える。

## 私の“対人援助”をレポートする映画は何だったのか？

そのような映画として、その時その時で様々な映画を挙げるができるだろう。ワークショップの話をいただいたときは、「クレヨンしんちゃん 大人帝国の逆襲」が、まさにそれであった。この映画のストーリーは簡単に述べると以下の通りである。

春日部に誕生したテーマパーク“20世紀博”に、主人公のしんのすけや友人たちの親が、子どもたちそっちのけで熱中してしてしまう。そのテーマパークでは、70年代の文化を再体験することができ、大人たちは自分が子どもだったときを思い出し抜け出せなくなってしまふ。しんのすけと友人は春日部防衛隊を名乗り、大人たちを取り戻すべく立ち向かう…という話である。この映画を初めて見たのは、実は私が中学1年生の時である。ストーリーの中で繰り広げられるギャグ要素に大いに笑わせてもらい、お気に入りの作品であった。しかし、大人になり、家庭、子育て、仕事と忙しさにかまけているうちに、この映画のことをすっかり忘れていた。そんなある日、私の姉が「しんちゃんの映画、何本かDVDに入れてるよ。見る？」と声をかけてきた。姉は、私の子どもより2つ上の子どもがいて、その子がすっかり「クレヨンしんちゃん」のファンだったのである。DVDを借りて久しぶりに鑑賞。驚いた。私は、この映画から学ぶことが沢山あったのだ。

一つは、懐古主義への批判である。映画の中で、大人たちは悪役2人の「昔の方が良かった。だから昔に戻りたい。過去に戻るのではなく、現在に過去を蘇らせよう」という思惑に賛同し、現在に70年代の生活を復活させようとする計画に乗ってしまう（実際はそのように洗脳しているシーンがある）。しかし、やはりこの計画はうまくいかないのである。現在

ではなく過去に意識を巡らすことで問題が生じるシーンが描かれる。私たちの生活を振り返ると、私も「以前はこうだった。昔の方が良かった」とつい思いがちであった。そして、自分の子どもたちには、自分が経験したことを経験させられない…と深く考えることもあった。これらのことを考えるとき、私の視点は過去にあり、現在を見つめていないのである。現在を見ずして、何を杞憂するのか。過去ばかりに思いを馳せていては、発展は望めないのである。ともすると懐古主義的思考になってしまう自分を気づかせてくれたのである。

二つ目に懐古主義への批判と繋がる、未来への希望についてである。懐古主義的になるのは未来に希望が持てないからとこの映画では描かれている。しかし、現実、時間は前向きに進んでいるのである（厳密には、前向きに進んでいるように体感しているだけかもしれないが。この話はまた今度…）。未来に希望が持てなくとも、前に進んで行こう、その中で今後の発展が見込まれるのだということも描かれており、ハッとさせられた。子どもを出産してから、不安や悲しさ、焦りなどのネガティブな感情に苛まれることが多くなり、子どもの将来や自身の未来を案じるが多くなっていった私は、このメッセージに感銘を受けたのである。そうだ、アクションを起こす前に色々と案じて結局アクションを起こさないよりも、前に進んでいこう、アクションを起こしていこうと奮起するのである。

三つ目に、絆の重要さである。上では「存在するかしないか見当がつかない」と述べたが、この映画を見ていると家族の絆を感じる。しんちゃんとその父母、妹、飼犬は一致団結して悪者に立ち向かう。その中で、悪者に対して「俺の人生はつまらなくなかない！家族がいる幸せをあんたたちにもわけてあげたいくらいだぜ！」と主人公しんちゃんの父であるひろしは言う。この一言は私の胸をグッと掴んだ。自分の親も果たしてこのように感じて生きてきたのだろうか、また私はこんな風を感じるができるのだろうかと考えてしまった。自分の親の日々の言動を見ていると、このように感じていそうである。一方で私はどうなのだろう。胸を張って、「家族がいる幸せを分けたい！」と言えるだろうか…たぶん言えそう。この感情があることで、家族内で互恵的な行動が維持されるのかもしれない。私は、この感情の存在を意識していなかったが、この感情を意識することで、自身の“対人援助”もリポートされるような気がしたのである。

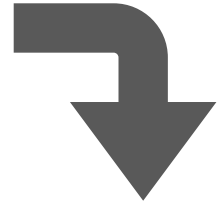
私の“対人援助”をリポートする映画として、「誰も知らない」という映画も簡単に紹介したい。この映画のストーリーは以下の通りである。この映画は1988年の巣鴨子ども置き去り事件を題材とした、是枝裕和監督の映画。都内の2DKアパートに住む母と4人の子ども。母に恋人ができてしまい子どもたちはネグレクトされてしまう。長男が下の子たちの世話をすることで、何とか生活をやりくりしようとするが、不条理な毎日に長男は疲弊してしまう。まだ鑑賞していない方のためにストーリーの詳細は割愛するが、題材となった事件を知らなくとも、多くのことを考えさせる映画である。まさに「誰も知らない」子どもたちの話であるが、この話から、社会の網目をすり抜ける存在がいることを自覚させられる。それは、この社会の中の誰が悪いのかとジャッジメントするための気づきではなく、まさに存在を示すための気づきを与えるキッカケであるとを感じる。この時点でも非常に心苦しくなり、



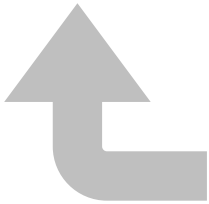
辛くなる。自身がいかに恵まれていたのかを知らされ、「誰も知らない」子どもたちに気づくことなく暮らしてきたことに言いようのない無力感や申し訳なさを感じる。このような感情を抱かせ、社会問題について知らせる機能がこの映画にはあるだろう。さらに「誰も知らない」子どもたちにどうやって気づき、どのように支援の手に繋げていくのかという問題意識も醸成させる。この映画を思い出すことで、社会にはまだ見落とされている子どもたちがいるかもしれないと振り返ることができ、その子たちのためにも“対人援助”を続けていこうと、リブートされるのである。

最後に、2015年、持続可能でよりよい世界を目指し、地球上の「誰一人取り残さない」ことを誓った「持続可能な開発目標:SDGs」が国連サミットで採択された。誰一人取り残さないためにも、私も、私が可能な範囲で“対人援助”に関わっていきたいと強く願う。そのためにも、私の“対人援助”をリブートする映画や書籍を大切にしていきたい。最後まで本稿をお読みいただき、ありがとうございました。

—つづく—



## 「レナードの朝」から対話と生活の質を考える



著：神山 努  
企画：渡辺修宏  
小幡知史  
二階堂哲

### はじめに

「レナードの朝」という映画を私が観たのは学生の頃でした。私の父親は映画がとても好きで、家で、時には映画館に連れられて色々な映画を観ました。その影響か、学生の頃から私も映画を観る習慣ができ、学生で時間があつた日には1日で複数本の映画を観たこともあります。

それはさておき「レナードの朝」のあらすじについて、主人公のレナードは嗜眠性脳炎によって、30年間半昏睡状態で、意識はあっても話すことも身動きもできません。しかし新任ドクターのセイヤーは、レナードに試験的な新薬を投与し、機能回復を試みます。そしてある朝、レナードは奇跡的な「目覚め」を迎える、というお話です。この目覚めからどういう展開になり、映画ではどのような結末となるか、それ以上のネタバレは止めておきます。

私は大学で障害について学んでいましたが、「レナードの朝」を観たのはそれとは関係なく、旧作おすすめを紹介する何かで見てなんとなく選んだのだと思います。見終わった後も特に障害支援と紐づけて考察もしませんでした。思い返すと、学生の頃は深く考察する習慣はなく、ようやく最近になって物事を考えるようになった気がします。それでも心に残り、対人援助をレポートする1本の映画と言われ、「レナードの朝」を思い出しました。

学生の頃から何年も経ち、障害がある人々に対する教育や支援について実践や研究を重ねた今に改めて考察すると、試行錯誤、生活の質というキーワードでこの映画を思い出したのかなと思います。

### 支援にみる「対話」

ドクターのセイヤー氏は、レナードを含めた嗜眠性脳炎により昏睡状態にある人々への機能回復のため、映画の冒頭から試行錯誤します。それは昏睡状態にある人々のある日の様子がきっかけに、新薬の投与をしてはその結果を評価して再検討します。

障害がある人々に対する支援では、PDCA サイクル（Plan-Do-Check-Act のサイクル）が重要とされています。障害がある人々への丁寧なアセスメントから支援計画を立て、その計画に基づく支援を実践し、その結果を評価、評価結果に基づき計画の再検討というサイクルです。支援実施前のアセスメントも重要ですが、それと同じくらい重要なのは支援実施後の評価です。評価結果から支援計画を再検討し、修正を重ねることで個に適した支援計画となっていきます。支援対象が音声言語を発しない場合、評価からの計画再検討は、本人との「対話」のように思えます。

この、話し言葉を交わすことも交わさないこともある、評価からの支援再検討の「対話」のようなサイクルの重要性を忘れないようにしなければと思います。支援の経験を重ねていくと、ある程度一般化した支援対象者の属性で、支援計画を判断してしまいそうになります（〇〇障害がある小学生ならこうした支援など）。しかし個々のニーズに即した支援が基本になります。丁寧なアセスメントから支援計画を立てることも大事ですが、その時点ではその支援計画はその対象に適しているか、仮説の段階と言えます。支援計画を実施して評価する「対話のようなやり取り」を忘れないようにしなければと思います。

## 生活の質の向上のための環境調整

そして支援対象者の生活の質（quality of life; QOL）の向上を追求することも映画から考えさせられます。例えば、発達障害がある人々には環境を整えることで本人ができること、やりたいことが実現できます。しかしこれに対して様々な立場から、「その環境調整がないとできなくなる、それは意味があるのか？」と問われます。もちろん意味あるでしょう。

本人たちに有効な環境調整が見つければ、それをより広いレベルの社会の中に広げていくことで、本人たちが社会でできることは増えていきます。望月昭先生の援助—援護—教授からも同様の考えを受け取れます。そしてそうした条件が整った中で本人たちができることからやりたいことを選び、実際に行っていくことが本人たちの生活の質の向上だろうと思います。

様々な実態把握から本人たちが求めているだろうことを推察し、それを支援者と言われる周囲の人々が与えることではなく、本人たちが求めていることを自らで選び、取りに行くこと、その中で必要な調整を周囲と「対話」して進めていくことこそ、「支援者」に求められることなのだろうと思います。

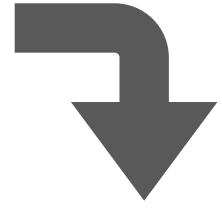
本稿を書き終えて、改めて「レナードの朝」を観てみようと思いました。今ならではの発見があるかもしれません。

## 参考

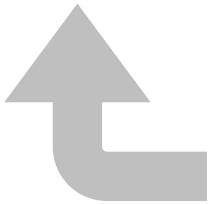
レナードの朝 ソニーピクチャーズ公式 <https://www.sonypictures.jp/he/702>

海保博之（監修）・望月昭編（2007）対人援助の心理学．朝倉書店

—つづく—



## 多様性，多文化，多層性，多重性と向き合う， という自己覚知と自己開示



著：渡辺修宏  
企画：渡辺修宏  
小幡知史  
二階堂哲

### はじめに

私からご紹介したい映画は、ヴィゴ・モーテンセンとマハーシャラ・アリのダブル主演で話題となった「グリーンブック」です。

この映画は、人種差別が激しかったといわれる1960年代のアメリカを舞台に、黒人ジャズピアニストのドン・シャーリーと、白人のイタリア系移民であるトニーの交流を中心に描いたロードムービーとなります。アメリカ南部のコンサートツアーに出かけた彼らが、社会の有り様という「自分の外側にある世界」に直面し、闘い、もがきつつも、やがて、「自分自身の内側」にも向き合っていくというストーリーが、概略となります。どうも、実話に基づく映画のようです。

この作品を、「(単なる)人種差別の映画」として語ってしまうと、私の捉え方と大きく異なってしまうでしょう。無論、この映画が、かつてはびこった人種差別を、あるいは、今もどこかしこに残る人種差別をさりげなく批判し、皆で改めんとする強いメッセージを発していることを否定する気は、毛頭ありません。ただ、本稿では、「かくも差別が人を苦しめる」という理解以外に、焦点を絞ることとしたいのです。それは、「人種差別」という事態を俯瞰することより、「差別をする/される」という実態の中で生きる人々の主観なり客観の方に、私の興味が強く傾いたからなのです。

### 多様性，多文化，多層性，多重性

ところで、この頃、『多様性』をいかに理解するかが、今後の地域社会のカギとなる」とか、『多様性』を包摂していくことこそが、これからの地域づくりである」といったフレー

ズを、あちこちで耳にするようになりました。この「多様性」は時に、「多文化」という言葉に置き換えられたりもします。また、「多層性」とか「多重性」という言葉も聞く様になりました。

多様性，多文化，多層性，多重性。

言わんとすることを強調するために類語が並んでいるのか、あるいは、それぞれの意味は実は大きく異なるのか、正直、私にはよくわかりません。ただとにかく、いろいろな違いを乗り越えていくこと、あるいは、受け入れていくことが、重要視されていることだと理解していますし、概ね納得もしています。そのような視点なり、感性なり、礼儀なり、作法なり、行動なり、習慣なり、常識なり、文化は、グローバル社会においてもローカル社会においても必要不可欠なことなのだろうと、私も考えております。

その一方、そして先に記した通り、多様性だか、多文化だか、多層性だか、多重性という「こと」だか「もの」を、どのように理解すればいいのかについては、まだまだ疑問を感じております。意味や理念や概念としてのそれらではなく、私が生きる「日常生活における1つ1つの振る舞いやかかわりの中で」、という捉え方においてです。私の生活と人生における、多様性、多文化、多層性、多重性とは、一体なんなのでしょうかね？

私も地域社会の成員の一人として、また、職業人、社会人、家庭人、息子、弟、兄、夫、父親という属性のもと、老若男女、数数えきれない方々と日々かかわりをもたせてもらっております。ですが果たして、私は、多様性、多文化、多層性、多重性とやらを踏まえた営みができているのでしょうか？

映画「グリーンブック」では、人種の違いを大きなテーマとしていました。私も、記憶の中では小学生の時に初めて、同じ小学校に通ったベトナム人、ドイツ人、アメリカ人と関わって、「人種の違い」を肌で体験しました。まさに、肌の違いに基づいて、「自分（の色）と違う！」と意識したのです。

それは、その方々とのかかわりにおいて、ある種の緊張感を生みだしました。緊張なり思考を伴わせて、私は彼らと、かかわったのです。「（自分と彼らの）爪はどう違うのかな？毛根も違うのかな？、あれ？でも鼻の高さはたいして変わらないじゃん」と、自分や自分とおなじ日本人（黄色人種？）と彼らの身体的違いに注目したのです。

でも、そのような注目も、すぐに消失してしまいました。ある程度彼らを見つめて、彼らと私の身体的特徴の違いを把握してしまえば、「多少の違い」が明らかになっただけで、それ以上の興味など生まれることなどなかったからです。でも、ドッチボールや陸上競技を通じて、彼らのパフォーマンスに体力的技術的に負けることがあると、「彼らはもともと（日本人より）体力的に優れているから仕方ない」という理屈を、何度となく使ったこともありました。今思えば、単なる言い訳でしかありませんが。

いずれにせよ、彼らと友人になって以降、人種の違いは、私にとってさほど大きな問題でも、大きな関心にもなりません。彼らと「仲良くなれる/なれない」、とか、彼らを「好きか/好きでないか」、という次元において、人種という要素はまったく関与しなかったです。

この頃に出会ったベトナム人の X さんは、当時の私にとって、大変好感度の高い人物の 1 人でした。残念ながら中学に進学してからは、X さんとの接点がなくなってしまったのですが、中学にいても、高校に行っても、大人になってからも、X さんに対する気持ちは揺るがなかったのです。そして最近知ったのですが、私の息子の友達の一部が、この X さんの妹の子どもであることがわかりました。不思議な縁を感じました。X さんと初めて出会って 40 年弱が過ぎていて、そもそも X さんとはたった 2 年ほどしか交流がなかったはずなのに、…人の縁とは実に不思議なものです。

大学時代の思い出を語るならば、その頃、私に一番優しくしてくれた他人種（私とは異なる人種、という意味で便宜上用いた表現）は、黒人の Y さんでした。彼とはウェストフロリダ大学で出会いました。とても親切で、紳士で、素敵な人でした。私と同じ年とは思えないくらいしっかりした方でした。

時はビル・クリントン政権の時代でした。Y さんが実に冷静に、そして見事に、クリントン政権のあり方を批判し、（主に人種差別や経済格差についての）社会の有り様を憂っていました。それらを見聞きして、正直、私は自分が恥ずかしくなりました。なにしろ当時の私の悩み事といったら、就職や進路より、友人関係、親子関係、そして恋愛についてなど、極めて個人的なことばかりだったからです。世間や世界についての悩みなど、まだどこかで「自分にはまだちょっと早い」とか「難しい」とすら感じていたからだと思います。Y さんの大人っぽさに、あこがれに近い感情すら、抱きました。

また、彼は、金銭的に余裕がない私に、さりげなく受容的でした。当時、ある程度お金が使える（他の日本人の）方々は、（主に白人のアメリカ人と共に）週末は動物園に海岸にと、頻繁に行楽に出かけていました。しかし、そんな余裕などない私はいつも、彼らが出かけた後、人目を避けるように、1 ドルでペプシ 1 本とマフィン 1 つを買えるベンディングマシンの前で、食事を済ませていたのです。

ハッと気づくとそこには、私と同じように金銭的余裕がない人たちが集まっていました。大半が黒人の方々でした。Y さんもその一人だったのです。貧乏に引け目を感じていた私を、皆は、さりげなく受け入れてくれたようでした。もっとも、彼ら自身も決して裕福ではなかったようです。

私たちはいつしか、ベンディングマシンの前でジカ座りして、右手にペプシだかコーラを、左手にマフィンをもって、語るようになったのです。その時の会話は、実にたわいもない内容で満ちていました。でも私にとって、とても心地の良い内容でした。各家庭の経済的な厳しさもそうですが、親兄弟の関係で悩んでいることであつたり、自分の夢であつたり、今思えば、実に若者らしい会話が飛び交っていたのです。そして、それぞれが語るストーリーに、自信と不安がミックスしていました。ここでの自信とは、「自分はこう生きたい！こう生きる！」といった決意のような哲学的なものでした。不安とは、「金銭的事由、あるいは機会不均等がゆえに思い通りに生きられない。他者に理解してもらえない。将来の先行きが見えない」といった内容でした。実に生々しい、いわゆる、「人間のリアルな声」が聞

こえきて、私は、人種や国境を越えたつながりを感じたのでした。

その後、大学のイベントで、日米交流サッカー試合が開催されました。その時、私がゴールを決めたら、Yさんら皆がそれをととても喜んでくれて、祝福してくれたことが、私を感激させてくれました。私は彼らと一緒に、(生まれて初めて)サブウェイのサンドイッチを食べて、心から「美味しい」と感じました。その旨さに感動しました。こんなうまいサンドイッチがあるなんて、とびっくりしたのでした。

裕福そうな白人らが落胆している横で…笑。

## 私の中の多様性、多文化、多層性、多重性

映画「グリーンブック」の話に戻ります。

私にとっての、多様性、多文化、多層性、多重性とは何か、…正直、説明できません。できるといえばできるけど、できないといえばできないのです。私と、私以外の他者の間における、多様性、多文化、多層性、多重性とやらかかわる違いは、あるといえばあるし、ないといえはないのです。少なくとも、私はそう感じているのです。

映画の中で、ドン・シャーリーとトニーは当初、人種の違いを気にしたり、または、それに惑わされたりしていました。時に、その違いを気にしないように、その違いに負けないように、自身を律してもいました。その過程を通じて、お互いがお互いの新たな一面を知って、受け入れ難さを感じたり、自身との共通点を見出したり、そして、受け入れたいと願って、垣根を越えていくのでした。

そのような彼らの内的な変化と、その変化に伴う彼らのかかわりの変質が、私にとっての最大の関心事となりました。すなわち、彼らの自己覚知、自己開示こそが、私にとってのこの映画の主題だったのでした。

人種差別や偏見といったことは、当事者というよりむしろ、「他者が評価する事態」といったほうが、適切なことが多いのではないのでしょうか？少なくとも私の体験知は、そのように感じております。

映画の中で、ドン・シャーリーとトニーの両方が、差別なり偏見を、少なからず有していました。どっちが正しいとか、正しくないとか、そういった問題ではないように感じました。差別なり偏見は、多かれ少なかれ、皆、有しているのではないのでしょうか？もしそうであるならば、そしてさらに飛躍して、もし、「差別・偏見、良くなし、当然、それらを有している人も良くなし」という論理がはびこることになったならば、私を含めて大半の方が、その「良くなし」に該当してしまうのではないのでしょうか？

こういった論理は、まさに、私の単なる考えすぎなのでしょう。でもなんだか私は、そんな論理にとらわれて、なんだか、生きづらさを感じるのです。「差別・偏見良くなし」と、自分や他人が有しているなにかを、まるで「弱い者いじめ」のように探し出し、攻撃？排他？しようとするような感覚に襲われるからです。

私は、そんな論理よりも、ドン・シャーリーとトニーの両方が、自分自身がどんな感性、

嗜癖、志向を持っていて、その一方、どんな感性、嗜癖、志向を（知らず知らずのうちに）排除していたのかに「気づくこと」に、注目したいのです。その気づきの過程こそが、とても大事なことだと感じるのです。

自分を知っていく、気付いていくという「自己覚知」と、そこで得た気づきに基づいて生き方を変容させていくという「自己開示」、この2つの営みを一人一人が徹底することが、多様性、多文化、多層性、多重性とやらを理解し、体現することになるのではないのでしょうか？私は、そう思うのです。そして、それがゆえに、自分の内側を突き詰める探求だか冒険こそが、差別・偏見に立ち向かうことになるかと考えるのです。

差別・偏見を無くそうとするならば、自分以外の誰か、またに何かに、目を血走らせるより、自分の内側のどこにそれが眠っているのかと探し続けて、その過程を告白しつづけることのほうが、結果として自分以外を受け入れやすくなるのではないのでしょうか。結局、変えるべき対象とは、自分自身しか、ないのではないのでしょうか。

そういった視点に基づいた時、映画の中で必死に生きるドン・シャーリーとトニーのかかわりが、私にとって、他人事ではなくなるのです。ああ、彼らはまさに、「私自身なんだ」と、感じられるのです。

ぜひ皆さんにも、この映画を見ていただきたいです。そしてそれに際し、上で記した、私の主張を踏まえてもらったうえで、皆さんが映画のラストシーンをどう受け取るか、…ぜひお尋ねしてみたいものです。ドン・シャーリーはどんな気持ちで、決意で、トニーを伺ったのか、そしてトニーはどんな気持ちで、決意で、ドン・シャーリーを部屋に受け入れたのか、ぜひ皆さんのお考えをお聞きしたいものです。

—つづく—



## 島根の中山間地から Work as Life

### 第10回

### 「フリースクールの1つ」

野中 浩一

#### 1. 社会のセーフティネットとして(官民連携)

2017年に教育機会確保法が施行されてから6年が経った。私が島根県の松江市で運営するフリースクールも13年目となり、開校当初と比べて官民の連携が多少なりとも動いていることが感じられる。

2019年に通知された文部科学省の『不登校児童生徒への支援の在り方について』の文中には、「本人の希望を尊重した上で、場合によっては、教育支援センターや不登校特例校、ICTを活用した学習支援、フリースクール、中学校夜間学級での受入れなど、様々な関係機関等を活用し社会的自立への支援を行うこと」「その際、フリースクールなどの民間施設やNPO等と積極的に連携し、相互に協力・補完することの意義は大きいこと」が明記されている。

こうした施策に対応した、著者の周りの身近な動きがある。著者が運営するフリースクールにおいて、2020年より「島根県子ども・若者支援地域協議会」の民間団体として参加が認められ、多様な情報交換ができるようになった。また、代表である著者自身が2019年以降、県立の養護学校の「学校運営委員」として参画して運営会議に参加したり、養護学校の先生20名が視察に来られたり等の行き来が生じた。このことから、不登校の子どもも含めて児童・生徒1人1人が安心してより良い学校生活を送るための機会や環境の整備が進んでいるように感じている。

一方で、全国的にはまだまだ民間のフリースクールとの連携には二の足を踏むケースが多いように感じている。神奈川県や茨城県や京都府など積極的にフリースクールと連携する自治体がある一方で、全国的には連携が進みにくいのはなぜなのか。やや古いデータではあるが、2016年に文部科学省による自治体への調査結果では、連携に向けた課題として「学校復帰のための取り組みと相いれるか明確でない」、「連携の効果が明確でない」、「子供の個人情報の共有が難しい」といった点が挙げられている。もちろんこれも一因であるが、これまで12年以上に渡りフリースクールを運営してきた立場から見たときに、学

校の先生や自治体の職員が、「フリースクール自体を知らない」または「多少知ってはいるが、深く関わったことがないから、よく分からない」など、連携以前にそもそもフリースクールの存在や実態を「知らない」ことも連携が進まない一因であると感じている。

そこで、今回は主に高校生たちが通うフリースクールの1つを、写真や図表を中心に紹介したい。

## 2. 集いの場(写真、間取り、生徒数推移)

著者が運営するフリースクールは、15歳から20歳前後の生徒たちが、主に高校卒業資格を取得することを目的に通っている。学習だけでなく、対話、遊び、活動を集団で行う、通学型のフリースクールであり、連携する通信制高校の卒業資格が取得できる通信制高校キャンパスを兼ねている。

在籍する生徒30名強、過去の学校の経歴だけで言えば、長年にわたる不登校、別室登校、支援学級などの経緯をもつ子どもたちが混在している（もちろんそういう経緯をもたない子も含まれている）。医療にかかる子や何らかの診断が出ている子も少なくない一方で、訪れた教育関係者からは「こんな活気ある支援現場があると知らなかった」「こんな普通に元気な高校生たちとは思わなかった」との声があがる。いろいろなタイプの子たちが集団で共存する、教育とケアが並立している現場である。



※プライバシー保護のため、写真はすべて加工しています

建物、間取り、机の配置等については下の図1のとおりである。外観では2軒あるように見える両方もが活動スペースであり、日常的に通ってくる生徒18~20名と職員4~5名が一斉に活動できるように配置している。また、中央から全体が見渡せるよう、間仕切りを最小限にしている。最大で全生徒30~35名が集うこともあるが、その際は別の会館を借りて使用することもある。

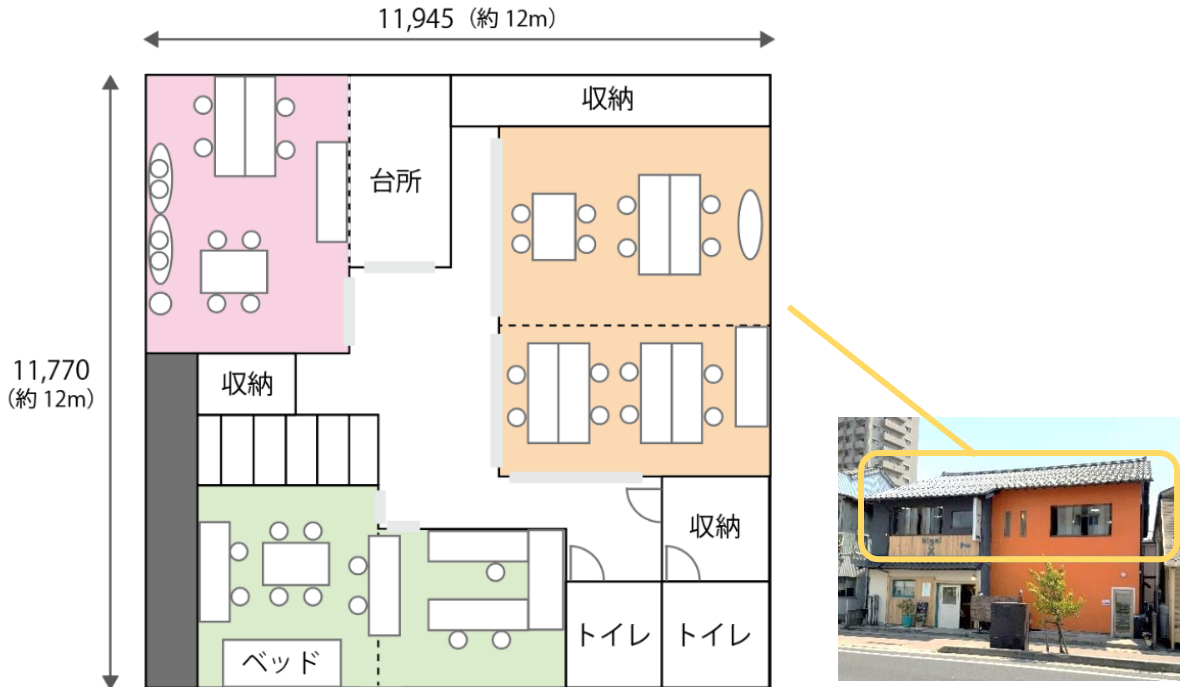


図1 間取り (2023年度時点)

当該フリースクールについて、見学・説明会においてよく聞かれる質問は下記のとおりである。

- ・何人くらい在籍して通っているのか
- ・辞める子もいるのか
- ・3年で卒業できるか、留年はあるか
- ・男女比はどのくらいか
- ・中学生も通えるのか

それぞれの「回答」は下記のとおりである。

- ・何人くらい在籍して通っているのか →概ね30名強
- ・辞める子もいるのか →いる。年間で0~3名の間。ただし数年後に復帰した生徒も2名あり
- ・3年で卒業できるか、留年はあるか →できる。学内の留年は12年間の卒業生128名中5名
- ・男女比はどのくらいか →12年間のうち11年間は概ね半々。近年は男子比率が多め(6割強)
- ・中学生も通えるのか →フリースクールコースで小・中学生、大学生も通うことがあるが、ごく少数

これまで12年間の生徒数は図2のとおりである。開校3年目以降は、30名強で推移している。基本的には希望があれば断らない方針でいるが、コロナ禍の一時期は断らざるをえない状況があった。

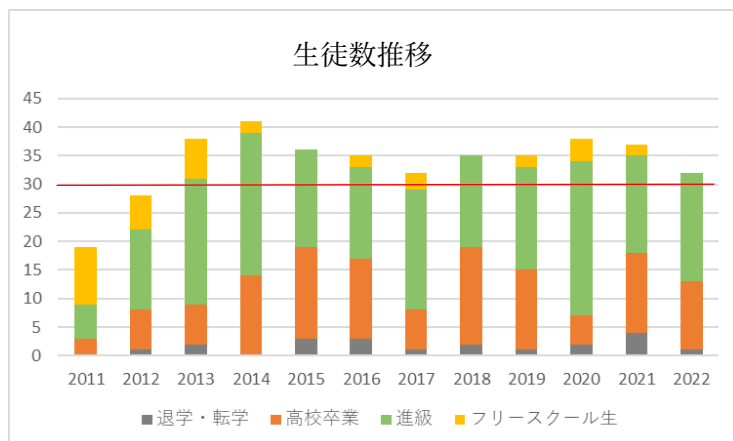


図2 12年間の生徒数推移 (2011年度～2022年度)

### 3. 学びの場 (諸活動、時間割り、家庭・保護者との関与)

このフリースクールでは、「対話」「遊び」「学習」「活動」を循環させながら、人間形成と学習の習得、そして将来の進路を模索する役割を担う。教育の方向性や集団形成はロジャーズのPCA (パーソン・センタード・アプローチ) を、循環構造についてはオランダのイエナプランを拠り所としている。諸活動の一例として、新入生が入学間もなくの3ヵ月間で行ったことを図3に記す。

2023年4～6月に行われたこと (生徒)				
	対話	遊び	学習	活動
日常的 (ほぼ毎日)	◎昼のひと言	◎休憩時間に集まってわいわい	◎レポート学習 ◎相互の教え合い	
定期 (頻度高～中)		・スタイルアップ腕立と腹筋を15回 (任意参加)	◎さかのぼり学習の英語講座 ◎地理・歴史講座 ◎理・数講座	◎そうじ
不定期	◎学園長より、起きていたり、感じていることの伝達 (随時) ・LINEでのやりとり (欠席、遅刻) ・直接の相談、ずれ感の翻訳・通訳 ・LINEでのやりとり (相談)	<頻度高> ・カードゲーム、ボードゲーム ・公園で軽運動 (キャッチボール、ドッチボール、卓球)  <頻度中～低> ・料理、お菓子づくり ・イラスト描き ・ドライブ+海辺の散歩 ・楽器 (ギター、ドラム、ベース) ・手芸、工作 ・釣り ・ファッション、メイクの集い	<頻度高> ◎各科目の授業 (主要5教科) ◎各科目の授業 (保体、家庭、音楽、美術)  <頻度中～低> ◎学習 (レポート、授業) 進行度チェック ◎進路のワークショップ ・大学散策、図書館利用	・バドミントン (部活動)
単発				◎山でのハイキング、BBQ ・ボランティア活動の計画、実行 ◎定住財団とのコラボ企画「10代に求められていること」対談 ◎浴衣の着付け講座

◎項目はその日に来ている生徒ほぼ全員が参加 (20名前後)    ○項目は多くの生徒が参加 (10名前後～20名弱)    ・項目は10名未満の少数または個人で行われている

図3 活動の具体例 (対話・遊び・学習・活動の循環)

学習については、在籍する生徒それぞれ経験・知識・能力にかなりの幅がある。高校の学習内容や大学受験に円滑に向かえる生徒がいる一方で、中には小数・分数の計算や This や That を読むことがおぼつかない生徒もいる。こうした様々な生徒たち、特に学習が苦手だったり発達に凸凹がある子たちが、自分ごととして学習に向かえること、支援されすぎて学びの主体性を見失っている状態から脱することを目指している。そのために当該フリースクールでは、やるべき学習課題および見通しを明確化し、1日の中でも個別学習と集団学習を横断しつつ、これまで教えられたり支援されていた側だった生徒が、教えたり支援したりする側にもまわる。折々の集会で各自の進捗を共有しながら、日々学習に取り組んでいる。

学校としての日常を過ごすうえで、当該フリースクールにおいても時間割りを定めている（一例として図4にて2023年度と2017年度の時間割りを提示）。この時間割りにについては、生徒の状況、集団としての様子により、年度ごとに大幅に変更を加えることも多い。

時間割り 2023年度						
	月	火	水	木	金	土
10:30 -12:50	フリー 英語講座	フリー 英語講座		フリー 地歴/記述講座	フリー 記述講座	
13:00 -15:20	活動	活動		活動	活動	
15:30 -17:50	フリー	フリー		フリー	フリー	

●上記の12枠の中から、「基本となる4枠」を定めます（月・木or火・金）

- 「基本4枠」の時間内に登校し、学習および活動を行うことで進級・卒業できます
- 「基本4枠」以外にも、「自由登校枠」として最大プラス4枠まで登校できます
- 自由登校枠について、その日の判断で登校してもらって構いません
- 自由登校枠は、行事等の事情により、事前に告知して登校調整する可能性があります
- 4月の年度初め2～3週間程度は、自由登校枠を0～2の間で調整いたします

平成29年度 時間割						
	月	火	水	木	金	土
9:00-10:00	待合時間(1F)	待合時間(1F)	待合時間(1F)	待合時間(1F)	待合時間(1F)	待合時間(1F)
10:00-11:40	フリータイム	フリータイム	フリータイム	フリータイム	フリータイム	フリータイム
11:40-12:40	昼休み&掃除	昼休み&掃除	昼休み&掃除	昼休み&掃除	昼休み&掃除	昼休み&掃除
12:40-13:00	連絡と報告	連絡と報告	連絡と報告	連絡と報告	連絡と報告	連絡と報告
13:10-14:00	体育・外遊び	音楽 国語	数学(受)	美術 社会(地歴)	英語	家庭
14:10-15:00	体育・外遊び	音楽 国語	数学(さか)	美術 社会(公)	英語	家庭
15:00-16:00	Tea Time	Tea Time	理科 Tea Time	Tea Time	Tea Time	Tea Time
						卒業生の集い ・フワフワサロン (第4土曜日) ・夏祭りの会
◎週9日のコースは、月・水・金と火・木・土の2パターンの通い方 →前・後期で入れ替え →12時40分の「連絡と報告」までに登校することで出席（登下校時間は柔軟）						
◎週4～5日のコースは、月・水・金が必須、火・木・土から1～2日選択 →10時～15時00分までが登校時間（午後の授業参加も必須）						
※全クラスとも、登校曜日の『連絡と報告』の時間（12:40～13:00）は必ず出席する						

図4 フリースクール時間割り

開校して数年間は時間割りどおりに通える生徒ばかりではなく、午後から登校する生徒も半数近くにのぼり、通えない日がある生徒もいた。一方で、近年は9割以上の生徒が時間割りどおり午前中から通ってきている。この点は、場や集団の安全感の醸成、生徒間の集団としての関係構築、メールやLINEを活用したナッジなど、積み重ねてきた工夫が一定の効果を表しているものと考えられる。

当該フリースクールでは、家族に安心してもらい、笑い合える関係づくりを目指している。ご家庭が抱える荷物（負担や負荷、負の循環等）の一部をおろしてもらうことを目指して、定期的に家族と会う機会を設け、また不定期に連絡をしている。その目的は生徒の変化や家庭の変化を知るためであり、何か大事がある前に一緒に話し合える下地づくりをするためでもある。

2023年4～6月に行われたこと（保護者）				
	来校	電話	メール・LINE	文章
日常的				
定期	・保護者会（年2回） ・保護者面談（年2回）			・通信紙の文章交換（毎月）
不定期	・入学前の面談	・相談や質問の受付 ・新入生の家庭に近況連絡 ・何かの予兆を感じたとき	・疾病や災害による対応 ・相談や質問の受付	

図5 家庭・保護者との関与

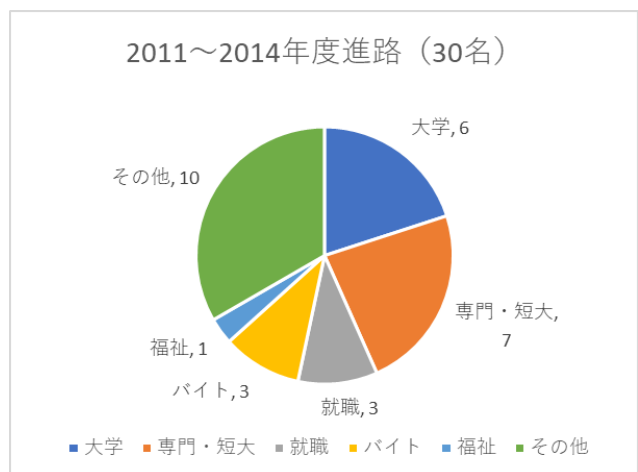
## 将来の架橋（進路）

卒業生がどのような進路を辿ったかは図6のとおりである。進路を4年ごと3期に区切ってみると、大学、専門・短大、就職といった一般的に「安定している」と思われる進路についての生徒の割合が「57%→74%→82%」と年を追うごとに次第に高まっていることが分かる。

著者が把握している範囲での進学・就職後の経過について、「四年制大学」に進学した卒業生は、そのほとんど（90%以上）が卒業に至っている。「短大・専門学校」に進学した卒業生では、約65%が卒業、約35%が途中で辞めて別の進路に進んでいる。「正社員として就職」した卒業生では3年以上続けている生徒が約60%であり、3年未満で辞める生徒が約40%である。

12年間の進路 128名	
大学（四年制）	22名
専門学校・短大	45名
就職（正社員）	25名
アルバイト	9名
福祉就労等	3名
その他	24名

※その他：浪人、職人修行、医療連携、手伝い・軽バイト等



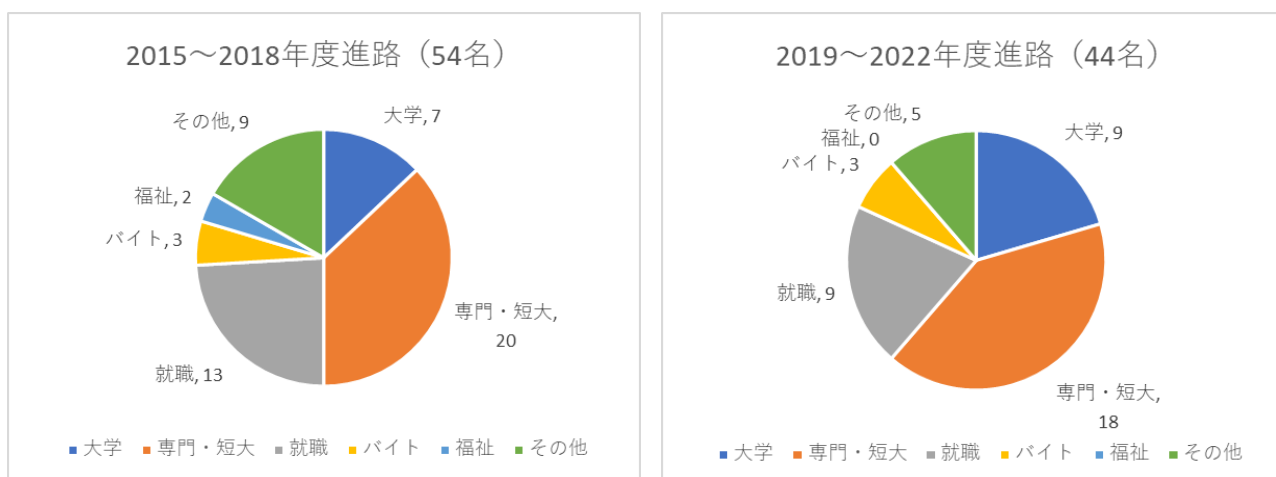


図6 卒業生の進路 (2011年度～2022年度)

## フリースクールと経営

以上、ここまで提示してきた図1～6は支援機関として著者が運営するフリースクールの実態である。参考のため、経営体としてのフリースクールを下記の表1に記した。

設立年	2006年に母体の有限責任事業組合を発足、2011年にフリースクールを開校
創設者	野中 浩一
ミッション	理念：①ずっと相談できる場所、②せまく・ふかく関わる、③学校の機能＋家庭の機能補助 方針：いま目の前にある環境（自ら選択した環境）において、調和と妥協の中で折り合いをつけながら、学業や仕事、そこに含まれる人間関係を維持・継続させられる人材育成
事業規模	全体の事業収入は約2000万円（2013～2022年度の10年間の平均）
職員数	常勤4名・非常勤5名、講師6名・ボランティアスタッフ1名
拠点数と所在地	1か所 島根県松江市
在籍者数と居住エリア	32名 松江市および、近隣の出雲市、安来市から通学
開室日時	月・火・木・金の週4日開校 9時から18時まで 水・土は事務や行事等で不定期に開校
コース	高校卒業コース、フリースクールコース
費用	高校卒業コース サポート料金270,000円/年、月謝30,000円/月
その他費用	制服（購入任意）男子一式30,000円・女子一式38,000円 夏合宿（参加任意）10,000円前後、修学旅行（参加任意）90,000円前後 ※別途、通信制高校費用10,000円～270,000円程度（世帯収入による）
補助金	遠方通学補助20,000～40,000円/年、ひとり親補助40,000円/年、 学び奨励金80,000～100,000円/年
関連事業等	カウンセリング（心理オフィス）
その他	島根県子ども若者支援地域協議会員（2020年10月～）

表中の学費について、フリースクール費用と通信制高校費用を合わせた総額で年間 89 万円～46 万円に設定している。経済的に厳しい家庭については、就学支援金（給付）、県・市の補助金（給付等）、奨学金（貸与）を組み合わせた範囲内で通えるように、加えて独自の補助金制度を設けて学費の総額を年間 40 万円代後半から 50 万円代前半になるよう調整している。そのこともあり、これまで非課税世帯も含め様々な所得帯の家庭が通学・卒業してきた。中には生徒自身がアルバイトによって学費の全額、または半額程度を支払ったケースも数件ある。

## おわりに(写真)

ある 1 つのフリースクールについて、図表をもとに実態を述べてきた。多数ある民間のフリースクールは、経営者や運営体制がそれぞれまったく違うため、多種多様で玉石混交である。しかしどの場所であっても、集う子どもたちに笑顔があり、継続して対話や遊びや学習に取り組むことができているのであれば、いい場所と言えるのではないだろうか。最後に、集団で活動することを基本とする通学型のフリースクールでの活動の様子を再度提示したい。



※プライバシー保護のため、写真はすべて加工しています



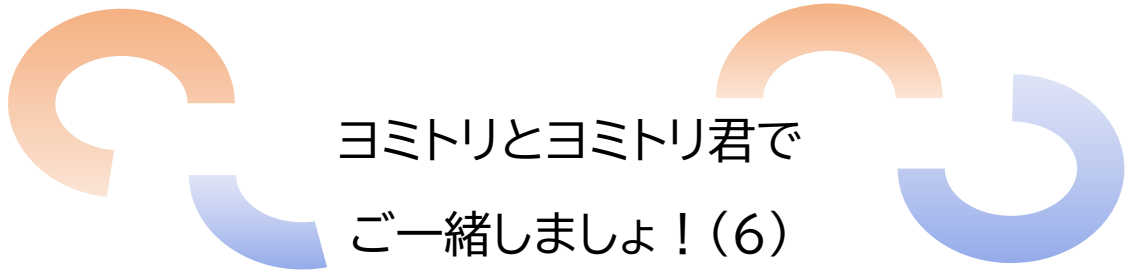
引用・参考文献

文部科学省（2019年10月25日）「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1422155.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1422155.htm)

日本経済新聞（2016年7月5日）「フリースクールがある自治体、5割超『連携なし』」

<https://www.nikkei.com/article/DGXLZO04500550V00C16A7CR8000/>



# ヨミトリとヨミトリ君で ご一緒にしましょ！（6）

高木久美子

意識があるのに、わかっているのに、言葉を発しているのにそれが伝わらないことについて、どう向き合い、取り組んでいくかということは、人の尊厳に関わる大切なことです。技術と技能を心で繋ぎ、障害のある方のコミュニケーション支援・レクリエーションの楽しい機会の提供を目指して非営利で活動しています。活動を通して学んだこと、感じたことなどを書いていきます。

## ヨミトリ君の快進撃が止まらない

### 2周年のふりかえり

ヨミトリ君がとても元気です！

2021年8月に、対人援助学会会員で本「ヨミトリとヨミトリ君で一緒にしましょ！」にてお馴染みのシステムエンジニアの岡田さんによる書字介助ヨミトリ(指談)のデバイス化着手に始まり、同年10月に試作機完成、11月にロックインの状態のパーキンソン病の方とテストして動作確認でき大成功。翌2022年4月にはその新規性で実用新案登録と、驚異のスピードで開発は進んで来た、これを快進撃と言わずして何といいましょうか！（冒頭から自画自賛状態は投稿のいつものパターンですみません…）

元々は病気や事故による全身麻痺、発話不能等の重度の後遺症で、覚醒しているのに意思を表出できないロックインの状態にある方のための介助付きコミュニケーションのデバイス化が目的でしたが、装置にかかる荷重の読み込みが柔軟にできるため、脳卒中の後遺症で片麻痺となられた方々にも応用して使っていただけることが判明し、同3月と6月には脳卒中のいきがいくくりNPO法人ドリームの協力で「ヨミトリ君と麻痺手で遊ぼう♪会」を開催。今までにない楽しいレクリエーションの機会とたいへん好評をいただいた上に、その際取得させていただいた片麻痺の方の操作のデータを基に、脳血流のAI解析による意思疎通(BCI)支援の研究者 増尾さんの助言を受けて同11月に対人援助学会年次大会でのポスター発表にて祝学会オンラインデビューできたのがまだ記憶に新しいところです！（今年もエントリーしました。猛烈楽しみです。）また、同時期から東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」（以下ひまわり）との連携が始まり、ヨミトリ君の体験をしてくださる方が一気に増えました。

### ヨミトリ君3号誕生

そんな中で、今年に入ってから岡田さんがデバイスの更なる改良を目指して書字介助ヨミトリ(指

筆談)の練習に挑戦。極低荷重を読み取れるヨミトリ君を開発した俺様にヨミトリができないわけがない！と、そこまでは言われていないけど相当自信があった様子ところが初回は見事に撃沈。その証言は前号の「ヨミトリとヨミトリ君で一緒にしましょ！(5)」に書いた通りです。が、その後、これまた驚異的なスピードで岡田さんはヨミトリがメキメキ上達され、最近では、パーキンソン病の進行によりロケットインの状態になられているAさんに

「おかださんすごくうまくなりましたね  
おとこどうしのはなしがしたいな」  
とまで言われるほどに！

この「現地現物」作戦の効果は絶大で、岡田さんは再び閃いてしまいました。  
書字介助ヨミトリ(指談)をもっと可視化できる仕組みがわかったぞ！

それからほどなくして、ヨミトリ君 3 号の試作機が完成したのです。

「できました」

と淡々と語られる様子に、ヨミトリ君開発初期にはその都度腰を抜かすほど驚き狂喜していた私も、あまりにすごいのもずっと続くと慣れてくるというのか(慣れるな)、

「おーっ」と言ったものの、驚きは冷静さを保っていました。

ところがです！

このヨミトリ君 3 号が、ほんとに、本当にすごかったのです！！

1 号と同様に、3 号試作機の初テストはパーキンソン病のAさんをお願いしました。

パネルに手(指)を当てる方法は 1 号と同じです。

デバイスの形状も一見すると 1 号とよく似ています。

でも、その性能が全く違ったみたいです。

### A さんの言葉

検証はいつものようにAさんに先ず操作をしていただき、その後コメントを書字介助ヨミトリ(指談)で書いて言っていたいただきました。

Aさんは言いました。

「ものすごくかるくおせる おどろきました

これはもってでかけられますか

どうしてもいいたいことはたかぎさんといいたいけど

どうでもいいことは よみとりくんでもいいかなと

おもいはじめています

とてもうれしい」

持って出かけられますか  
ヨミトリ君で話したい

ヨミトリ君の取り組みを開始してから、初めて言っていた言葉です。  
おまけに今までは高木さんのヨミトリ一択だったのに、

(書くのに)よみとりくんでもいいかな

って、このコメントを引き出すヨミトリ君 3 号、何者ですか？！

すごくうれしい。うれしいけど…

横を見ると、普段はみんながゲームで盛り上がっている時も冷静にデータだけを見つめている岡田さんが、「ヨシッ！」と呟きながら、ガッツポーズを何度も何度もしています。相当嬉しそうです。

いよいよ高木お払い箱か。うれしい。それもまたよし。すごくうれしいです。病気の進行で全身を動かさず言葉も発することができなくなってしまった A さんがヨミトリ君 1 号で誰の介助も受けずパネルを押して掛かる荷重の増減を初めてディスプレイに示して皆で喜んだ日、でも「たかぎさんと かくときとは ちがう」と、今後への課題も言ってくださったあの日からわずか 2 年弱で、A さんが「よみとりくんでもいいかな」と言ってくださるところまで来ることができたなんて。

高木もうれしい。うれしいけど、でも…一瞬心を通り抜けた寂寥の風…。何を言っているの。だって高木さん一択だったのに。「たかぎさんといいたい」だったのに…ってヨミトリ君に嫉妬してどうする高木。

人間とはかくも狭量なるものかと、いえ、すみません、単に私の器が小さいだけの話ですトホホ。

そんな私の揺れた心のひだに岡田さんは当然気づかず、システムエンジニアですから、「ヨシッ」と拳を振っていることを責めることはできません。でも、A さんはわかってくださいました。前述のコメントの「とてもうれしい」の後、私が「本当にすごい。私もうれしいです」と言った時、また A さんの指が動きました。

でもやっぱりだいじなことはたかぎさんといいたいです

Aさんの書字をキャッチしながら同時にAさんの温かさに包まれました。

一瞬でも私の中に付いてしまったシミのような気持ちの一片がAさんの優しさであつという間に消えました。上手く言葉で言い表せないですが、なんというか、心の交信はもしかしてお互いの言葉の表出の合間にあるのではないか。書字介助ヨミトリ(指談)は確かに手に掛かる荷重をキャッチして文字の一画一画を読み取る技術ではあるのですが、その荷重には気持ちが乗っているというか…。理屈からいえば、読み取る側としてはヨミトリによって文字がアウトプットされ、それを認識して初めて書き手の意思を知るというプロセスのはずですが、気持ちはヨミトリと同時に、むしろ一瞬先に来ている気が…。コミュニケーション。ものすごく奥の深そうな世界です。

いけない、いけない。ヨミトリ君快進撃の経過の途中で脱線してしまいました。

### 偶然の一致？

実は、ヨミトリ君3号についてはそのすごさをAさんだけでなく他のロックインの状態の方からも同時期に言っていただく形となったのですが、それにしても別の意味で驚かされたのが、リアクションの言葉でした。Aさんのテストの日は同日にもうお一人交通外傷によるロックインの状態の方のところへの訪問もあり、翌日また別の遷延性意識障害と診断されている方のお試しにいただくチャンスがあったのですが、そのお二人の方がそれぞれAさんとほぼ同じ言葉を書かれたのです。

Aさん「どうしてもいいたいことはたかぎさんといいたいけど  
どうでもいいことはよみとりくんでもいいかなと  
おもいはじめています」

Bさん「だいじなことはたかぎさんといいたいけどよみとりくんでもいいなとおもいます」

午前のAさんの時は、私への配慮皆無でコメントに満面の笑みを浮かべていた岡田さんも、午後のBさんがこう書かれた時は、あまりに似た言葉に、えっ？と怪訝な表情に。帰りの道中で「上手くいってよかったです。それにしてもコメントがそっくりでしたね」と呟かれていました。

そして翌日のCさんにヨミトリ君3号を試していただいた時のこと。良い感じで操作できました。感想をヨミトリで聞きました。Cさんは表情筋を少し動かすことができるので、笑みを浮かべたお顔からヨミトリ君3号の感触が良いことは明らかでした。問題はその表出される言葉です。Cさんはどう書かれるのか。岡田さんもCさんをじっと見つめています。

とてもかるくおせてやりやすいです  
たかぎさんといいたいけどよみとりくんもいいなとおもいました

もう寂寥を感じている場合ではありません。偶然なの?!シンクロシティとかいうものですか。いろいろな思いがぐるぐる巡りますが、Cさんがこの後に書いてくれた

とてもうれしいです

この言葉が一番大事です。ヨミトリの実践者やヨミトリ君の開発者にとっては、Cさんは取り組みを共に行う仲間の一人ですが、Cさんにとっては今外の世界と介助なしで意思疎通する取り組みをする唯一の仲間です。実践者・開発者の困惑は一旦置いておき、Cさんとの検証作業を続けます。うーん、それにしても、意思疎通。ものすごく奥の深そうな世界です。

### ヨミトリ君プロジェクトの目指すところ

ハッ、いけない再び。またまた脱線してしまいました。

でも、最近特に思うのです。

当たり前のことですが、当事者の方が意思疎通できるようになることも、支援者のヨミトリの熟達もヨミトリ君の完成もゴールではありません。

その目標に向かって、それぞれが日々できることを一所懸命やって得た気づきや、工夫や思いを、お互いの時間を調整して持ち寄って集い、対面し、一緒に笑ったり、驚いたり、悩んだり考えたりすること、その気持ちの響き合いが、ただ楽しい。そこに評価は必要なく、関わっている皆が楽しかったら、そして次の機会を楽しみにできたらそれでよいのではないかと。その楽しさをお一人でも多くのロケットインの状態にある方と共有できたら。そこが心から願うところです。結果は後からついて来ます！楽観的過ぎるでしょうか。

人の気持ちの交わりには現行の科学や技術で説明しきれないことがたくさんあると思います。絶対ではない。科学する人も人であり、誰がどのような条件で、力量で検証するかで一つの事象に対する評価も刻々変わるはずです。人も人の創り出したものも不変はない。科学も然りと思います。

私はロケットインの方々と何をしたいのか。

書字介助ヨミトリ(指談)の真偽を問われることがあります。もしそれを問われるなら、その科学的証明は誰がすべきものなのか。

でもそんな大上段の問いも必要ないのかもしれない。

お訪ねするロケットインの方のお顔を思い浮かべながらお会いできる日を楽しみにし、  
あなたに初めて会えた、また会えたことを喜び  
声をかけながらあなたの手を取らせていただき  
あなたと言葉を交わし  
ヨミトリ君のパネルの接地をお手伝いし、

ヨミトリ君は見えないあなたの力を私たちに見せてくれる

### ヨミトリ君の PR ソング誕生♪

「ホッ。ようやくヨミトリ君の話題に戻ってきた」と安堵するシステムエンジニアの顔が浮かんで来ました。

そうです！素晴らしいヨミトリ君を一人でも多くの人に知ってほしい。

開発に尽力されている岡田さん

検証に協力してくださっているロケットインの方々

私はそのコメントを拾い伝える大事なお役目をいただいておりますが、  
もっと貢献したい！

そこでです。ジャーン！

ヨミトリ君のPRソングを作りました。YouTubeへのアップロードが遅れていて、すみません、この原稿提出時にはURLをご案内できないのですが、マガジン 54 号発刊時にはYouTubeで話題に！なるわけありませんが、ひっそりとヨミトリ君プロジェクトHP、ご一緒しましょ！HPでご案内していると思います。曲を聴いてみてもいいという方は、ぜひ本稿最後に付しているURLからアクセスしてくださいね！

♪♪♪ ヨミトリ君音頭 ♪♪♪

ヨミトリ君 アソーレ ヨミトリ君  
目には見えない 見えないけれど  
ヨミトリ君には わかるんだ  
僕は押してる 確かに押してる  
パネルを通して伝わる 勇気と希望  
ヨミトリ君と伝えたい 僕がわかっていることを

ヨミトリ君 アソーレ ヨミトリ君  
目には見えない 見えないけれど  
ヨミトリ君には わかるんだ  
あなたは書いてる 確かに書いてる  
パネルを通して伝わる あなたの思い  
ヨミトリ君と伝えたい あなたがわかっていることを

聴こえているよ 見ているよ  
感じているよ 想ってる

あなたを想っていることを  
ありがとうを 伝えたい

アソーレ

ヨミトリ君 アソーレ ヨミトリ君  
目には見えない 見えないけれど  
ヨミトリ君には わかるんだ  
僕は押してる あなたも書いている  
パネルを通して伝わる 勇気と希望  
ヨミトリ君と伝えたい 私がわかっていることを  
ヨミトリ君と伝えたい あなたがわかっていることを

ヨミトリ君 アソーレ ヨミトリ君 アソーレ

#### 特別企画:Yさんのお話しと音楽の会♪

さて、ヨミトリ君快進撃の続きです。実は本稿冒頭で「3分で読めるヨミトリ君快進撃ストーリー」を目指しましたが、書いていると本当にヨミトリやヨミトリ君でロックトインの方々と一緒にいる時の1コマ、1コマが浮かび、いろいろな思いが湧いてきて、脱線しつつのご報告になってしまいました。

前述のひまわりとの連携開始後に、ひまわり会報に書いたヨミトリ君の記事を読んで興味を持ってくださった会員さんにYさんがいます。Yさんは低酸素脳症から遷延性意識障害となられ20余年。ひまわりのプログラムとして月に1回のペースで3回ヨミトリ君を体験していただき、7月からはヨミトリ君プロジェクトの活動として訪問させていただいています。

Yさんのご家族は指筆談をマスターされており、日常生活において言葉でのやり取りが可能な環境は書字介助ヨミトリ(指談)とヨミトリ君の支援活動の中でも初めてのことで、勉強になることがたくさんあります。

ヨミトリの方法一つ取っても、バリエーションがあることを実際に見ることはまさに目からうろこ。

当事者の方の書字時に接触している介助者の手に生じる圧(荷重)の量と方向を認識して線の縦・横・丸みを読み取ってひらがなの何の文字かを判断し、その動作の連続により書かれた言葉をキャッチするメカニズムは同じですが、高木は、たとえばYさんとヨミトリをするなら、Yさんの手を取ってYさんの指を高木の掌に当て、掌に感じる圧を認識・増幅してアウトプットしますが、Yさんのお母さんはそのやり方もできるけれども、通常は、Yさんの手全体から圧の量や方向を読み取り、ご自身の指でご自身の掌にYさんの書字の動きを文字として出力しておられます。

また、介助者が当事者の方にペンを握らせてその拳そのものに手を添えて用意した紙にアウトプ



ットする場合は、書かれた文字が目を確認できるので、通訳として介助者がアシストする場合は、当事者の書いた内容が対話の相手にわかりやすく、記録も残すことができます。これが筆談で、Yさんのお姉さんは主にこの筆談を用いてYさんとお話しされています。Yさんとの対話時ですが、筆談の方が読み取りしやすいのだそうです。

Yさんは毎回ヨミトリ君の来訪をととても楽しみにしてくださっています。人と会って話すことが大好きなYさん。ご家族と行う日常生活のコミュニケーションに加えて、高木とのヨミトリでの対話、岡田さんのヨミトリの練習の先生役、そしてヨミトリ君の操作練習、3号の検証協力など、普段の生活とまた一味違った楽しみができたことがとてもうれしいと言ってくれます。また良いと思うことは友人・知人にもぜひ知ってほしいという積極性をお持ちのYさんが

よみとりくんのよさをみんなにつたえたいです

と書いてくださいました。コロナ禍の前はコミュニティ活動として指筆談の勉強会を定期的開催されていたとのこと。これは何か企画をしないわけにはいきません。

「ではひまわりの地区交流会の特別開催として、親睦と洋平さんのお話し会をするのはどうですか。」

早速お聞きしてみると

いいですね ぜひやりたいです とてもうれしいです

とうれしいお返事をいただきました！

でも かいのとちゅうでねてしまうと みなさんにわるいから それがしんぱいです

お母さんの説明が入りました。低酸素脳症の後遺症として覚醒と睡眠が短い間隔で来てしまうことがあるそうなのです。

「あーそれはご心配なく。大丈夫です。」

思いつきながら後先を考えずすぐに口走るのは高木の欠点ですが、でも言っちゃった。

「高木は視覚に障害のある友人と音楽バンドをやっているのです。友人はマギーというのですが、交流会にマギーを呼んでおいて、洋平さんがもし会の途中で眠ってしまったら、その間はマギーが歌って場をつなぐというのはどうですか。去年の秋にやったマギーのコンサート、すごく好評だったんですよ」

それはいいかも たのしそうですね

とYさん。突然の高木の提案も面白がって聞いてくださっています。そうです。対人援助マガジン前号(53号)の執筆者短信に書いた「遷延性意識障害の方のお話し会&音楽会をプロデュース中です」はこのひまわり地区交流会特別企画のことでした！

うれしい。調子に乗った高木は続けました。

「実は岡田さんはマギーが私に紹介してくれたんですよ。いわばヨミトリ君の生みの親の親というか。あ、また思いついちゃった。Ｙさんのヨミトリ君操作のデモンストレーションは会の目玉じゃないですか。そこをマギーとのコラボということで、今練習している『はい』『いいえ』のパネルの押し分けを『合格』『不合格』の鐘の音に表示設定を岡田さんに変えてもらって、マギーが歌った後に、のど自慢みたいにＹさんが審査員としてヨミトリ君で鐘を鳴らすというのはどうですか。」

それもおもしろそうだなー

とＹさん。お顔も笑っています。

でもできるかな むずかしそうだけど

心配も浮かんだようですが、モチベーションこそ上達のカギ。

「しっかり押し分けできるようにがんばってヨミトリ君練習しましょう！」

そうして7月、8月はヨミトリ君の猛特訓。でも遷延性意識障害の方の究極の課題「頭でわかっているけれど体が動かない。思うように動かせなくてもどかしい」困難さが障壁となり、妖怪ゲームのようにやって来る敵を意識せずにパネルを押して撃退できるような、そのようにはなかなかパネルを押しわけすることができません。手の拘縮もあるので、2点に同じように圧をかけるのもたいへんです。合格の鐘の側が特に押すのがたいへんなようで、不合格の鐘ばかりが連続して鳴ってしまいます。

「とにかく練習はいっぱいしたから、じゃ、1回本番のリハーサルということで、やってみましょう。マギーの代わりに私が歌いますからね。『1番、名古屋市、高木久美子。ヨミトリ君音頭を歌います。ヨミトリ君 アソレ ヨミトリ君♪』

さあ、Ｙ審査員！鐘をお願いします！！

岡田さんが装置にリセットをかけ選択ニュートラルの状態に。

Ｙさんのお姉さんも傍らでじっとＹさんの手を見つめています。

Ｙさんの手の動作は目視ではわかりません。

Ｙさんが鳴らす鐘の音はどっち？どっちだ？！

キンコンカンコン キンコンカンコン キンコンカーン♪

合格の鐘が鳴り響きました。大喜びの高木。でも感激はそこで終わりませんでした。

「Ｙさん、合格の鐘ありがとうございます！うれしい」

たかぎさんのために がんばりました ごうかくのかねをならせてよかった

Yさんは私のために、気合を入れてがんばってくださいました。合格の鐘もうれしいけれど、Yさんが書いてくれた言葉、その気持ちに高木泣いてしまいましたよ。

ヨミトリ君とご一緒しましょ！

以上、申し訳ありません、自慢に始まり自慢に終わる「ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！（6）」でしたが、全然悪びれずに更に自慢させていただくと、7月にはヨミトリ君3号でヨミトリ君に係る2つ目の実用新案の登録が成りました！

同月、10年前に高木が初めて指筆談を見学、体験した時にお会いした遷延性意識障害のMさんと再会し、Mさんとのヨミトリ君の取り組みが始まりました。遠距離で対面の機会の設定が少しいへんですが、Mさんの情熱と意欲とご家族の理解を得て、工夫して今年中に計3回の取り組みの機会を設定し、次回が10月の予定です。マガジン次号「ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ(7)」では、Mさんとヨミトリ君の熱き奮闘もレポートしますので、ご期待ください。

No Promises. Just Possibilities.

確約はないです。でも可能性を信じましょう！

あなたがわかっていること伝えたい。

情報を必要としている方にヨミトリ君が届きますように

ご一緒しましょ！

ヨミトリ君HP

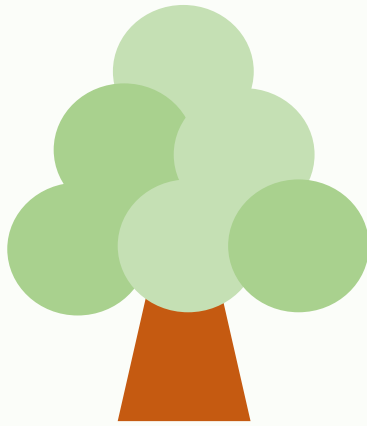
<http://www.aizyoushien.com/index.php/yomitokun-project/>

\*\*\*\*\*

<プロフィール>

インドネシア語・英語通訳・翻訳を経て、介助付きコミュニケーション「ヨミトリ」による意思疎通支援をライフワークとする。コミュニケーション支援の任意団体「ご一緒しましょ」代表。脳卒中障害者のいきがづくり「NPO 法人ドリーム」理事。「東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」」会員。第52回NHK障害福祉賞優秀賞。ヨミトリ君共同考案者。

ご一緒しましょHP <https://www.goisshoshimasho.com/>



## こかげのにちじょう⑤

～児相による、保護者や子どもの「意向確認」～

鳴海 明敏

8月某日

連日の猛暑。青森の夏で、こんな長い期間の30度越えは経験したことがない。日本全国、世界中が猛暑なんだろうなあ。世界陸上のブタペストも暑そう。

分教室に通う小・中学生は、今日が二学期の始業式。実は、一日前の昨日が「登校日」だった。夏休みが一日少なくなるじゃん。子どもたちかわいそう。と思ったけど、昨日の、登校前の、「制服は?」、「宿題は?」という朝のバタバタの様子を聞くと、やっぱり子どもたちと職員にとっては、心の準備とリハーサルのために「事前登校」は必要だったのだろうかあと納得した。その甲斐あって、今朝の登校は、スムーズだったらしい。

学園の入所定員は30名だが、昨年度4月に25名でスタートして、なかなか入所児童がなく、最終的には26名で年度末を迎えた。年度末に10名ちょっとの子どもが退所し、その後も退所が続いて、何人か新入所児童はあったものの、現在は18名である。このまま行くと、コロナの件を考慮してもらったとしても、来園度は確実に暫定定員になりそうな気配で少し焦っている。暫定定員が適用されて、定員から一人少なくなれば、年間で500万円程度の減収になるので、なかなか厳しい。

全児心では、現行の「入所実績が、定員の90%を下回れば暫定」という基準を、80%～70%程度に緩和してくれるように、国に毎年要望を出しているが、理解は示すものの、改善される見通しはない。「こども家庭庁」になって、なんか変化が起きるだろうか?

県内外の児相から、入所の可否について打診があったり、親子を伴っての施設見学もあり、

今週末にも高校生男児が入所する予定。来月にかけて、もう2～3人の入所が予定されていて、全く動きがないわけではない。

児相とのやり取りの窓口は支援課長が担当しているのだが、その経過報告を聞きながら、不審に思うことがある。それは、「親が、入所に難色を示しているので・・・」とか、「保護者や子ども本人の意向を確認してから、連絡し直します」という児相担当者の説明である。

保護者や子ども本人の「意向の確認」が必要である、ということは重々承知しているが、どうも、最近の福祉司さんは、手順を勘違いしているのではないかと思うのである。

以前児相に居た私の理解では、子どもを施設に入所させる措置をとる場合は、親や子どもや関係機関への調査（社会診断）や、心理診断、医学診断、一時保護所の行動診断が出そろったら、それらを基に、児相として、施設に入所することが必要であるかどうか、この施設が適当であるかどうか、という判断（判定）がをして、その児相の判断（判定）についての、保護者や子ども本人の「意向（同意・不同意）」を確認する、という流れになっているものと理解していた。

しかし、こここのころの福祉司さんの対応を聞くと、「保護者が施設に入所させて欲しいというので、措置します」とか、「子どもが反対して、それで保護者が動揺しているようなので、もう一度、保護者と児童の意向を確認します」というような説明をしていると言うことらしい。これでは、児相は単なる御用聞きではないか、と私は思ってしまうのだが・・・

私が、児相で仕事していた頃も、虐待の相談件数が、毎年前年を上回り、マスコミから叩かれ続けていた時期だったが、最近はその当時の比ではないらしい、ということは聞いている。業務量の増大に対応するために職員が急増して、職場研修もままならないということも聞いてはいるが、これはちょっと違うんじゃないの、と思う今日この頃ではある。

（了）

#### 第4回「居場所、居場所っていうけれど！」

不登校の子どもたちの増加が止まりません。居場所の必要性を感じて、行政の方たちもフリースクールなどの「居場所」を公立学校や公的機関の中にも作り始めています。そのような居場所とはどのような役割を果たすのでしょうか。

学校に行かないと言っても様々な原因と状況があります。大きく分けて二つです。

一つは「学校に行かない」でしょう。これは行きたくないから行かないという、自分の意思に従って、意志通りに行動がとれるということです。この場合、学校のしていることに興味がない。自分の将来のアウトラインに学校の必要性を感じない。これらは自分なりの価値観で判断して、その通りに行動をしています。このような子どもたちにとって、居場所は自分で探すものです。自分の行動を起こすために役にたつところを探すでしょうね。学校の持つ価値観がこの子ども価値観と異なるということもあります。机に向かって授業を受け、試験をして成績を出し、部活内や友人間で関係性を育てるといったプログラムに乗らないお子さんたちです。

二つ目は「学校に行きたいけどいけない」お子さんです。自分の中では行こうと思っているのに、様々な理由で学校にたどり着くことができない場合です。原因と考えられるのは、エネルギーダウンです。家庭や学校でストレスをかけられて、エネルギーが切れてしまい、校門までたどり着けないのです。家の玄関を出ることもできない子もいます。自分の部屋から出ることも難しい子、自分の布団から出ることもできない子もいます。この玄関は出られるけれども校門に入れない子どもたち。この子たちがいわゆる行政がセッティングする「居場所」にゆける子どもたちです。お布団から出られないお子さんや玄関を出られないお子さんに対しては、別の対応が必用なのです。

次に多いのは発達の問題、特に ADHD などで教室での対応が難しいお子さんでしょう。このお子さんたちには単なる「居場所」では、教室と同じことが起こります。必要な事は発達の課題を正確にとらえて、SST などのその課題に応じたプログラムを実施することです。これには専門家の見立てや分析と具体的な SST のプログラム構築が必要です。果たして、単なる居場所というネーミングの施設で、それが可能でしょうか。

発達に特性をもつ子どもたちはいじめの対象となりやすいです。いじめ被害となると心に傷を負います。この場合もエネルギーがダウンして、校門を通れないということになり不登校となります。このお子さんに必要な事は、単なる居場所ではなくその心の傷つき、時には PTSD やトラウマになっている子どもたちもいることでしょう。心理治療ができる居場所の設定が必要となるのです。

このように、一概に居場所と言っても様々な機能が必要ですし、居場所だけで不登校が解決できるものではありません。不登校という大きな問題のほんの一部をサポートするにすぎないということを大人たちは認識しないとイケません。教育の改革を含めもっと理解と行動を示さないといけない時期が来ているということです。

**「居場所っていうけれど、子どもに関わらなければ問題は解決しません。」**



## はじめに

「誰でも調子に乗れる書道塾」として各地でワークショップを開催していると、さまざまな人と出会えるようになった。始まりは、障害のあるKくんが高等部を卒業したあとの学び場的な展開だったが、それはただのきっかけだった。そうこうしているうちに、いろいろな人が（決して多くはないが）少しずつ増えてきた。参加した方々の声の中で多いのが、「居心地がよかった」「夢中になって楽しかった」「何かすっきりした」というものだ。今回は、塩竈市美術館との事業で、すみあそびと対話の時間を組み合わせて行った「“こちよ”の実践プログラム①」を振り返りながら、「こちよさ」とは何かを考察したい。

## その前に、「いま」を考える

多様性の尊重、ダイバーシティ、インクルーシブ、誰1人取り残さないSDGs、おそらくはすべての人々を包括し、誰にとっても居場所のある世界を作りたいという人類共通の願いのもとにわたしたちは生きている。とはいえ、恐ろしくも差別的で、二極化し、格差のある、そんな世の中にすら見えるのが「いま」かもしれない。好きな言葉ではないが、「不登校」というものの取り扱い方も、法整備は整ったとはいえ、まだまだ「行く」か「行かない」の選択肢のあいだで苦しんでいる子や親は多い。障害のある子どもにとっては就学指導委員会でかなりがっちりと、特別な場に「行く」か「行かない」か決められた上で支援が始まる。どうやら変えられない制度問題などというものを嘆いてもしかたがなく、それであればわたしたちができることを提案するしかない、というところで決まったのが今回の「こちよ」の実践プログラムであった。わたしたちが多様性という言葉を使ったときにイメージしてしまう世界は、もしかしたらすでに「多様な認知をしている誰か」と「そうでないわたし」のように、すでに分断されているのではないか。そうであれば、その構造を保ったままどんな話を聞こうとも、対等な関係を作ることはできない。

## 誰にとっての「こちよさ」か

当日は美術家であり、アートディレクターとして障害のある人の表現活動をサポートしている中津川浩章さん (<https://www.lascaux-labo.com/>)をゲストに迎えた。わたしの墨遊びの時間は、いつも始まりも終わりもない。参加する人が、そのタイミングで準備したり、じっとしていたり、眺めていたり、そんなふうになり、いつの間にかいろんな人が書き出す。実はすでにここから

世界が始まっていて、自分のタイミングを大切にされることは何よりも重要だと考えている。書き出すまでに、とても時間がかかるある青年を中津川さんが観察し続けてくれた。彼は何度も書道塾に来ているメンバーなのだが、一見、何もできず困っているように見えなくもない。そのため、学校や施設などでは指示されることも多かった。そうすると今度は途端に固まってしまう。つまり困っているわけではなく「考えて」いるだけなのだ。考えている最中に次の指示をどんどん出される。それは彼にとっては辛い環境になってしまう。待っていると（書道の場合は、我々は待ってすらいないが）彼の中にある書きたい漢字を次々と生み出していく。「この時間が大事だね」と語り合う。ここちよさを考える重要な要素の一つは、「時間感覚」かもしれない。始まりも終わりもないゆるい場を、「ここちよい」と思うか、「まとまりがない」と思うか、それは実はファシリテーター自身の価値観そのものである。そういう視点で見ると、世の中には「まとまりがある」「揃っている」「乱れていない」ということがよしとされる雰囲気がたくさんあって、同じ文字がずらりと並んだ教室掲示、甲子園の応援、制服。このあたりから大人がちょっと開放されることも必要な気がする。

### 自分で決めるという「ここちよさ」

ファシリテーターによって、いろいろなものが形作られ、結果が出され、というようなワークショップの展開に「やらされている」という感覚を持ち、ワークショップ嫌いになった子どもたちもいる(残念な事例は震災後によく耳にする)。その子どもたちが中津川さんのアートワークショップで子どもたちが一変した話を聞く。やりたいことをやれた、という感覚を取り戻したとき、人はどんどんその場に対して心を開く。自分で決めるここちよさを取り戻したのだと思う。

対話の時間に参加したメンバーは、本当に様々で、それぞれの自己紹介もないまま対話に入った。それゆえに自分が何を感じているのかを遠慮せずに話すことができたとも言えるし、一方でそれぞれが過敏に反応する言葉も実は多かったとも言える。安心して話せるかどうか、というのは遠慮しながら話すこととも違うので、「言いたいことが言える」という前提に含まれているのは、「誰かが傷つくかもしれないけれど、それは実はお互いさまだから言い合う」ということだ。しかし、今は配慮が先立ちすぎるがゆえに、「言いたいことが言えない」になり、結果、「匿名で呟く」という言語文化になってしまったような気がする。そのあたりの「ここちわるさ」というのは完全に大人側の問題で、正直なコミュニケーションを取り戻していく作業が、実はとても重要なのではないかと思う。

「“ここちよい”の実践プログラム②」は、9/30に開催。より自分ごととして「ここちよさ」について掘り下げていこうと思う。



7/1の対話のじかんの様子（塩竈市杉村亭美術館）

櫻井育子（生涯発達支援塾TANE 代表）

宮城県在住、1979年生まれ。水瓶座。書家、書道ファシリテーター、生涯発達コーディネーター。

「違いは魅力」をテーマに発達・心理・文化芸術・教育・福祉のつなぎめをコーディネート。

「つなぎめを学ぶ講座」、「旅する書道塾tane」も開催中。<http://ikuko-sakurai.com>



# 社会教育の周縁

## (4) 社会教育の終焉③

山本 竜司（社会教育主事／社会人大学院生）

社会教育行政の必要性を論じる際、市民の「学習権」の保障という考え方が持ち出される場合が多い。しかし、松下は、基礎教育を終えた成人の市民文化活動に学習権はあてはまらないと主張する。市民は、自由な市民文化活動を行っているのであって、社会教育行政によって保障される「学習権」（権利としての社会教育）を行使しているわけではない。市民文化活動には、誰もが、いつでも、どこでも活動できる自由があればよいのであって、市民文化活動は「自由権」の行使である（松下：176）。さらに、成人市民は社会教育行政の対象とならない自由を持っていると松下はいうのである。

松下は、今日の生涯学習活動に見られるような市民の学習活動を「市民文化活動」という表現を用いて説明している。生涯学習活動は、市民の自発性に基づく自由な活動であり、社会教育行政という枠を超え、多様性を有している。しかし、このような「自由権」としての市民文化活動／生涯学習活動が盛んに行われていくとしても、そのことをもって「学習権」保障としての社会教育の役割がなくなると結論するのはあまりに早計である。前述したように、今日の社会教育は「生涯学習支援」の性格を強めているものの、さまざまな社会的課題—たとえば、

人権、貧困、防災、環境などの「現代的課題」といわれるもの一をめぐり学習など、社会教育の持つ教育的な側面は重要である。社会教育の業界では、こういった学習課題を「必要課題」という。また、外国籍住民の日本語の読み書きや、さまざまな社会的背景を持つ人々の識字など、学校教育を補完する成人基礎教育としての社会教育活動も重要である。

一方、市民の要求に基づく学習課題を「要求課題」といい、これまでは、いわゆるお稽古事に代表される趣味・教養的な内容が多くを占めてきた。しかし、実際は、こういった単純な二分法で割り切れるものではない。何を課題とするか、すなわち、どういう問いを立てるのか。そして、その問いを誰が立てるのか。これらは、社会教育の根幹に関わる問題であるといえよう。社会教育では、学校教育のように学習指導要領で達成課題が示され、それを解く方法や道筋が示されているわけではない。どういった問いを立て、それをどのように解いていくか、それ自体が社会教育では当事者に任されている。しかし、それを、できる人、したい人だけの自由に任せておけばよいと言ってよいのだろうか。

「生涯学習」という考え方は、基本的に個人の自発性や自主性、すなわち自由に任せるというスタンスを取ってきた。しかし、近年では、社会的公正といった観点から、国際的にもこれまでのスタンスの見直しが始まっている。社会教育の意義が再評価されるタイミングではないかと私は考えている。

ここまで、3回にわたって「社会教育の終焉」論を振り返った。ここで一旦の区切りとしたい。

<参考文献> 松下圭一、1986、『社会教育の終焉』、筑摩書房。

# コソダテノシンリ (4)

中谷陽輔

連載第4回目です。第2,3回目は「こども家庭庁」について続けて書きましたが、そろそろ趣向を変えて、今回は「睡眠」について書いてみたいと思います。

なぜ急に「睡眠」をテーマに選んだかというところ…何となく思いついたから、としかいえません。ただ、「コソダテ」との関係はかなり深い、と考えています。

## 「睡眠」の重要性は、言うまでもない!?

三大欲求の一つとされるくらい、人間が生きていくうえで欠かせないのが「睡眠」。

ちなみに、欲求を「三大」とする科学的な根拠はなく、「三大欲求」というのも日本文化ならではの呼び名だったりするようです…なんて豆知識はさておき。

たっぷり食べて、たっぷり寝る。それができるだけ十分に幸せな気がしますよね。

かたや仏教の祖であるブッダ(ゴータマ・シッダールタ)は、いわゆる三大欲求(食欲・睡眠欲・性欲)と生存欲・怠惰欲・感楽欲・承認欲を「七つの欲求」としてまとめており、大雑把に言うと、それらの欲求に過度に反応しないことが幸福への秘訣だとしています。

生理的な欲求に無反応であれというのはいささかハードな面はありつつ、現実には、生理的欲求を満たすことすらままならなかったり、後回しにしたりすることがあるのが「コソダテ」というものだったりもします。特に乳幼児期。子どもが幼ければ幼いほど、「私だって、思う存分眠りたい!!」という、睡眠欲を発露したくなる思いを抱えたことのある親御さんは少なくないかと存じます。

なんでしょう、意図せずして修業の道を歩んでいるような気すらしてしまいますよね。

睡眠が重要でない、という人はそうそういないでしょうが、実際、どれくらい睡眠って重要視されているのでしょうか。

## 「睡眠」の理想と、「コソダテ」における現実

「スタンフォード式 最高の睡眠」(西野, 2017)という書籍が、30万部超のベストセラーとなりました。この本では、睡眠の重要性や、良い睡眠について、量・質それぞれで重要となるポ

イントが、科学的な根拠もふまえ、わかりやすく記載されています。詳細は書籍を当たっていた  
だくにせよ、ここではさらに簡潔に、以下にまとめてみました。

まず睡眠の「量」についていうと、日本人の平均睡眠時間は、世界平均より1時間ほど短く、  
多くの日本人は「睡眠負債」の状態にあります。なお、睡眠不足について、睡眠研究者は「睡眠  
負債」と呼んでいます。返済が滞ると「眠りの自己破産」をもたらす…なんだか怖いですね。

実際、睡眠時間の国際比較を行うデータをいくつかみると、日本はワースト1だといわれる  
ことが多いです(e.g., 内閣府, 2023;西野, 2017)。また、大人だけでなく子どもの睡眠時  
間も世界で最も短く、年齢的に望ましいとされる睡眠時間ほど1~2時間ほど短い傾向にある  
ことや、親に睡眠負債があるほど子どもにも睡眠負債がある割合が大きいことがすでに報告  
されています(株式会社ブレインスリープ, 2022)

そして「質」について。睡眠の「質」を高める上で最も重要なのが、入眠後すぐに訪れる 90 分  
間のノンレム睡眠であり、「スタンフォード式 最高の睡眠」(西野, 2017)では「黄金の 90 分」  
と呼ばれています。そのため書籍内でも、この最初のノンレム睡眠をいかに深くするか、という  
観点から、睡眠において適切な体温・光・飲食などの具体的なコツについても数多く述べられ  
ています。

なお、良質な睡眠をとれているかどうかの 4 つのポイントとして、①眠りに落ちるまでの時  
間が30分以内、②夜中に起きるのは1回まで、③夜中に目覚めた場合 20 分以内に再び眠る  
ことが出来る、④睡眠時間の 85%以上を寢床で使っている (昼寝や居眠りなどが 15%以下)  
が挙げられています。これらのポイントが満たされていない場合、「睡眠負債」が蓄積されてし  
まっている可能性が高いといえます。

仮に睡眠の「量」が不十分だとしても、いやむしろ不十分であるほどに、「黄金の 90 分」の質  
を上げるために、睡眠前の行動、睡眠環境を見直して良質の睡眠がとれるようにしていくこと  
が、より重要となってきます。

…このようにまとめていると、私自身もイチ日本人として、睡眠の量・質を改善する余地が  
大いにあると感じさせられます。

ただ「コソダテ」の現実として、睡眠の量・質ともにこれらの理想的な睡眠からは程遠くなら  
ざるを得ない、と感じてしまう方もまた多いのではないのでしょうか。

睡眠のリズム・サイクルは個人差が大きいものの、生後3~6 カ月までは、多くの赤ちゃんは  
昼夜問わず数時間おきに泣いて起きてきます。また、乳児期の睡眠は、比較的浅い睡眠である  
レム睡眠が約 5 割を占めており(成人では約 2 割)、ちょっとした物音で起きたやすかったりし  
ます。

一万歩譲って、子どもが生まれて1~2年くらいはまともに眠れなくても仕方ない、と割り切

ったにせよ、子どもがもう少し大きく幼児や小学生になってからも、夜になると眠気や不安などから機嫌が悪くなったり、寝る時間になってもなかなか眠らなかつたり、夜泣きをしたり・・・といった子どもも決して少なくありません。

そのような状況では、上記の良質な睡眠の 4 つのポイントと照らし合わせても、①隣で騒がしかったりぐずられたりしていたらなかなか寝れず、②夜中には何度も起こされることもあり、③起きてしまったら再び眠れるかどうかは子ども次第で、④日中も昼寝・居眠りせずにはおれない、ということは十分に起こりえます。

もちろん、それぞれのご家庭のできる範囲で、短くても眠れるときに仮眠をとったり、代わりに子どもを見てくれる人を頼って睡眠時間を確保したり、親子ともども良質な睡眠がとれるように睡眠環境を整えたり、といったことをしていると思います。

むしろ、そういった工夫なしに、乳幼児期の子どもを一人の親がケアし続けている状態、自分のとりたいように睡眠がとれない「コソダテ」が慢性化している状態というのは、その家庭に大いなるリスクを内在させていることに他なりません。

## 言うまでもない「睡眠」の重要性を、「コソダテ」の観点から裏付ける

睡眠を疎かにすることのデメリットは、かなり明確に、科学的な根拠をもって語られるようになってきました。私は睡眠の専門家ではありませんが、ざっと調べた限り、睡眠不足の悪影響として明らかになっているものを大きく①**身体**、②**認知**、③**感情**という 3 つの視点から、それぞれまとめてみます。

- ① **身体**・・・さまざまな身体疾患(糖尿病、心筋梗塞・脳梗塞、高血圧など)のリスク上昇、免疫力の低下、自律神経・ホルモンバランスの乱れ、体重増加、疲労の蓄積などなど、枚挙にいとまがありません(cf. 西野, 2017)。最近では、食事・運動・睡眠の中で、健康維持に最も重要なのは「睡眠」であるというのが通説になってきているようです。
- ② **認知**・・・記憶力・判断力・集中力などほぼすべての認知機能が低下します。その低下レベルについて具体例をあげると、24 時間睡眠をとらなかつたトラック運転手の判断力はアルコール血中濃度 0.1%と同水準になります(Dawson & Reid, 1997)。つまりは酔っ払い運転で捕まるレベルです(日本では 0.03%以上が酒気帯び運転)。さらに、6時間睡眠を2週間続けると、24時間寝ていないのと同じレベルまで集中力や注意力は低下します(Van Dongen et al., 2003)。相当の数の日本人が、酔っぱらいながら日常を過ごしているイメージでしょうかね。
- ③ **感情**・・・不安定になり、不安・抑うつ、孤独感、そして攻撃性が増強します(Barnes et al., 2015; Motomura et al., 2013; Simon & Walker, 2018)。ポジティブな感情も感じにくくなります(Saksvik-Lehouillier, 2020)。脳研究においては、睡眠負債を抱えた状態では、ネガティブ感情の中核とされる扁桃体などの部位がより活

性化し、感情のコントロールを司る前頭葉の機能が低下することなどが示されています。つまり、睡眠によって軽減されるはずのストレスが解消されないだけでなく、むしろ悪化してしまうといえます。

…「身体」の健康が損なわれ、「認知」能力が低水準になり、「感情」も不安定になる睡眠負債。親がそのような状態では、生活を営むこと自体がままならなくなったり、冷静でしっかりとした判断・思考ができなかったり、気持ちが落ち着かず子どもについて過度に怒ってしまったり、というのは、ある意味で必然です。コソダテ中の親の個人の努力どうこうを言う以前に、まずは「睡眠」の量・質の改善のために、周囲の協力が不可欠です。

生後半年～1歳未満の子どもをもつ子育て早期の母親を対象にした研究(関島, 2014)では、概して母親の身体不調や疲労の症状が強く、睡眠による疲労回復感は良好ではありませんでした。ただ同研究で、「やりたい子育てができて」と考える母親たちは、そう考えていない母親たちよりも、比較的睡眠による疲労回復感が良好であったり、祖父母と同居している傾向がありました。睡眠で疲れがとれており、身近に育児の支援者がいる、ということの重要性を裏付ける結果だといえます。

ただでさえ、家事育児は肉体労働であるとともに、予想外のことが頻繁に起こります。肉体的にも、認知的にも、感情的にも、疲弊します。それだけの心身の負荷に見合った睡眠を、どれほどの親がとれているでしょう。

コソダテ中の親の悩み事は、その負荷に見合った十分な量・質の睡眠をとることが可能なら、それだけで大部分が解決するかもしれない…というように考えるのは、決して突飛な発想ではないと思うのですが、いかがでしょうか。

## 我々は、コソダテにおける「睡眠」の重要性を本当に分かっているか？

ここ何年か、5月頃にインターネット界隈でちょっとしたブームになる動画をご存知でしょうか。もしご存知でなければ、"[World's Toughest Job](#)"でインターネット検索していただき、出てきた4分程度の動画をご覧ください。英語ですが、日本語字幕も出てくるはずです。

ネタバレを避けつつ要点のみ言うと、不眠不休のように働く仕事の求人を、最終的に美談として終えている動画です。

ただ私は、美談のまま終わらせてはいけない、と強く考えています…特に日本において。

日本では、諸外国と比べて、男女ともに労働時間が長く、家事育児の時間(無償労働時間)が母親のほうが圧倒的に長く、かたや父親の長時間勤務(有償労働時間)が著しく長いことが特徴的です。そして、世界的に父親より母親のほうが家事・育児時間が多い傾向はあるのですが、日本においてはその差がさらに顕著となっています(内閣府, 2020, 2023)

無償・有償問わず、労働時間が長ければ長いほど、その家庭の睡眠は、必然的に短くなっていきます。

もちろん、十分な「量」の睡眠がどうしても保てないという時もあるでしょうし、そういった時は上記の文献等を参考にして、眠れるときに短時間でも仮眠をとったり、良質な睡眠を少しでも確保しながら、心身の負荷を減らしていくことも必要だったりするでしょう。

ただ、「睡眠負債」の悪影響を考慮すると、コソダテにおいて慢性的に睡眠を犠牲にする状況というのは、もっともっと最終手段として扱われるべきものだと考えます。

コソダテに伴う心身への負荷は、一人で抱えることが困難でも「親なんだからしっかりしないと」と思いがちだったりします。そうやって抱え続けて「睡眠負債」が蓄積されていくと、身体・認知・感情が正常ではなくなっていくので、その親が支えようとしている家族の生活自体が脅かされていきます。

家族の生活を守るために、親子それぞれの心身を守る基盤、「睡眠」が削られるというのは、本末転倒なのです。

むしろ、すでに心身を削って頑張っているのだから、頼れるものは何でも頼って、もっともっと手助けしてもらいましょう。時短家電、宅食、家事代行、近親者の支援、サービス・制度の活用など、使える手段はどんどん使いましょう。そうやって「睡眠」を充実させていくことこそが、親子の心身、そして家庭を守ることに直結します。

だからこそ、子育て支援の文脈においても、親の「睡眠」を真っ先に優先できるマインドセットやシステムが整ってほしい。多くのママ・パパがより良い「睡眠」を自然と選択できる世の中になってほしい。私はそのように願っています。

…あなたにとっての「睡眠」の優先順位、どれくらいでしょうか？

#### 【引用・参考文献】

Barnes, C. M., Lucianetti, L., Bhave, D. P., & Christian, M. S. (2015). "You wouldn't like me when I'm sleepy": Leaders' sleep, daily abusive supervision, and work unit engagement. *Academy of Management Journal*, 58(5), 1419–1437.

([https://ink.library.smu.edu.sg/cgi/viewcontent.cgi?article=5352&context=lkcsb\\_research](https://ink.library.smu.edu.sg/cgi/viewcontent.cgi?article=5352&context=lkcsb_research))

Dawson, D. & Reid, K. (1997). Fatigue, alcohol and performance impairment. *Nature*, 338, 235. (<https://www.nature.com/articles/40775>)

株式会社ブレインスリープ (2022) 睡眠偏差値 kids 調査結果発表 2021, Retrieved August 25, 2023 from <https://brain-sleep.com/service/sleepdeviationvalue/research2021kids/>

Motomura, Y., Kitamura, S., Oba, K., Terasawa, Y., Enomoto, M., Katayose, Y., Hida, A., Moriguchi, Y., Higuchi, S., & Mishima, K. (2013). Sleep debt elicits negative emotional reaction through diminished amygdala-anterior cingulate functional connectivity. *PLOS ONE*, 8(2), e56578. (<https://journals.plos.org/plosone/article?id=10.1371/journal.pone.0056578>)

内閣府 (2020).男女共同参画白書(令和 2 年版):コラム 1 生活時間の国際比較 Retrieved August 25, 2023 from [https://www.gender.go.jp/about/danjo/whitepaper/r02/zentai/html/column/clm\\_01.html](https://www.gender.go.jp/about/danjo/whitepaper/r02/zentai/html/column/clm_01.html)

内閣府 (2023). 男女共同参画白書(令和5年版):コラム1生活時間の国際比較 Retrieved August 25, 2023 from [https://www.gender.go.jp/about/danjo/whitepaper/r05/zentai/html/column/clm\\_01.html](https://www.gender.go.jp/about/danjo/whitepaper/r05/zentai/html/column/clm_01.html)

西野精治 (2017).スタンフォード式 最高の睡眠 サンマーク出版

Saksvik-Lehouillier, I., Saksvik, S. B., Dahlberg, J., Tanum, T. K., Ringen, H., Karlsen, H. R., Smedbøl, T., Sørengaard, T. A., Stople, M., Kallestad, H., & Olsen, A. (2020). Mild to moderate partial sleep deprivation is associated with increased impulsivity and decreased positive affect in young adults. *Sleep*, 43, 1-10. (<https://academic.oup.com/sleep/article/43/10/zsaa078/5822126>)

関島 香代子 (2014). 子育て期早期の母親のやりたい子育ての実現 日本助産学会誌, 28 (2), 207-217.

Simon, E. B., & Walker, M. P (2018). Sleep loss causes social withdrawal and loneliness. *Nature Communications*, 9, 3146.



<https://www.nature.com/articles/s41467-018-05377-0>

Van Dongen, H. P. A., Maislin, G., Mullington, J. M., & Dinges, D. F. (2003). The cumulative cost of additional wakefulness: Dose-response effects on neurobehavioral functions and sleep physiology from chronic sleep restriction and total sleep deprivation. *Sleep*, 26, 117-126.

<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/12683469/>

<プロフィール>

児童福祉施設の相談員。資格は、公認心理師、社会福祉士、臨床発達心理士など。大学院に進学後、研究者の道から方針転換して子ども福祉臨床の現場に飛び込み、早10年強。現在、仕事でもプライベートでも、子育て&子育て支援まみれの日々を送っている。プライベートでの子育てやらをめぐる由無し事を、ブログに月数回、不定期投稿中。

<https://childcare-support.hatenablog.jp/>

# 教室の窓から

令和 5年  
(2023年) 8月  
來須 真紀

## さあ夏休み

さあ、待ち待った夏休みです。当然ながら、子どもは楽しみにしています。そして教員も…。ちょっとだけ楽しみにしています。なぜちょっとだけなのかと言いますと。この夏休み、先生たち結構忙しいのです。忙しい割には、子どもたちがいない。子どもたちの存在の大きさや大切さを思い知らされる日々なのです。

## 夏休みあれこれ夏休み準備

夏休みの準備といえば、まずは夏休みの宿題の選定。から始まるといってもいいです。教材費で買うものに関しては、教材採択の妥当性(内容・ねだん・他社との比較)などを話し合い決定する会議なども開かれます。それに加えて、ドリルやプリントの準備、絵画や書道、工作、作文のコンクールの要綱をまとめ、家庭科や音楽などの専科教科の宿題の調整をし、「夏休みの宿題一覧」を作る。作ったものを配りやすい状態にして保管する。。。最近では、タブレットを使った宿題もあるのでその段取りもする。ここまですら結構な作業です。最近では、夏休みの宿題を出さない学校も増えていると聞いていますが、これは賛否があります。子どもは大喜びですが保護者からは「宿題がなかったら遊びほうけてばかりいる。」という声が聞こえてきそうです。

## 夏休みあれこれ夏休み期間

私は子供だった頃は、夏休みといえば 7月20日ころから8月31日までと大体決まっていたような気がします。しかし、最近では、7月25日ころから8月25日くらいまでと期間が短くなってきています。(一部地域では以前からこれくらいだったという話も聞きますが)しかも8月の終わりから給食も提供できるようになったという話もききます。広島市の一部の学校は、G7サミットの関係で5月に臨時休校があったため、前年度よりもっと夏休みが短くなったという話も聞きます。子どもたちにとっては迷惑な話、保護者にとってはちょっぴりうれしい話になるのでしょうか？

## 夏休みあれこれ研修の嵐

さて、本格的に夏休みに入ると「先生は、夏休み何やってるの？子どもいないから暇でいいね。」なんてこと聞かれます。その質問が来ると「まあ、日常と比べたら少々ゆったりはしておりますが、決して暇ではないんだようなあ。」と思っていました。では、先生は、夏休み何をしていますでしょうか？まず夏休みになると研修が毎日のように入ります。法廷研修(法律で決められた研修○年次研修など)、校内研修(校内で企画運営される研修)、教育委員会や教育センターなどの公的機関の研修、などなど、自主的な研修(これは休暇を利用して参加します)特に校内研修については、こんなこと学校の先生がやるの？みたいな研修もあります。例えば。。

不審者対応研修…警察官などを講師に呼び、講話を聴いたり警察官を不審者役にしてシュミレーションしたり、さすまたの使い方なんかもちょっぴりします。

エピペン研修…アレルギーについて講話を聴き、エピペンの使い方を練習用のエピペンを使って研修します。

危機管理対応研修…校内でけが人や急病人が出たときのシュミレーション研修。救急車の入り口や救急救命、応急処置について実習したりします。

ICT研修…ICTの使い方について研修します。

授業研修…授業づくりや教材についての研修をします。

心の健康研修…SCなどが教員の心の健康を保つためにどうしたらよいかなどの研修をします。

教科研究会…自分の選んだ教科に分かれ、特定の教科について研修を深めていきます。市内の学校の先生方が集まります。

接遇研修…電話の取り方、接客の仕方など研修をします。

服務研修…不祥事や事故の未然防止のため、事例検討や自己の振り返りなどする。

などなど。。。

地域や学校によっても違いはありますが、私が在籍していた学校はざっとこんな研修がありました。もう正直、何でも屋さんです。研修自体はすべて必要なことですし、いろいろなことが学べるのでうれしいことも多いのですが、欲を言えばもっと子どもの理解とか授業づくりの研修が増えたらいいなと思っていましたし、児童相談所や児童福祉の分野の方(ケース演習みたいな)と研修ができたらいいなと思っていました。

## 夏休みあれこれ掃除掃除掃除

研修の他、夏休みにやることといえば、校内整備。これがなかなか体力勝負。教室のワックスがけ。エアコンのフィルター掃除。教材室の整理。粗大ゴミ出し。備品点検などなど。人数や力が必要な作業は、長期休みに職員作業として入ることが

多くあります。私は、これでポリッシャーの使い方を学びました。(なかなか上手に扱えるようになりました)

### 夏休みあれこれ生徒指導

学校によっては、地域に見回りに出る学校もあります。大型のショッピングセンターや公園。スーパーマーケットやお祭り。大体の目的は未然防止なのですが、見回り中に子どもに遭遇すると。。。んー。そのまま生徒指導ということもあります。

また、地域から学校に連絡が入ることもあります。「公園で〇〇してます」「車があるところで遊んでいて危ない」という内容から「警察です。。。。。。」とかまで。その度に教員は出動→指導→保護者連絡というパターンを繰り返します。

コロナ禍の夏休み、どこのプールもしていない時期に「公園の噴水で水遊びしているぞ!やめさせろ!」(なんじゃそりゃ?)というお電話をいただいて、やめさせに行ったことも…。実は、夏休みも気が抜けないのは生徒指導なのです。ちなみにお電話いただいて出動したら自分の学校の子どもではなく他校学区から遠征してきているという場合もあります。

### 夏休みあれこれ宿題〇つけ

さてさて、そんなこんなで夏休みが終わり、学校に子どもたちが戻ってくると、学校は一気ににぎわいます。その後、夏休み明けの一山が待っています。それが、宿題の〇つけと整理です。保護者にある程度の〇つけはお任せしていますが、〇つけや直しができているか1ページ1ページ見て、日記を読み、コンクールに応募する作品を精査し、応募票を作り、応募先へ持っていきます。これが8月中の勝負で、担任はだいたい子どもが下校した後は、これらのことに集中します。

そして、宿題をやってきていない子どもには、最後までやり切れるように寄り添います。少しずつ休憩時間などを使って進めていきます。

### 夏休みあれこれまとめ

ざっと、先生たちの夏休みについて書きました。書いたものはごくごく一部ですし、学校や校種、地域によっても違うとは思いますが、長期休みは、授業日よりゆったりできますし、休暇も取りやすいのも確かなのですが、なかなか忙しく、忙しくしている割には子どもがいない学校というものはなんとなく物足りなくて、さみしいなというのが、私が思っていたことです。帰宅途中に公園で遊ぶ子どもたちに出会ったりしたら、妙にうれしくなったことを思い出します。ホッとする時間も大切ですが、やはり、学校は子どもあつての学校!だと思います。

## 社会科の授業を対人援助学の視点から③

2023年8月12日 内田一樹

はじめに

今回は先日7月20日～23日に行われた2023年度選択講座「東北と復興」の石巻市スタディツアーの報告を行う。ツアー自体も2年目ということで1泊伸ばして、各日程において自分の中でテーマを設けてストーリーをつくった。今年度のツアーの感想や学びの振り返りは夏休み明け以降の振り返りの場での様子を見守っていききたい。

### 1. 2023年度「東北と復興」石巻市スタディツアー報告

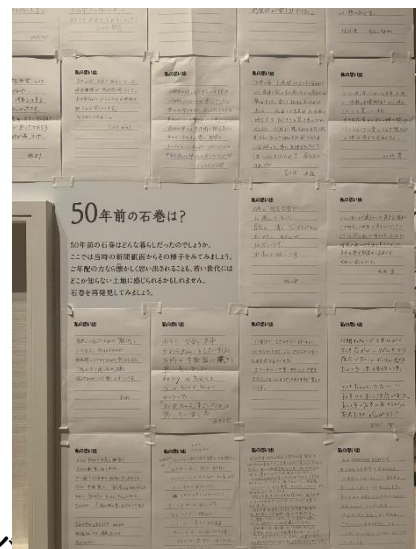
2023年7月20日(木)～23日(日)まで「東北と復興」の宮城県石巻市スタディツアーを実施した。行程表(予定)は以下の通りである。

月日	時間	場所	内容
7月20日 (木)	7時32分 東京駅発	東京駅	集合・出発 新幹線
	7時56分着、57分発 大宮(埼玉)	大宮駅(停車)	新幹線
	9時04分着 仙台駅	仙台駅	仙台駅到着
	9時25分発 仙台駅—石巻駅	仙台駅(仙石東北ライン)	仙台駅から石巻駅へ 乗り換え
	10時14分着 石巻駅	石巻駅到着	
	10時20分発 桃生交通バス合流	石巻駅前 石巻博物館へ	移動バスと合流
	10時30分着 石巻博物館	石巻博物館	トイレ休憩
	10時30分～12時00分	石巻博物館	研修、1時間
	12時10分発 石巻博物館	石巻博物館から、いしのまき 元気いちばへ	バス移動。
	12時30分～13時30分	いしのまき元気いちば	昼食 トイレ休憩
	13時30分発	雄勝へ	
	14時30分着	雄勝着	トイレ休憩・説明等
		おじま漁港・荒浜海水浴場・モ リウミアス・夕飯等(体験系の ワーク)	雄勝渚泊阿部久良さん案内
	18時30分	モリウミアスで宿泊	トイレ休憩、宿泊施設チェックイ ン
18時30分～19時30分	モリウミアスにて1日目の振 り返り		

	20時00分から		自由時間
7月21日 (金)	6時30分～7時30分ごろ	モリウミアス	朝食
	8時00分発	大川小学校へ	
	8時30分着	大川小学校	
	8時30分～9時30分 9時30分～10時30分	大川小学校・伝承館	伝承の会(佐藤敏郎さん)にしたがって案内を受ける(～9時30分まで)。 大川小学校→伝承館
	10時30分発	大川小学校	
	11時30分頃	石巻市街地へ	
	11時30分～12時30分	まきいし	昼食
	13時00分～17時30分	門脇小学校・南浜ツアー	
	18時～19時	かわべい振り返り	
	19時～20時	楓楸栞	夕飯
	20時30分着	ルートイン石巻河南インター着	
	7月22日 (土)	6時30分から8時20分ごろ	朝食
8時30分発		ホテルルートイン石巻河南インター	
9時ごろ		ルートイン発	
9時から11時		雄勝法印神楽保存の会 講演+ワークショップ	石巻市中央公民館
11時10分発		昼食会場へ	
11時30分～12時30分		仙台弁当 縁家	昼食
13時00分～17時00分		人的交流 Rera こども∞感パニー	3.11をきっかけに生まれたNPO法人の方から活動のお話を伺い、これからの活動について考える。
17時30分～18時30分		かわべい振り返り	
19時～20時		とり文	夕食
7月23日 (日)	6時30分から8時20分ごろ	朝食	
	8時30分	チェックアウト	
	8時30分～10時30分	上品の郷	
	10時48分発	石巻駅から仙台駅へ	
	11時52分着	仙台駅着	
	12時20分～13時20分	おしか	昼食
	13時30分～15時30分	せんだいメディアテーク	
	16時25分発	仙台駅から東京駅へ 新幹線	
	17時39分着	大宮駅	
	18時24分着	東京駅	

## 1 日目

今年度の1日目のテーマは「石巻市の伝統や文化、生業を知る」と考え、石巻市博物館や雄勝町での漁業体験を盛り込んだ。石巻市で午前中に1つプログラムを入れようとするとうとう朝が早くなってしまった。7時半に東京駅を出るということは多くの生徒が始発で家を出なくてはならなくなるので、この点については来年度以降もう少し考えていく必要があるようだ。



石巻市博物館では学芸員さん2人に対して10人程度ずつ2グループに分かれて話を伺った。石巻市の古代からの歴史や文化などを中心に話していただいた。石巻地域は古代から漁業や港町として発展をしてきた。近代には伊達藩の一部として鑄銭場等も作られ、河川と海が交わる場所として江戸と東北をつなぐ交通の要衝にもなった。博物館ではあまり東日本大震災のことをメインに取り上げているわけではなく、この辺りについても市内の他の震災遺構との役割分担をはかっているらしい。震災前からある石巻市の歴史・文化のセンターとしての役割を引き継いでいる。俯瞰的に石巻市を見ることができたが、生徒達の反応は様々であった。震災のことを学びに来たことと、歴史・文化を学ぶということがつながらないという面食らったような反応をしている生徒達もいたようだ。事前にもう少し説明が必要かもしれない。

昼食を石巻元気市場で済ませると、雄勝町へ向けてバスで移動。1時間程度かけて雄勝町へ。石巻市は2005年に、桃生町、河南町、河北町、北上町、雄勝町、牡鹿郡牡鹿町と石巻市が合併し、新しい石巻市となった。今年度はその中で雄勝町にフォーカスし、漁業体験とモリウミアスでの宿泊を1泊させてもらうこととなった。

雄勝町へついた頃には天気が崩れそうであり、夏にもかかわらず寒いと感じるほど気温が低くなっていた。「前日までは熱帯夜で本当に暑かったんですけどね」とは雄勝町の道の駅、硯上の里で合流した現地のコーディネーターの方。雄勝でのツアーの仲立ちをされており、今回の漁業体験や宿泊施設の仲立ちをお願いした。





巨大な防潮堤をくぐっていった先に船着き場と漁場があった。漁業体験では船に乗る組と陸に残る組で10名程度ずつの2組に分けて、前半後半と交代でそれぞれ漁師さん達からお話を伺った。いずれも真摯に言葉を選びつつ生徒達の質問にも答えてくださっていた。

印象的だったのは、震災前と震災以後で銀鮭の漁獲高が変わったそうだ。その理由として銀鮭は土の匂いを覚えており、海へ出た後もその匂いを頼りに生まれ育った場所へ戻ってくるそうだ。ただし防潮堤が新たに作られたことによって土の匂いが変わり、銀鮭が戻ってこられなくなり、漁獲高も減ったそう。

合わせて生徒から福島第一原発の処理水の海洋放出についてどのように考えているかの質問が出た。これについては漁師という立場が利害関係に直接関わるので、ということであまり明言できないとしつつも、再び魚の値段が下がってしまうのではないかと心配が仲間内で出ているそうだ。震災以後もこうした影響が漁業に出ているということを改めて生の言葉で聞けたように思う。しかし近年これらにも増して問題になっているのは地球温暖化の影響で漁獲高が減ってきていることである。逆に南の魚が網にかかるようになってきて、海の変化を顕著に感じているということをお伺いできた。



その後、荒浜地区へ移動して津波碑について地元の方からお話を伺った。荒浜海水浴場は12年ぶりの海開きを翌日に控えていた。津波碑の後ろの防潮堤を上って下りた先には海水浴場となる砂浜が広がっている。

お話の内容は以下の通りであった(お話ししてくださった方の語りについてかなり方言が強かったこともあり、後日コーディネーターの方が要約のデータを生徒用に送って下さった。そのデータを以下抜粋する。)

#### 【要約】

昭和8年3月3日に発生した巨大地震(※執筆注：昭和三陸地震)により、荒浜地区は津波に襲われ地区の大半の家屋が流され、犠牲者も出た。荒浜は壊滅状態となり、隣の漁村で被害の少なかった大須地区の住民が支援に来てくれた。(大須地区は集落が高台に集中していたため被害が少なかった。これは東日本大震災時も同様で、大須地区は住宅被害が少なく食料や衣料も豊富にあったので、自衛隊などからの物資が供給されるまで



の間、他の集落や避難所に分け与えるなどした。) 荒浜の住人はこの昭和8年の震災を教訓として家屋は高い場所へ建て直した。功を奏して、東日本大震災時でも津波で甚大な被害を受けたが、地区内での人的被害はなかった。(※荒浜在住だった雄勝病院勤務の看護師が職場にて1名犠牲となった) 石碑に刻まれた「地震があったら津波の用心」という言葉は、学校で習ったわけではなく地域住民や親から教え込まれた教訓である。

【補足】(コーディネーターの方から)

巨大防潮堤(必要以上の高さの防波堤)は海と共に暮らしてきた住民にとって、海の様子が見にくくなり、景観も損なうという理由で建設には反対だった。ある程度の津波には対応はできるかもしれないが、10メートルを超える津波が押し寄せた場合は、防潮堤を超えた津波が逆に勢いを増し、被害が更に大きくなる。(防潮堤そのものの強度にも不安が残る) 一方で、避難するための時間稼ぎにはなるという意見もあるが、地震があったら高台に逃げるとい教訓が津波に対する何よりの対策であり、他に命を守る方法はないと思います。



その後、1日目の宿泊施設であるモリウミアスへ。こちらは元々桑浜小学校という小学校であったが、2002年に廃校した。東日本大震災以後、この場所を使って新たに関東などから学びに来る場所としてモリウミアスが誕生した。雄勝町の豊かな森と海の恵みについて宿泊しながら体験的に学ぶことが出来る場所であり、本来は宿泊だけの施設ではないが、今回は特別に宿泊を認めてくださった。夕食に出される地元産の食べ物に舌鼓を打ち、1日目の振り返りを小グループに分かれて行った後にこの日のプログラムは終了した。

## 2日目

朝からお散歩へ。5時という早い時間にもかかわらず、2人の生徒がついてきてくれた。

前日に聞いていたのだが、地元の桑浜漁港まで徒歩で20分ぐらいらしい。ここは防潮堤がなくそのまま港に入ることができる。

漁師さん達は朝の1時、2時ぐらいから作業をされていて、午前中には漁を終えるらしい。午前1時は執筆者からすると深夜、もしくはまだ寝る前ぐらいの感覚である。

坂道を下っていくと、美しい漁港の風景が見えてきた。どこまでも青い海と青い空。日本一美しい漁村がそこにはあった。両側には切り立った崖で、その地形を生かしてつくられた漁港であった。





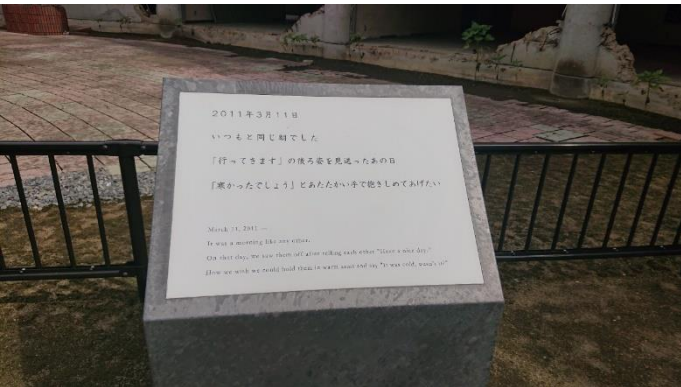
漁港を歩いていると一人のおばさまが声をかけてきてくださった。聞くと、石巻市のもっと内陸の方から車でここまで漁に来られているようだ。午前1時から車を飛ばして来る道中には鹿が出てくることもしょっちゅう。朝からウニの収穫に漁に出て、もうすでにある程度一段落してこれからもう一度漁に出ようというところだったそう。かなり親しげにこちら側のことも尋ねてくださった。関東の方から学校の講座で学びに来ていること、モリウミアスへ泊まっていることを伝える。パートナーの漁師さんにも紹介して下さる。「竿を持ってきてねえのか!?何のために来たんだよ」という言葉に笑いながら、すみません次回来的时候は、と答える。モリウミアスの職員の方の家もここにあるんだ、と教えて下さる。そこで昨夜、最初にモリウミアスの職員の方から聞いた話が思い出される。「この地域でも、かつては外から来る人たちに対して少し警戒しているところもありましたが、モリウミアスを作るとともに地域の復興を目指していく中で、この施設を利用する外から来る人たちに対しても寛容になってきて、今はもう受け入れて下さっています。」職員の方のことを話す漁師さん達を通して震災以後にできたモリウミアスが地域の中でどのような活動をされてきたのか伝わる気がした。

その後モリウミアスへ戻って朝食を済ませると、施設を後にして2日目の活動をスタートした。2日目のテーマは「震災遺構をまわって東日本大震災の被災の大きさを考える・感じる」というものである。昨日同様に雄勝を案内して下さったコーディネーターの方が大川小学校に行く途中でぜひ立ち寄って欲しいと、雄勝病院へ案内して下さいました。2011年当時、彼もここで被災をされたそうだ。「自分の知り合いもここで亡くなった」と語り始めるコーディネーターさん。これまではあまりメディア等でも取り上げてこれなかったが最近メディアでも少しずつ取り上げられるようになってきて、当時この病院で何が起こったのかを多くの人に知って欲しいということ。そしてその雄勝のコーディネーターの方の語りで印象的だったのは、「ここは大川小学校とは違って、患者の遺族の人たちもみんな職員の人たちに感謝しているんですよ。最後まで一緒にいてくれて」という言葉だった。色々なことを感じたが、この雄勝病院は本来のツアーの行程には入っていなかった。1日目だけの予定が2日目の早朝にわざわざ駆けつけて、この雄勝病院に案内をされたコーディネーターの方思いを考える。高校生達を前にして、ここで起こったことを知って欲しいと語られた言葉はずしんと落ちていった。昨年もあったが、高校生達を前にして時々現地の方が何かに突き動かされるように語られる場面に出会う。ツアーの予定を組むようになったからこそ、そうした場面があることにも気づくようになってきた。



コーディネーターの方とはここでお別れだったが、「大川小学校は佐藤敏郎先生の案内を受けるんですよ。実は自分は敏郎先生の最初の教え子だったんですよ(笑)」と最後に教えて下さった。

予定通りに8時半頃に大川小学校に到着する。大川小学校では大川伝承の会の佐藤俊朗さんから1時間程度案内を受ける。



佐藤さんの案内を受けるのは個人的には2度目である。1度目は昨年下見に来た際に、ちょうど月に1度の伝承の会の案内の日と重なっていたので、その参加者の一人としてであった。昨年も伝承の会の方に案内していただいたが今年はまた違う語り口で、生徒達の受け止め方も異なっていた。

佐藤さんの言葉で印象に残ったものは2つある。1つめは裏山に上ったときに言われた言葉。「ここに山があれば助かったはずですよ。でも子ども達は助からなかったんだ。山は魔法の絨毯じゃない。災害の時、山が助けてくれるわけではない。命を助けるのは山に上るという行動なんだ」ハッとした。もう1つは、佐藤さんの当時その場にいた先生達への語りである。当時、児童達が逃げた道を一緒に佐藤さんを先頭に歩いて行く。以下がその語りの内容をまとめたものである。

ここまで来た時に津波が来たんですね。その最後の瞬間、児童達やその場にいた先生達はどうかだったかなって思うんですよ。でも僕は先生達の最後の行動は想像ができますよ。きっと大きな津波の前に両手を広げて子ども達を守ろうと立ち塞がったはずですよ。抗えないような大きな力を前にしていても、最後の瞬間まで子ども達のことを思っていたはずですよ。でもね、その瞬間どれだけ子ども達を助けようとしても、もう遅すぎたんだ。その意味も考えないといけない。考えるべきはもっと前の、平時にどこに逃げるかを考えておかなければならなかった。そうじゃないと子ども達の命は守れなかったんだ。大川小学校は特別な学校じゃない。あの「大川小学校」と言われます。あのとき、避難するか避難しないかの選択をせまられた。避難して助かった学校はそれで良かったけれど、避難しなかったけれど助かった学校もあった、その中で大川小学校は避難しなかったから助からなかった学校になった。でもこの避難しなかった学校の違いはどこにあるのか？避難しなかったけれどもたまたま津波が来なくて助かった学校もあったはずですよ。大川小学校とそれらの学校の違いはどこにあるのか？大川小学校は決して特別な学校ではない。特殊な事例ではない。本当にこんなことを繰り返さないためには、避難しなかったけど助かった学校、避難しなかったけどたまたま津波が来なかった学校、これらもなくしていかなければいけないんだ。もう大川小学校の校舎の中には入れなくなったが実は未だに教室の棚の子ども達のネームシールははげていない。僕にはその理由が分かる。新年度自分のクラスに来る子ども

がどんな子なんだろうって想像しながら、先生達は想いをこめてシールを貼る。だから震災や津波を経て、どれだけ時間がたっててもまだはげていないんですよ。

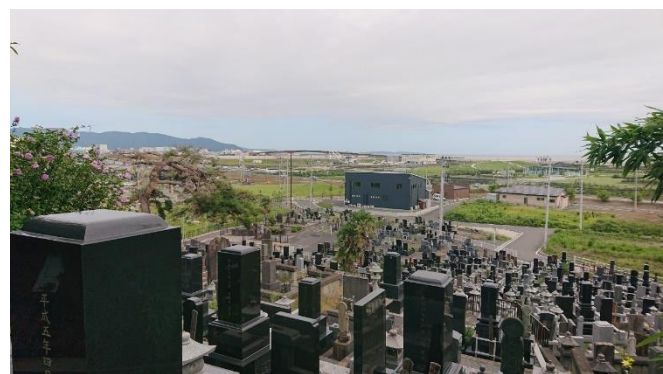
以上のような内容であった。佐藤さんご自身が大川小学校でお子さんを亡くされた遺族であると同時に学校の先生であったからこそその言葉であるように感じた。不思議と執筆者にはその説明がすっと入った。それは執筆者自身が先生という仕事をしているからかもしれない。これまで大川小学校での先生達がどのような思いを抱いていたのかを想像することから少し逃げていたかもしれないと感じた。もちろん先生の思いも児童の思いも、一人の旅行者には到底理解し得ないものだと思うし、分かるとは言い切っただけいけないものだと思う。それでも考える、想像するということが実際に教師として高校生達の前に立つ自分にはしなければならないのではないか、と感じた。先生たちは児童たちを大切に思っていた、しかしそれでも命を守れなかった。その理由、意味を震災後にずっと問い続けてこられた佐藤さんの説明は自分の中で新しい視点をもたらしてくれたようだった。「山は助けてくれない。命を守るのは山に上るといふ行動なんだ」といふ言葉は昨日に聞いた「防潮堤は助けてくれない、高台に逃げるといふことが大事だ」といふ考え方に通じるように感じた。

1時間ほどの案内の最後に佐藤さんご自身の娘さん含めて、大川小学校の遺族の兄弟姉妹たちがどのように感じていたのかについて、「東北ココから」といふ番組で今夜あるといふことを教えて下さった。遺族の大人ではなくて、当時遺族の子ども達はどう感じていたのか語り始めたので見て欲しい、とのことだった。当時のメディアの報道のされ方や切り取られ方で遺族の子ども達も傷ついたりもしたが、今回の番組は慎重に作ってくれた、といふことだった。案内を受けた後、高校生達は大川小学校で1時間ほど自由に見て回る時間とした。

大川小学校でのプログラムを終えて、今度は石巻市街地、門脇地区を目指す。昼食後、門脇小学校と南浜地区をツアーで案内いただく。

門脇小学校では3.11メモリアルネットワークの阿部仁さんの案内を受ける。門脇小学校の卒業生で、この地区に住んでおられるようだ。震災遺構である門脇小学校の入り口で待ち合わせをしたが、そこにはもう一人女性がいらした。彼女は当時門脇小学校で校長をされていた鈴木さんであった。たまたま近くに来て迎えを待つ間、執筆者たちに当時の小学校の様子を語って下さった。





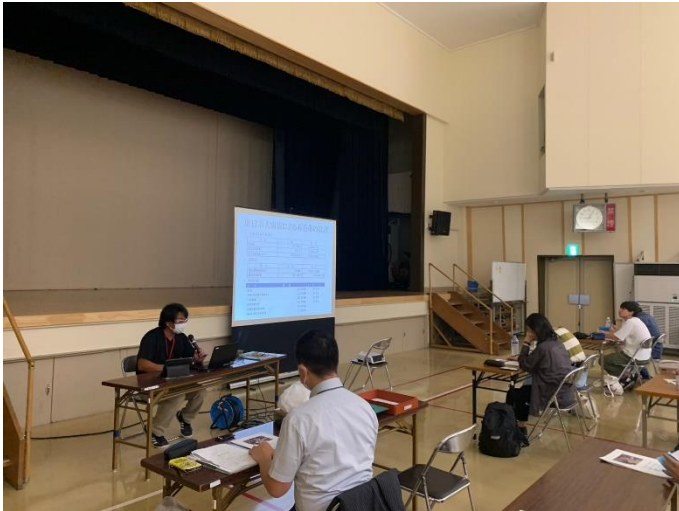
門脇小学校と小学校からの避難経路の追体験、MEET 門脇、がんばろう！石巻看板と回る。今年度はこのツアーの行程を当初の予定よりも少し短くした。生徒の中で軽い熱中症のような症状や疲れが出て休みたいという人が出たからである。朝早く雄勝から移動してきたことや前日との寒暖差もかなりあって、全体的に疲労がたまっている様子であった。雄勝から移動してきて午前中大川小学校、午後門脇小学校というプログラムはかなりの強行軍であったかもしれないと後悔した。

しかし、ツアー後のかわまち交流センター(通称、かわべい。以下、かわべい)での交流はかなり一人一人感じたことが多く、それを全体で聞きたいという雰囲気があった。当初 60 分程度を予定していたが、90 分以上かかっていたように感じる。疲れもにじみ出ながら、それでも全員の言葉を聞こうとする高校生達の姿。それぞれが震災遺構をめぐって感じたことがあった。その後貸し切りにしたお店で夕食を。お店のテレビで「東北ココから」を映してもらった。「語り始めた大川小の子どもたち」というタイトルであり、当時大川小学校の遺族といわれた子どもたちがどのように感じていたのかを中心に、大人になった当時の子ども達が当時の思いを語っていくという内容であった。

2 日目は奇跡のような偶然が多く重なった一日であった。高校生達を連れてこなければ執筆者自身知ることができなかったこと、出会うことができなかった場面が多くあった。

### 3日目

この日のテーマは「復興の今を知ろう」というものであった。午前中に雄勝法印神楽保存会の方のお話をお伺いし、午後は現地の NPO 団体との交流会を企画していた。移動も昨日ほど長くないということもあり、朝は少しゆっくり出る。



石巻市教育委員会の主導で会が開かれる。雄勝法印神楽という重要無形民俗文化財の成り立ちから、東日本大震災での被災での道具の流失。その後、震災で大変な中で神楽を舞うことに意味があるのかと葛藤もありながらも舞った結果、地域の人たちの元気を取り戻すことにつながったというお話。震災と津波、災害が失わせたものと、それでも続いていく伝統の強さのようなものを感じることができた。後半には実際に神楽で使われる道具を作るという時間もあった。

午後は場所を石巻市水産総合振興センターに移し、NPO 団体の方達との交流会である。昼食を弁当で済ませて、午後の準備を進める。講演をお願いした NPO 団体は、移動支援団体 Rera さんとフリースクールやプレイパークを運営するこども∞感パニーさんであった。Rera さんは昨年度から継続してお願いしており、今回の交流会についても楽しみにしてくださっていた。昨年度参加したメンバー以外にも誘って連れてきた、と笑顔でおっしゃってくださる。こども∞感パニーさんは初めてであったが、講演と交流会について快諾してくださった。そのほかに中間支援団体いしのまき NPO センターの方も来てくださっており、つながることができた。

午後の交流会については、学校紹介、司会進行は高校生達にまかせる。動画もまじえた自校紹介はとても良かったし、高校生が主体で会を運営していくことが現地の NPO の方々にとっては新鮮だった様子だった。





こども∞感パニーさんからのお話は、子どもの持つ可能性について示唆に富むものであった。震災後、大人達が目の前の課題等を前に、ギスギスとした雰囲気になっていたようだ。お互いに口論になることも。しかし子ども達のために空き地を使ってプレイパークを作ったり、自分達で自作の映画館を作ったりとしていくうちに、その周りの大人達も子ども達を自然と手伝って、笑顔になったと。子ども達の笑顔で大人も笑顔になることができた、力をもらうことができた、という話であった。そして震災以後プレイパークやフリースクールの運営を行っている。石巻市の不登校の子ども達の数やそれに対してある支援の現状を通して「震災課題から社会課題へ」という言葉が印象的であった。

Reraさんはこども∞感パニーさんとは違って主に高齢者の方達の足となって支援をされている。利用者の方々の声などを紹介しつつ、一方で行政やタクシー等の民間の会社との狭間で移動支援を行う難しさについても吐露されていた。これは石巻市だけの問題では無く、今後多くの地方都市が抱える問題、社会課題であることには変わりはないように思った。昨年度のお話の続きのような部分もあり、昨年度から継続して選択している生徒の中にはそのことについて考える生徒もいた。

それぞれ1時間ほどの講演、及び質疑応答を終えた後に小グループに分かれて、NPO団体の現地の方々も各グループに入って一緒に議論をして考える。今回の問いは事前に各団体の講演者の方と打ち合わせをした結果、「NPO団体と思いを持っている若い人達とつながる、入ってきてもらうためにはどうしたらよいか？」というものであった。各団体ともに新しくNPO団体を手伝ってくれる人の不足や入ってきてすぐ辞めてしまうという現状があるという悩みがあり、埼玉の高校生達とこの問いについて考えてみたいということだった。

執筆者自身、ファシリテーターとして一つのグループに入ったが驚いたのは、かなり自分自身の経験や周囲の状況も振り返りながら語る生徒達がいたことだ。不登校の経験や不登校の兄弟姉妹がいたりして、こども∞感パニーのような団体が近くにあって欲しいというのや自らのおじいちゃん・おばあちゃんの交通の不便さを考えたときにReraの活動のありがたさを思うというものであった。まさに「震災課題から社会課題へ」という社会課題として高校生達の目の前にも横たわっている問題であるように感じた。つながるという方法については多くのグループでSNSという意見があがっていたが、一方でそのSNSへどうアクセスするか、そうした現場に飛び込むための勇気をどうやったら持てるかということも話題にあがっていた。友人と一緒に誘い合わせて参加する、ツアーを行う等である。

高校生達は NPO 団体の方達とかなり意気投合した様子で、交流会終了後も外でそれぞれに話を続けていた。こうしたつながりが、高校生達にとってまた次に石巻市に来たいという原動力につながると嬉しい。特に高校3年生は来年から大学や専門学校、もしくは就職をするのでそれぞれに個人で来ることができると思う。ぜひ来てここからまた新しい輪が広がることを願っている。

かわべいで振り返りもそれぞれに充実したものであったが、その後ホテルに戻って東京大学との高大連携で来てもらっている大学生2人と教員での定例(今年度は1日の終わりに実施した)の振り返りと打ち合わせをしているときに次のような言葉があった。「NPOの方の話を聞くのは分かるのですが、石巻市の、という部分よりも社会課題という部分が大きくて、埼玉のNPOの方のお話を伺うのとどう違うのか(同じではないか)、ということも少し思っていました」遠慮がちにであったが、このような内容の言葉であった。だからこそ自分の問題に引きつけられる、という考え方を執筆者はしていたが、確かに…と思う部分もある。今後もNPOの方達との交流の時間はもっていきたいが、その際に何を語ってもらうようお願いするか、震災課題と社会課題とをどう結びつけていくか、まだまだ考えないといけないところもあるな、と感じた。

#### 4日目

最終日であり、今日のテーマは「未来について考える」というものであった。朝から移動し仙台でお昼ご飯を食べた後に、せんだいメディアテークの3月11日をわすれないためにセンター(通称わすれん!)の活動について、職員の方からお話を伺う。

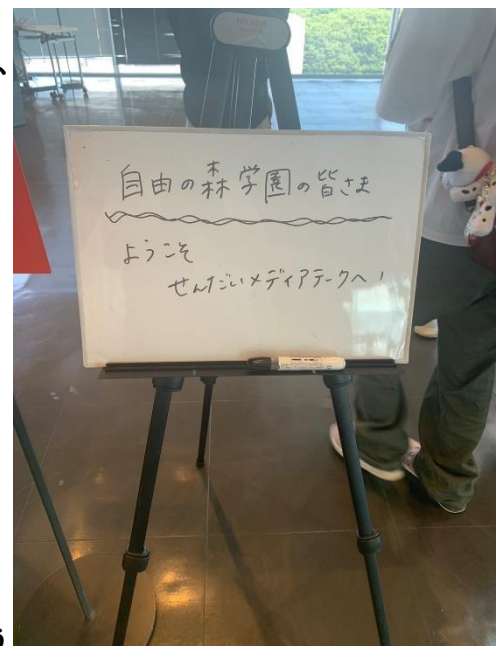
朝から石巻市の上品の郷という道の駅でお土産を購入する。昨年と同じバスの運転手さんだったため、この頃には生徒の中には運転手さんとすっかり仲良くなった人もいた。

その後仙台に移動してせんだいメディアテークへ。

メディアテークでは館内の案内に合わせて、記録を残すことの意味、アーカイブ化していく理由について説明してもらう。記録を残すことが必ずしも正しいということをお願いするのではなく、今はまだ振り返ることが難しい人でも、いずれ振り返りたいと思った時に何もなかったら、振り返ることができない。だからこそ様々な角度からの記録を残しておく、という説明はとても印象に残った。

「ひとことといえばわすれん!は、東日本大震災という歴史的な出来事を、個人の立場と視点から記録して、公的に共有し継承していくアーカイブ活動です。一般的なアーカイブでは、記録の〈収集と保存〉に力を入れます。それは震災アーカイブでも同様ですが、わすれん!では、記録そのものをつくる活動に重点のひとつが置かれていることがユニークな特徴です。何を記録すべきかという指示がまったくなく

いうことは、「何を・どのように・誰が・発信し、記録するか」という問題に、参加者一人ひとりが向きあうことを意味します。その結果、わすれん!に寄せられた記録には、被災状況の一次資料だけではなく、一人ひとりの視点からあらためて語られ、振りかえられた、さまざまな想いや考えが記されました。出来上がった記録は、個々人の視点を色濃く帯びており、震災の記録としてもユニークだと言えますが、それに加えて、多数の人たちがひとつのテーマについて、記録と作品の境界があいまいになっていくような何かを集合的につくっていく「表現をめぐる試み」としても、ユニークなものになっているのです。」<sup>1</sup>



<sup>1</sup> 佐藤知久,甲斐賢治,北野央『コミュニティ・アーカイブをつくろう!—せんだいメディアテーク』,晶文社,2018年



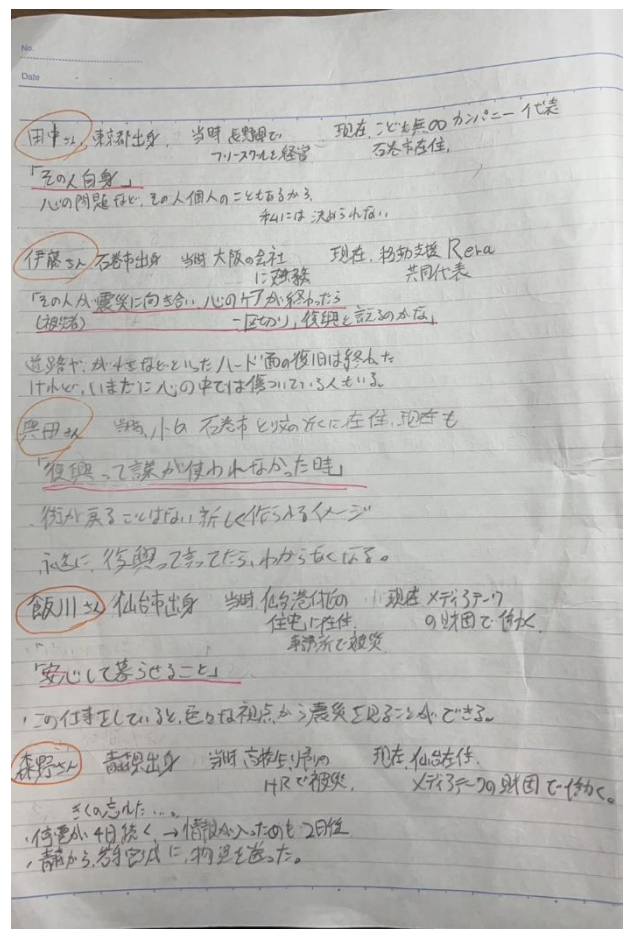
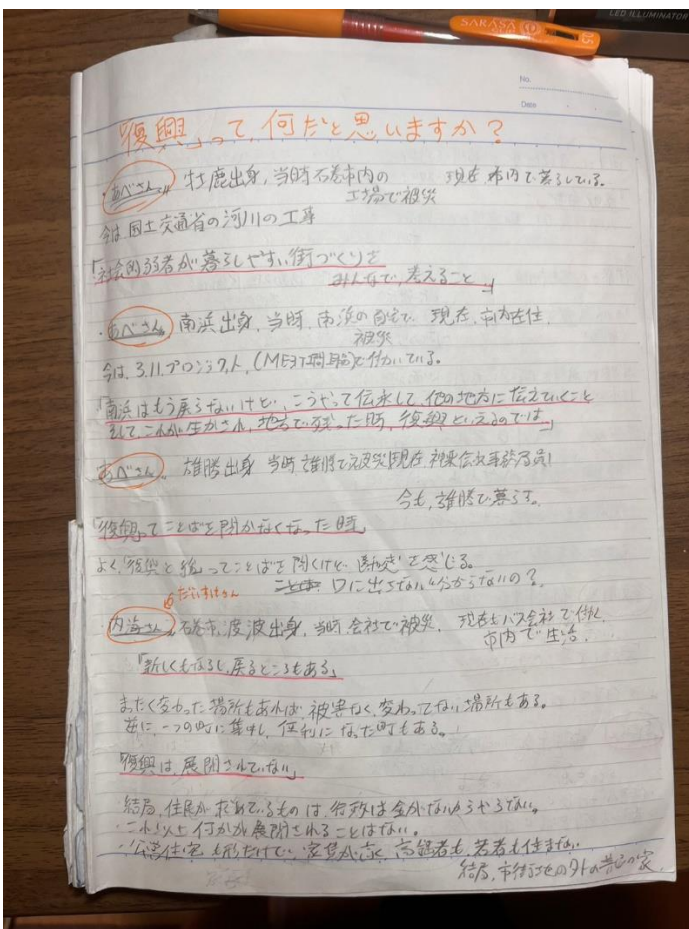
一緒に記録を作っていく活動に参加しませんか、と職員の方から声をかけられたのだが、どのように生徒達は受け止めているのだろうか。この辺りは夏休みが明けて感想を聞く場面で聞いてみたいと思っている。当日のことについてはメディアテークの方も記事にして紹介して下さっていた。

(<https://recorder311.smt.jp/blog/64482/>)

午後のメディアテークでのプログラムを終えて、仙台から東京へと新幹線で向かう。最後の解散の際には生徒達は疲れてもいたが、どこかやりきった表情もしていた。3泊4日と昨年よりも1泊伸ばし、訪れる先も昨年よりはかなり増やした。情報過多になりすぎていないかという気持ちもある。執筆者は何を高校生達に学んで欲しいのか、高校生達は何を学びたいのか。試行錯誤しながらの2年目のスタディツアーは終わり、まだまだ課題もたくさん残ったな、という実感である。そして来年のツアーはこうしたいと考えることができるのは、継続して関わることを保障されているからだな、と思う。

石巻市、及び仙台でお世話になった方々にはこの場を借りて改めてお礼を言いたい。

## 2. ある生徒のノートから



ツアーの中盤以降、出会う人たちと必ず終わった後に質問に行っている生徒の姿に気がついた。その生徒Aは、昨年もこのツアーを受講していた高校3年生の生徒だった。そこで何を話していたのかを聞いてみると、「復興って何だと思いますか?」と質問しているのだという。ツアーの中で出会う人たちはある程度高校生達との交流について引き受けて下さっている方々だから大丈夫か、と思い、また面白い取り組みだなと思って、「帰ったらノートのデータを送って欲しい」と頼んだところ、このデータを送ってくれた。上記の写真はその一部である。

Aは確かに昨年1年この講座を選択して学ぶ中で「復興って何だろう?」と問いを深めていたな、と思い出す。誰にとって、あるいは何がどうなれば「復興」なのか問い続けていた。Aはどちらかといえば人見知りなところもあり、あまり積極的に初対面の人に話しに行くタイプではなかった。そのため、今回現地で行く先々で

積極的に人と関わっている姿を見て成長を感じたと同時に、そのノートを見せてもらってあまりの現地の人たちの語りの豊かさに驚いた。高校生が質問することに対してそれぞれに真摯に向き合って答えをくださっていた。地域のコミュニティがなくなってしまったことや景色が変わってしまったことへの思いの吐露、防潮堤にまつわるお金の流れ(関東の大企業が受注していて地元でお金が回っていないこと)など、ノートを見ていると現地で関わった方々それぞれの「今」に対する声が聞こえてくるようだった。それは全体の講演や関わりの中だけでは聞くことができない情報でもあった。

Aは昨年から学んできたことや疑問に思ってきたことをそれぞれの場面できちんと出しており、だからこそそれに現地の方達も答えて下さったのだろう。Aが自ら得たこれらの声や知見を今後どう生かしていくのかも見守っていきたいと思っている。何よりも現地の人たちと仲良くなって名刺などをもらっている姿に、このような生徒達がこれからまた石巻市や東北と関わっていくのだろうと。この講座をきっかけにしてまた新しいことが生まれるのではないかと希望を感じている。

# ある訪問看護師のアタマの中

2

～精神科訪問看護の関係作り おもてなしに要注意～

山岸 若菜

## はじめに

先日、自分が精神科の訪問看護を始めて10年以上になることを知らされました。体感的にはまだ5年ぐらいかなという感じだったので、驚きました。

それまでは、普通に病院で働いたり、身体の病気をもちながら在宅生活をされている方の訪問看護をしていました。

精神科に関わるようになってから、精神科とそれ以外の科との違いに戸惑うこともありました。今回は、なんでこんなことになるの！？と、戸惑いながらも日々悪戦苦闘している話を書こうと思います。

これから先は精神科以外の科のことを一般科と書くことにします。

## 一般科で聞きなれない言葉

精神科でよく聞く言葉に「関係作り」があります。

訪問看護での「関係作り」とは、利用者さんに自分たちを「悪い人ではなさそうだ」と思ってもらって、毎週会うことを受け入れてもらう段階というのがしっくりきます。

そこがしっかりできてから、少しずつ信頼関係を築いていくイメージです。

それまで経験していた一般科の訪問看護では聞かない言葉でした。利用者さんは、看護師がどんなことをしに来るのか理解してくれていて、訪問すると歓迎してもらえるのが当たり前でした。だからわざわざ「関係作り」として意識したことがなかったのです。

ところが、必ずしも自分から望んで治療を受けている人ばかりではない中、精神科訪問看護では、まずこの「関係作り」がとても大切だと知りました。

## 訪問導入期に気を付けること

訪問看護が始まる時は、入院中に病院から利用者さんに「退院後に訪問看護を受けてみませんか？」と提案があります。

利用者さんが了承されると、主治医が利用予定の訪問看護ステーションに「訪問看護指示書」を発行し、訪問看護がスタートします。

訪問看護について入院中に説明を受けて同意し、契約を結ぶのは精神科も一般科も同じです。

それでもいざ病院から退院して、いきなり知らない人が自分の家に毎週やって来るとなると、精神科の利用者さんはとても警戒しています。

なるべく早く関係作りをしていきたいのですが、この時期に大事にするのが、利用者さんの家の環境に口を出さないということです。

利用者さんのいる場所は病院ではなく自分の家なので、何をしよう、どうなっていようと、他人が口を出すことではない、というのがその理由です。

利用者さんの生活環境の問題をどうにかしていくのは、とりあえず関係が出来てからの話になります。

とはいえ、この生活環境にパンチがありすぎるのが精神科訪問看護です。

## 関係作りに必要な鈍感力

まず、精神科の利用者さんは、病気の影響で自分や部屋を衛生的に保つことが難しくなる人が多くいます。

ご自身は何日もお風呂に入れておらず、部屋の中も物があふれて、足の踏み場がないのはごく普通です。

コバエが飛んでる、ウジがわいてる、利用者さんとお話している間をゴキブリが横切る、正座で痺れた足に猫が乗ってくる。

何かの汁を踏んづけて靴下がしっとり濡れることもあります。

それでも、帰りの車の中で靴下を替えるだけで「掃除したら？」とは、この段階では決して言いません。

そんな不衛生な環境の中、大きな鍋で獣臭い何か茶色いドロツとしたものが、グツグツ煮込まれているのを見たこともあります。

絵本でしか見たことないビジュアル。

魔女がかき混ぜてるやつや…。

何を煮込んでいるのですか？と聞いたら、

「アザラシの肉です。」

と教えてくれました。

「なるほど。」

と、何ができるほどなのかわからない返事をしながら、

ここに毎週来るのか一…。

と思ったことを覚えています。

潔癖症でなくてもなかなかしんどい時期ですが『たいていの事に動じない心を手に入れるための修行』だと思おうようにしています。

## おもてなしには要注意

本当に覚悟が必要なのは、この家の状況で、利用者さんなりにもてなそうとされる時です。

初めての訪問の時など、恐る恐る出してくれるコップから、

「この人は自分が出したものに手をつけてくれるのか？」

と、こちらを窺っている気持ちをヒシヒシ感じます。

ドキドキしながら用意をしてくれたんだろうなと思うと、そんな精一杯のおもてなしを断ることはできません。

これはいつ洗ったんやろう？

ていうか、洗ったことあるのかな？

と思うぐらい汚れたコップに入ったお茶が出てくることもあります。

そんな時は、不自然に見えない動きで素早く、一番汚れが少なそうな飲み口を探しだす技術が試されます。

そうしてお茶をいただくと、ようやく少し利用者さんの緊張が緩まる気がします。

## 有名な最中のなれの果て

通常はそれから少しずつ日常のお話を聞いていくのですが、ある日、お茶をいただいた後にあんこたっぷりの最中を出してくれた高齢の方がいました。

「仙太郎のやで。持って帰って食べて。」

仙太郎という老舗和菓子屋さんの『ご存じ最中』という人気の和菓子です。  
あんこがこれでもか！というぐらいたっぷり入っていて美味しいんです。

ほんまやったらめっちゃ嬉しいんやけどなー。

テーブルに直置きしてはったような・・・。

・・・ん？なんかあんこの様子がおかしいぞ？

と思ったらあんこに群がるアリの大群でした。

ひえ～！ご存じ最中ちゃうやん！アリンコ最中やん！

「いやいや。いただけないです。お気持ちだけいただいております。」  
と断っても、

「大丈夫やって。今食べ。今食べたら誰にもバレへんし、怒られへんで。」  
と一切悪気のない気遣いで追い詰めてきます。

今?!ここで?!  
無理無理無理!  
怒られるとかそういう問題ちゃうねん。  
アリンコやねん。  
それ、ほぼアリンコやねん!

あんこがアリだったという衝撃と、あの美味しい最中がこんなことに…という怒りと悲しみで、頭の中では利用者さんの胸ぐらを掴んでゆさぶる勢いでした。

が、このまま置いておいて利用者さんが食べても困るので努めて冷静に、

「じゃあ、お腹がいっぱいで今食べたらもったいないし、やっぱりいただいて帰って後でゆっくりいただきますね。」

と答えると、嬉しそうにティッシュで包んだアリンコ最中を渡してくれました。  
きっと自分が食べるのを楽しみにしていたのに、私に食べさせてやろうと思ってくれはったんや  
などその顔を見た時に思いました。

お家を出た後、急いで最中を出すと、カバンの中からアリがわんさか出てきて泣きそうになりましたが、この方とは今も関係は良好です。

## 断固拒否の紅茶

逆に頑張っても関係作りが出来なかった経験もあります。

精神科訪問看護を始めて二年目の冬、大雪が降りました。  
こわごわ車を運転し、雪が降りしきる中、初めてののお家に伺いました。

綺麗で立派なお家のインターホンを鳴らすと、利用者さんのおじいさんがニコニコして迎えてくれました。

あ、いい人そうでよかった。

家の中も綺麗に掃除されていて、受け入れも良さそう、これはアタリやな。

とテンションが上がりました。

勧められるまま席につくと、利用者さんのお姉さんと思わしき高齢女性が、無表情で広口のティーカップに入った紅茶を私の前に運んで来てくれました。

そして無言でティーカップを置くと、無表情のまま少し離れた距離からじっと私の方を見ています。

え？ちょっと待って？利用者さんておじいさんの方やんな？

あれ？どっち？

少々混乱しながら、でも寒かったので、

紅茶は嬉しいなー。

と思いながらひと口飲むと、

つべたっ！！

と思わず声が出そうになりました。

温かい紅茶だと思って飲んだのは歯が凍るほどキンキンに冷えたレモンティーだったのです。

しまった。

広口のカップにだまされたー。

少しも警戒しなかった自分を恨みながら「関係作り関係作り」と言い聞かせ、冷え冷えのアイスティーを飲み干しました。

あ～さぶいっ！

利用者さんとはにこやかに話ができいていましたが、常にお姉さんの熱視線があり、会話を深めるのが難しく感じました。

それならばと、お姉さんに話を振っても、まるで聞こえてないように完全に無視されます。

行き詰まりを感じ始めた三回目の訪問の後、訪問看護お断りの連絡がありました。



理由は特に言われませんでした。お姉さんとの関係作りに失敗したのだと思います。関係作りは難しいと思った出来事です。

## 関係作りに秘訣なし

結局人間同士の相性もあるので、関係作りがどうやったら上手くいくかは今でもよくわかりません。

だから毎回体当たりです。

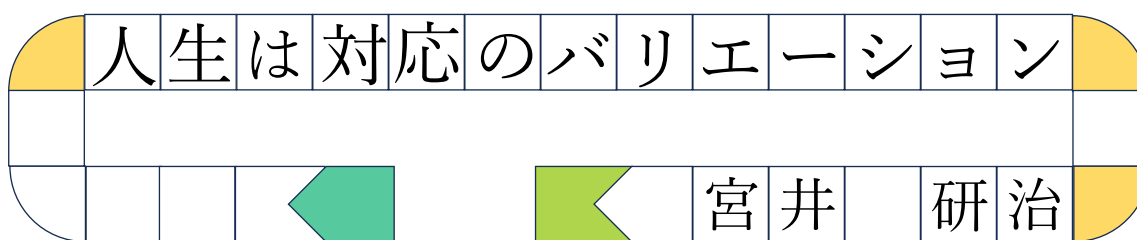
どんなお家かな？

どんな人かな？

どんなことが起こるかな？

緊張するけど、病院と違ってよそ行きではない利用者さんの顔が見られるのは、訪問看護ならではの楽しみでもあります。

私の『たいていの事に動じない心を手に入れるための修行』はまだしばらく続きそうです。



## -第2話 ロールプレイにおける面接のバリエーション-

「対応のバリエーション」は、私たちが仕事で出会う様々な「対応」場面をロールプレイで再現し、いろんな対応の仕方を試してみて、感じたことを自由に話し合おうというワークショップ式体験学習です。ゲームみたいな感覚でみんな楽しんでながら、実は、その中から何か日常の業務に役に立つものを持って帰っていただけたらと思っています。（「そだちと臨床」研究会主催 対応のバリエーション勉強会のお知らせより）

### 1. 第1話のあらすじ

第1話のこの連載では、自分のために、自分の言いたいこと、感じてることを、ある程度は自分の立場を担保しながら（ビビリですから、そんなの関係ねえなんて威勢のよいことは、言えない。言わない）書いてやると言い切りました。所信表明です。でね、書いてみてちょっとスッキリしました。書いた内容より、そういう表現の場が自分にできたことにです。好き勝手に、シニカルに毒を吐くなら、居酒屋に気の合う連中と連れ立っていけばいい。自分の内実へ、嘘なく（これもむずかしい話で、本音というのはいろいろあって、自分でも迷ってぐるぐるあっち行ったり、こっち来たりするもんじゃないでしょうか）見つめるなら、日記をつけりゃいい。それとは違うんだということが、第1話を送り出して気づいたことです。目の前の、あなた、そうあなたです！どこ見てるんですか、あなたですよ！誰かは知らな

い、誰もいないのかもしれないけど、その誰かに向けて書けることに大きな意義があることを今更ながらに気がついた。そのことをぜひ最初に記しておこうと思います。これも、やってみてわかった私の対応のバリエーション（以下、めんどくさいので“対バリ”に略したりします）のひとつです。

第2話ですが、第1話で研修会として行ってきた対バリの良さ-事例を扱う研修形式としての優れていると思われる点、使い勝手の良さや、参加者を元気づける理由-などをつらつらと挙げてみました。それと、前回書き忘れてましたが、対バリの良さというか、気軽に取り入れられる点として、「事前の用意がいらない」ということでしょうか。事前に事例発表者を決め、資料にまとめてもらい、コメンテーターなる者にもお願いをし、じゃあ司会進行は自分でなんて考えだしたら、だんだんと気が重くなることは必至です。

その点、対バリは事前の役割分担は一切ないし、心構えもいりません。その場に集中して、その場で選んで行けばよいわけです。非常に Here and Now なわけです。例えば、日帰り温泉的気軽さでもいいでしょうか。これは、勉強会や研修会を続けていきやすくするための大きな要因でしょう。

## 2. 面接の話

さて、付け加えるのは、これぐらいにして第2話の本題です。今日は、面接の話をしたい。対応のバリエーション勉強会は、基本的にどなたが来てもウェルカムなんです。福祉業界の人が多いわけですから、参加する人のニーズとして「面接がうまくなりたい！」というのは確実にあると思います。この面接がうまいということから、考えていきましょう。みなさん、支援する側で想定するのが当たり前ですから、うまいという言葉から連想すると、話がスムーズに進む、面接の場が和む、共感、話が弾むといったポジティブな現象を指す場合がほとんどだと思います。概ねこのように面接が進めば達成感はあるし、支援者も今日の面接は失敗したとは感じないでしょう。しかしながら、これは支援者側からの評価であり、要支援者とイコールとは言えない。要支援者は、支援者ほどはよくしゃべれたとは感じていない可能性があります。また、虐待対応に絡むような面接は、基本的に和やかにはいかないものです。要支援者側と、和やかに、親和的で、問題について話すけど、未来の話もできるといった至福の時間なんてそう持てるものではない

ということでしょう。言い換えれば、面接がうまくいくことと、要支援者に満足してもらえることとは全く同じではないということです。ありませんか？もう、ひどい面接だなと感じながら、着地点もさっぱりわからないまま時間がきて終了となった面接。あるいは、喧嘩別れとは言わないけど、もの別れに終わった虐待対応。それでも、要支援者は「なんとなく、元気でましたわ」と言ってくれたり、怒って帰ってしまったお父さんに再度のアポイントがなぜかすんなり取れたりということがありませんか？これは、まぐれでも嘘でもありません。面接のなかで何かが育まれると言いますか、そういう面接あるあるですよ。だから、「面接に失敗はなく、次がある」わけです。ドロップアウトされたとしても、要支援者は見限って次の未来というか将来に駒を進めたのだと見るほうが、より役にたつと考えます。非常に楽天的かもしれません。

失敗はないと考えることができるなら、あとあるのは、面接における対応のバリエーションだけなのであります。なかなか良い落とし所でしょう。これまでの対応のバリエーション勉強会のそこそこの歴史の中において、参加者から見せてもらった面接のロール、あるいはわたし自身がよく使う対バリの中から、役立ちそうな対応をまとめてみました。

### ①「ねぎらう、ほめる、おどろく」

なんだ、お前そんなことかと思ったあなた、実はこの基本のきの字をおろそかにしてませんか？今更、「共感」、「傾聴」を持ち出すまでもありませんが、やはり、聴

いて、驚いたり、嘆いたり、憤ったり、感銘を受けたり、そうしたことを二人の間で取り行うことが対話なのだと思います。人はわかっているけど心動かされるもの。あと、付け加えるならば、「聴いてるよ」の伝え方にそれぞれの工夫が生きるように思います。ひとつは具体性。「〇〇できてるのがすごいと思うわ。」のようなところに感動してるかを伝えないと、相手はわからないですよ。そして感動している主体は、今、話を聴いている私ってことを、言わずもがなで伝える。相手は、「また、おべんちゃら言いくさって」(関西弁ややきつめですが)と思っても、悪い気はしない。2者関係の不思議なところもあります。

ある対バリの一コマ。事例提出者は、直ぐに揚げ足を取ってくる父親に困っています。母親は、父親の強引さに辟易しながらも、面接の場面では、父親に同調するかのようダンマリを決め込んでいます。主訴は、父からの暴力で、万引きや言いつけられた家事をさぼる次男(中1)に向けられることが多い。この親父さん、全く家事をせず、母親任せという事でもなく、料理全般は買い出しから洗い物まできちんとやる。家族に聞けば味も素晴らしい。故に口うるさい。長男(高1)も長女(小6)もいやいや従っているが、家の約束事が彼らの年齢に合わなくなってきている。それでも親父恐さに嫌な顔は見せず、不満は母親に吐き出しています。ただ、次男のみ不満の表明を万引きや、後ろ向きの反抗という形で出しています。事例提出者はそこそこ面接で話したいんですが、そこまで到達するまでに、炎上して終わ

りというパターンに辟易してる。

対バリのロール設定場面は、支援者側が児童相談所のワーカーと、心理司、要支援者側が父親と母親の4人のロールプレイです。事例提出者でワーカーである当人は、当人が辟易している父親役をしてもらいます。ロールプレイでのワーカー役は、入社2年目の新人君が買って出してくれました。新人「ぼくでできますか??」スタッフA「できます」(即答)スタッフB「仕事じゃないので、誰にも迷惑かけないし、叱られることもないし」などと、適当な言葉をかけて、安心させます。

#### ロールプレイ① スタート

父親役「いつになったら息子を返してくれるんじゃ!話し合いをするするって、何回してるんじゃ、ぼけ」ワーカー役「ですから、お父さんが今までのようにカづくで、ヨシオくん(次男)を従わせようというのでなく...」

父親役「カづくって、万引きなんかしくさって。人の道に外れるときには、カづくで止めん親がどこにおらんじゃ、ボケが、カスが!」

ワーカー役「カスは余計だと思いますがお父さん」

父親役「お父さん、お父さんって、おまえの親父ちゃうわい、ボケが、カスが、阿保が!」

いつもの不毛と思われるやりとりですが、新人くんは声を震わせながらも、じつと父親役を見つめながら、たじろがず、か

とって同様に怒ることもなく、淡々とこの繰り返しに挑みます（少なくとも周りからはそんな様子に見えます）

ワーカー役「お父さんがいつも家族のために、食事作りに苦労されていること、人に迷惑をかけてほしくないというお父さんの一番の願いを砕かれてがっかりされていること、子どもない私にもずいぶん伝わってきました。その上でのこうした呼び出しにも応えていただいていること、感謝しています。」

父親役「(わずかに声のトーンが下がったような) まあ、わかりゃええんよ、なあ、母さん」

母親役「えっ、そ、そうそう」

そんなこんなで、ロールプレイの時間終了。現実のケースワークでは時間で終了はないので、これも対バリのいいところでしょうか！？

この後のフロアーからの感想では、新人くんの健闘ぶりに、具体的な称賛の声が多く上がりました。

「ビビりながらも、相手のペースに乗らず、一貫性があったのが若手とは思えない」

「うるさい、やかましい親父だと思ってしまえばそこまでだけど、諦めず付き合っ、心理司もよくフォローしてチームワークを感じた」

「責められつつも、相手の良さを言うてみることの大切さを感じた」

等々です。父親役を演じた事例提出者

からは、こんな感想でした。

「ちょっとですが、親父さんもがんばってるんだと感ずることができました。でも、苦手ですが(笑)」

目の前の要支援者が、助けるに値する人でもなかろうとも、その人と協力してやってゆくというミッションの前では、相手の苦勞を勞う、相手の努力(たとえそれが不毛であろうとも)をほめる、相手の努力の大変さ、工夫におどろくことは、面接の基本のきだと思います。

## ②ひとつ下の立場を模索するロールプレイ

これは、ときどき、私がロールプレイヤーをやらせてもらった時に、やってみる方法です。「下手に出る」という態度と近くはありますが、同義語ではないと思います。相手に媚びるという意味合いではなく、「相談をするー相談を受ける」「指示するー指示を受ける」、虐待対応であれば、「介入するー介入される」の関係性に揺さぶりをかける一手と言えるでしょうか。膠着した関係性からは、いつも通りの結果しか戻ってこない可能性が高いです。その梯子をちょっと外してみる試みと言えます。「素直に謝る」「こちらもよくわからないことを伝える」といった態度もこれにあたります。普段、支援者と言われる専門家が取らない態度でしょう。今回取り上げたロールは少しひねりを入れたものです。具体的には、要支援者の前で、支援者同士であるワーカーと心理司が意見の相違を見せるわけです。喧嘩します。だから、ホントに喧嘩するわけではあり

ません。嘘っこの喧嘩、意見の相違を実演して見せるわけです。梯子を外せるのは、相談を受ける支援者側でしかないです。

ロールプレイの前には支援者チーム内での作戦会議は必須です。要支援者側もどんな夫婦で行くのかを話し合います。何度も言いますが、対バリは事例の再現を目指すものではなく、事例はあくまでも出発点に過ぎません。演じているうちに、もともとのケースとは違ってきます。とはいえ、いつものお仕事の現場では、支援者側のこのアクションは、勇気のいる一手です。しかし、大丈夫です、ロールプレイなのだから。でも、ロールプレイで出来ないことは、実践でもやらないでしょうし、一生やらない。絵に描いた餅ですね。たかがロールプレイ、されどロールプレイです。

## ロールプレイ② スタート

父親役「だから、息子をいつ返してくれるんかちゅうことや！もう二度と前のようなことは起こさん言うてるやろ」

母親役「うちの人もこう言うてるし、私も気をつけるようにしますし。」

ワーカー「ご両親のお気持ちや、ご決意はよくわかるんですが...」

父親役「なにがあかんの？！そのスペアタイヤもやる言うてるやろ」

母親役「あんた、スペアじゃなくて、ペアルント！しゃんと覚えときや！」

父親役「わかっとるわ！細かいことぬかすな。だいたいやな...」

両親とも苛立ち、お決まり痴話喧嘩を始

めるタイミングですが、やおら同席の心理司が割って入ります。

心理司「そこですよ、僕も疑問に思ってたんですが、プランが分かりにくいというか。ご両親も困ると思うんですよ」

ワーカー「いやいやいや、それは今から伝えようと思ってたことで」

心理司「今からって何度来所してもらっているんすか！」

ワーカー「ちょっと待てよ。だから今日は息子さんの気持ちを心理のほうから話してもらおう段取りだろう」

心理司「だから、前置きが長すぎるんですよ、先輩は！早く話を進めないで前のご家族のように、話を聞いてもらえなくなるんですよが！」

ワーカー「なんで、君に僕の仕事を評価されないといかんねん！！！」

父親役「(割って入るように) まあまあまあ、あんたらも喧嘩することあるんや。その一、息子の気持ちって、なんなのかな？」

母親役「そやわ、教えて。怒らへんし」

こんな感じの一手が打てたらいいですよ。ご両親は、専門家と言われる人も、お役人でも一枚岩ではなく、迷える人間なんだと感じてくれるかもしれません。この後、息子の思いが語られるかもしれませんが、息子が帰りたくないと言っているかもしれません。息子なりの条件を出してくるのかもしれません。いずれにしろ、両親は自分らで、「教えて」と言っ

ている以上聞かざるを得ない状況を自らで選択しています。だいたい、対バリなら7分、8分でロールプレイを設定しますので、このあたりでタイムアップとなるでしょう。

さらなる展開として父親は「ほんとに息子がそんなこと言うてるんか！直接話をさせろ！」といったもの怒りモードに戻るかも知れません。これに対してワーカーは「そうなるでしょ。だから、時間をお取りしていたんです」と予想通りの展開として返すこともできるでしょう。心理司は「ですね。そんなこと言われたら僕もショックだと思います」と同調パターンで接することもできるでしょう。一枚岩でないと思われた両親は、ワーカーや心理司のどちらかに向けて本音を話やすくなるかもしれません。いや、「こんなベースラインのぐらついているやつらに任せてばかりではらちあかん、俺らがしっかりせにゃ、なあ、母さん」と、やさしい眼差しで母親を見つめる。と、ここまで来ると妄想ですね。

### 3. 「対応のバリエーション」勉強会に、いま思うこと

ここまで「対応のバリエーション」という装置が、いかに使い勝手があり、次世代に繋げたい事例検討方式かということ、第1話、2話を通して書いてきました。その上で思うことは、このやり方を私自身が随分気に入っているということです。同時にロールプレイの意義みたいなものを再確認させてもらいました。私自身は、ロールプレイをし始めの頃は、嫌で嫌でたまらなかったのですが。ただでさえ緊

張しい(そうは見えないようですが)の上に、どうして人に見られながら演じなきゃならんの、役者じゃねえしというのが偽らざる本音でした。そしてまた「対応のバリエーション型事例検討会」は、対人援助職のケース対応へのストレスを緩和する装置としては、かなり実効性があると確信するに至っています。

#### (告知)

第1話、第2話とかなり真面目な内容でした(どかがやーい!!)。ので、次回からは気の向くままのテーマで書いていこうと思います。もちろん、お仕事に則ったものも気の向くままに取り上げていきます。どうぞ期待!



<https://www.akashi.co.jp/book/b65738.html>

## 編集後記

### 編集長(ダン シロウ)

マガジン編集の仕事が続いていると、春夏秋冬にいろんな場所で原稿を受け取ることになる。送信側にもいろいろ事情があって、そんな 60 本以上の連載を出先のあちこちで間違いなく受け取るだけでも煩雑だ。加えて、今夏は異常な暑さでばててしまわれた方も多く、休載の知らせが続いた。

長くやっているのでも要領は分かっている、初心者戸惑いのようなことはないのだが、それでもこの手間だから、これを突然、もう誰かが替わってくれ！と言っても無理な話かもしれない。まあ実際にそんなことになったら、やれるようにやるだけのことはあるのだが、本誌には強力な編集員が二名も揃っている。(これはなかなかの配備だ)。

日本社会の課題の一つが後継者不足、世代交代問題だという一般論は承知している。その上で、いつまでも現役を続けている者の言い訳をさせていただくなら、立場や権力(肩書付き)を占有するつもりはない。極力、私的で無権限であることを心がけている。

もともとそういうところがあったのだが、権限や権力を持った経験があまりない。社会から与えて貰えなかっただけかもしれないが、私には好都合だった。マガジンの編集長などまさに、そんな役割だ。高齢化社会で働き続ける棲み分けのポイントがここにあると思っている。

リタイア時期が来たら、一個人に戻って、自分の甲斐性で出来ることに取り組む。私的に生きるとは、趣味を享受するばかりの消費者になることではない。

いや私の場合、コレが趣味か？

(こんなことを書いていた編集会議の前日にコロナ陽性が発覚。昨日の高熱では、zoom 編集会議も無理だったなあと思う。世間に起きることは私にも起きることか。)

### 編集員(チバ アキオ)

ある昔ながらの「ドライブ・イン」に行った。もともと予定はなかった。ネットで、そこがおいしい！癒される！という記述が数回出てきたのを覚えていた。急遽、その地域でどこかで食事をするめぐり合わせが来たのである。そもそも「ドライブ・イン」は世代的にもなじみが薄い。マ

ニュアル化され、サービスとして確立しているところの方が気軽に入りやすく感じてしまう。

レンタカーを店の駐車場にとめる。駐車場は砂利。車を止める線もない。店に近づくと入り口横のガラスはひびが入り、テープで補強している。入り口の扉を開けると、大量の鉢にポトスが植えてあった。進むと冷氣遮断用のビニールが下がっていて、そこをくぐって、テーブルが並ぶ空間に入る。お店には常連さんと思われる方、二組。席に座るとお水を出してくれた。その人は中学生に見える。私服にエプロン。夏休みに祖母の店をお手伝いしている様子か。表情もはにかみながら、復唱もたどたどしく、初々しい。厨房には祖母と思われる方と祖母の娘さんが調理の様子(つまり、女性 3 世代で回しているのか)。祖父と思われるの方も店の片隅に座っていた。別のお客さんの子どもさんがトイレに行こうとすると、床に突っ伏していたマメシバがうしろをついていく。ワンちゃんはトイレ前を横切り、店の奥へ。店内にはテレビがあり、見ているような、みてないような。常連さんとお店の人も世間話に花が咲いている。

端的に言うならば、入ると「昭和」で止まった雰囲気。こうした景色がとても愛おしい。こうしたお店の魅力について、「昭和レトロ」をキーワードに話題に上ることも増えた。

ネットがない時代は、新しいことへの注目はゆるぎなかった。しかし、新しいことがすぐに手のひらのスマホにある時代となると過去のことへの距離も同様に手に届く環境になった。ある大学 2 回生の好きなタレントは「内田有紀」さんだという。内田有紀は私が若い頃のアイドルである。昔の若い姿も、今の時を重ねた姿もかっこいいというのだ。若さに魅力を感じるだけではない。もっと長い時間を含めて、惚れているのである。

先ほどのドライブ・インも時代を超えて「令和」でも継続し、支持を受けている。店内には、おそらく昭和から時を経過したものが随所にあった。その価値にも令和の世間から注目されながら、孫世代が手伝っていた。魅力がわかるお客も、とりあげる動画配信者もいる。いろんなあり方も、惚れ方(昔より深い?)もできるようになったのかもしれない。

こうした飲食店もマニュアル化、FC 化されたものが増えた。働いているのはアルバイトで、ユーザーとして適正なサービスを求めることにも慣れてしまった。

入り口横のガラスが割れて、店内に飼い犬が歩いて



いて、祖父が休憩をしているお店はある時期はナンセンスだったかもしれない。しかし、そこにある「時間」の価値がわかるようになったともいえるのだろうか。

「対人援助」に「時間」が必要なことは言うまでもない。また、新しいことが無条件で良かったりするほど、この領域は単純ではない。そうしたことも見せてきたのが対人援助学マガジンの50回以上の連載ではないか。書かれている内容はもちろん、著者人の在り方でもある。「時間の大切さ」はヒューマンサービスのメインストーリーングからははじかれつつある。この「時間の価値」を示し続けたいと願うのが私が編集部として活動し続けている原動力の1つでもある。目の前の人との時間は仕事だけではない、暮らしでもある。その余白を持つべき現場の話が今号もたくさん集まった。

## 編集員(オオタニ タカシ)

数年前に『こんなことができたらいいな…』と思っていたことのいくつか、思っていたのとは違う流れの中で結実しそうになってきた。当初の構想とはずいぶん違っけれど、結果的に流れの中でできたものの方が「無理なく」「より良い形で」「継続して」できそうな気配を感じるのが何とも面白い。

かねてから、団編集長が言っていた「セレンディピティ」のことを、少し自分事として実感できた気がする。セレンディピティとは「何かを探しているときに、別の何か価値のあるものを見つける」といったような、“予想外の幸運との巡り合わせ”を意味する言葉である。ただ、団編集長の話では、この「予想外の幸運」を単なる“運”と片づけない。絶対にこうなる、とは言えないけれど、そういう幸運や巡り合わせが起きそうな行動を能動的に重ねることは可能であり、逆に思いがけない不幸の中にもその可能性が高まる行動の積み重ねがある場合もある…という、主体的な問題として捉えるのである。例えるならば、芽が出るかどうか、どんな芽がでるかはわからないけれど、それでもいろいろな種を蒔いておくことがのちの実り(幸運)につながる…というようなイメージだろうか。仕事はもちろんうまくいく方がいいのだけれど、「狙い通りに」いくよりも、少しの偶然を含んで結実する方が面白いと感じられるのはなぜだろうか。

## 対人援助学マガジン

通巻54号

第14巻 第2号

2023年9月15日発行

<http://humanservices.jp/>

### ■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

[danufufu@osk.3web.ne.jp](mailto:danufufu@osk.3web.ne.jp)

マガジン編集部

第55号は2023年12月15日

発刊の予定です。

原稿締切2023年11月25日！

### 執筆者、常に募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。執筆資格は学会員であること。現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

### 表紙の言葉

これはヒトコマ漫画である。蛇足であることは承知で、その解説をしておく。

\*

母と息子がマンションの隣室の扉前を通った。「アラ、お隣さん、海外旅行にでも行ってるのかしら？」と母は思った。(口にはしない)。息子は「スゲー、あんないっぱい溜まって！」(と、思った)。双方、口には出さないから、お互いは分からないギャップだ。だからどこにも笑いは生まれない。

多分、世間はこんな知り得ぬギャップに溢れているのだろう。

(2023/09/15)

## 【特別寄稿】

### ヒロシマへ行こう！

本間たけし

対人援助学会員ならびに対人援助学マガジン読者の皆さん。私は昨年「第14回大会」の実行委員長、本間たけしです。

第14回大会のテーマが「新潟水俣病とわたくしたち」に決まってから、特に熊本の関係者から、「本間さん、水俣病ば研究するとなして水俣にいかんとか」とお叱りを受けていました。そういえば大学生時代、いつも一緒に時間を過ごしていたH先生が水俣出身で、産科のクリニックをお父さんから継承したはずだと気づき、ネットで検索したらその所在が分かりました。H先生に「対人援助学ばなして研究しちつと？」と聞かれても、卒後40年間の経緯をすべて電話では話しきれません。時候の挨拶から始め、私が主宰する退院支援研究会や第14回大会開催の経緯の紹介を「Hレディースクリニック」出産希望者用メールに入力しました。ですが不審者だと思われるようで返信は有りませんでした。

思い切って、電話でH先生に第26回定期研究会の案内をしたのが、熊本弁で言う「7月頃やった」と思います。約1年後、現地で皆さんとお目にかかり、H先生はじめ熊本や鹿児島産科医やそのご家族が、如何に大変な日々を過ごしているかよく分かりました。

私と家内が水俣病にゆかりのある場所を訪れたいとお伝えしたところ、H先生夫妻は（私のマガジン49～51号の記事も熟読

されていたようです）熊本の同級生たちに声をかけ、40年ぶりに再会を祝う宴を準備して下さいました。会場に向かう「市電」が、かなり飛ばすので驚きました。冬でも路面は凍結しないそうなので、これで宜しいかとは思いますが。



写真の中に「指名手配者」はいませんし、皆さんがいわゆる公人なのでご紹介します。私の右側にいるのが「H先生」こと本田先生（産婦人科）、その後ろが間部院長（産婦人科）、私と家内の後ろが犬童（いんどう）院長と奥様めぐみ先生です。

家内は、私と付き合いを始めた頃、私が学生時代は同級生たちに嫌われていて、友人が一人もいないと話したところ驚いたそうですが、私こそ66歳になり、こんなに沢山友人がいたことに驚いた次第です。

翌日の昼は鹿児島島の南端から、市内の全出産を一人で請け負う中村院長が、醸造元でも入手困難な銘酒を持参して駆けつけてくれました。病院所在地の首長さんが、よき理解者と聞き、安堵しました。寡黙で誠実、真の九州男児じゃ。



ところで7月15日(土)に「訪熊(ほうゆう)」した私たちは、翌16日の早朝、熊本駅隣接のホテルから九州新幹線で新水俣駅に向かいました。『苦界浄土』の著者石牟礼道子さんによれば、昭和30~40年代は各駅停車で水俣駅から熊本まで、片道3時間近く要したそうです。私は当時、新潟から水俣を目指した齋藤医師や坂東弁護士は、どれくらい時間をかけていたのだろうかと改めて考えました。齋藤恒医師はいつも、月曜朝の外来が気になっていたようですが。

まず我々は、旧チッソ(現在はJNC)に向かいました。日曜にもかかわらず、守衛さんがにこやかに頑丈そうな門を開けてくれました。玄関で出迎えてくれたJNCのNさんが、さっそく社屋内でチッソの歴史や現況の説明を始めてくれました。



Nさんがここまでフレンドリーなのは、私の新潟土産が功を奏したわけではありません。長年、本田先生がNさんのご家族の健康を管理されているからなのです。

次に向かったのは、今話題の「百間排水口」です。老朽化を理由に廃棄処分に着手するという話がありましたが、患者個人や団体の要望で、工事は「見合わせ」になりました。水俣病の被害者だけでなく、人類にとって広島「原爆ドーム」のような意味がある施設だと私は思います。



それから、初期に多くの水俣病患者さんが報告された茂道・湯堂地区で、美しい海に放置されている漁船や、



沖合はるか彼方には、帆に風を孕み底引き網をひく「うたせ船」が見えるではありませんか。本田先生が「よかタイミングですね」と驚かれるほどの美しい光景でした。



私と家内が、最も心を動かされたのは、

山間の車1台が漸く向きを変えられるスペースから、さらに険しい細い山道を上り詰めた場所にある「乙女塚」でした。



確証はありませんが、そこには沖縄の人々が魂を休める「がま」に似た（「がま」は本来、自然の洞窟や鍾乳洞からなりますが、先の大戦では石を積みあげたり、塹壕のように穴を掘ったりして急遽作られたものもあったとか）慰霊の地があり、シーサーがひっそりとみ霊を見守っていました。水俣地区には南西諸島出身の労働者が少なからずいたと言われています。



最後に、私たちは新潟水俣病の被害者から熊本の被害者に送られた「阿賀の地藏様」と会うことが出来ました。



お地藏様の傍らで、水俣病の被害者のみならず、世界中の人たちが極楽浄土に迎えらるることを願うご僧侶に会えました。



「水俣に行かずして、水俣病を語るなかれ」は真実でした。本田先生ご夫妻はじめ、私の同級生やJNCのNさん、そしてこのご僧侶のお導きで私はそのことを改めて確信しました。

1947年にG.バタイユが強調した<sup>1)</sup>、原爆を投下された側の被害者たちが動物のように扱われた悲惨さと、投下した人間と競い合い原爆を作り出した文明の愚かさ<sup>2)</sup>は、最近のハリウッド映画の浅はかな宣伝でよみがえりました。でも「復讐するは我にあり」は、人ではなく神の言葉です。

皆さん、2023年11月11・12日に広島で再会の喜びを分かち合い、学びあおうではありませんか。岡崎さん、迫さん、来須さんと広島の間仲間たちが待っています。

行きましょう、広島へ。

2023年夏 本間たけし

#### 推奨文献

1. G.バタイユ著.酒井健訳：「ヒロシマの人々の物語」.景文館書店.2020.
2. 石川学著：「理性という狂気 G.バタイユから現代世界の倫理へ」.慶應義塾大学出版会.2020.